新潟県埋蔵文化財調査報告書第51集

北陸自動車道

糸魚川地区発掘調査報告書Ⅴ

小出越（こいでごし）遺跡

1988

新潟県教育委員会

北陸自動車道

糸魚川地区発掘調査報告書Ⅴ

小出越（こいでごし）遺跡

1988

新潟県教育委員会

序

北陸自動車道の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は昭和47年８月以来継続してきたが，昭和61年７月をもって一応終了し，現在その報告のための整理作業を進めている。

本書は，新潟県が日本道路公団の委託を受けて実施した糸魚川市小出越遺跡の発掘調査報告書である。

西頸城地方は最近の諸開発事業で低位段丘や沖積地の発掘調査例も多くなり，そこに散在する古代の遺跡について注目されてきている。この地方は天下の嶮と言われる親不知子不知に代表されるようにけわしい山々が海岸部にせまっており，昔から交通の難所とされてきた。しかし，河川の中・下流部に段丘や沖積地がわずかに展開し，ここに当時の遺跡が散在している。

小出越遺跡は，平安時代の土師器焼成遺構を中心とする遺構群と考えられ，本県でも数少ない遺跡の一つである。全国的にも不明な点の多い土師器造りの一端を明らかにしてくれたものと思われる。本調査の成果が，古代の歴史的解明の一助になり得るとすれば意義深く，本書が広く活用されることを望むものである。

なお，本調査の際，日本道路公団には特段の御配慮を賜り，また，地元糸魚川市教育委員会並びに市民の方々には多大な御協力と御援助をいただき心より謝意を表するものである。

昭和63年３月

新潟県教育委員会

教育長　田　中　邦　正

例　　言

1．本書は新潟県糸魚川市大字大和川字小出越（通称　草山）に所在する小出越遺跡の調査報告書である。調査は，北陸自動車道建設に伴ない，新潟県が日本道路公団から受託して実施したものである。

2．本遺跡の発掘調査は，新潟県教育委員会が調査主体となり実施した。調査期間は，昭和58年４月９日（分布調査）・昭和59年８月20日～22日（確認調査）・昭和60年４月19日～７月26日（本調査）の３回にわたっている。なお，昭和60年度の調査体制は以下のとおりである。

昭和60年度

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　有磯邦男）

管　理　総　括　高橋　安（新潟県教育庁文化行政課長）
　　管　理　田中浩一（　〃　課長補佐）
　　庶　務　高橋幸治（　〃　主事）

調　査　調査指導　中島栄一（　〃　埋蔵文化財係長）
　　調査担当　鈴木俊成（　〃　文化財専門員）
　　調 査 員　和田壽久（　〃　文化財主事）
　　調 査 員　遠藤孝司（　〃　文化財調査員）
　　調 査 員　高橋保雄（　〃　文化財専門員）
　　調 査 員　小池義人（　〃　文化財専門員）
　　調査作業員　糸魚川市大和川・梶屋敷・田代・羽生・厚田・京ケ峰・平牛・竹ケ花・成沢・坂井・押上・寺町・横町・中央及び青海町の地元有志

3．発掘調査に至る経緯については「北陸自動車道　糸魚川地区発掘調査報告書Ⅰ」の序説で述べているのでここでは省略する。

4．遺物の整理，復原作業，報告書作成は新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係職員があたった。

5．発掘調査の出土遺物は，一括して新潟県教育委員会（以後，本文では県教委と呼ぶ）が保存，管理している。なお，出土遺物の注記記号は「KK」とした。

6．本書の執筆作業は，鈴木俊成が第Ⅱ章２・３，第Ⅲ章１・２Ａ・Ｂ（１・２・５号住）・Ｃ（19・20号土坑），第Ⅴ章１（縄文時代前期）・２・３・４，和田壽久が第Ⅰ章，第Ⅲ章2Ｂ（３号住）・Ｃ（Ａ・Ｂ群土坑）・Ｄ・３，遠藤孝司が第Ⅱ章４・第Ⅲ章2Ａ・Ｂ（４号住）・Ｃ（Ｃ・Ｄ群土坑），第Ⅴ章２，山本　肇が第Ⅱ章１，高橋保雄が第Ⅱ章2（試掘調査），國島　聡が第Ⅲ章１（縄文時代中期），第Ⅴ章１（縄文時代中期）をそれぞれ分担し，鈴木・遠藤が編集した。

7．注・引用文献は，第Ⅳ章を除きすべて本文末に記した。

8．実測図の番号は挿図・写真図版とも時代別に通しで共通の番号としたが，第Ⅲ章はその限りでない。

9．本書の示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約７度である。作製した図面のうち既成の地図を使用したものは，それぞれの図に出典を記した。その他は日本道路公団が測量した地形図を用いた。

10．図版の空中写真は，(財)日本地図センター発行の1947年撮影のものを使用した。

11．土師器の胎土分析は奈良教育大学　三辻利一氏に依頼し，その結果について原稿をいただいた。

12. 発掘調査から本書の作成にいたるまで，下記の方々から貴重な御教示をいただいた。厚く御礼申しあげる。(敬称略　五十音順)

小野　昭・金子拓男・川田壽文・木島　勉・久々忠義・小池邦明・甲崎光彦・小島幸雄・小林達雄・駒形敏朗・桜田正信・高松俊雄・玉田芳英・田中耕作・土田孝雄・前山精明・山本正敏・渡辺朋和

目　　次

第Ⅰ章　遺跡の立地と周辺の遺跡

1．位置と地形 ……1
2．周辺の遺跡 ……2

第Ⅱ章　調査の経過

1．昭和59年度確認調査 ……5
2．昭和60年度調査 ……7
3．昭和61年度整理作業 ……8
4．遺跡の層序 ……10

第Ⅲ章　遺構と遺物

1．縄文時代 ……11
2．平安時代 ……14
A　土器分類について ……14
B　住居跡 ……18
C　土　　坑 ……51
D　遺構外出土土器 ……81
3．その他の遺構と遺物 ……85

第Ⅳ章　小出越遺跡，および，その周辺の遺跡出土土師器の
蛍光X線分析 ……89

第Ⅴ章　ま と め

1．縄文時代の土器 ……96
2．土師器焼成遺構 ……97
3．平安時代の土器 ……105
4．結　　語 ……108

注・引用文献 ……109

挿 図 目 次

第1図　糸魚川地域の地形分類 …… 1
第2図　糸魚川地域の傾斜区分 …… 2
第3図　周辺の遺跡（奈良・平安時代）と地形 …… 3
第4図　遺跡の位置と地形 …… 4
第5図　グリッド設定図 …… 5
第6図　確認調査出土遺物 …… 6
第7図　遺構配置図 …… 9
第8図　遺跡の層序 …… 10
第9図　縄文時代遺物分布 …… 11
第10図　縄文時代の土器 …… 12
第11図　縄文時代の石器 …… 13
第12図　剥片長幅比 …… 13
第13図　土器各部位名称 …… 14
第14図　土器分類 …… 15
第15図　その他の土器 …… 17
第16図　1号住居 …… 18
第17図　1号住居カマド …… 19
第18図　1号住居，19・20号土坑遺物分布 …… 19
第19図　1号住居出土土器　カマド付近 …… 20
第20図　1号住居出土土器　覆土1 …… 21
第21図　1号住居出土土器　覆土2 …… 22
第22図　1号住居出土土器拓影 …… 24
第23図　2号住居 …… 25
第24図　2号住居カマド …… 26
第25図　2号住居出土土器　覆土1 …… 28
第26図　2号住居出土土器　覆土2 …… 29
第27図　2号住居出土土器　覆土3 …… 30
第28図　2号住居出土土器拓影 …… 31
第29図　3号住居及び遺物分布 …… 33
第30図　3号住居出土土器　覆土1 …… 34
第31図　3号住居出土土器　覆土2 …… 35

第32図　4 号 住 居 ……36
第33図　4 号住居カマド ……37
第34図　4 号住居出土土器　ピット 1 ・ 2 ・ 4 ……38
第35図　4 号住居出土土器　ピット 3 ……39
第36図　4 号住居出土土器　覆土 1 ……43
第37図　4 号住居出土土器　覆土 2 ……44
第38図　4 号住居出土土器　覆土 3 ……45
第39図　4 号住居出土土器　覆土 4 ……46
第40図　4 号住居出土土器　覆土 5 ……47
第41図　4 号住居出土土器　覆土 6 ……48
第42図　4 号住居出土土器拓影 ……49
第43図　5 号 住 居 ……50
第44図　5 号住居カマド ……50
第45図　土 坑 分 布 ……51
第46図　A 群土坑　1 ……53
第47図　A 群土坑　2 ……54
第48図　B 群土坑，1 ・ 2 号炉，ピット及び遺物分布 ……55
第49図　B 群　1 号炉 ……57
第50図　B 群土坑及び遺物分布 ……58
第51図　B 群　1 号炉出土土器　1 ……60
第52図　B 群　1 号炉出土土器　2 ……61
第53図　B 群　22号土坑出土土器 ……62
第54図　B 群　25号土坑出土土器 ……63
第55図　B 群　27号土坑出土土器 ……63
第56図　B 群　28号土坑出土土器 ……64
第57図　B 群　29号土坑出土土器 ……65
第58図　B 群　30号土坑出土土器 ……66
第59図　B 群　31号土坑出土土器 ……67
第60図　B 群土坑出土土器拓影 ……67
第61図　C 群　6 号土坑遺物出土状態 ……68
第62図　C 群土坑及び遺物分布 ……69
第63図　C 群　6 号土坑出土土器 ……71
第64図　C 群　16号土坑出土土器 ……72
第65図　C 群　17号土坑出土土器 ……73

第66図　C群　18号土坑出土土器 ……74
第67図　C群　19号土坑出土土器 ……75
第68図　C群　20号土坑出土土器 ……76
第69図　C群　26号土坑出土土器 ……77
第70図　C群土坑出土土器拓影 ……78
第71図　D群　5号土坑及び遺物分布 ……79
第72図　D群　5号土坑出土土器　1 ……80
第73図　D群　5号土坑出土土器　2 ……81
第74図　遺構外出土土器　1 ……82
第75図　遺構外出土土器　2 ……83
第76図　畝状小溝 ……85
第77図　陶磁器 ……87
第78図　鉄製品 ……88
第79図　銭貨 ……88
第80図　砥石 ……88
第81図　小出越遺跡土師器焼成遺構出土土師器の Rb-Sr 分布 ……92
第82図　小出越遺跡住居跡・土坑出土土師器の Rb-Sr 分布 ……92
第83図　小出越遺跡及びその周辺遺跡出土土師器の K 量 ……92
第84図　小出越遺跡及びその周辺遺跡出土土師器の Ca 量 ……92
第85図　小出越遺跡及びその周辺遺跡出土土師器の Fe 量 ……93
第86図　小出越遺跡周辺の遺跡出土土師器の Rb-Sr 分布 ……93
第87図　小出越領域内外の遺跡 ……102
第88図　胎土分析資料　1 ……103
第89図　胎土分析資料　2 ……104
第90図　土師器杯の変遷想定図 ……107

写真図版目次

図版１　遺跡空中写真
図版２　遺跡遠景・調査前の状況
図版３　発 掘 風 景
図版４　発掘風景・遺物・遺構検出状態・遺跡見学会
図版５　遺構分布状態
図版６　60年度　確認調査
図版７　１号住居（完掘状態・カマド・遺物出土状態）
図版８　２号住居（完掘状態・遺物出土状態・土層堆積状態）
図版９　３号住居（完掘状態・遺物出土状態）
図版10　４号住居（完掘状態・遺物出土状態・発掘風景）
図版11　４号住居（カマド・ピット２・３遺物出土状態）・５号住居（カマド・完掘状態）
図版12　Ａ群土坑（分布状態・１・２号土坑）
図版13　Ａ群土坑（３・４・15・７号土坑）
図版14　Ａ群土坑（８・９・11・12号土坑）・Ｃ群土坑（10号土坑）
図版15　Ｂ群土坑（分布状態・22・23号土坑）
図版16　Ｂ群土坑（25・27・28・29・30・31号土坑・１号炉）
図版17　Ｂ群土坑（１・２号炉）・Ｃ群土坑（６・16・18号土坑）・Ｄ群土坑（５号土坑）
図版18　Ｄ群土坑（５号土坑）・畝状小溝
図版19　その他の遺構・沢部河床・Ⅳ・Ⅴ層試掘
図版20　縄文時代の土器
図版21　縄文時代の石器・１号住居出土土器
図版22　１号住居出土土器
図版23　２号住居出土土器
図版24　２号住居出土土器
図版25　３号住居出土土器
図版26　４号住居出土土器
図版27　４号住居出土土器
図版28　Ｂ群土坑出土土器（１号炉）
図版29　Ｂ群土坑出土土器（22・25・27号土坑）
図版30　Ｂ群土坑出土土器（28・29・30・31号土坑）・Ｃ群土坑出土土器（６号土坑）
図版31　Ｃ群土坑出土土器（６・16号土坑）

図版32　C群土坑出土土器（16号土坑）
図版33　C群土坑出土土器（17・18・19・20号土坑）
図版34　C・D群土坑出土土器（26・5号土坑）・遺構外出土土器
図版35　遺構外出土土器・砥石
図版36　陶磁器・鉄製品

表　目　次

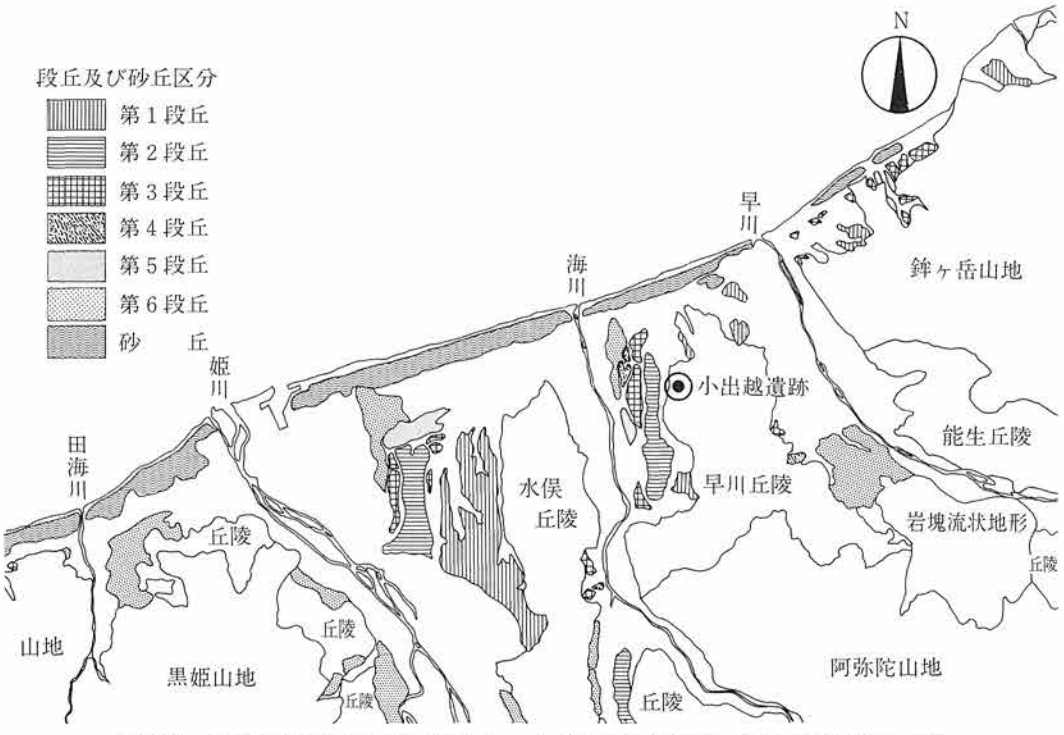
第1表　60年度　発掘調査経過 …… 7
第2表　胎土分析値 …… 94
第3表　土師器器種別組成表 …… 106
第4表　平安時代土器観察表 …… 113

第Ⅰ章　遺跡の立地と周辺の遺跡

1．位置と地形（第1・2図）

西頸城地方は，新潟県の南西部に位置し，南は白馬岳（標高2,933m），小蓮華山（標高2,769m）が連なり，葛葉峠を経て長野県と，西は青海町の親不知子不知の峻嶮を越えて富山県と接している。東は能生町の鉾ケ岳，権現岳や名立町の急峻な山地を経て頸城平野に至る。その中心部に位置する糸魚川市は山地や丘陵が海岸線のすぐ近くまで接近しており，日本海海岸や河川に沿った地域にわずかに広がる低地に立地している。これらの山地や丘陵の間をぬうようにして早川や海川，姫川などの急流河川が流れ，それぞれの河岸に段丘を形成している。特に段丘は姫川河口岸や海川河口岸などに階段状に発達し，その地形面は海や河川に向かって傾斜している。段丘は高位の洪積段丘より低位の沖積段丘まで6段に細分される（鈴木　1983の中でGtⅠ～GtⅥとしたものを本書では，仮に第1段丘～第6段丘と呼称した）。第1段丘は姫川右岸に存在し，標高220～110mを計る。縄文時代の長者ケ原遺跡で知られる長者ケ原段丘面が代表的である。第2段丘は長者ケ原段丘の西側や海川右岸に発達し，標高100～30mである。第3・4段丘は第2段丘の前面周辺の狭い範囲に発達し，標高は20m前後である。第5・6段丘は糸魚川市街や海川右岸などに形成され，標高は数m～10mである。

砂丘は海岸線と平行に走り，現在の市街地や主要幹線はこれらの砂丘上に立地している。砂丘の内陸部に形成された沖積地は河川谷口までの急激な傾斜から平野に移る際に堆積，沈降の



第1図　糸魚川地域の地形分類（1/100,000）（土地分類基本調査，糸魚川1982を参考に作製）

くりかえしによってできた扇状地状の低地と考えられている（鈴木　1983）。

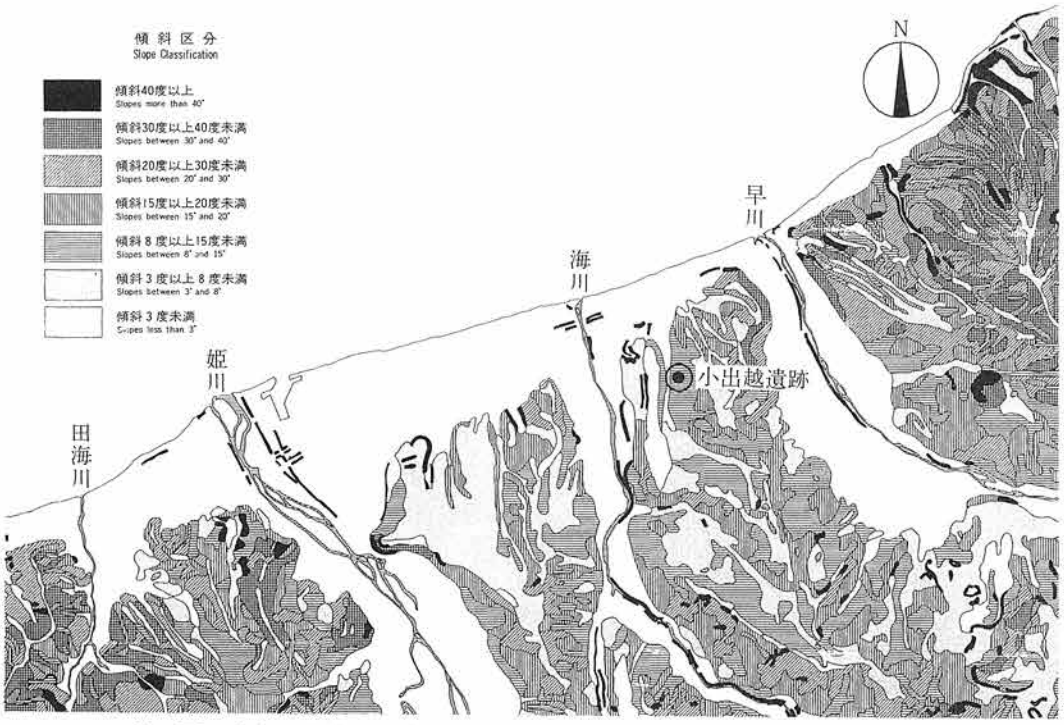
糸魚川地域の地形傾斜区分については，鈴木（1983）の傾斜区分図を用い，ここでは前述の地形分類と同様に姫川と早川に挟まれた段丘地域を概観する。第１・第２段丘付近は傾斜８度未満の緩斜面が大きく広がっている。その周辺は８度～20度未満の比較的急な傾斜となっている。奈良・平安時代の遺跡のほとんどは，傾斜３度未満の平坦部に存在するが，３度以上８度未満の区域にも若干見られる。

小出越遺跡は海川とほぼ併流する谷幅の狭い前川の右岸，海岸より内陸へ約３㎞の位置にある。特に，ここは標高約55ｍ前後で，地すべりに起因する傾斜８度以上15度未満の緩やかな丘陵西斜面上にあたり，前述したように他遺跡の多くが比較的平坦な面に立地するのと対象的である。遺跡周辺の早川丘陵（鈴木　1983）は傾斜30度未満であり，小起伏山地が焼山（標高2,400ｍ）や火打山（標高2,462ｍ）を頂点とした山地に続く。前川をはさんで対岸には標高約60ｍの第２段丘が遠望でき，北方には大和川集落の立地する砂丘地や日本海が眺望できる。

2.　周辺の遺跡（第３・４図）

小出越遺跡周辺の奈良・平安時代の遺跡を概観すると，海川右岸と姫川右岸の河岸段丘上に集中して分布していることがわかる。

海川右岸では小出越遺跡と前川をはさんで対岸の第２段丘の先端部に中原Ａ遺跡が立地している。西側の一段低い段丘上に岩野Ａ遺跡（高橋　1986，土田　1986）や岩野Ｅ遺跡（高橋　1986）

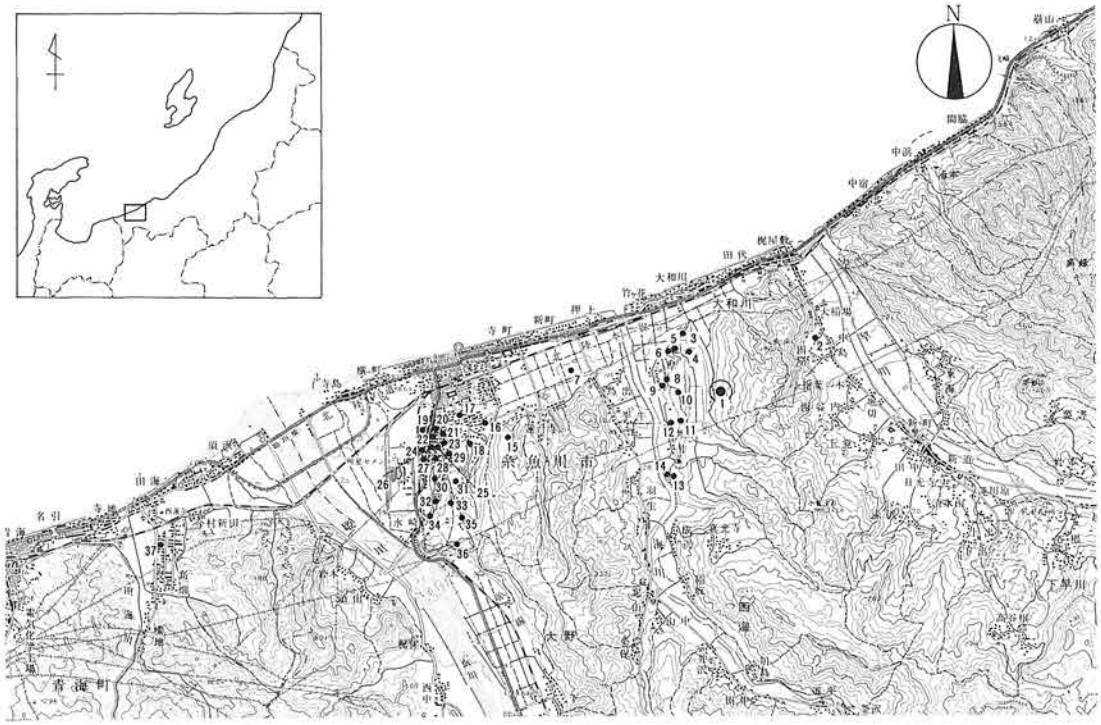


第２図　糸魚川地域の傾斜区分（1/100,000）（土地分類基本調査，糸魚川1982より転載）

がある。他に同一段丘上の北側に山崎Ａ遺跡，山崎Ｂ遺跡，西隣の一段低い段丘上に山崎Ｃ遺跡がある。岩野Ｅ遺跡の存在する段丘の下に発達する標高10ｍ前後の第５段丘上には岩野下遺跡（和田　1987）が立地している。

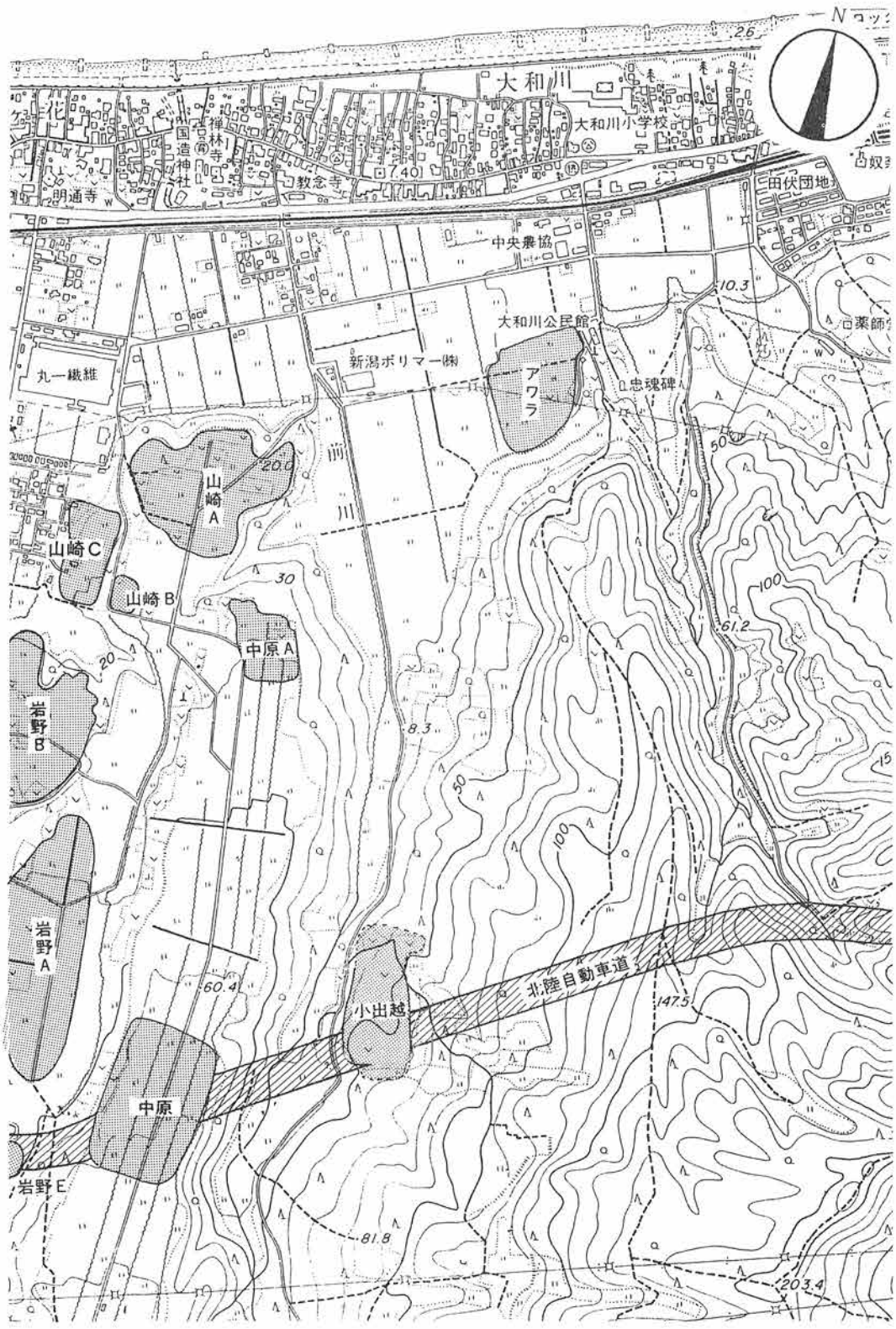
姫川右岸では標高70ｍ前後の第２段丘上に原山遺跡（土田　1986，県教委発掘　1986），標高60ｍ前後に新割遺跡（土田　1986）がある。原山遺跡より一段低い段丘上に美山遺跡（県教委発掘　1986）と道者ハバ遺跡（土田　1986）が存在する。これら両者の段丘の間に標高50～60ｍの段丘があり，そこに鰐口下遺跡（県教委発掘　1986）が立地している。

以上のように今までに確認された奈良・平安時代の遺跡は，その多くが海岸に舌状に張り出した段丘上に分布しているが，近年，沖積地や低湿地における該期の遺跡も発見されてきている。



１．小出越　２．立ノ内　３．山崎Ａ　４．中原Ａ　５．山崎Ｂ　６．山崎Ｃ　７．苗吹田
８．岩野Ｂ　９．岩野Ｃ　10．岩野Ａ　11．岩野Ｅ　12．岩野下　13．坂井Ａ　14．坂井Ｂ
15．後生山　16．城畑　17．城跡　18．菊畑　19．稲場　20．下畑　21．東角地
22．張出　23．茶畑　24．幅上　25．宮屋敷　26．久保角地　27．苗代坪　28．神角地
29．三本松　30．道者ハバ　31．新割　32．鰐口下　33．原山　24．美山　35．苦竹原Ａ
36．苦竹原Ｃ　37．奴奈川

第３図　周辺の遺跡（奈良・平安時代）と地形（1/100,000）（国土地理院，昭和44年３月30日発行，1/50,000）



第4図　遺跡の位置と地形 (1/10,000)

(原図:糸魚川市役所発行　1:10,000地形図 昭和55年)

第Ⅱ章　調査の経過

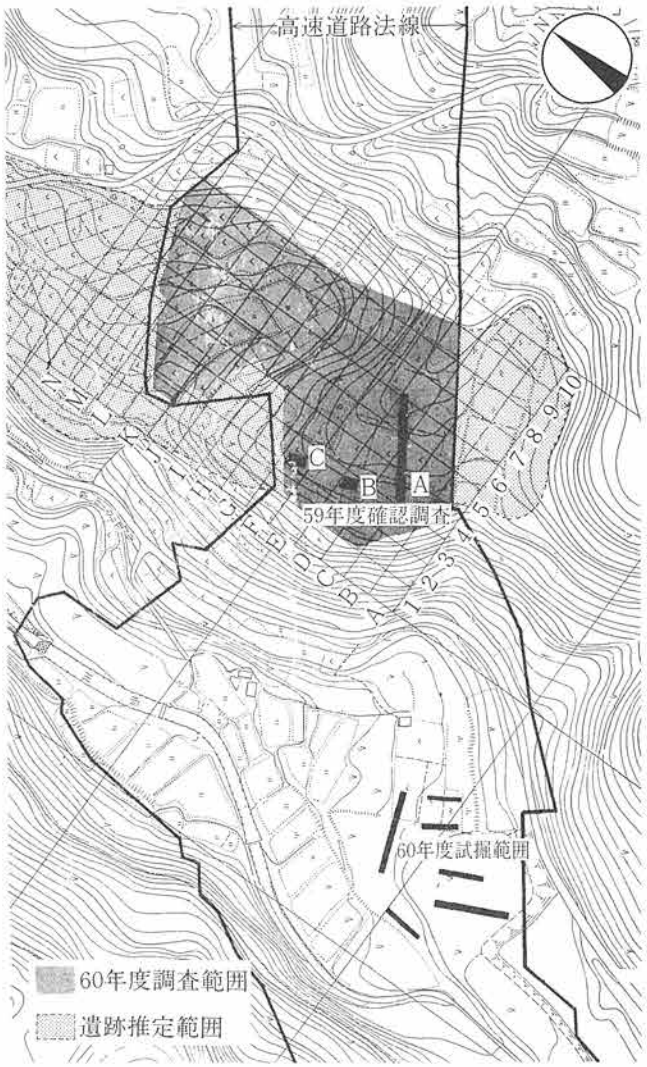
1．昭和59年度確認調査（第5・6図）

確認調査は昭和58年4月9日に実施した北陸自動車道6・7次の分布調査時に，多数の土器片が小出越の畑で採集されたことを受け，昭和59年8月20～22日の3日間実施した。調査は，調査に係る予算積算に必要な基礎資料を得るため遺跡の時期・範囲・遺物包含層までの深さ等を調べることを目的とした。

8月20日，現地にて県教委と日本道路公団糸魚川工事事務所との間で協議し，調査は土地所有者の了解が得られた本調査予定範囲南側の畑地に限って実施することとした。調査区はグリッド設定図（第5図）のA～G-2～10の地域とした。なお調査区の北側（沢を境いに北側）の畑地は耕作中であり，また調査期間が3日前後と限られていたため，本調査時に確認調査を実施し，対応することとした。

調査地区の現状は畑地と一部杉林となっており，試掘は畑のみを主として行った。

調査区は道路計画線の南側境界線にほぼ平行する形で，内側へ15m寄った地点にAトレンチ（長さ36m，幅2m），それより北西寄りにB・Cトレンチ（南北5m，東西2m）を設定した。Aトレンチは北東から南西に2m毎の区画をし，各々A1・A2……A18と呼称した。遺物は各区画毎に収納した。またグリッド設定図Iラインから西側は，畑耕作により上位の平坦面より2段ほど階段状に低くなり，さらに急傾斜となって落ち込んでいる。周辺から遺物は採



第5図　グリッド設定図（1/2,500）

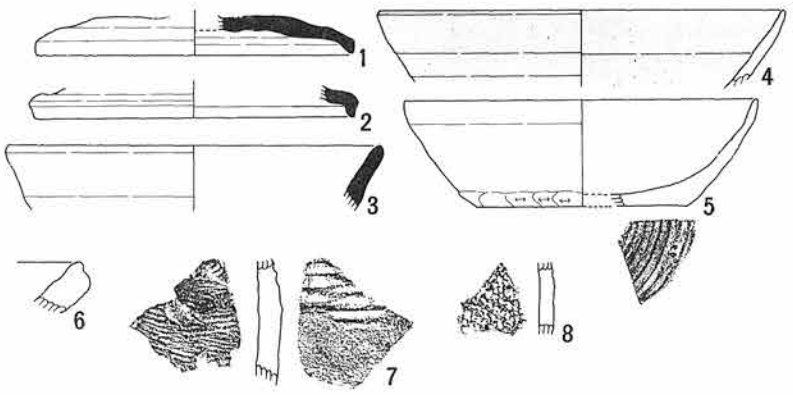
集されていない。またAトレンチの遺物出土状況もA18まで下ると希薄となり，この地域へのトレンチ設定は見合わせた。また，グリッド設定図H・Iライン上に走る沢部の北側畑地については，土地所有者の了解が得られず，本調査時に合わせて確認調査を行うこととした。

遺物の出土状況は，B・Cトレンチからは検出されず，おもにAトレンチから多く出土した。Aトレンチ内でも，A1・A10～A13に分布の密集が認められた。特にA1では作物の根にからんで器種の判明する大きい破片が出土している。

1・2は須恵器蓋で，口縁端部が屈曲して垂下するものでシャープさに欠けるものである。口径12.6cm前後のものである。つまみは欠損している。1はA1とSD12に出土，2はA12出土。3は須恵器杯の口縁と考えられるが，器壁が6㎜と肥厚しており，他の器種の可能性もある。口径14.8cm，A13出土。4は土師器杯で内外面とも赤色塗彩を施す。胎土は緻密なものである。内面下半には縦位，口唇部は横位に赤彩が施される。口径16.0cm，A1出土。5は底部に糸切り痕を有する土師器杯である。外面体部下半に横位のヘラ削りが施される。口径14.0cm，底径8.4cm，A1出土。6・7は土師器甕の口縁部と体部である。6の口縁端部は丸く撫でられておわる。A12出土。7は外面平行叩き，内面ヘラ調整痕を残す。A13出土。8は縄文土器である。単節縄文RLの縄文原体を使用したもので，焼成の硬質なものである。A11出土。

調査の結果，1．遺物包含層は耕作等で荒されており，確認できなかった。地山までの深さは10～20cmほどであった。2．遺構は判明しなかったが，A1やA11に遺物が集中することから，住居跡等の遺構が想定される。3．遺物は土師器が主体をしめ，須恵器が少なかった。わずかに縄文土器もあり，縄文時代と平安時代の複合遺跡であろう。4．遺跡の範囲は，標高55mから上の比較的平坦な面と考えられる。西側は急傾斜になっており遺構の存在はないものと考えられる。

以上，調査区南側の標高の高い地域では，遺跡の内容がほぼ把握されたため，これ以上の試掘坑はあけず本調査に期待した。翌22日埋めもどし作業を完了し，確認調査を終了した。



第6図　確認調査出土遺物（1/3）

2．昭和60年度調査

調査区の設定（第5図）

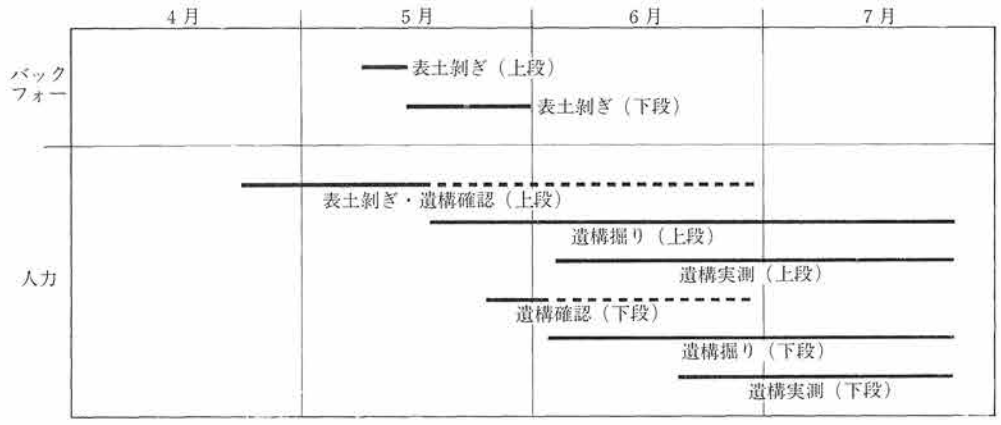
調査範囲内に存在する，日本道路公団設定の“上り車線ステーションNo347杭”を基点とし，それを国土地理院の座標軸に合せ南北，東西方向へ各辺10ｍの区画を碁盤目状に配した。区画は調査範囲南西隅を基点とし，そこから東方向（ｘ軸）へ１・２・３……真北方向（ｙ軸）へＡ・Ｂ・Ｃ……の記号を付した。なお，各調査区（10×10ｍ）の呼称は，ｘ－ｙ軸の記号の順に５－Ｄ区，９－Ｇ区等と表した。また，Ｇ・Ｈライン付近を境に便宜的に南側の標高の高い地域を上段，北側の低い地域を下段と呼ぶこととした。

調査の方法と経過（第1表）

４月19日，器材搬入等，諸準備を行ない，４月22日より作業員を導入し調査を開始した。59年度試掘調査で結果の出せなかった北側（下段）についても表面採集，試掘を実施した。当初，調査は59年度に実施した確認調査の結果を積算の基準とし，調査員３名，作業員20名，調査期間３ケ月，調査範囲2,700㎡で実施する予定であったが，前述した下段への調査の結果，遺物集中地点が確認され，調査面積は上・下段合せ約9,500㎡にふくれ上った。その時点で，作業員の倍増，重機導入の必要性が生じたが，それらの補強が成ったのは５月の半ば過ぎであった。

調査方法は，59年度実施の確認調査または，調査当初におこなわれた表面採集，試掘等の結果を考慮し，遺物・遺構が集中すると推定される５・６・７－Ｂ・Ｃ・Ｄ区（上段），３・４－Ｊ・Ｋ区（下段）を人力による調査とし，他の部分は，バックフォーにより表土剝ぎを実施した。また当初より発掘中に出た排土の置き場がなく，調査範囲内で処理せざるをえなかった。そこで９－Ｆ・Ｇ・Ｈ区の試掘を実施し，遺構・遺物の無いことを確認した上で排土場所とした。遺構内の遺物取り上げ方法は，プラン確認の段階で遺構の重複が見られ，遺物の帰属遺構をとらえるため，基本的には分布図を作成し取り上げをおこなった。また，遺構外のものに関しては，10×10ｍのグリッド単位で層序毎に取り上げを実施した。

第１表　60年度　発掘調査経過



上段で表土剝ぎが終了したのは５月中旬である。遺物包含層は存在せず，その時点で，遺構の分布がほぼ確認された。これらは試掘，表面採集の結果とほぼ一致し，平安時代に属する住居跡・土坑群は，南側の５・６・７-Ｂ・Ｃ・Ｄ区に集中し，西側斜面には時期不明の土坑群と，近代の畝状小溝が分布していた。おのずから，調査の主体を平安時代の住居跡と土坑群に向けた。遺構は近代の攪乱により，遺存状態が悪く，個々の形状をとらえることに苦慮した。遺構内の調査は，５月中旬より着手し７月下旬に終了した。

下段で表土剝ぎが終了したのは，５月末である。南側の沢部より，良好な遺物包含層が確認されているが遺構は検出されなかった。この地区は湿地のため，植物性の遺物・遺体の出土が期待されたが，皆無であった。４・５-Ｌ区に平安時代の土坑・住居跡が検出されたが，他の範囲からは，近代の耕作痕と思われる落込みが多数発見されている。遺構内の調査は，６月上旬から７月末までである。また遺物の取り上げに関しては，上段と同様である。

以上，上段・下段を合せ，全ての作業が終了したのは７月26日である。

試掘調査（第５図）

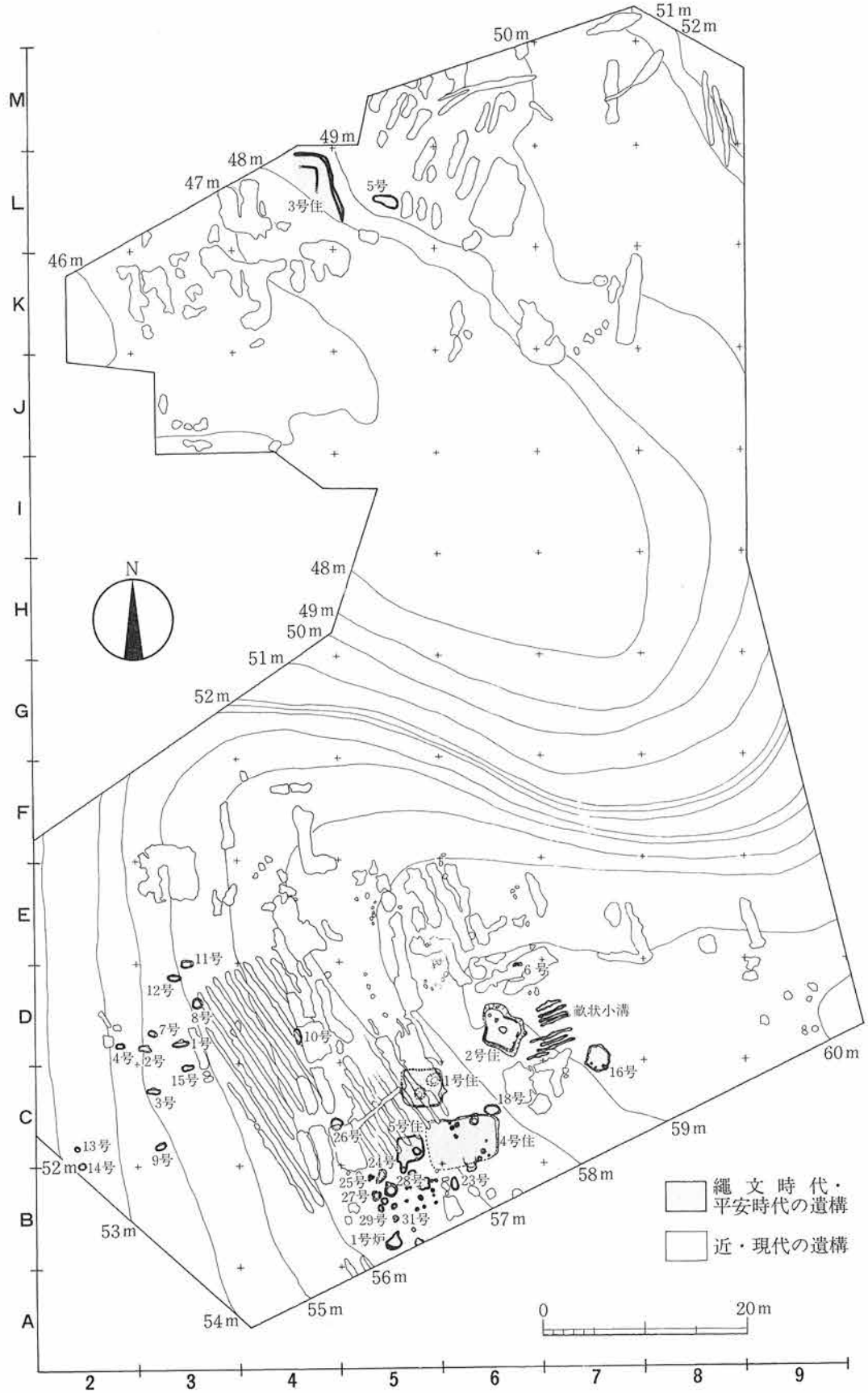
本遺跡の南西部には，約900ｍ×50ｍの平地が存在する。この平地は，グリッド設定区域より一段低く，現状では杉林・湿地・荒地であったが，遺物の有無を確認するため，７月15日～17日の３日間試掘調査を実施した。試掘溝は幅２ｍ長さ約10～30ｍを６本入れた。その結果，層序は表土層（暗褐色土）が約10～20㎝であり，その下に礫層（茶褐色土・砂・礫の混合土）が厚く堆積することが確認され，前川の氾濫原の一部と推定された。遺構・遺物の存在も認められないため，調査を終了した。

3．61年度整理作業

報告書にともなう整理作業は，昭和61年８月から翌年３月にかけてであったが，実際の整理作業は断続的であった。当初，調査員と作業員の比率が不安定で，作業量にもかなり影響したが，後半，現場作業終焉と同時に，調査員の増加および，作業員の安定確保がなされた。

遺物洗浄，注記作業に関しては，発掘調査の期間中にほぼ終了したため，実際には８月当初土器接合から作業を開始した。また，土器の遺存状態が非常に悪く，ほとんどは，接合作業前にバインダー処理をおこなわねばならなかった。

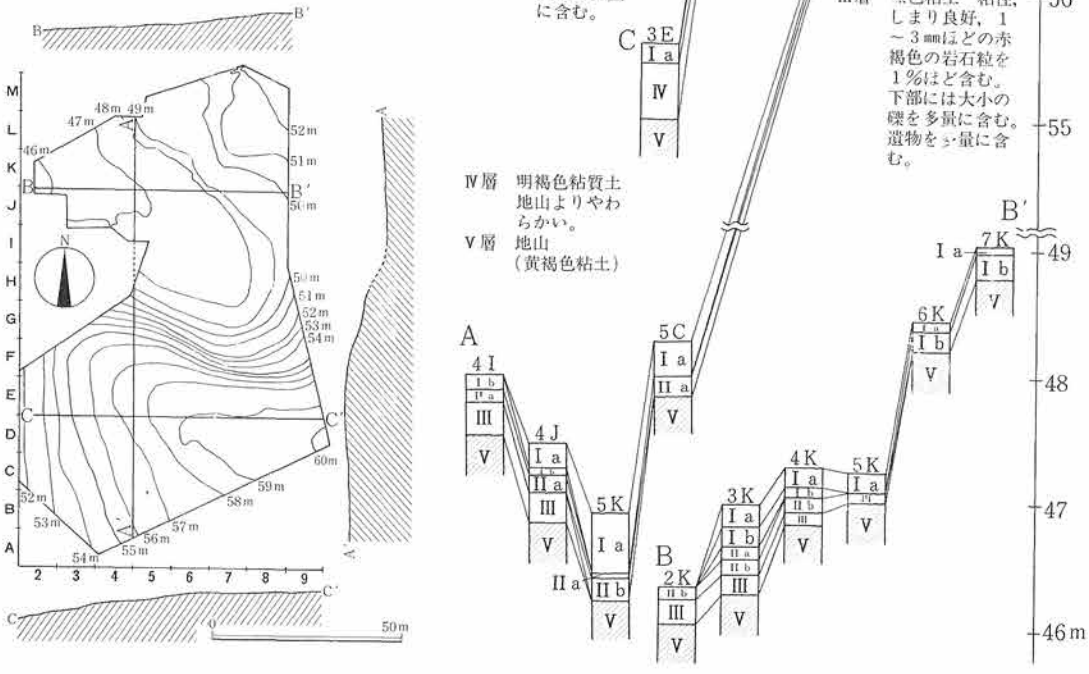
作業は，土器量がかなり多く（遺構内出土土器は他遺跡のそれに比べ，比較できないほど多量である。）接合可能な資料も多数含まれることから，接合・実測・復原等にかなりの日数を費し，人員を投入した。



第7図　遺構配置図（1/600）

4. 遺跡の層序（第8図）

調査前の状況は，荒地及び一部畑地で，良好な状態で土壌が堆積しているものと想定された。しかし，実際は遺跡の上段と下段とではかなり異なる様相を呈している。基本的な層序はⅠ層表土（耕作土），Ⅱ層黒褐色粘質土（平安時代の遺物包含層），Ⅲ層黒色粘土層，Ⅳ層明褐色粘質土（縄文時代の遺物包含層），Ⅴ層黄褐色粘土（地山）である。上段ではⅠ・Ⅳ・Ⅴ層の順に堆積しているが，Ⅳ層は頂部西側の傾斜地に残存するだけである。下段ではⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ層の順で，このうちⅡ・Ⅲ層は埋没して沢地周辺の底地面のみに残存する。これらの状況からⅡ・Ⅲ・Ⅳ層は傾斜地や低地へ流れ込んだ2次堆積と推定される。よって上段及び下段の頂部付近では，遺構外から出土する遺物は少なく，極端な場所では表土約20cmを削平すると，すぐ地山面に至るといった，丘陵特有の土壌堆積状態を示す。

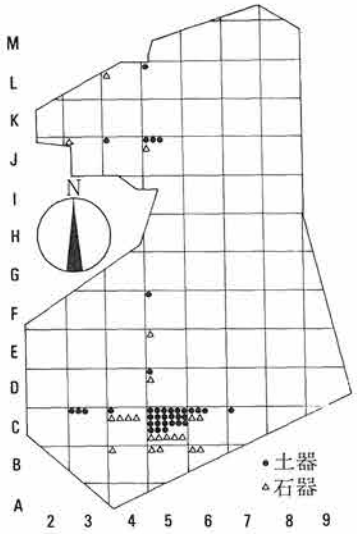


第8図　遺跡の層序

第Ⅲ章　遺構と遺物

検出された遺構と出土した遺物の概要は次の通りである。

縄文時代　遺構　土坑数基
　　遺物　前・中期の土器，石器，抉状耳飾
平安時代　遺構　竪穴住居跡５，土坑18，畝状小溝
　　遺物　土器平箱約70箱，鉄製品，（銭貨）
近・現代　遺構　畝状小溝，性格不明遺構
　　遺物　陶磁器，鉄製品，砥石



第９図　縄文時代遺物分布

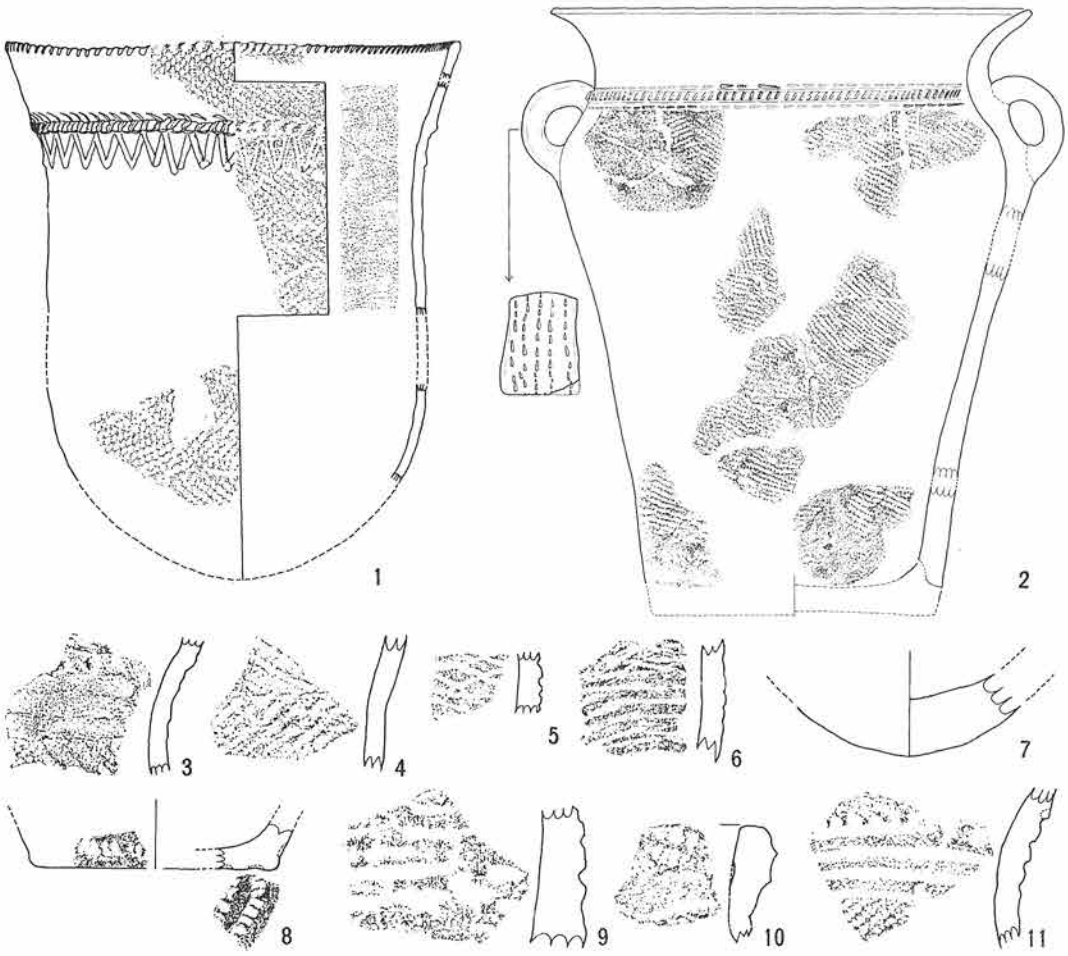
１．縄文時代（第９図）

遺物を出土した遺構は検出されていない。遺物は，上段の５－Ｃ区を中心に下段にも若干分布する。包含層はⅣ層と考えられるが，後世の遺構または表土層からの出土も若干含まれる。土器は，それぞれ小破片で遺存状態もかなり悪く，全体を窺い知るものは少ない。

土　　器（第10図，図版20）

１・３～９は，前期初頭から前半にかけてのものである。１は口縁部が外反し２単位のゆるい波状を呈する。胴部下半は若干ふくらみ底部は丸底になるものと推定される。内面は横位の細かな条痕が施されるが，条痕で消しきれなかった指圧痕が散見される。外面は地文にRLRとLRLの羽状縄文が施され，口縁端部と頸部に文様帯をもつ。端部内外面には刻みが施される。頸部は粘土紐を貼り付け刺突が施される。さらに上下より爪形が加えられている。隆帯下には半截竹管により鋸歯状文が施されている。施文順位は，縄文→口唇部刻み／頸部隆帯→刺突→爪形→半截竹管である。胎土は精練され，細かな繊維が混和材として混入されている。また頸部に補修孔が見られる。３・６は胎土が極めて似ており，胎土・焼成・内面の調整等，１と同様である。３は地文に原体RLの羽状縄文をもち，頸部上位に観察される瘤は，刺突により盛り上がらせる。下位は，竹管状の工具により３条の押し引きが見られる。４は不明瞭ながら，上位に原体LRを押圧しその後，下位にRLを回転させている。４・５は同一個体と思われ，５が６の上に位置すると考えられる。５は網目状撚糸文，６は半截竹管によっている。内側には条痕が見られ，胎土には細かな繊維が混入している。７の胎土は粗い水晶粒が多量に含まれる。８は，半截竹管による連続刺突が底部と胴部に施される。９は，外面に断続的な深い沈線が施される。10は肥大する口縁外面に大きな原体RLが施され，下位には横位の沈線が見られる。

２は，一対の環状把手をもつ短頸壺形土器である。無文の口縁部は鋭く外反し，胴部とは連続した刻み目文を付した隆帯によって画されている。頸部から肩部にかけて付けられた把手には，縦方向に五列の刺突文が施されている。また同様な工具で施文されたと思われる横方向の



第10図　縄文時代の土器（1・2＝1/4，他は1/2）

刺突列が，隆帯を上下から挟むように二列巡る。胴部からは緩やかに内湾しながらすぼまり，底部に至る。なお，胴部文様は縄文LRが方向を変えてほぼ全面に施文されている。時期的には中期最終末に比定されよう。11は，中期前葉に比定され，文様帯は半截竹管による横位の沈線によって区画され，上位には，半截竹管による刺突，下位には原体LRが施される。

石　　器（第11・12図，図版21）

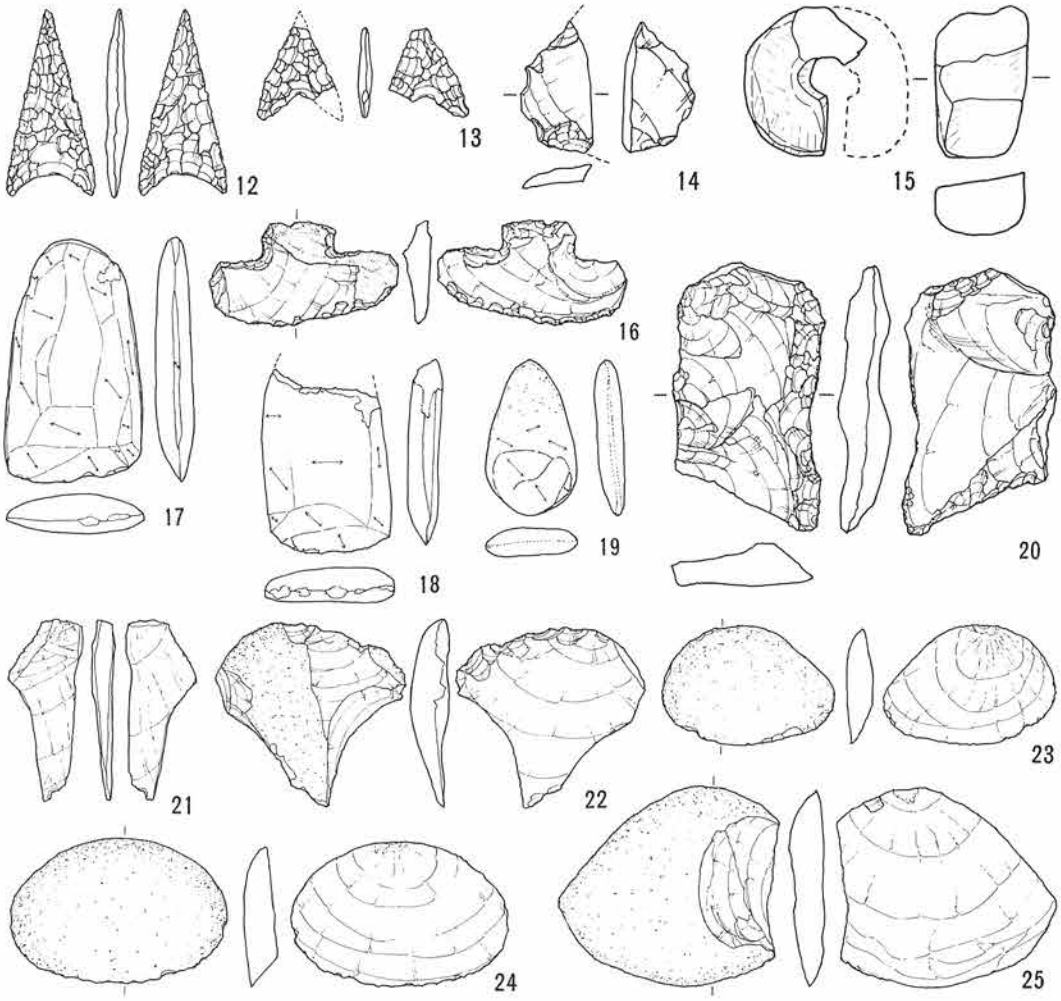
石鏃2，磨製石斧4，石匙1，スクレイパー1，抉状耳飾1，剥片31が出土している。

石鏃（12・13）は，いずれも凹基無茎(注1)鏃である。両者とも周辺は押圧剥離により丁寧に仕上げられている。石質は12が鉄石英，13が黒耀石である。14は頁岩製の未成品と思われる。

抉状耳飾（15）は，滑石製であり，約半分を欠損する。

石匙（16）は，片面に原石面を残す横長の剥片を素材とする。周辺への二次加工は，素材の形状を損わない程度に施されている。石質は頁岩である。

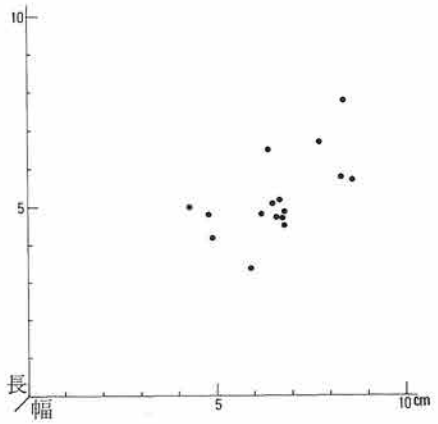
スクレイパー（20）は，横長の剥片を素材とし，側辺に細かな二次加工を施している。裏面には細かな刃こぼれがみられる。石質は頁岩である。



第11図　縄文時代の石器（12～15＝⅔，16～20＝½，21～25＝⅓）

磨製石斧（17～19）は，全て蛇紋岩製である。小型で薄く片刃となるものが一般的である。

剥片（21～25）は，正・裏面が剥離面で構成されるものと，礫表皮を剥ぎ取ったように正面が原石面を残すものとに大別される。前者は１点（21），他は全て後者である。第13図は，後者に該当する剥片の長幅比であり，７㎝台の小型のものが多数含まれる。中には縁辺の１部に刃こぼれ様の細かな剥離がみられるが，磨滅・光沢等は観察されない。

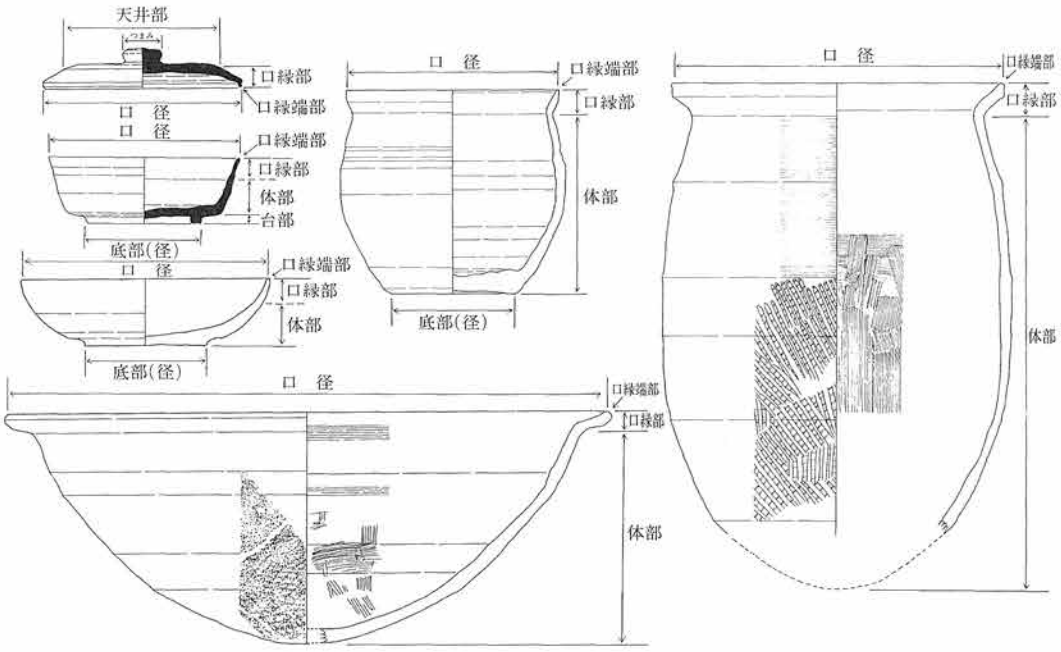


第12図　剥片長幅比

2．平安時代

A．土器分類について（第13・14・15図）

土器細部名称



第13図　土器各部位名称

実測図の表わし方

◦須恵器断面は黒塗り，土師器は白ヌキにし両者を区別した。

◦撫では———で表わし，削りは——で表わした。また，撫でと削りの境線は—（沈線または，器体が明瞭にくびれる部分も実線で対応している）とした。

◦削りの方向は→の矢印で表わし，削りの始めと終りの不明瞭なものは↔で表わした。

◦赤彩部分は，□で，黒色処理部分は，▨のスクリーンで表わした。

各器種の細分（第14・15図）

小出越遺跡から出土した遺物は多量でありその主体は平安時代の土師器である。これらは，ほとんど遺構内から出土している。土師器には，杯・椀・鉢・ロクロ成形甕（以後，甕とする）非ロクロ成形(注2)甕・小型甕・鍋・盤・足高杯・台付大型皿等が存在し，各器種の中でも器形や口縁端部の違いにより数タイプが存在する。

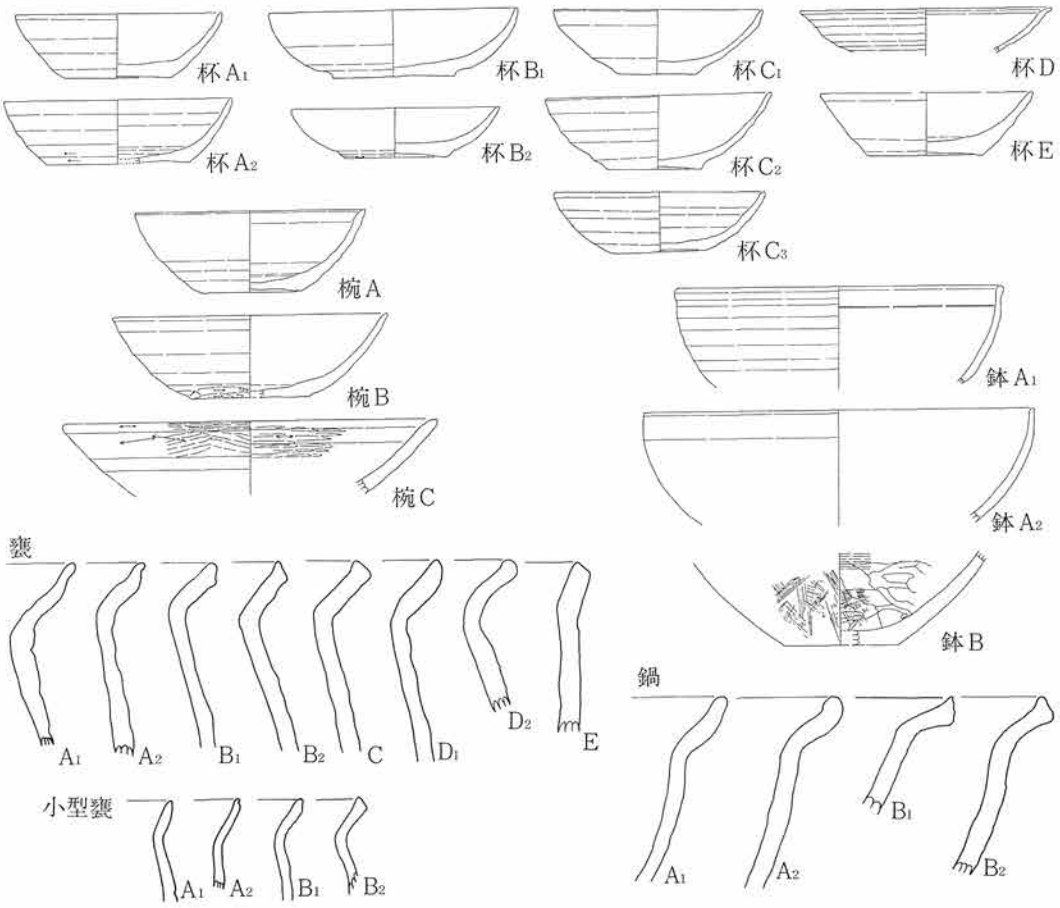
また，本遺跡は第Ⅴ章２で説明するように土師器焼成遺構と考えられるものが検出されており，一般の土器消費地と土器組成が異なる(注3)。焼成遺構内から出土した土師器は同一器種・同一タイプを焼成する可能性もあり(注4)，遺構内出土のものが特定の器種で同一タイプに片寄ることも考えられる。したがって，遺構内出土の土器様相の違いが即，時期的な違いとは言えず，同一

時期の器種の違いに起因する可能性も存在する。そこで，これら多種の遺物にみられる時期幅，または同一時期のタイプ差等を整理してゆくためにも，各遺構内出土遺物を説明する前に土器の分類を行なう。

実際の分類作業は，多量に出土している土師器杯・椀・甕・小型甕・鉢・鍋に関して行ない，出土量の少ない須恵器の各器種・土師器非ロクロ成形甕・盤・足高杯・台付大型皿については割愛する。また分類したものは，器種別に若干分類基準が異なる。杯・椀・鉢は，器形全体のプロポーション・調整技術等を考慮し，甕・小型甕・鍋については，口縁から底部まで全体を復原できる資料が少ないため，口縁端部の成形によって分類作業を行っている。

杯A類　口径の割合に器高・底径が大きく，体部は内湾して立ち上がる。器壁が厚手で体部下半にヘラ削りが施されないもの（A1）。器壁がやや薄手で体部下半に回転ヘラ削りが施されるもの（A2）の2種類に分けられる。A2類には，ごく希にヘラ削りの施されないものがある。

杯B類　底径の割合に器高が低く，撫でによりくびれた体部下半から急激に内湾し口縁部に達する。底部外縁部が無調整のもの（B1），底部外縁部の突出部分をヘラ削りにより調整し丸



第14図　土器分類（杯・椀・鉢＝1/4.5，その他は1/3）

味をもたせるもの（B2）の2種類に分けられる。

杯C類　口径の割合に底径が非常に小さく，体部はやや緩やかに内湾して立ち上がる。口縁部が明瞭に屈曲して立ち上がるもの（C1），器高が高く大型のもの（C2），底部外縁部の角を撫で調整により丸味をもつもの（C3）の3種類に分けられる。

杯D類　器壁は薄く，体部の形態は緩く立ち上がり口縁部で外反する。ロクロ撫での凹凸が顕著で，凸部に限ってミガキが施されるものが多い。

杯E類　底部から直線的に立ち上がり，ラッパ状に開くもの。器壁が厚く，内外面にはロクロ撫での凹凸が顕著に残る。

椀A類　体部は内湾して立ち上がり，やや小ぶりのもので体部下半に削りは施されない。

椀B類　体部はやや内湾気味に立ち上がり，大型のもの。体部下半にヘラ削りが施されるものが多い。

椀C類　体部はやや直線的に開き，内外面とも入念にヘラミガキが施される。

鉢A類　小ぶりの底部から内湾して立ち上がり，体部下半に手持ちのヘラ削りが施されるもの。このうち，口縁部が内傾するもの（A1），口縁部を入念にロクロ撫でし，くびれを有するもの（A2）の2種類に分けられる。

鉢B類　器面調整に入念なミガキが施されるもの。

甕A類　口縁部は内傾気味に立ち上がり，端部は丸味を帯びる。口縁端部がつまみ上げられただけのもの（A1），端部の内面を押えつけ外側へ折り返すもの（A2）の2種類に分けられる。体部には粘土紐の凹凸を顕著に残す。

甕B類　外側に開いた口縁部を端部で屈曲させ上方へつまみ上げるもので，口縁端部を直立気味につまみ上げるもの（B1），内傾気味につまみ上げるもの（B2）の2種類に分けられる。

甕C類　B2類で作り上げた内傾気味の口縁端部外面を，新たに押さえ平担な面に仕上げるもの。

甕D類　B類で作り上げた口縁端部の屈曲部を，新たに撫でにより丸く仕上げるもの（D1），端部内面を隆帯状に盛り上がらせるもの（D2）の2種類に分けられる。

甕E類　頸部の屈曲がほとんど目立たないもの。

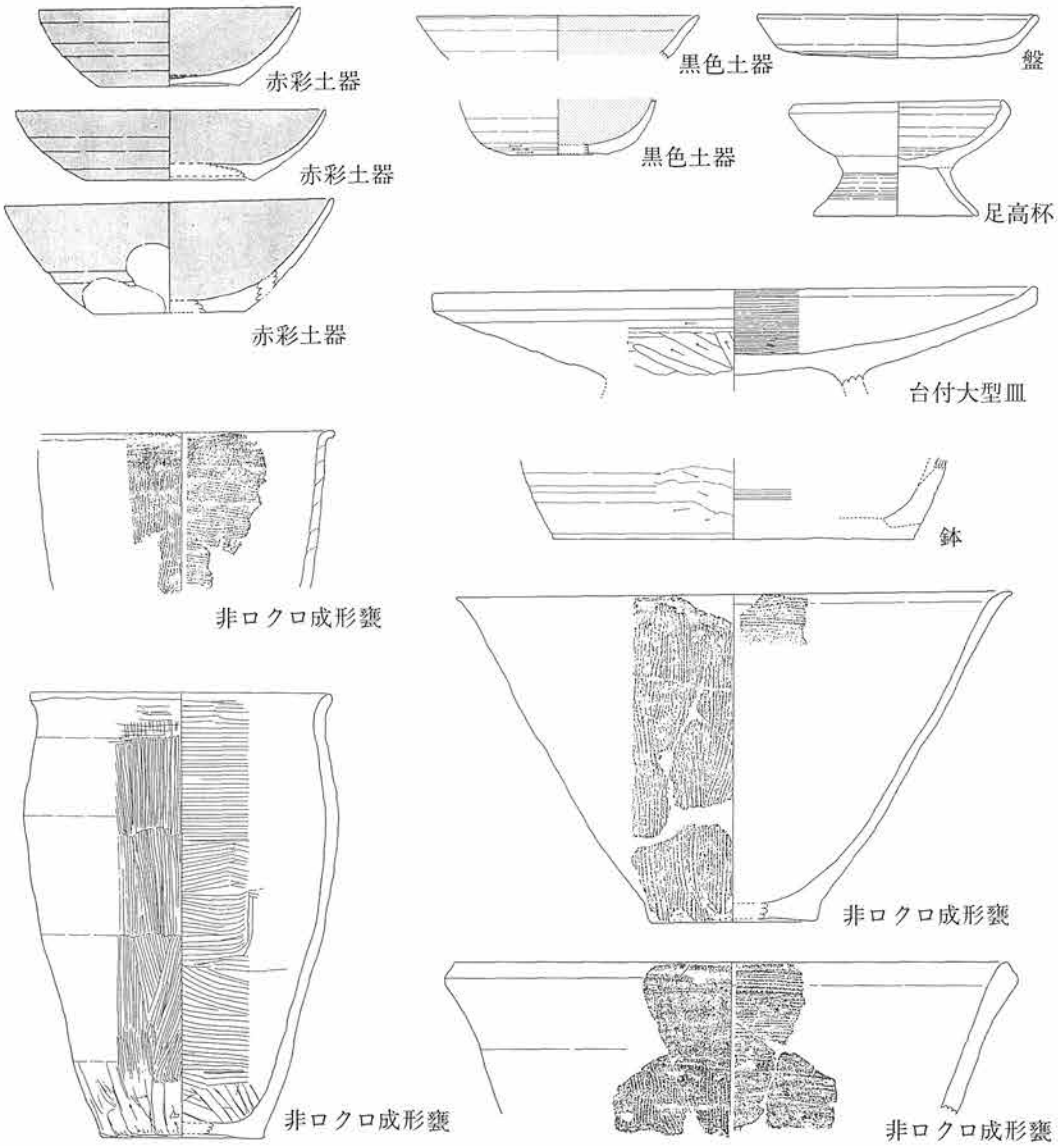
小型甕A類　口縁部は内傾気味に立ち上がり端部外面に明瞭な屈曲部をもたないもので，端部無調整のもの（A1），端部の内面を押えつけ先端部を外側へ折り返すもの（A2）の2種類に分けられる。

小型甕B類　外側に開いた口縁部を端部に至って屈曲させ上方へつまみ上げるもので，口縁端部を直立気味につまみ上げるもの（B1），内傾気味につまみ上げるもの（B2）の2種類に分けられる。

鍋A類　口縁部は内傾気味に立ち上がり端部外面に明瞭な屈曲部をもたないもので，端部無調整のもの（A1），端部を肥厚させ丸く仕上げるもの（A2）の2種類があり，A2には希に端部

内面を隆帯状に盛り上がらせるものがある。

鍋B類　外側に開いた口縁部を端部で屈曲させ上方へつまみ上げるもので，口縁端部を直立気味につまみ上げるもの（B1），内傾気味につまみ上げるもの（B2）の2種類に分けられる。



第15図　その他の土器（1/4.5）

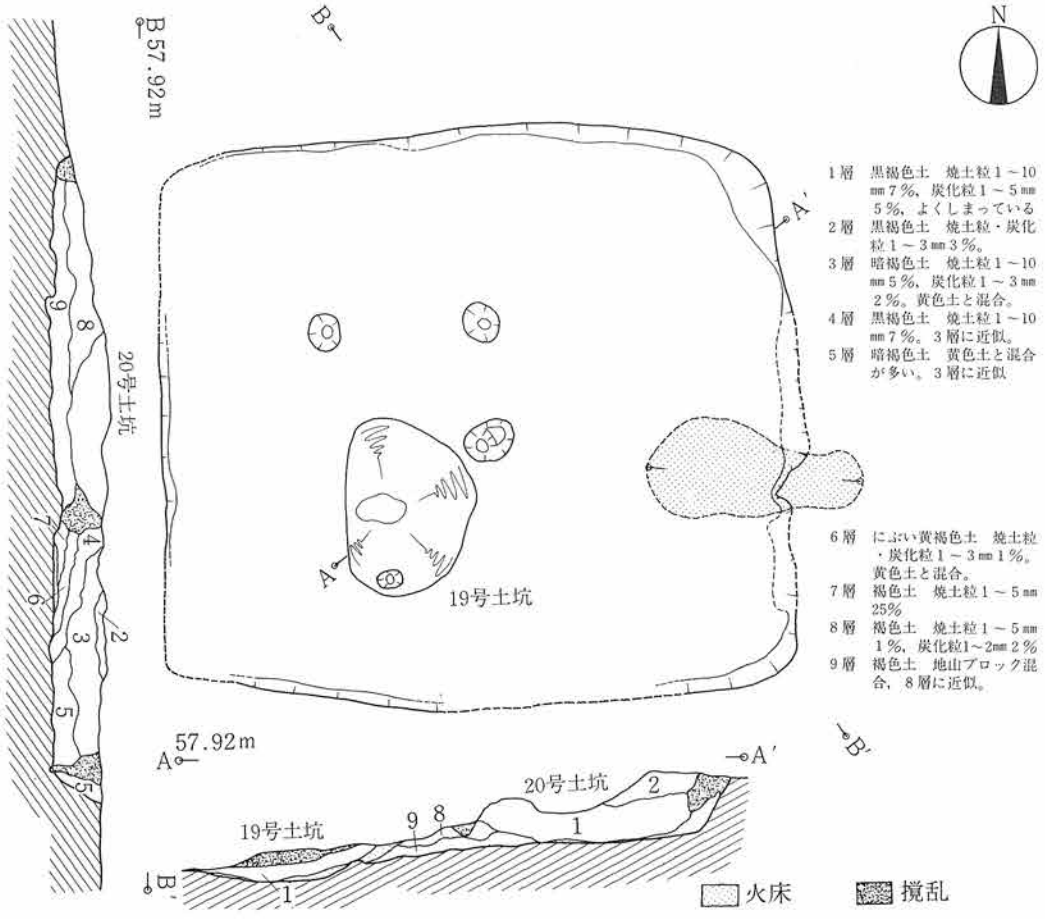
B. 住 居 跡

1 号 住 居（第16～18図，図版７）

検出区は５・６-Ｃ区にまたがっている。北西から南東に走る数本の畝状小溝によって，かなりの部分が破壊されている。壁面の立ち上がりは，攪乱の影響範囲外で部分的に確認される。中でも西側半分は，ほとんど破壊されており，復原の部分が多い。また，19・20号土坑が竪穴埋没後，構築されている（詳しくは，Ｃ群土坑で説明する）。

規模は，長軸4.2ｍ，短軸3.8ｍのほぼ方形を呈するものと推定され，床面積は約16㎡である。主軸方位はＮ-90°-Ｅである。遺構確認面での掘り込みは，中でも遺存状態の良い竪穴東側で約44㎝を測る。

覆土は全部で９層に識別されるが，19・20号土坑の覆土を除き本住居自体の覆土としては８層に分けられる。大きくは２～５層の黒褐色土を主体とするものと，６～９層の黄褐色土を主体とするものに大別される。後者は基本土層Ⅳ層にきわめて近似する。各層には炭化物・焼土粒が粒の大小・量を問わず含有されている。

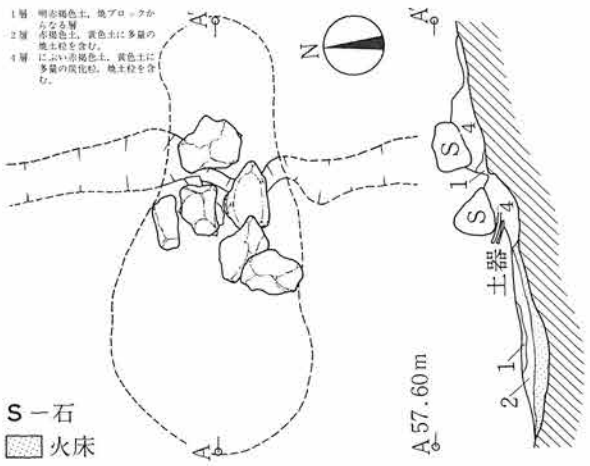


第16図 １号住居（1/50）

硬化した床面等は確認されなかった。9層は，地山（V層）ブロックが多量に含まれ，下面は凹凸が著しく本住居の掘り形面と考えられる。

周溝は検出されなかった。

ピットは3基検出され竪穴のほぼ中央に位置する。いずれも深さは10cm前後と貧弱で主柱穴となるものは無さそうである。

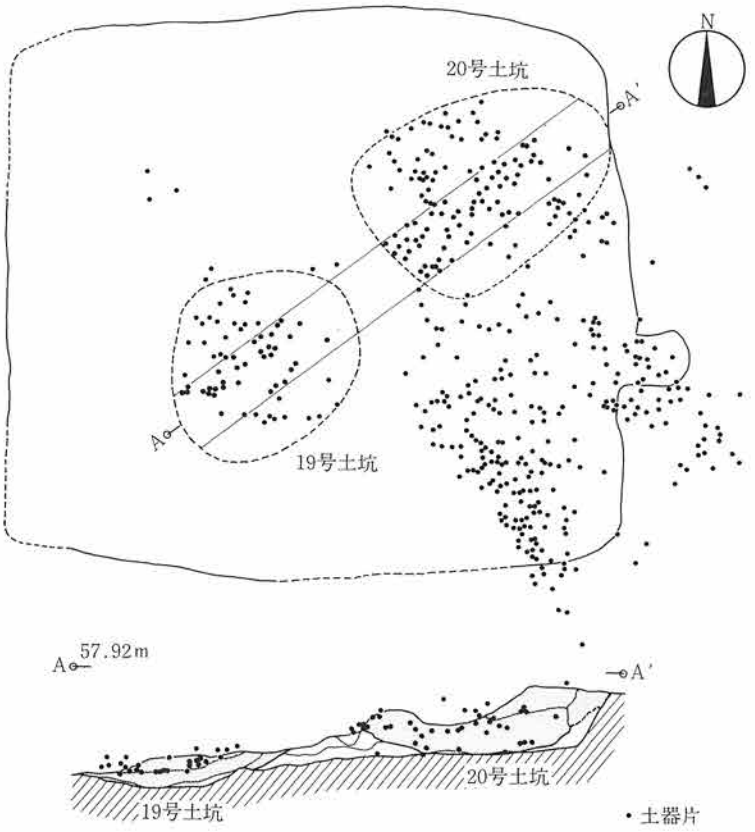


第17図　1号住居カマド（1/25）

カマドは，竪穴の東壁ほぼ中央に位置するが，ほとんど破壊された状態で検出された。構築時に使用したと考えられる角閃石安山岩の自然角礫が6個，中央にまとまって出土している。周辺には炭化物・焼土が多数出土しており，特に礫集中部の西側には，火床と思われる落ち込みが確認され地山が硬く焼けていた。また，カマド両脇の壁は，撹乱部分にあたるため，明確に検出することは出来なかった。

出土遺物（第19～22図，図版21・22）

本住居から出土した遺物は，須恵器・土師器・礫に分けられる。須恵器は杯と蓋の細片が5点と少なく，図化できなかった。礫に関しては，その多くがカマド構築の際，使用されたものと考えら



第18図　1号住居，19・20号土坑遺物分布（1/50）

れる。したがって遺物の大半は土師器である。

遺物分布状態は，19・20号土坑内出土のものを除き，ほぼカマドとその焚き口部周辺に集中している。遺物のほとんどは，2～5層の黒褐色土を主体とする層に含有されており，床面付近と考えられる8・9層に含まれるものは，小破片のみ僅かである。カマド範囲から出土したものも前述のように浮いたものが大半を占めるが，中でも第19図にレイアウトしたものは，崩れた礫の下から重なるように出土しており，しかも個体の半分以上の破片であるため，本住居出土遺物中では最も信頼性の高い共伴資料と考えられる。

接合状況は，19・20号土坑との関係が少数見られるが，大方はカマド付近とその焚き口部周辺での接合が多い。したがって，ここではカマド付近のものと覆土出土のものに分けて説明する。

カマド付近出土遺物（第19図）

杯（1～6）　器形全体の特徴よりC2・E類の2種類が含まれる。細片のため分類できないものも多くある。

C2類（1・2）は両者とも胎土・焼成が極めて似ており底部切り離し後，周縁部分のみ撫でが加えられ丸味をもたせている。また内面は，滑らかに仕上げられており，体部には部分的に黒斑がみられる。

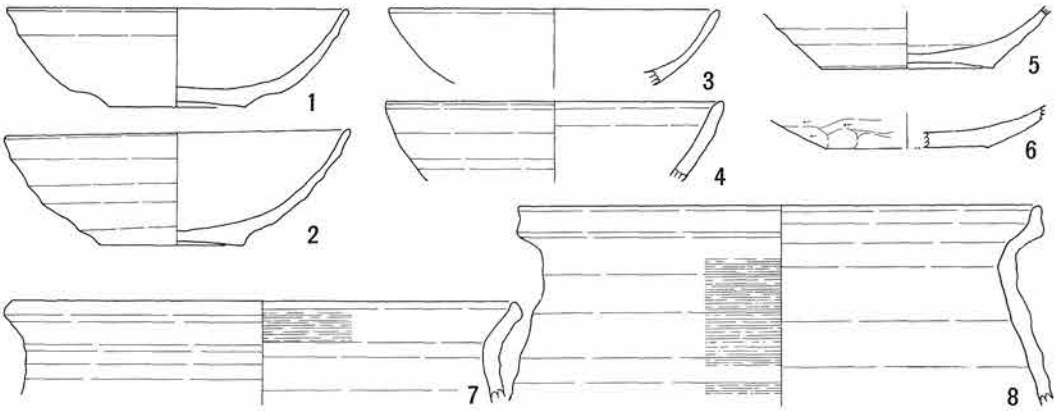
E類（5）内面は撫でにより滑らかであり，本類に多く認められるロクロ痕は消去されている。

その他，3・4は小片であるため詳細は不明であるが，特に4の口縁部は異常に厚いため，E類の可能性がある。6は唯一，体部下半に手持ちによる削りが施されている。

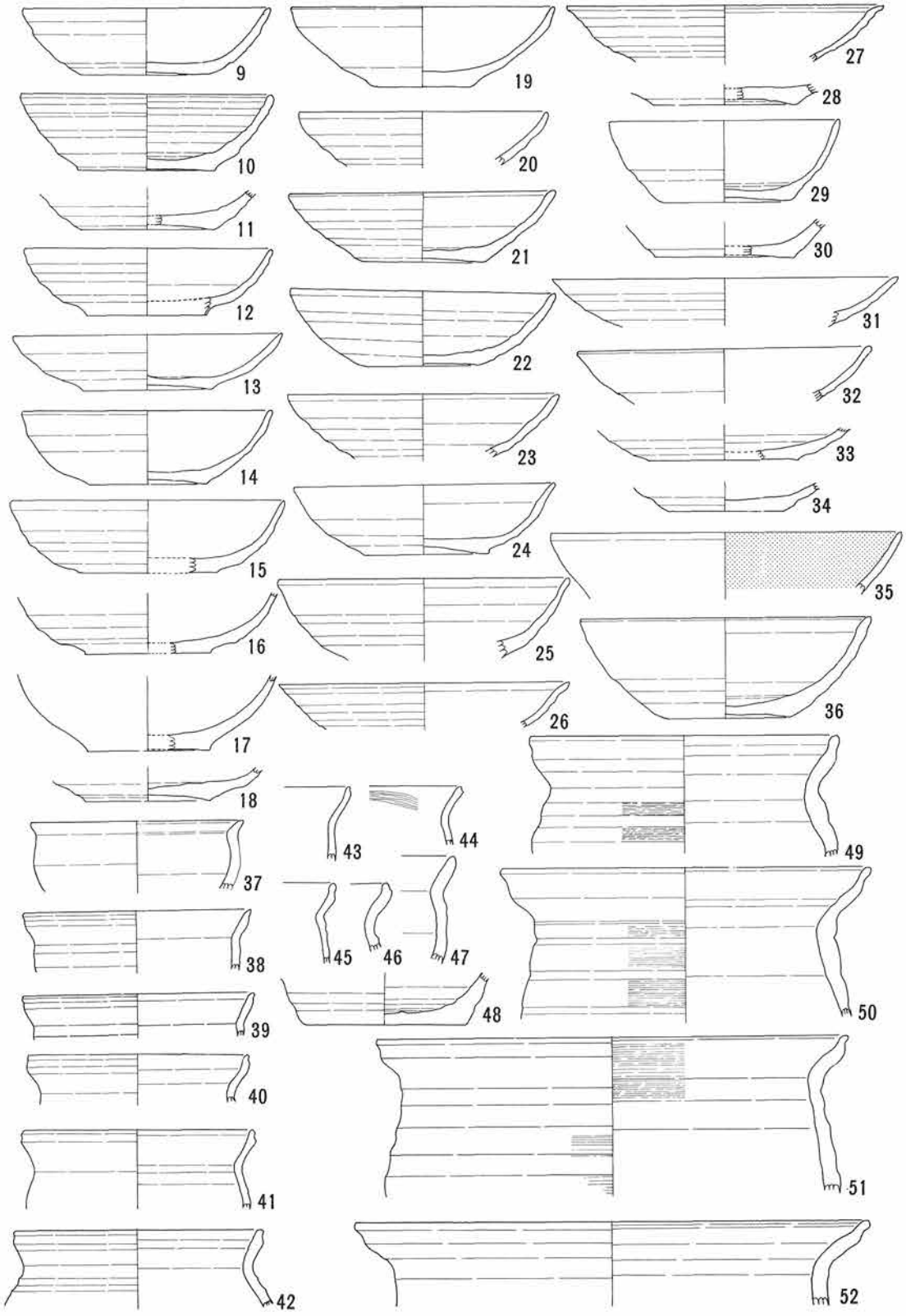
甕（7・8）　B1類(8)・B2類(7)が出土している。7は内面に，8は外面にそれぞれ細かなカキ目調整が観察される。また8の口縁端部のつまみ上げはきわめて大きい。

覆土出土遺物（20～22図）

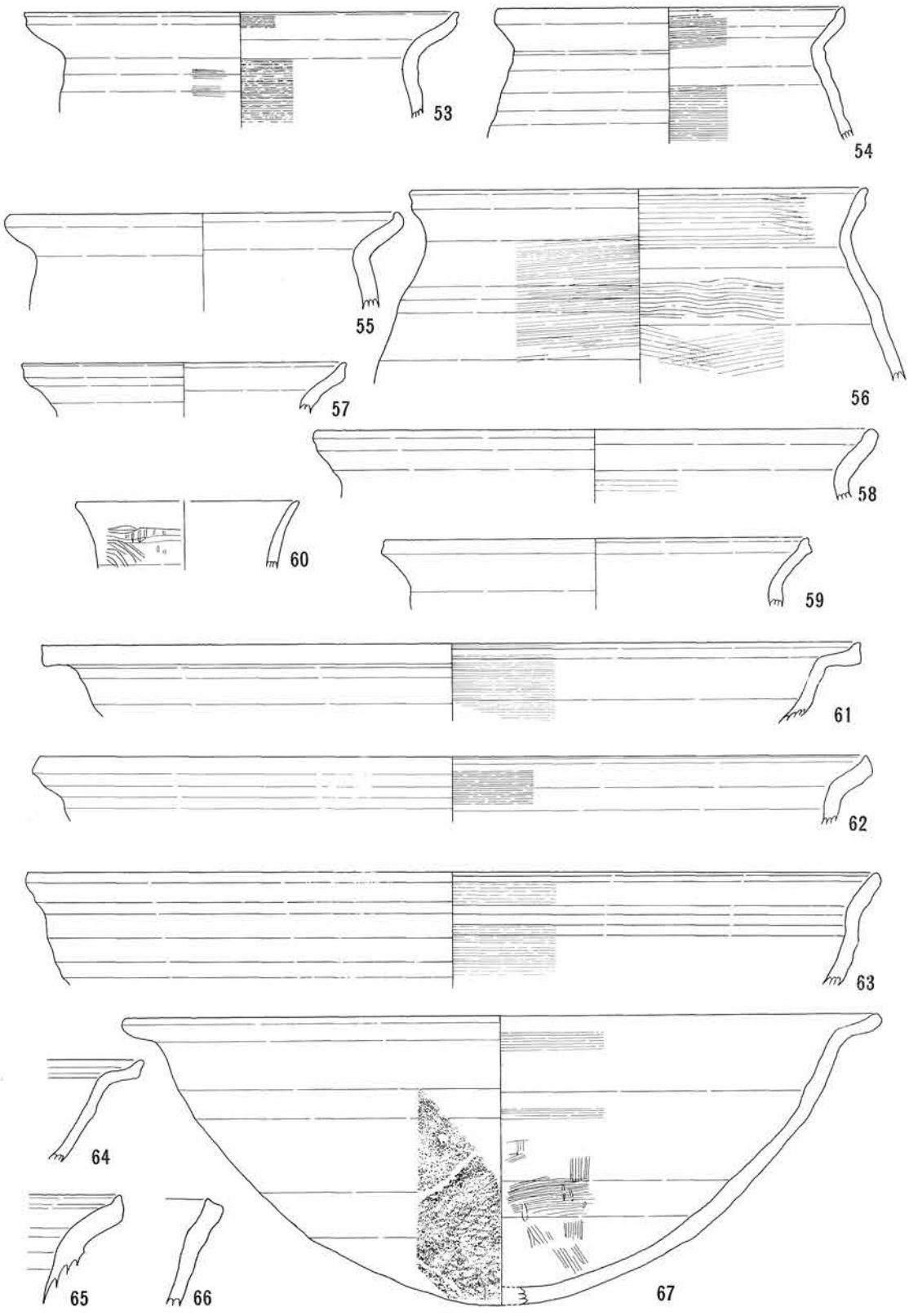
竪穴から出土したもので，上記したカマドより出土したもの以外をここで取り扱うこととする。



第19図　1号住居出土土器　カマド付近（1/3）



第20図　1号住居出土土器　覆土1　(1/3)



第21図　1号住居出土土器　覆土2　(1/3)

杯（9～35）　底部破片の識別により50個体以上が含まれると推定される。A1・A2・B1・C1・C3・D・E類の多種類が出土している。

A1類（9・10・11・29）は本住居から出土した杯の中で最も焼成が良い。10は内外面ともロクロ痕をかなり残すが，11の内面は撫でにより平滑に仕上げている。

B1類（12～18），内面は，比較的遺存状態の良い12・14・15・16をみる限り，撫でにより平滑に仕上げている。13・14・16の体部外面には，広い範囲で黒斑が認められる。15は，外面の口縁部に鉱物が溶解したような，黒色のガラス質付着物がみられ，焼きは非常に硬く，器体は部分的に還元焔焼成の様相を呈す。

C1類（19・20）は，内面が平滑に仕上げられている。

C3類（21～25）は，内面がいずれも平滑に仕上げられている。24の底部付近は，ヒビ割れによる歪みを生じている。22は，器高が高く，底径が小さい標準的タイプである。

D類（26～28），28は内外面のロクロ痕凸部に対し，ミガキが施される。26は，外面のロクロ痕凸部に対し，不明瞭ながら光沢が観察される。

その他（30～34）は，破片のため分類できなかったものであるが，15は体部の立ち上がりからE類に近似し，31～33は，器高が低く，口縁に向かって外方へ広がるように開くことからD類に近似すると考えられるが，器壁が厚く，口縁端部の作り出しも異なることから本類に含めることはできない。34は，底部回転糸切りの後，底部と体部下半に対し，削りが施されるもので本住居では1点のみの出土である。器面はかなり荒れているが，削り部分の粒子の動きから，回転による削りと考えられる。内面は平滑に撫でられている。

黒色土器（35）は1点のみの出土である。

椀（36）　A類に含まれる。1点のみの出土である。

小型甕（38～48）　口縁部破片の識別により13個体以上が含まれると推定される。A1・A2・B1・B2類が出土している。

A1類（47）は1点のみの出土である。他の同種のものに比べ器壁がかなり厚い。

A2類（38～40・43・45）は本住居出土の小型甕の中で最も多いタイプである。他のものに比べ，最も器壁が薄く，胎土・焼成も良くない。38のように胴部が張らないものと，45のように張るものとがある。

B1類（41・42）・B2類（44・46）は全体的に焼成が良く，胎土も精練されているようである。胴部が張るもので占められている。42の口縁から胴部にかけては，広い範囲で黒斑がみられる。

48は，底部破片である。底部内面から胴部にかけてロクロ痕が顕著に観察される。

甕（49～59）　口縁部破片の識別により15個体以上が含まれると推定される。しかし，個体別の口縁部破片の割合に比べ，胴部破片の数が異常に少ない。A1・A2・B1・B2・D2類が出土している。

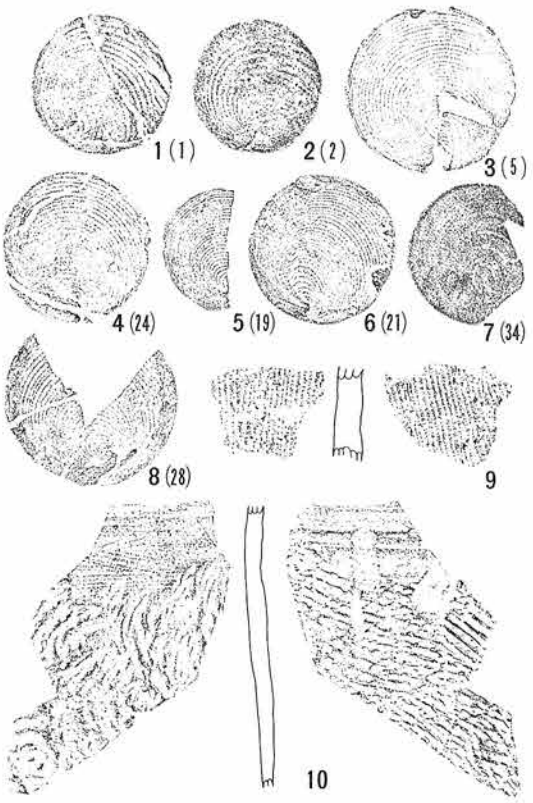
A1類（49・50・52）は，胎土に大小の白色粒が含まれており，他のタイプのものと区別される。

頸部の屈曲部から体部にかけては，輪積み痕の凹凸がそのまま残され，その凸部に限ってカキ目調整が施される。これらは，A1 類に特徴的にみられる体部上半への調整と言える。49・50は，体部が張るが，52は，若干ふくらみをもつ程度と推定される。

A2 類(51・53)の体部には，A1 類でみられた頸部屈曲部から体部上半にかけての顕著な輪積み痕はみられないが，他のタイプに比べ凹凸は目立つ。また凸部へのカキ目調整も A1 類ほど顕著ではないが観察される。体部の張りは，両者とも，それほどふくらみをもたない。

B1 類(54・56・57)は，A類に比べると一般的に焼成が良好である。外面体部上半はA類とは異なり，輪積み痕をカキ目により平滑に調整している。

B2 類(59)は，他に3点出土している。



第22図　1号住居出土土器拓影 (1/3)
( )内の数字は遺物番号

鉢(37・60)は図化した2個体のみである。いずれも細片のため全体像をとらえることはできなかった。37は，内外面撫で調整により丁寧に仕上げられている。最も近似する形態である A2 類に比べ小型で器壁も厚く，口縁部が外反する。60は口径が不明であるが，ラッパ状に口縁を開き，外面にはヘラ状工具により沈線が施されている。

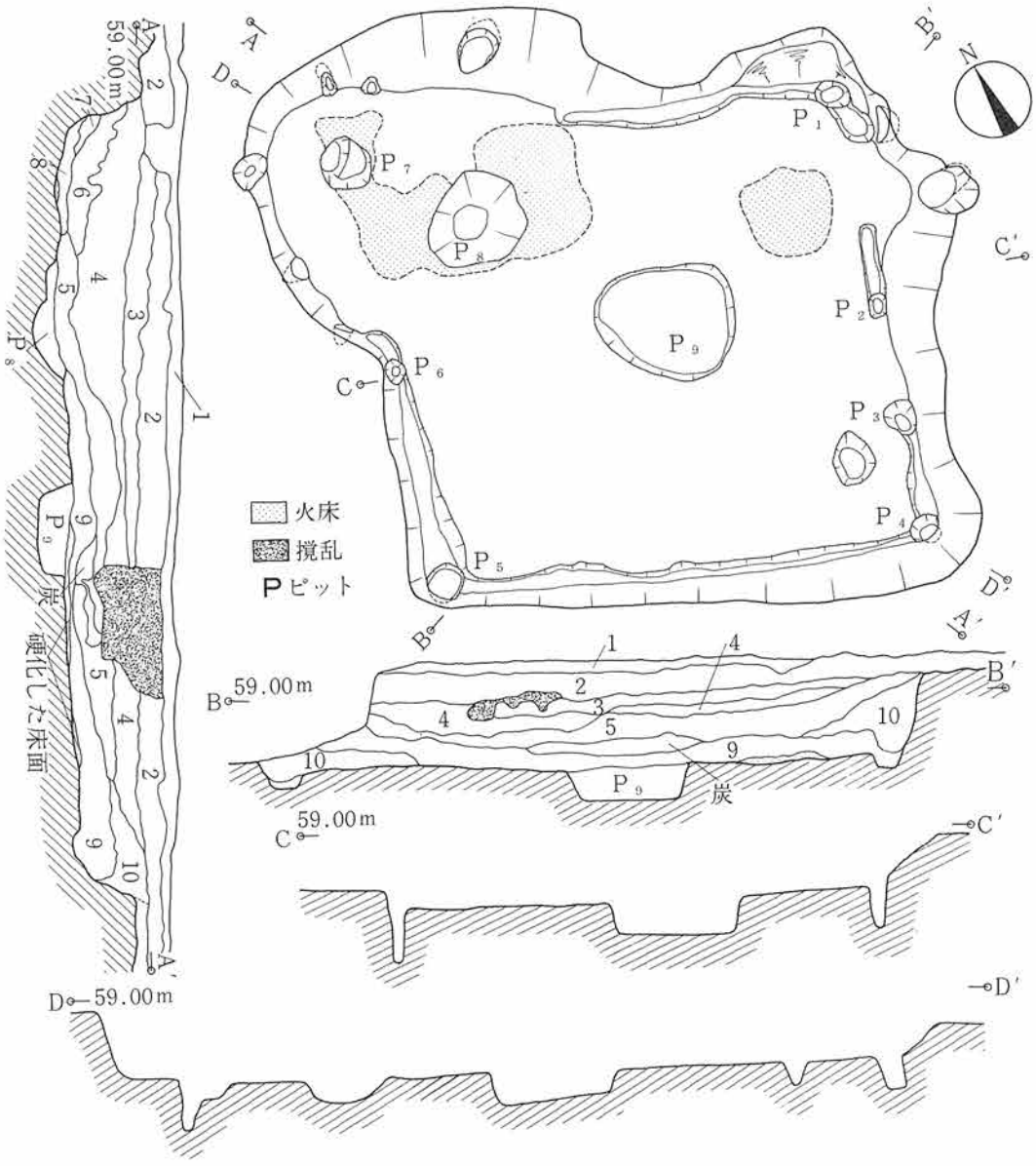
鍋(61～67)　口縁部破片の識別により12個体以上が含まれると推定される。甕同様，別個体の口縁部破片が多く，それに見合うだけの体部破片は出土していない。A1・B1・B2 類が出土している。各資料とも外面体部上半から口縁端部にかけては撫で，内面はカキ目によって調整が施されている。

A1 類(63)は他に3点出土している。B1 類(61・64・65)は本住居から出土した鍋の中で最も多いタイプである。

B2 類(62・66・67)　67は唯一，全体像の復原できる個体である。外面体部上半から内外面の口縁部にかけて撫で調整が施され，体部下半は格子叩き目によっている。その後，体部の撫でと叩き目との境に限って不定方向に削りが施される。内面体部上半は横位のカキ目，下半はハケ目調整が施される。また下半に限って，前段階の押圧痕がカキ目により消去されず部分的に残存する。

2号住居（第23～28図，図版8）

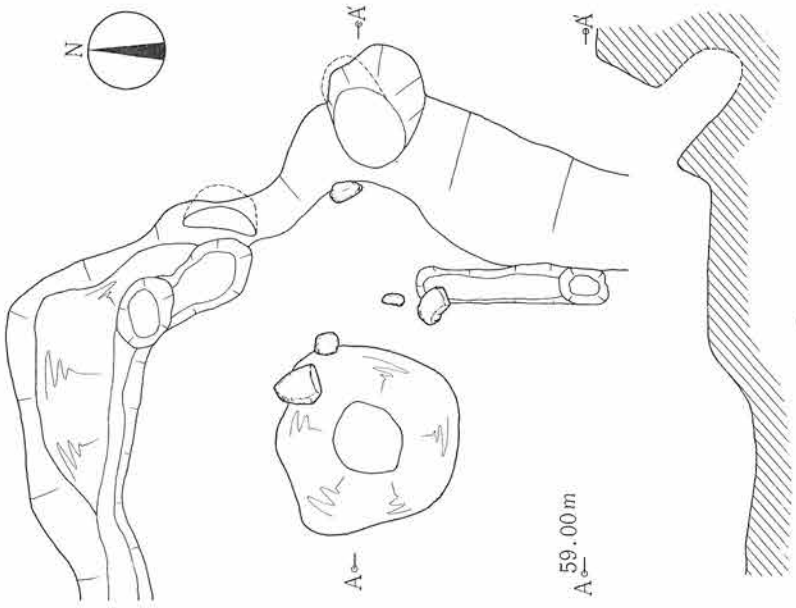
土師器焼成遺構とも考えられるが詳しくは，第Ⅴ章で述べる。ここでは一応，住居として説明する。検出区は6-D区である。基本的には方形のプランを呈するが，北西隅には大きな張り出し部分をもつ。ここでは覆土の連続性から，張り出し部も住居の一部と考えておく。



1層　暗褐色土　耕作土。
2層　暗褐色土　耕作土，しまり若干あり。
3層　黒褐色土　粘性，しまり若干あり。
4層　黒色土　焼土粒1～5㎜を若干含む。
5層　黒褐色土　焼土粒1～10㎜10%，炭化粒1～3㎜1%
6層　褐色土　焼土粒1～10㎜2%，黄色土粒が混合。
7層　暗褐色土　焼土粒と黄色土粒の混合土
8層　褐色土　焼土粒・炭化粒・黒色土の混合土
9層　明褐色土，黄色土を多量に含む，住居の第1次推積土。
10層　暗褐色土　炭化粒1～4㎜2%
Pa　焼土層
Pb　褐色土　地山ブロックを混合，住居覆土9層に近似。

第23図　2号住居（1/50）

規模は，方形部分で長軸4.8m，短軸4.3mを測り，床面積はおよそ20.5m²である。主軸方位はN-65°-Wである。確認面からの掘り込みは，北西隅の張り出し部分で64cm，東壁で54cmとかなり深いが，南西部では，後世の耕作による土壌流失が見られる。張り出し部分の床面と壁の立ち上がり部分には，火の影響により硬化した面が認められる。床面はかなり広い範囲で焼けているのに対し，壁面は，部分的に硬化している。また北東隅に位置する火床と思われる硬化面は，本住居のカマド火床としたが，不明な点が多い(注5)。



第24図　2号住居カマド（1/25）

覆土は第3～10層の8層に識別される。これらは1号住居同様，3～5層の黒褐色土を主体とするものと6～10層の黄褐色土を主体とするものに2大別される。9層を除く各層には炭化物・焼土粒が粒の大小・量を問わず含有されている。また5と9層に挟まれた部分に炭化物の層が確認されている。これらは竪穴のほぼ中央部のみに分布している。

床面は，火床のレベル・硬化面等の存在から，ほぼ掘り形と同じレベル（9層下面）がこれに相当するものと考えられる。

周溝は，方形を呈する部分にのみ検出されている。北西の張り出し部分を除き，ほぼ全周するが，北東隅のカマド周辺で部分的に跡切れる。幅10～40cm，深さは10cm平均である。覆土は竪穴の第1次堆積土である9層に近似する。

ピットは全部で18基確認されている。その中で周溝内より検出されたP1～P6とP7は，深さ30cm前後を測るしっかりした穴で，本住居の柱穴と考えられる。それぞれの隅を占めるP1・P4・P5・P7の内，P1を除く残りの穴は，底部が外側に傾斜するように穿たれている。張り出し部分の壁面にも，大小のピットが存在し，その多くは柱穴同様底部を外側に傾斜させている。

カマドは，東壁の北側に位置すると推定されるが，半ば破壊された状態であったため，構造等をとらえることはできなかった。周辺には若干掘り窪められた火床が存在し，カマド構築時

に使用されたと思われる自然礫が散乱する。

出土遺物（第25～28図，図版23・24）

本住居から出土した遺物は，須恵器・土師器・礫に分けられる。礫に関しては1号住居同様カマド構築に使用されたと考えられる。

遺物は，大半が方形部分より出土しており，張り出し部分からの出土は少ない。出土層位は床面直上からのものが細片のみ僅かで，ほとんどは浮いた状態で4・5層に含まれている。また，土器が限られた範囲に集中するということはなく，まんべんなく含まれている。接合状況は，方形部・張り出し部の別なく，かなりの距離を隔てたものが接合する例が多く認められる。また垂直分布からも，上下約30㎝離れた土器片が接合する例がある。住居外との接合関係で特筆することは，距離を隔てて東側に位置する6号土坑との接合関係である（詳細は6号土坑参照）。

須恵器（68～76）

蓋（68～70）　つまみ部・端部折り返し部等の識別により5個体以上が含まれると推定される。68・70は，本住居出土品の一般的な形態で，器高が低く，端部の折り返しは弱い。また，つまみ頂部は平坦に仕上げられる。それに比べ69は，器高も高く，端部の折り返しも強い。そして，宝珠形のつまみをもち，天井部を回転ヘラ削りの後，撫でにより丸く仕上げている。また，内面中央には，回転糸切り痕が不明瞭ながら観察され，成形技術の一端を窺い知ることができる（第28図12）。

有台杯（71・72）　僅か2点のみの出土である。底部は回転糸切りの後に撫で調整が施される。

無台杯（73～76）　6点出土している。底部はいずれも回転ヘラ切りの後，撫で調整が施される。75・76は，台付か否か不明であるが，器壁の薄い作りである。

土師器（77～129）

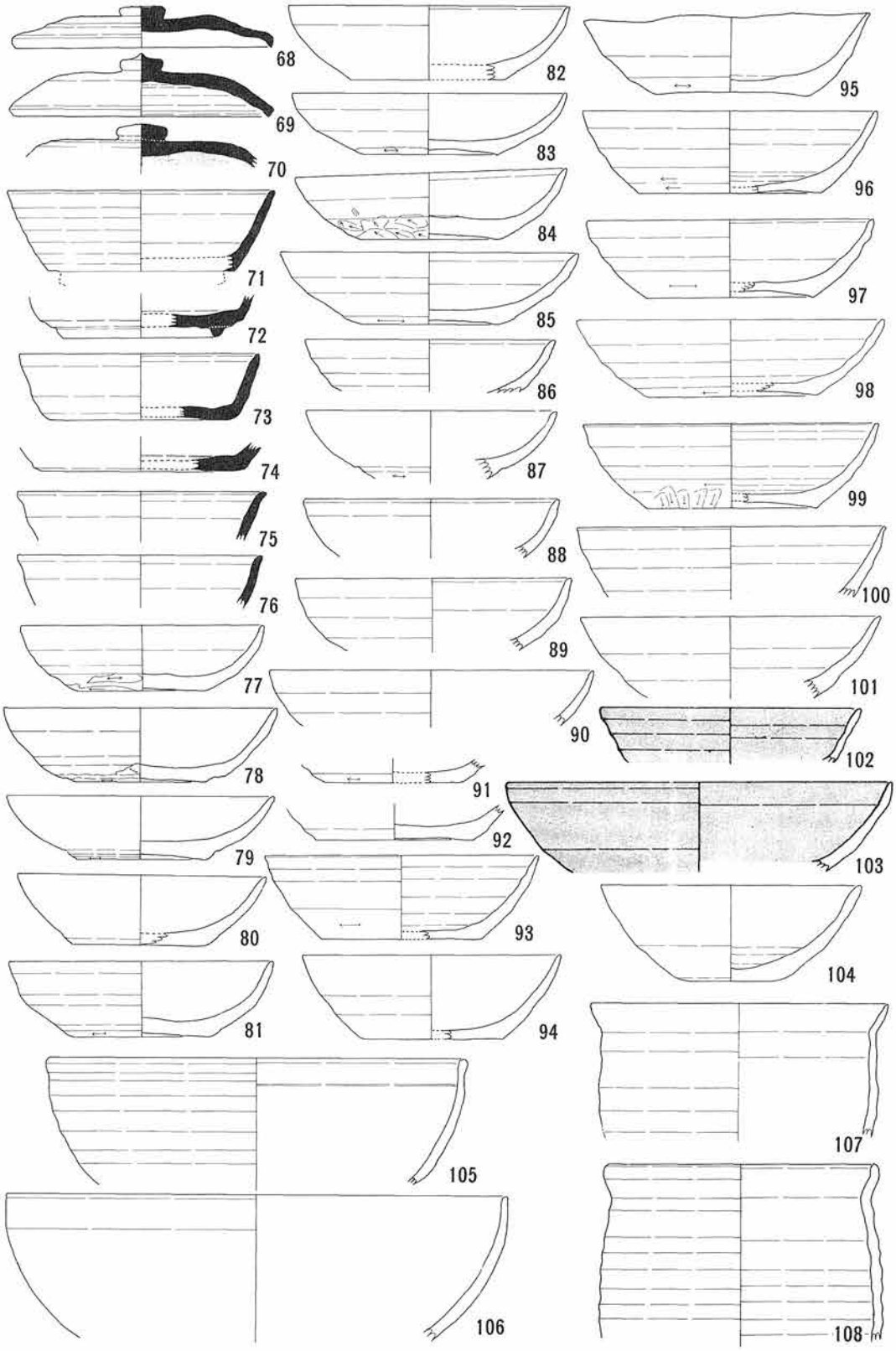
杯（77～101）　底部破片の識別により50個体以上が含まれると推定される。A_1・A_2・B_2類・赤彩土器が出土している。

A_2類（93～100）の胴部下半の削りはB_2類同様，回転を利用したものである。遺存状態の良好な93・96を見る限りでは，削りの後，撫でにより滑らかに仕上げている。また，これらの器壁には，火の影響と思われる剝落が目立つ[注6]。95は，かなり歪んでおり，接合もままならなかった。内面はB_2類に比べると粗く，ロクロ痕を消すような撫で調整は見られない。

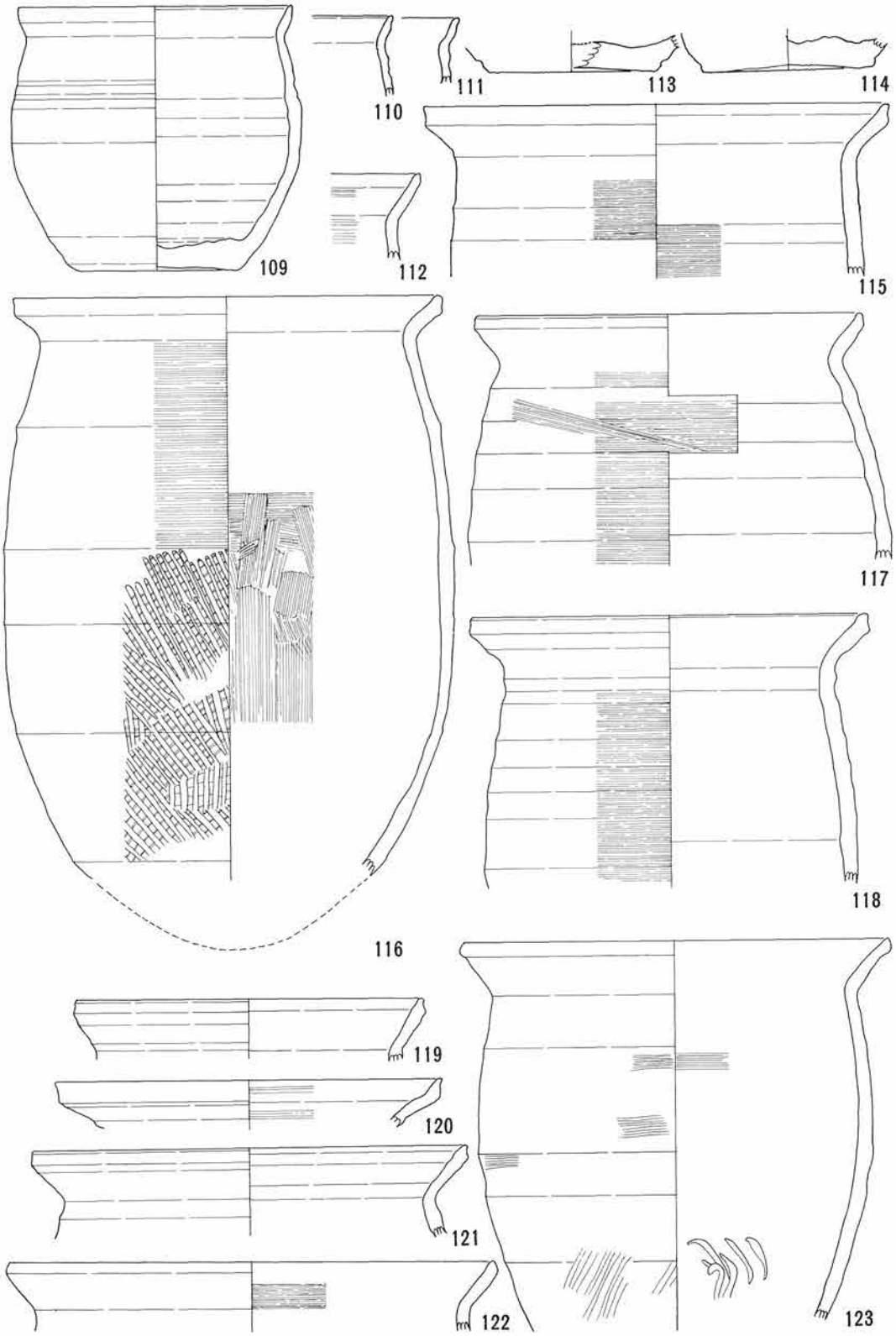
B_2類（77～91）の底部から胴部へ立ち上がる部分に施される削りは，全て回転を利用したものである。体部の立ち上がりは，若干内湾気味になるのが一般的で，内面は撫でにより平滑に仕上げている。86～90は，口縁部の破片であるが，体部の立ち上がりからB類とした。

その他図化していないが，B_1類と思われる底部破片が僅か1点出土する。他は全て上記した体部下半に削りを施すもので占められている。

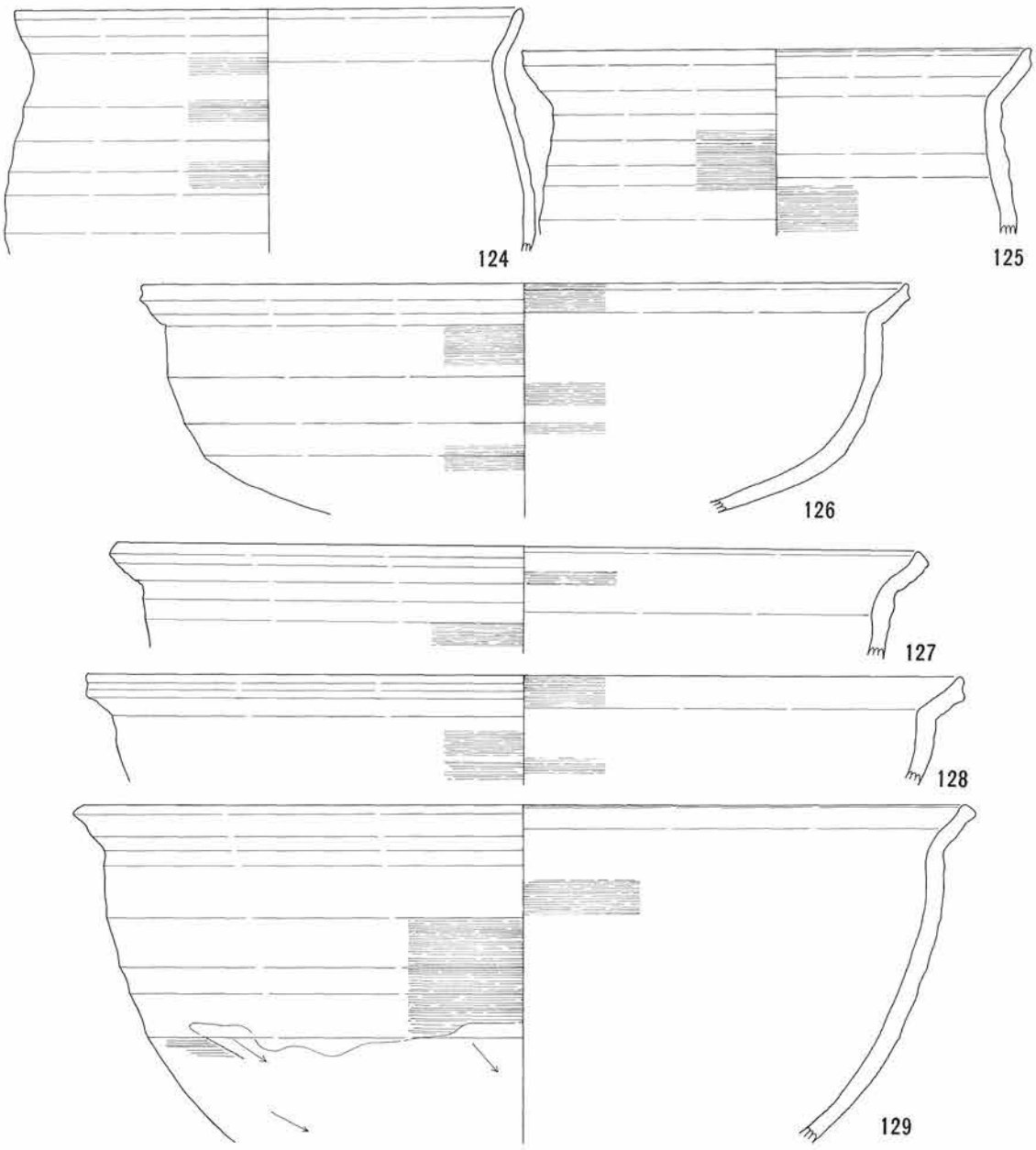
赤彩土器（102・103）は底部破片の識別より10個体以上が含まれると推定される。形態または成形技術等はA_1類に類似するが相対的に大型のものが多い。体部下半を削るものが大半であ



第25図　2号住居出土土器　覆土1　(1/3)



第26図　2号住居出土土器　覆土2　(1/3)

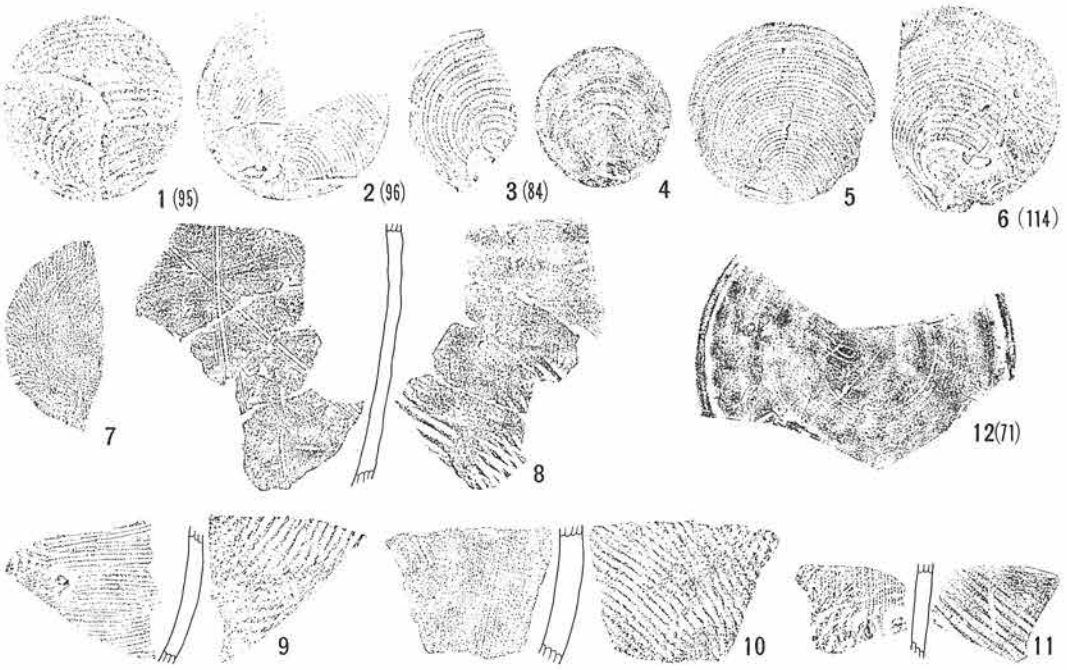


第27図　2号住居出土土器　覆土3　(1/3)

るが，103のように大型の椀になるものが少数含まれる。また，102のように，器壁にロクロ痕を顕著に残す薄い作りのものが1点だけ含まれている。破片の多くは，火の影響により器壁が剝落するものが目立つ。

椀（104）　104はA類に含められるが，中でも底径が異常に小さい。

鉢（105・106）　口縁部破片の形状より図化した2個体が出土している。A_1類(106)・A_2類



第28図　2号住居出土土器拓影（1/3）（ ）内の数字は遺物番号

(105)に分かれる。同一個体と思われる破片から成形技術をみれば，底部は回転糸切り，体部下半は，手持ち削りによっている。

小型甕（107～114）　底部破片の識別により17個体以上が含まれると推定される。底部破片が多量に出土しており，それに見合うだけの口縁から胴部にかけての破片は出土していない。すべて A_1 類である。112は，器壁が中でも一番厚く，頸部屈曲部から口縁端部にかけて大きい。113・114等の底部破片の観察(第28図6・7)から，回転糸切りの後，底部外周に限って，ヘラ状工具により放射状または不定方向へハケ目が加えられるものも目立つ。

甕（115～125）　口縁部破片の識別により13個体以上が含まれると推定される。個体別の口縁部破片の割合に比べ胴体破片の割合が異常に少ない。B_1・B_2・D類が出土している。

B_1 類(115～121・123・125)と B_2 類(122・123)の調整はほぼ同一である。内面は，体部上半から口縁端部までを撫で（一部口縁部にカキ目を施すものもある），下半は，押圧痕をそのまま残すものと，カキ目調整により消去するものとがある(第28図8・9～11)。

D類(124)は，器壁が薄く，口縁部の作りによっても小型甕 A_1 類をそのまま大型化したもののようである。しかし外面頸部屈曲部から体部にかけては，横位のカキ目が施され，小型甕に一般的にみられる輪積み痕の凹凸は，きれいに消去されている。

鍋（126～129）　口縁部破片の識別により5個体以上が含まれると推定される。甕同様，別個体の口縁部破片が多く，それに見合うだけの体部破片は出土していない。B_1・B_2 類に2分

される。B1類(126・128)とB2類(127・129)は，器体に見られる調整痕がほぼ同一である。内面は，頸部付近が撫での他，カキ目が施されるが，体部下半は不定方向のハケ目である。また，129は不明瞭で図化しなかったが，押圧痕が下半に部分的に残る。

3号住居（第29図，図版9）

方形と推定される落ち込みと，その外周に沿う溝とによって構成される。検出区は下段の北西側，標高48mの南西に緩く傾斜する4-L区である。方形部の落ち込みは竪穴住居の壁面と推測される。西側から南側にかけては耕作等によって破壊を受け壁面は確認されなかった。

方形の長軸・短軸は不明である。遺構検出面からの掘り込みは遺存状態の良い北側で15cmである。

覆土は黒褐色粘質土で，多量の黄褐色粘土がブロック状に混入する単層である。

外周溝と言えるかどうかは不明であるが，方形の落ち込みに沿って溝が検出されており，排水溝とも考えられる。覆土は住居の覆土と同様であり，平安時代の土師器片が出土している。溝は方形部の北壁と東壁にほぼ沿うように1～1.2mの間隔をおいて位置しているが，南側は序々に方形部より遠ざかっていく。幅は30cm前後を測る。溝の先端部は傾斜によって消滅するのかそれとも底部が序々に立ち上がるのか確認できなかった。溝の深さは確認面から平均20cmを測る。ピットは検出されていない。

カマドは確認されなかったが，方形部の東壁延長線上に長径1.2m，短径0.75mの範囲にわたって火床部分が検出されている。

出土遺物（第30・31図，図版25）

住居及びその周辺から出土した遺物は須恵器と土師器で，土師器が大半を占める。須恵器は蓋1個体，杯2個体分である。土師器は杯と甕が多く，他に小型甕と鍋が続き，蓋と台付大型皿各1個体である。方形部の南東側に遺物の集中している地点が認められ，その殆どは床面と推測される付近より出土している。また，遺物の接合状況もこの集中地点内での接合が多い。146は隣接する5号土坑と接合している。第30・31図にレイアウトしたものは全て，集中地点からの出土である。

須恵器（130・132）

蓋（130）　天井部外面はロクロ撫でによる凹凸が顕著でやや窪んでいる。天井部と体部の境目は回転ヘラ削りが施されている。

杯（132）　墨書は「V」字が並列したような形で描かれ，文字か記号かは不明である。

土師器（131・133～147）

蓋（131）　県内では出土例が少ないが，器壁が厚い他製作技法は須恵器の蓋と同様である。天井部はほぼ平担で口縁端部はわずかに屈折して丸く仕上げられている。

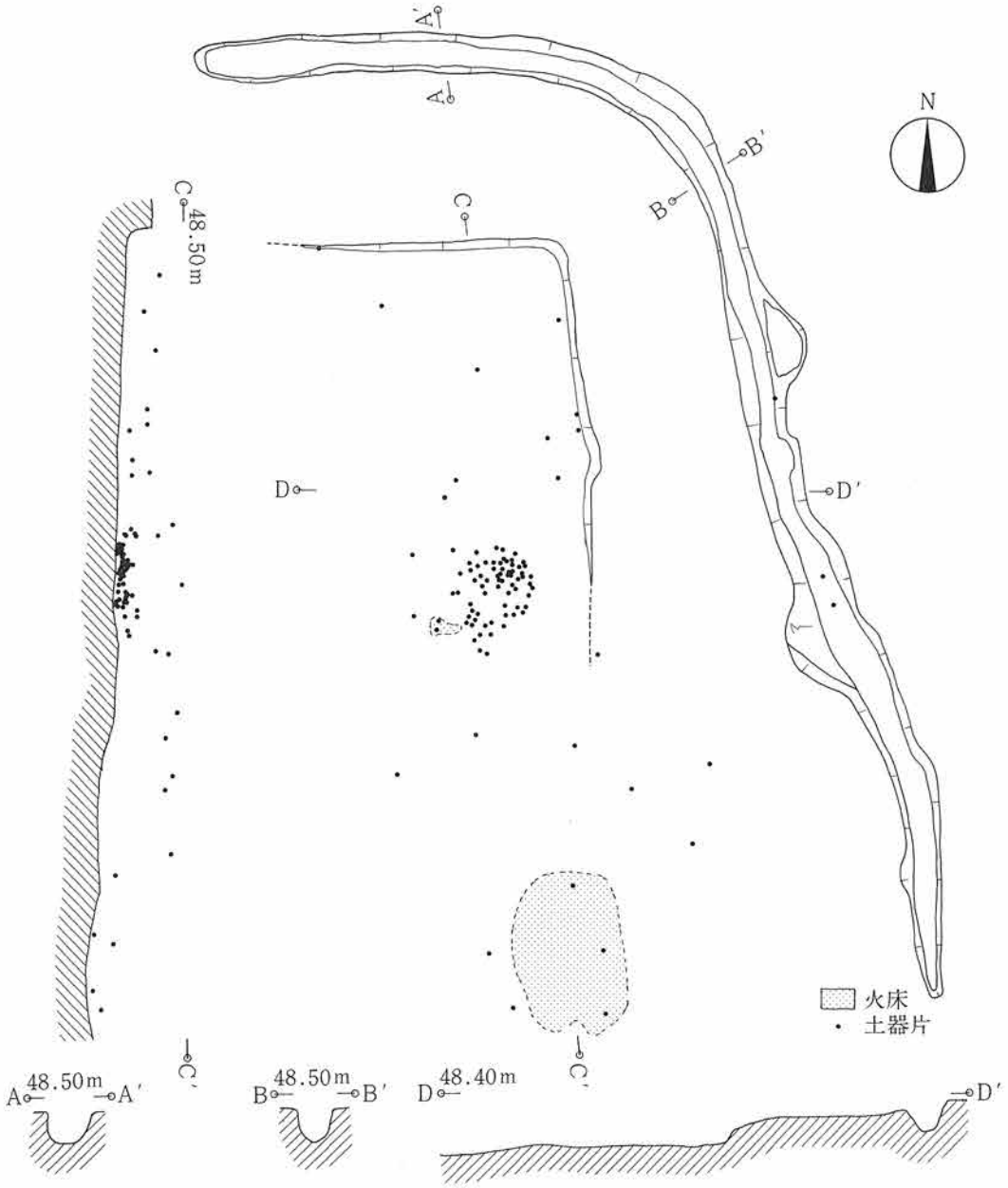
杯（133～137）　口縁部破片の識別により9個体以上が含まれると推定される。破片のため

明確ではないが，大きくB類とE類に分類される。

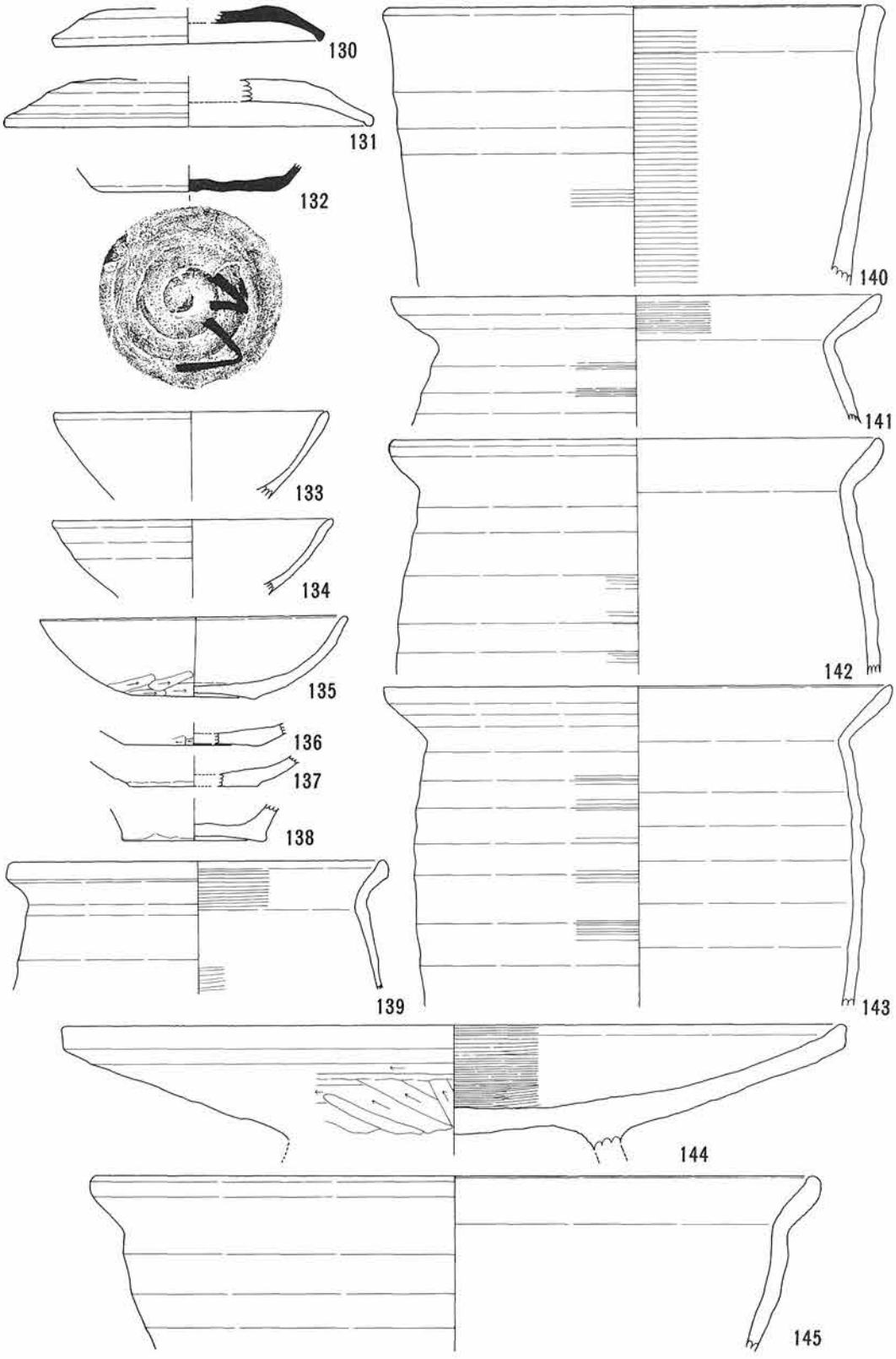
E類(133・134)　体部はほぼ直線状に開くが，134の口縁部は少し外反気味である。

B類(135～137)　135はB_2類で，体部下半は横方向のヘラ削りによって底部を小さく仕上げている。口縁内外面には一様にスス状の付着物が観察される。

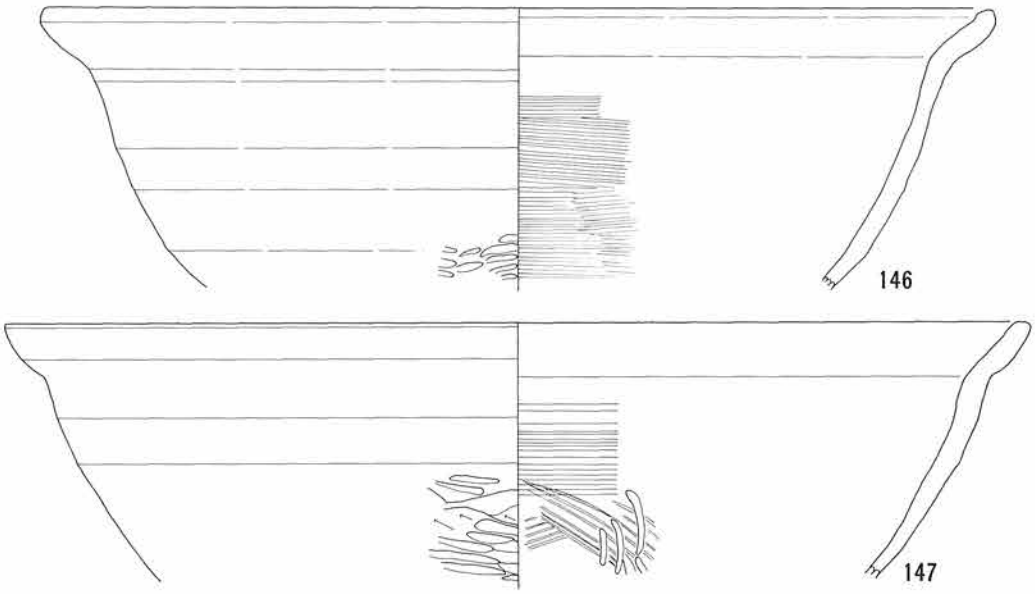
小型甕(138)　胴部破片の調整痕により9個体以上が含まれると推定されるが，口縁部破片は見当らず，底部の破片もわずかしか認められない。



第29図　3号住居及び遺物分布 (1/50)



第30図　3号住居出土土器　覆土1　(1/3)



第31図　3号住居出土土器　覆土2　(1/3)

甕（139～143）　口縁部破片や胴部破片の識別により10個体以上が含まれると推定される。D1・E類が出土している。

D1類(139・141～143)　139の口径は比較的小さく，中型の甕と考えられる。体部と口縁部の一部にススが付着している。141は口縁部が「く」の字状に大きく外反している。141～143の口縁部は，ロクロ撫でによって殆ど稜をなさず丸くふくらみ，そのまま薄くつままれている。胴部は3例とも薄くつくられ，特に外面はロクロ撫でが強く凹凸になっている。その凸部にはカキ目痕が見られる。胴部下位は叩き目になるものと考えられる。

E類(140)　胴部から口縁部にかけて直線状に，やや開きながら立ち上がっている。頸部がわずかに窪み口縁部がやや外反する。口縁端部は把厚し，ほぼ平坦になっている。

鍋（145～147）　口縁部の形態から3個体ともA2類と推測され，いずれも底部欠損している。145の口縁部は外反した後，端部を薄くし，内側に丸くつまれる傾向も見られるが磨耗しているため，明瞭ではない。146は5-L区の5号土坑出土の破片と接合する。147の体部内面上位のカキ目は粗くなっている。146と147の体部下位は外面に平行叩き目が，内面には同心円状の叩き目の後，ハケ目により調整されている。これらは胎土や胎土に含まれる砂粒の量・色調・製作技法など類似している。

台付大型皿（144）　底部には高台が付く。全体的に均整がとれているように見えるが，細部では底部内面のハケ目痕や体部外面下位のヘラ削り痕が不定方向に残り，高台内面では一部回転ヘラ削りによる凹凸がみられ，粗雑な作りである。

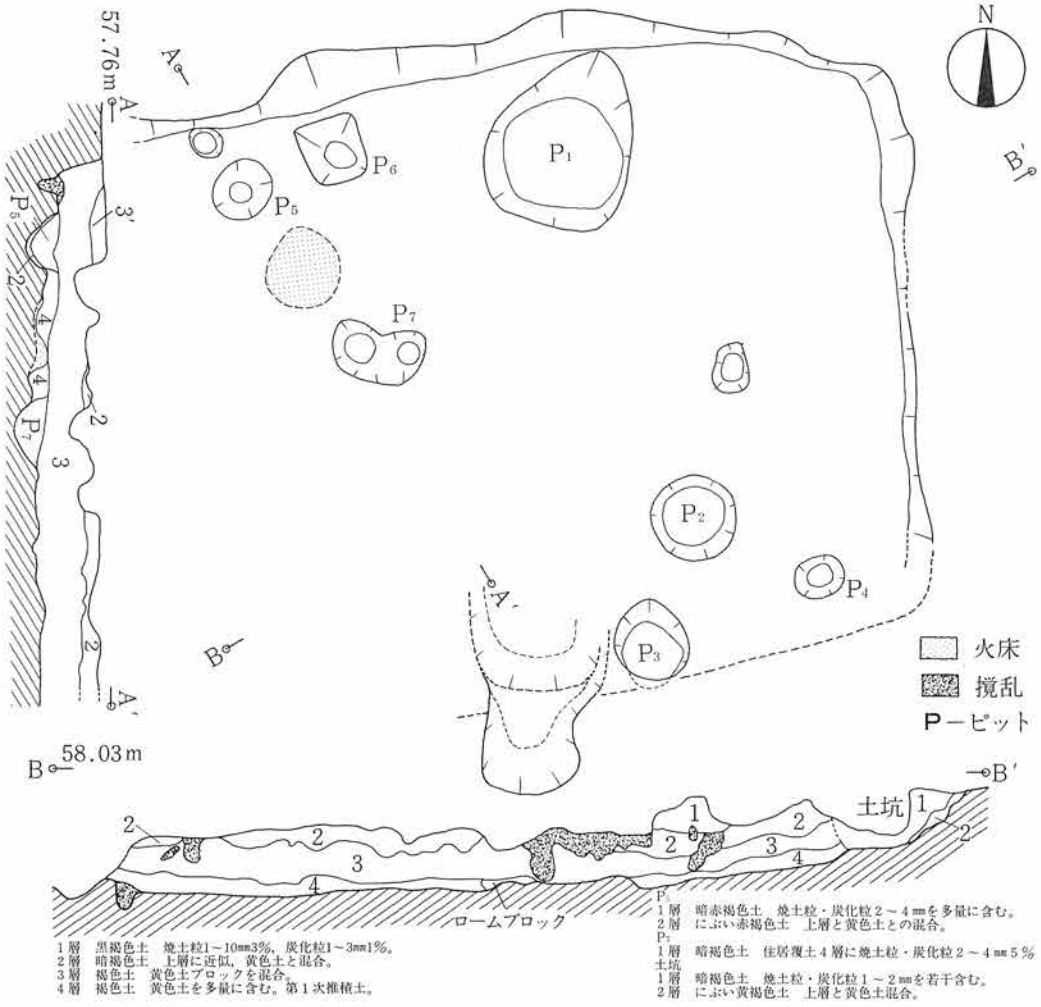
4号住居（第32・33図，図版10・11）

検出区は，6－B・C区で，住居西側半分は攪乱により破壊され，全体のプランは不明である。

規模は，長軸・短軸とも不明であるが東西方向にのびる方形を呈すると推測され，床面積は15㎡以上を測る。住居東側の壁面を基準とする主軸方位は，N－4°－Wである。

遺構確認面からの掘り込みは，遺存状況のやや良好な住居東側で50㎝，北側で45㎝である。

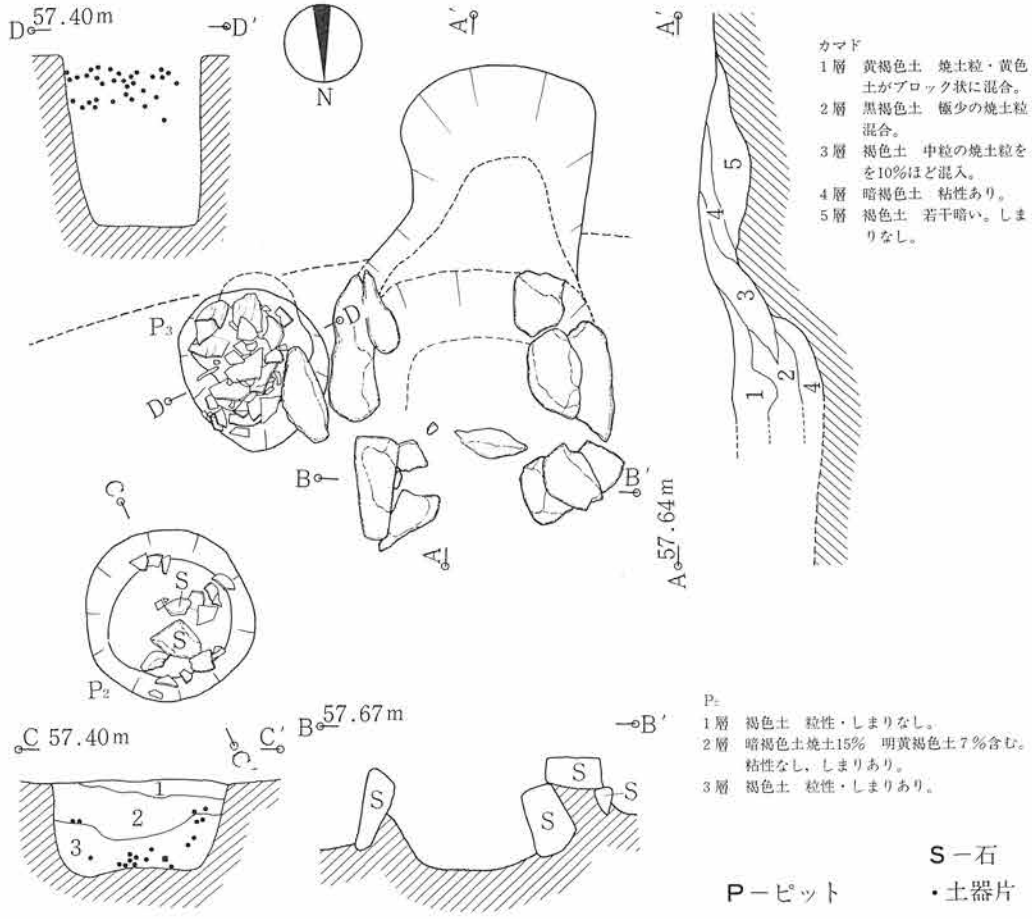
覆土は，4層に識別され第1層の黒褐色土は一部にしか残存しておらず，竪穴上面はかなり攪乱を受けている。覆土の主体となる黄色土ブロックが混入する褐色土は，平均して20～25㎝の幅でレンズ状に堆積している。床面直上にまばらに堆積している第4層は，黄色土が多量に混入するもので，住居が埋没する時に周辺の地山が流入した第1次堆積土と推測される。



第32図 4号住居（1/50）

ピットは7基確認され，Ｐ２・３を除き直径30～40cmの円形プランを呈するものが多く，床面からの深さは平均して10～20cmである。Ｐ２は直径55cmの円形プランを呈し，深さ30cmを測る。また，住居西側Ｐ５とＰ７の中間に火を受け赤く硬化した面が検出された。覆土は３層に識別され，第３層の褐色土からまとまって土師器片が出土している。Ｐ３は長径55cm，短径45cmの楕円形を呈し，深さは58cmを測る。覆土は褐色土を主体とするが，焼土粒・灰・炭化物が多量に混入するもので，カマド内埋土の廃棄ピットとも考えられる。

カマドは，住居の南側ほぼ中央に位置する。焚き口の袖部は人頭大の礫によって構築されていたと推測されるが，半ば崩壊した状態で検出された。また，カマド周辺の壁立ち上りも不明で，住居南側は全体に遺存状態が非常に悪い。カマドの規模は，幅が約90cm，長さ95cmの方形を呈するものと推測される。さらにカマドの奥の一段高い竪穴外と思われるところに，幅5.5cm，長さ60cm位の窪みが確認された。土層断面や位置などから煙道と考えられる。



第33図　４号住居カマド（1/25）

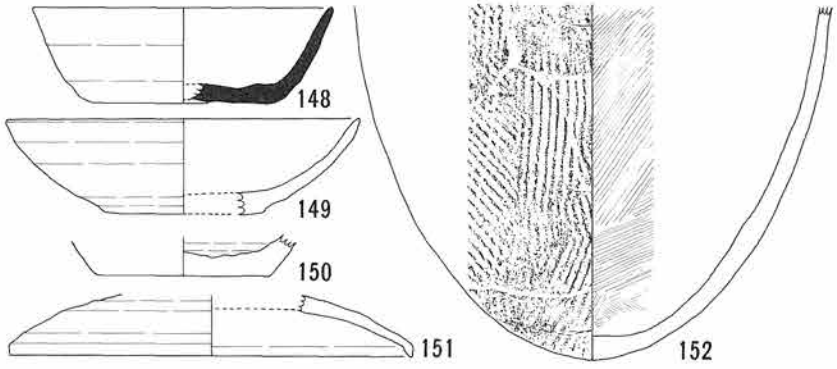
出土遺物（第34～42図，図版26・27）

須恵器・土師器・内面を黒色処理する黒色土器が出土している。このうち大半は土師器が占めている。須恵器は他の遺構に比べ数量が多く，甕胴部破片・短頸壺片がそれぞれ1点以外は全て供膳形態の蓋・杯である。土師器にはロクロ成形・非ロクロ成形があり，後者は量的に少ないが，平安時代の土器としては器形・技法等，極めて特異である。その他に，土師器の蓋で内面を黒色処理した黒色土器が出土している。覆土以外に，各ピットより土器が出土している。細片で図化できなかったものが多く，このうちＰ５からは甕１個体，Ｐ７では甕１個体・非ロクロ小型甕２個体，Ｐ８では土師器細片が数点出土している。いずれも口縁部片は出土していない。Ｐ１～４出土の土器は大半が第34・35図に図化したが，このうちＰ２・３は，覆土内より一括して出土しており，且，遺存状態が良好で貴重な資料である。

ピット１出土土器（148・151）は，２点のみである。148は無台の杯で，内面は粘土紐(注7)痕の凹凸が顕著で，底部は回転ヘラ切りが観察される。151は須恵器の技法をそのまま踏襲しているが，色調は明褐色を呈し軟かく酸化焔焼成と推測されるため土師器とした。口縁端部はつままれ，稜を有し垂下する丁寧な作りである。

ピット２出土土器（149・152）は，図化したもの以外に土師器杯１点が出土している。149は杯C_1類に分類され，体部下半でくびれ内湾気味に立ち上る器形である。152は甕で破片数は15点を数えるが全て胴部片で，口縁部が出土していないため分類不可能であった。破片は１部内外面に炭化状のものが付着し，赤味を帯びている部分もあり，煮沸用として使用された痕跡が観察される。

ピット４出土土器（150）は，図化したもの以外に土師器甕２個体分が出土している。150は器形の大きさなどから小型甕の底部と推定される。内面は粘土巻き上げ痕の凹凸が顕著で，底部には回転糸切り痕が観察される焼成良好な土器である。甕は口縁部がなく全て胴部破片で，１個体は薄手で外面は叩き痕があり，器面全体に炭化状のものが付着し黒色を呈している。内面



第34図　４号住居出土土器　ピット１・２・４（1/3）

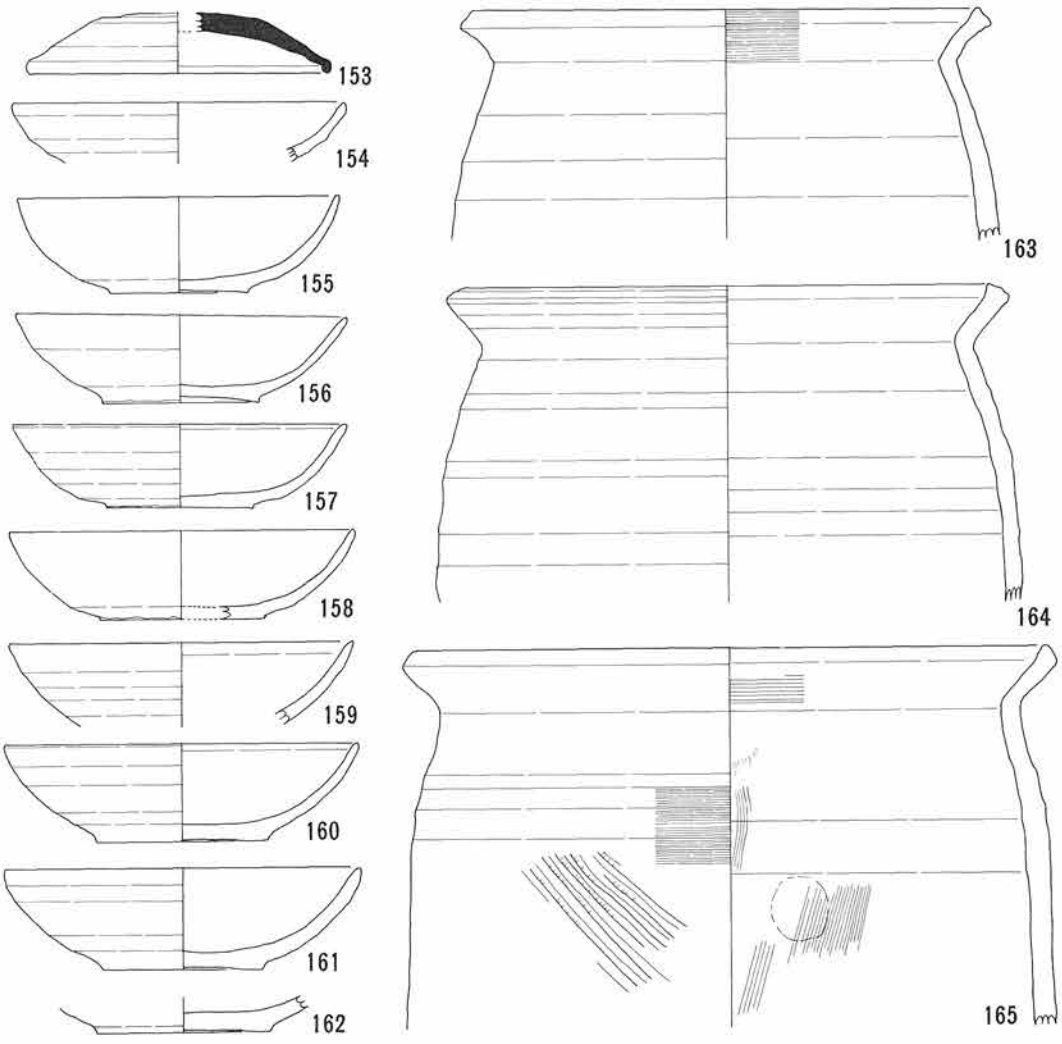
は丁寧な撫で調整が施されている。

ピット3出土土器（153～165）のうち，土師器の甕胴部片以外の全ての個体を図化した。須恵器蓋1個体・土師器杯9個体・甕3個体である。杯は形態の識別から大半がB1類である。

須恵器蓋（153）　口縁端部は，やや丸味をもって垂下するもので，外面縁辺部は帯状に黒化しており，重ね焼き時に生じたものと推定される。

土師器

杯（154～162）は，全て内面が平滑に撫で調整されるもので，B1類である。遺存状態が良好で，技法や底部回転糸切り痕も明瞭に観察できる。157は内面に細かい墨滴が付着し，これは覆土出土の213にもみられる。



第35図　4号住居出土土器　ピット3（1/3）

甕（163～165）は，いずれも口縁形態からC類に属する。胴部下半の破片も多く，外面叩き目，内面押圧痕の後カキ目が施されている。接合状況では，164がカマド出土のものと接合していることが注目される。

覆土出土遺物

須恵器（166～192）

他の遺構に比べ須恵器の数が目立つが，器種別では供膳形態である蓋・杯がその大半を占める。破片の識別により蓋29・有台杯６・無台杯19個体以上含まれるものと推定される。

蓋（166～177）　166・167・175・176は，いずれも偏平ながら宝珠様のつまみをもつ。天井部は回転ヘラ削りにより調整されているが，166・167・175はさらに撫でを施し滑らかに仕上げている。167と175の内面には墨痕が観察され，175は磨られていることなどから転用硯と推定される。168～174・177は，口縁端部が丸味をもつものや細く垂下するものなどいくつかの形態を観察することができる。内面に墨痕が観察されるものに171と173があり，173は磨り面を有し，形態などから175と同一個体の可能性が強い。172と177は他の蓋に比べ焼成が不良で，色調も白っぽく軟かい。

有台杯（178～183）は全て付け高台で，底部は回転糸切りと回転ヘラ切りの２種類が観察される。糸切りは179～182，ヘラ切りが178・183である。糸切りの杯は，全体的にロクロの依存度が高いようで，直線的で丁寧なつくりを呈している。179の底部外縁は，ヘラ削りにより調整されている。

無台杯（184～186・190）は底部回転ヘラ切り技法で，糸切り底のものはない。186は焼成不良で，灰白色を呈して軟かい。その他は台付か否か不明であり，187は頸部付近でわずかに外反する器形で，それ以外は直線的に立ち上がるか，やや内湾するものである。

短頸壺（191）　１点のみの出土である。極めて薄い作りである。

土師器（193～282）

多種多様な器種が含まれている。ロクロ成形・非ロクロ成形があり，大半はロクロ成形の土師器である。特にことわからない限り，ここではロクロ成形の土師器をさすこととする。

蓋（193）　１点のみの出土であり，内面はミガかれ黒色処理されている。本遺跡出土の土師蓋中，最も丁寧で薄い作りである。

杯（194～223）　口縁部破片より堆定80個体以上出土している。A_1・A_2・B_1・C_1・C_2類の５種が出土している。B類が他の形態に比べ数量が多い。その他，分類の範疇に該当しないものが数点見られる。

A_1類（209・210・215）　209・210はA_2類に比べ小ぶりで胎土は緻密である。両方とも非常に丁寧な作りで，遺存状態も良好である。209の立ち上がりは，体部中位からやや直立気味となり口縁部付近で若干くびれる器形で，底部は目の粗い回転糸切り痕が観察される。213は内面見込み付近に墨滴と思われるものが多量に付着し，体部から口縁にかけては細かい墨の粒が飛

び散った様子で付着している。胎土に細砂が多量に含まれ，表面はザラザラしている。215は，体部中位から急激に内湾し，口縁で直立気味となるものである。体部の形態などからB類の範疇とも考えられるが，B類の特徴である底部から体部下半のくびれがまったく観察されないものである。

A_2類(217・219・220)は，体部下半から底部にかけて器壁が厚くなるもので，いずれも体部下半に回転ヘラ削りが観察される。焼成時に受けたものと推定される焼けムラが目立つ。

B_1類(194～196・198～205・212・213・218・221)は，胎土がやや粗く，大小の白色粒子が含まれるが，一部202・218のごとく胎土が緻密で他と区別されるものもある。B_1類の特徴である底部から体部下半のくびれは，さらに指頭によって撫でつけ底部外線を突出させている(199・200・202・194)。外面は磨耗しているものが多く，焼成時のものと思われる焼けムラが目立つ。221は二次的に火を受けたものと推定され，遺存状態の非常に悪い土器である。

C_1類(197・214)は，焼成がやや不良で器面は荒れている。体部の傾きなどを考慮すれば207・208も含まれる可能性がある。

C_2類(211)は1点のみの出土である。底部は欠損しているが体部の形態から本類とした。

その他(206～208・222・223)は口縁及び底部の破片で，分類不可能であった。ただし206は杯というより皿になるものと考えられ，体部下半は入念に削り調整が施されている。器面は荒く，底部は回転糸切りである。

足高杯(224)　1点のみの出土である。底部は，回転糸切り離し後，高台を貼り付けている。焼成は非常に良く，胎土には大粒の白色粒を含む。

小型甕(231～246)　口縁部破片より17個体以上が含まれるものと推定される。いずれも破片で，口縁部から底部まで接合できるものはない。A_1・B_1・B_2類が出土している。

A_1類(232・235・237～240・242)は，口縁部をつまみ上げ端部を細く仕上げている。このなかでも頸部が強く外反するもの(232・235・237・238)と，緩いもの(239・240・242)があり，強く外反するものは体部の幅が口径より大きくなるものと考えられる。

B_1類(233・234・241)　233の内面は粗いカキ目が全面に施され，厚手である。

B_2類(231)は1点の出土である。端部がやや内傾するものを本類とした。砂粒を多量に含み，焼成は良好である。

甕(226～230・247～266)　大別してロクロ成形の甕と非ロクロ成形の甕類がある。ロクロ成形の甕は，口縁形態の識別により15個体以上含まれるものと推定される。口縁部から底部まで接合できるものはないが，体部上半は撫で，又はカキ目，体部下半から底部は叩き目が施される。B_1・B_2・C類が出土している。C類がその半数以上を占める。一方非ロクロ成形の甕は，口縁部及び底部の識別より13個体以上含まれるものと推定される。口縁形態やプロポーションから数種類の器種又はタイプに分類されるものと推定されるが，数が少ないため，個々の説明を加えるに止め，分類はしなかった。

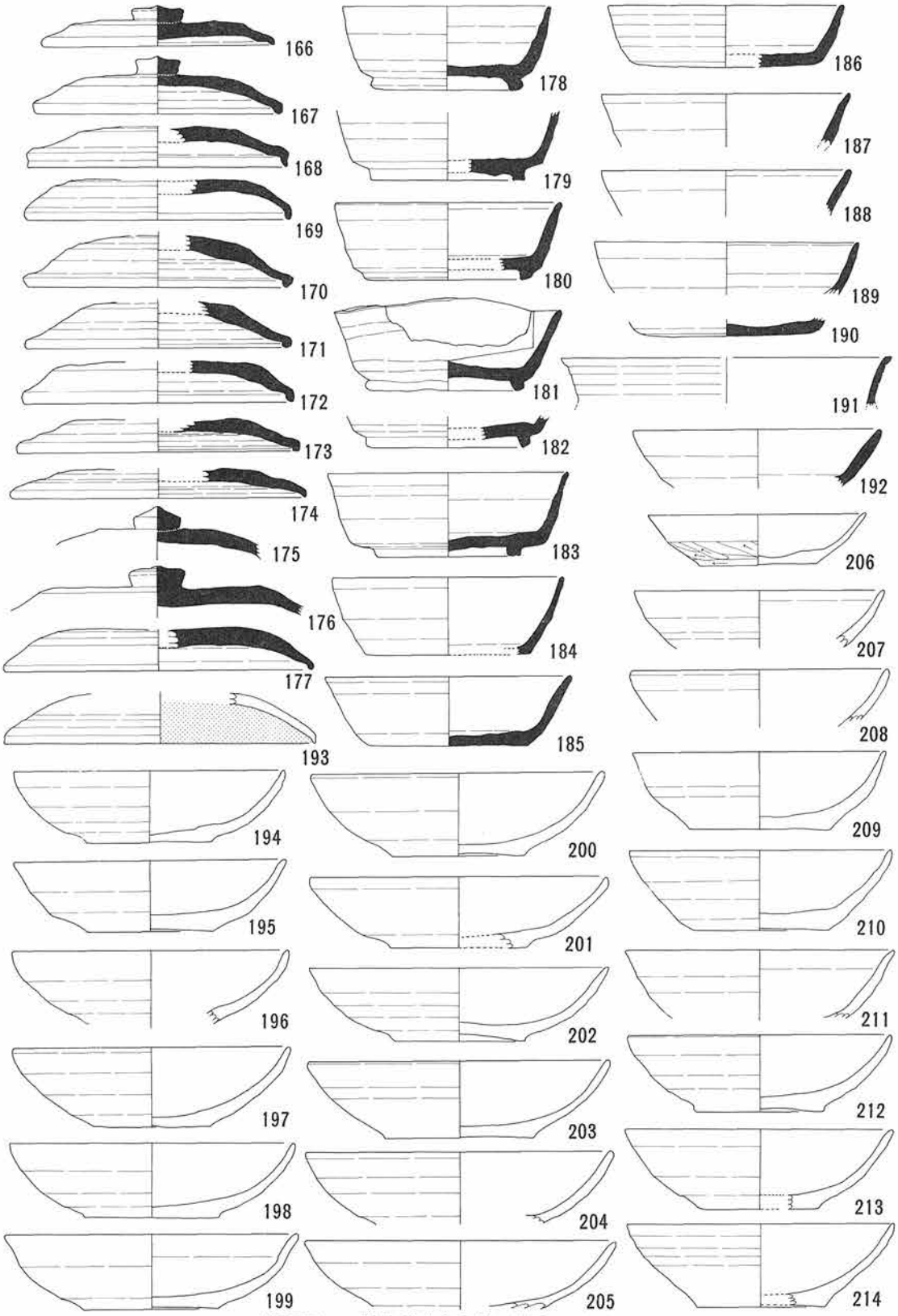
B1 類(230・248)は2点の出土である。248は230に比べて頸部から強く外反するもので，口縁端部を丁寧に撫で，直立気味に調整している。外面体部にカキ目が施され，焼成も良好である。

B2 類(227～229)　227・229は外面端部つまみ上げにより凹部が著しく，口唇部にそって沈線がめぐっているかの様に観察される。227は体部下半の叩き目を施した後，上半にカキ目を施し調整している。

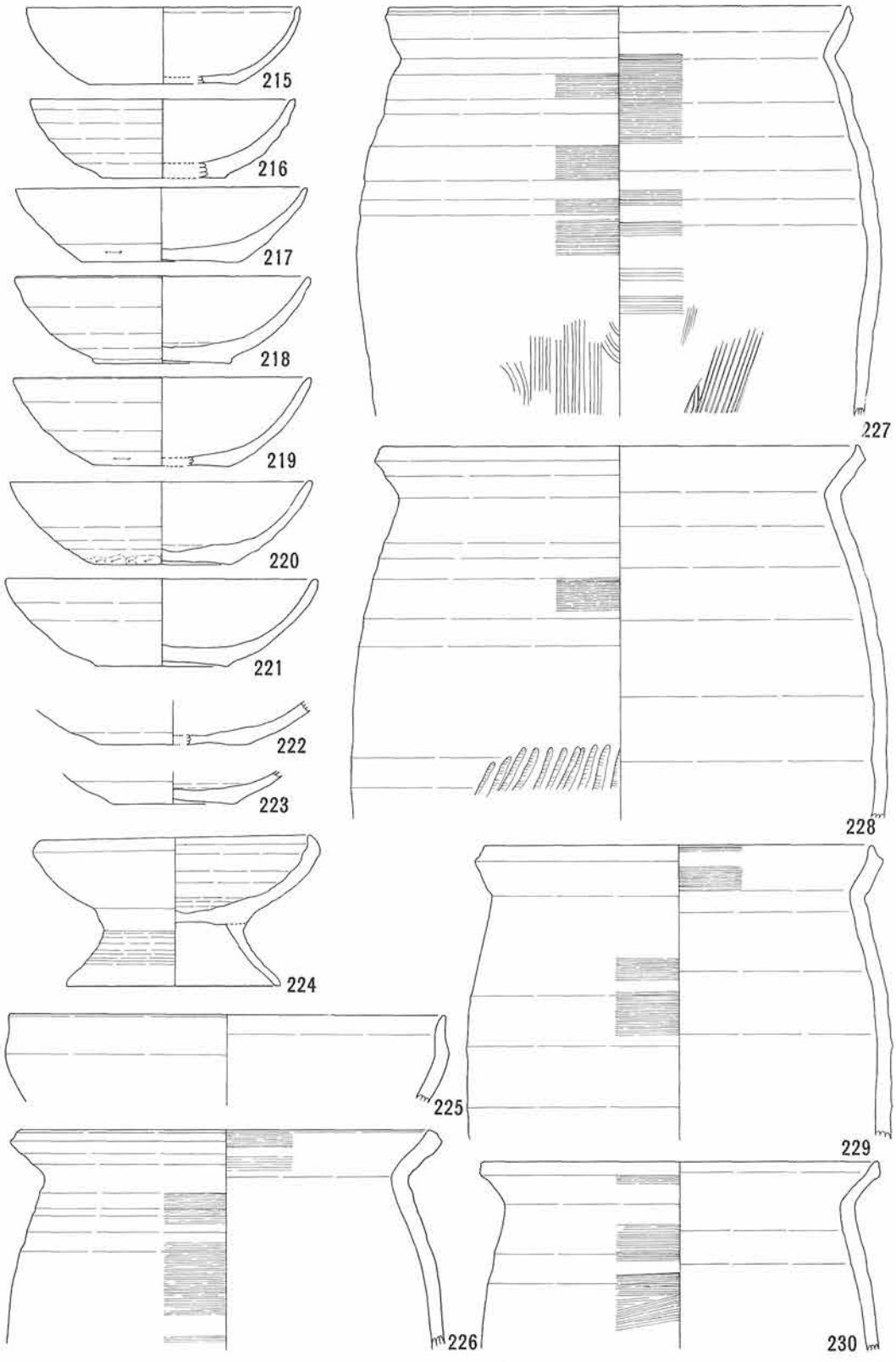
C 類(226・247・249・250～252)は，口縁外面端部をB類同様つまみ上げ内傾させるが，その後引き伸さず口唇部を押さえ平担な面を作り出す。断面は台形を呈するものが多い。体部中位で器形の最大径を測るものが多いが，252は体部上半で最大幅に達するものと推定される。
226・247・249・251は器面の赤色化，黒い焦げ跡，炭化物の付着等が観察され，煮沸用に使われていたものと思われる。

非ロクロ成形甕(253～266)　器形にバラエティーがあるが，基本的な成形技法はある程度一致している。口縁から体部にかけては外面縦位のハケ目，内面横位のハケ目が施され，外面体部下半は削られ，底部は平底になるものが多い。253は器面の凹凸が著しく，やや粗いハケ目が口縁から底部にわたり施され，口縁部から頸部にかけてはその後に横撫でされ，ハケ目を消している。体部の底部付近も撫で調整が施されている。頸部の屈曲は緩く，器形の最大幅は口縁と体部で同じ位になる。底部は平底で粗く撫で調整されている。254は頸部が屈曲しないで，口縁端部を横撫でによりつまみ上げたのち，外方向へ折り返し突出させるもので，口唇部より下方約1㎝位の幅でハケ目が消されている。内面には横撫でが施されるが，粘土紐痕が顕著に観察される。255も甕の破片と推定され254と類似するが，口縁部は折り返さず，体部から直線的に口縁に達するもので頸部も不明瞭である。256・257は小型の甕底部と推定される。いずれも平底で，底部は撫でが施されている。257は内外面とも黒く焼けた痕跡があり，器面はやや脆い。内面はヘラ状のもので撫で調整が施されている。258はややラッパ状に開く器形のもので，口縁端部を横撫でし，やや内側から外傾し開く。外面は細かい縦位のハケ目，内面にも細かい横位のハケ目が施されている。262は頸部付近でわずかに器壁が薄くなり，口縁で厚手になるもので，口縁端部をやや押えながらつまみ，稜を作り出している。外面口縁から頸部にかけて撫で，体部はハケ目が施される。体部下半及び底部は不明であるが，成形技法等から263と類似する。264は262などに比べ，器壁が薄く口縁は朝顔状に大きく開く。砂粒を若干含むが，焼成は良好で堅緻である。外面は縦位のハケ目，内面横位のハケ目が施され，口縁外面は横撫でされている。266も264に類似する口縁形態を示しているが，頸部の屈曲が急である。外面は体部から口縁端部まで縦位のハケ目が，内面は口縁部のみに横位のハケ目が施されるが，体部には施されず丁寧な撫で調整で仕上げてある。尚，底部は撫で調整が施されている。

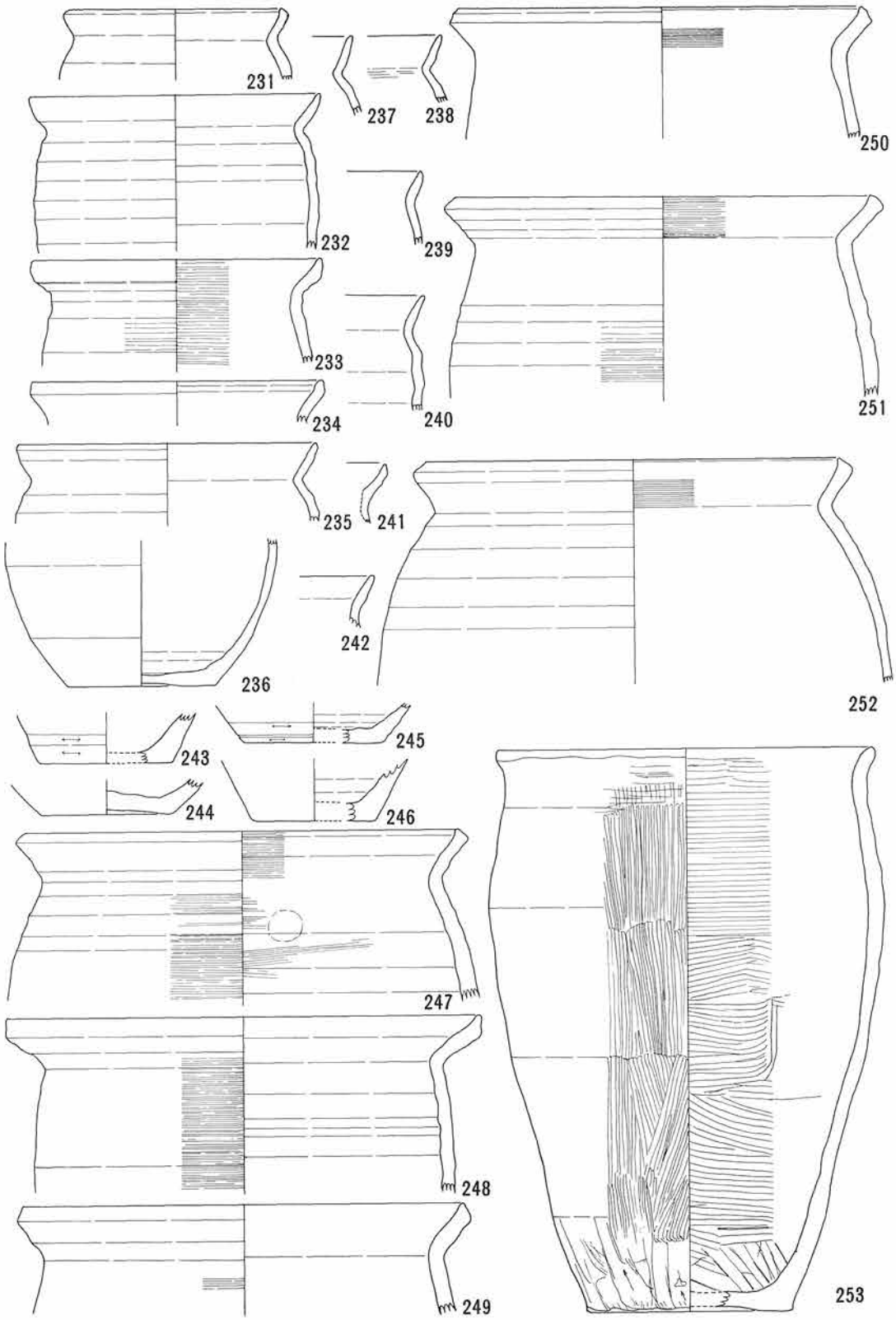
鍋(267～282)　口縁から底部まで接合できるものはないが，口縁形態の識別より20個体以上含まれるものと推定される。口縁の傾きや体部の形態，大小等のバラエティーは認められるが，A1・A2・B1・B2 類が出土している。



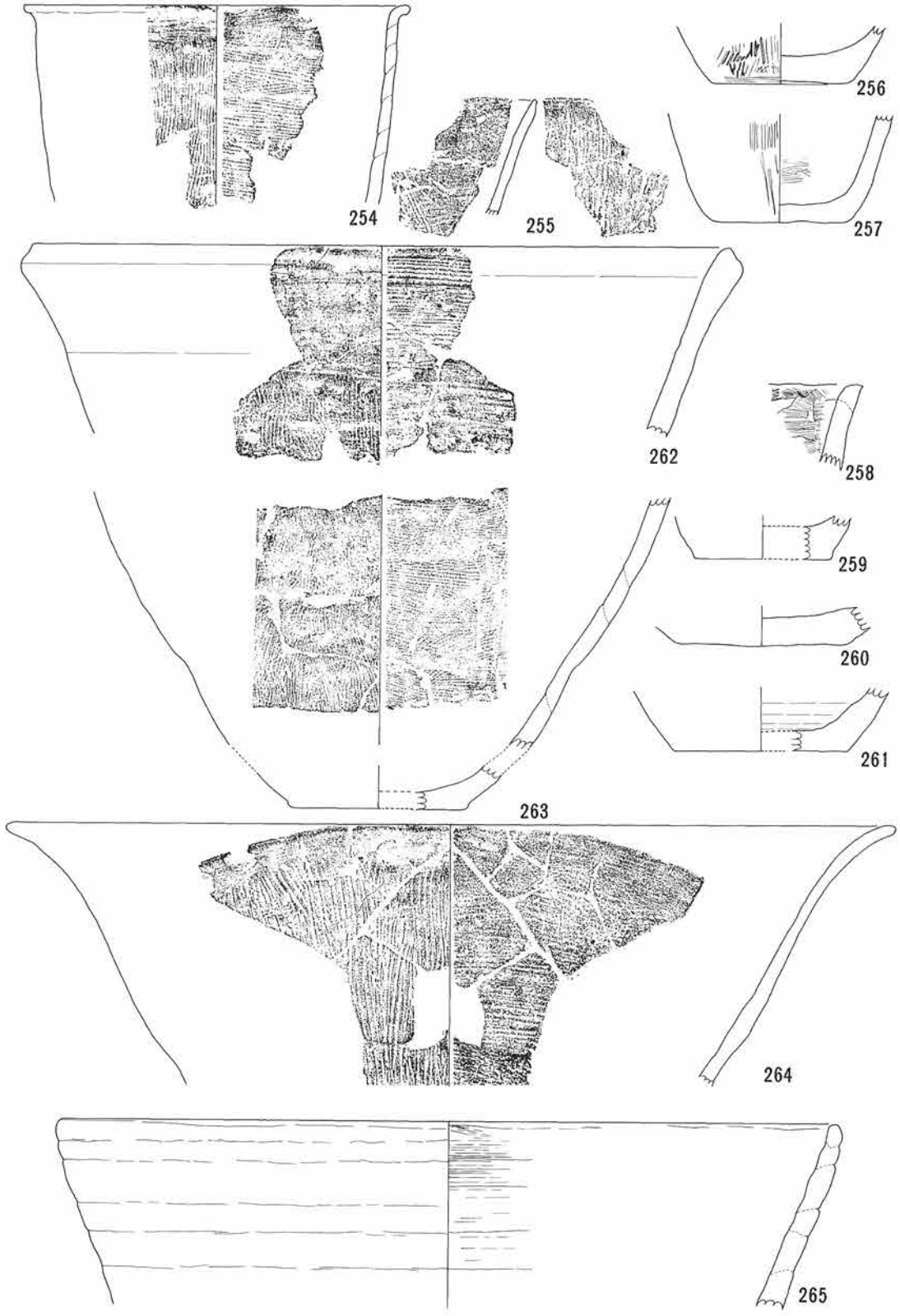
第36図　4号住居出土土器　覆土1　(1/3)



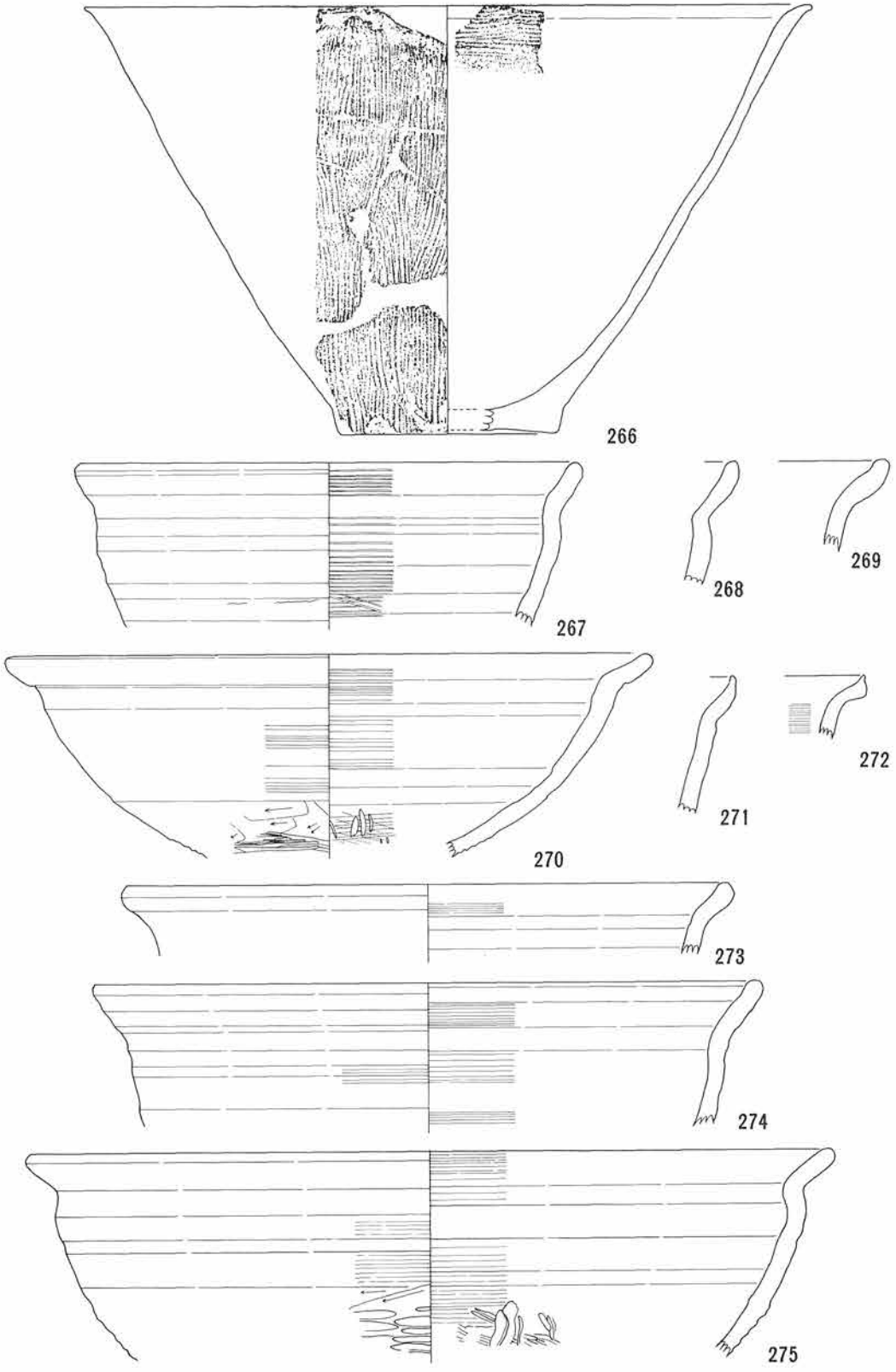
第37図　4号住居出土土器　覆土2　(1/3)



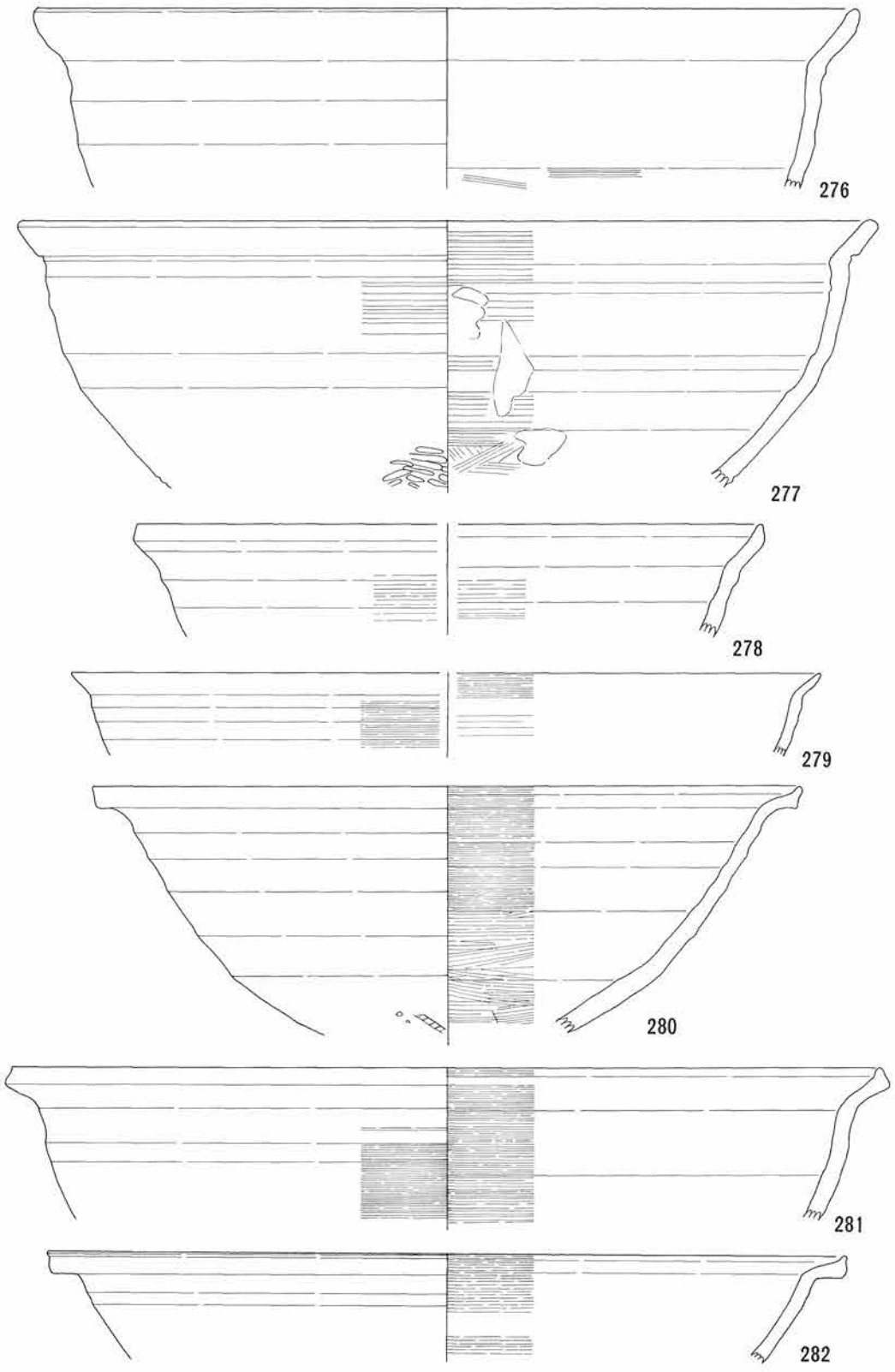
第38図　4号住居出土土器　覆土3　(1/3)



第39図　4号住居出土土器　覆土4　(1/3)



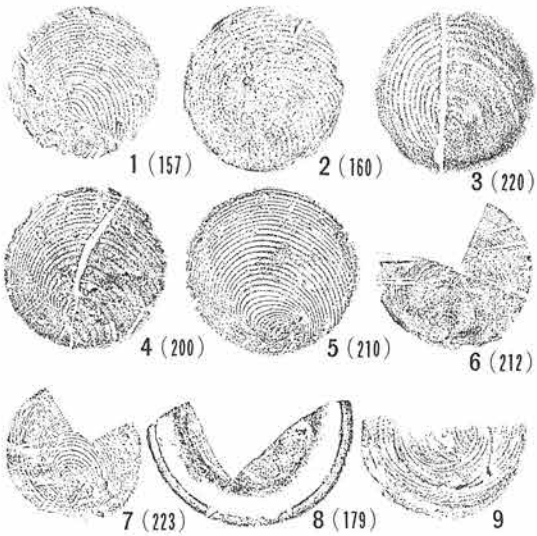
第40図　4号住居出土土器　覆土5　(1/3)



第41図　4号住居出土土器　覆土6　(1/3)

A1 類(267～269・274)は頸部のくびれが緩く，口縁部がわずかであるが内湾し立ち上がるもので，内面には太目のカキ目が施されている。胎土にはいずれも砂粒が多量に含まれる。269は口縁の歪みが著しい。

A2 類(271・275・277・279)は，半円状の丸味をもった体部から頸部で明瞭にくびれ，外反し口縁に達する。内外面とも体部上半にカキ目が施され，体部下半は叩き成形である。275では上半のカキ目と下半の叩き痕の境にヘラ削りが施されている。271・279は他と比べ薄手で口縁端部は丸味をもつものの，上方へ最後つまみ上げられており，別タイプの可能性がある。そして，279は細片実測であるため径が幾分小さくなる可能性が強い。



第42図　4号住居出土土器拓影 (1/3)
( )内の数字は遺物番号

B1 類(278・280・282)は，緩く内湾して立ち上がってきた体部をもち，頸部で急角度に屈曲する。口縁端部はつままれ稜を作り出している。278は頸部でほとんど屈曲しないが，口縁端部の作り出しは，やや磨耗してはいるものの稜が確認できることから本類とした。いずれも外面は磨耗して荒れた器面を呈している。

B2 類(281)は1点のみの出土である。丁寧な作りで焼成良好，堅緻である。

1・4号住居　遺物出土状態

5 号 住 居 (第43・44図, 図版11)

検出区は5-C区である。

規模は長軸2.8m, 短軸2.5mの東西に長い方形プランを呈する。床面積は約7㎡で主軸方位はN-90°-Eである。確認面からの掘り込みは平均20cm強である。

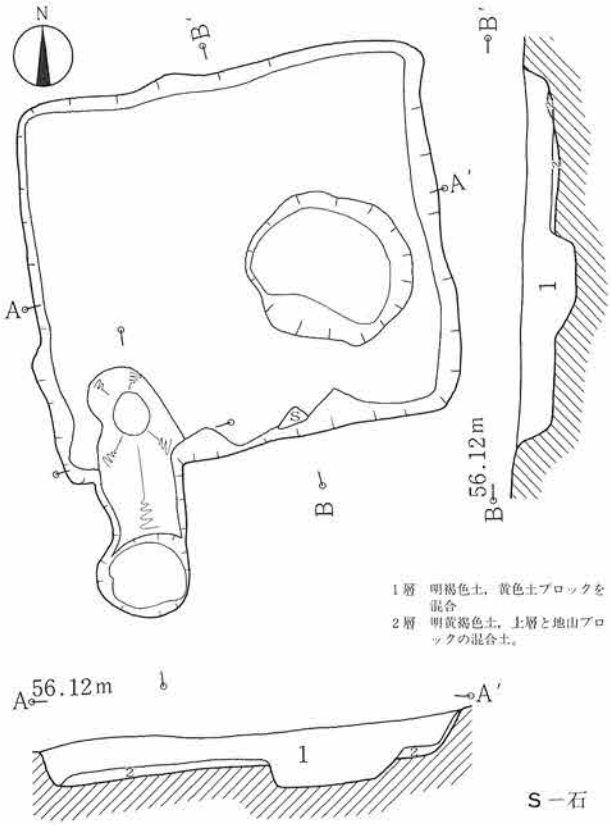
覆土は2層に識別されたが, 黄褐色土を主体とする層のみで, 他の住居に一般的に見られる黒褐色土を主体とする層の存在はなかった。1・2層は、基本土層Ⅳ層にきわめて近似しており炭化物の含有の多さによって, かろうじて識別された。

周溝・ピット・硬化した床面等は検出されなかったが, 竪穴東側に径1.1m, 深さ15cmほどの土坑が1基検出されている。

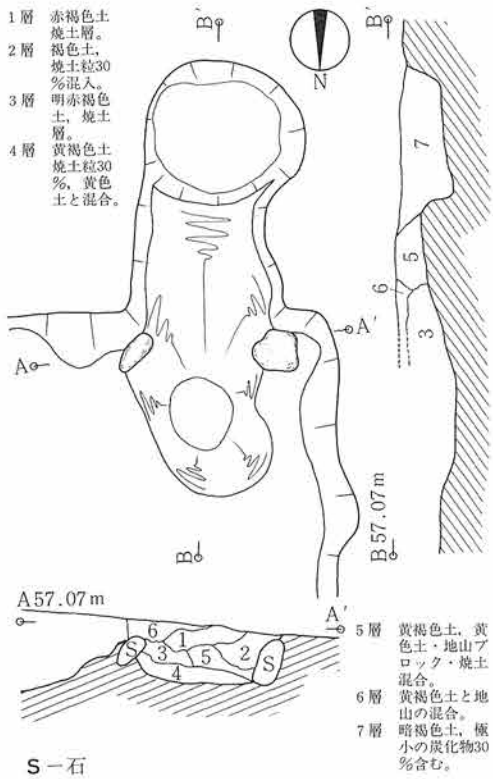
カマドは南壁の西側隅に位置する。袖に当る部分には, 角閃石安山岩の自然礫が立てた状態で検出されている。その東側の礫は, 地山とほとんど変わらない土にささった状態であった。前庭部は, 若干落込みが認められ, 火床と推定されるが, 焼けて硬化した面は存在しなかった。南側に張り出した部分は煙道と考えられ, 端部で円形の落込みが確認された。

出土遺物

床面からかなり浮いた状態で土師器の細片が数点出土している。しかし, これらの中に個体全容を窺い知るものは無く図化していない。



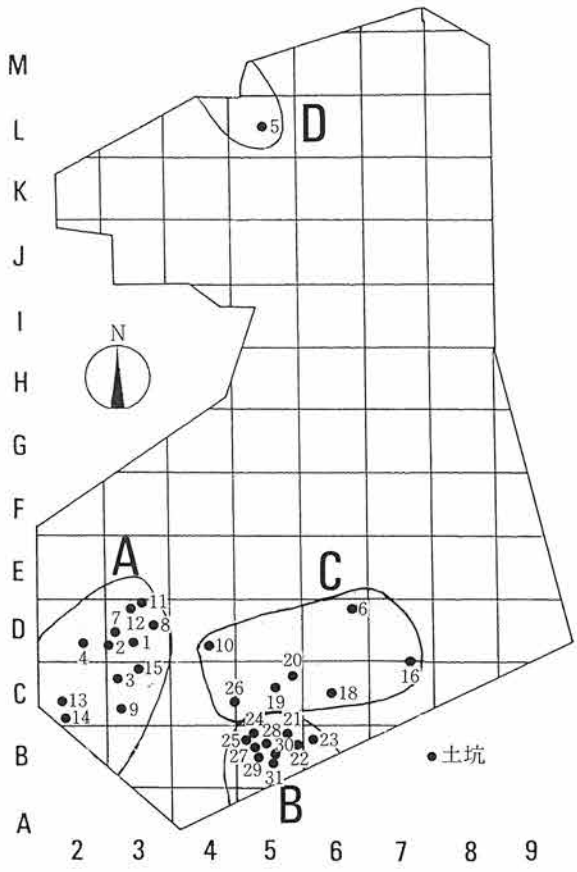
第43図 5号住居 (1/50)



第44図 5号住居カマド (1/25)

C．土　　坑（第45図）

土坑は上段頂部周辺と，西側斜面に集中している。分布地点から，A群（1～4・7～9・11～15），B群（21～25・27～31），C群（6・10・16・18～20・26），D群（5）の4群に分けられた。



第45図　土坑分布（略図）

A群では，平面形が長方形を呈し掘り形がしっかりした深いものが多い。覆土の第1次堆積土（基本層序の第Ⅳ層に類似）に黄褐色粘質土が堆積し，遺物はほとんど含まない。B群は，楕円形の平面形態を呈するものが多く，各土坑より土師器片がまとまって出土している。C群は，掘り込みがやや浅く，覆土には焼土粒・炭化物を多く混入する。土師器片も多量に含まれている。D群は，下段に位置し他の土坑と分布を異にするが群として取扱った。A～D群のうち，A群は形態が他の土坑と異なり，土師器がほとんど出土していないこと，第1次堆積土にⅣ層近似の土が堆積していることなどからB～D群とは区別され，縄文時代の所産と考えられるものが多い。また，B・C・D群の1部は平安時代の土師器焼成遺構の可能性がある。

A群土坑（第46・47図，図版12～14）

検出区は2・3-C・D区の範囲にある。当地区の地山は西方向に傾斜している。そのため地山下部の自然礫が露出している。

1号土坑（第46図）

規模は長軸1.61m，短軸0.58mを測り，東西方向に長い隅丸長方形状のプランを呈する。遺構確認面からの掘り込みは東側が43cm，西側が20cmを測る。底面はほぼ平坦で，壁は外反している。

覆土は3層に識別され，第2層と第3層はほぼレンズ状に堆積している。1層より土師器片

が20数点出土している。いずれも細片で図化していない。

2 号 土 坑（第46図）

規模は長軸1.30m，短軸0.68mを測り，東西方向に長く，ほぼ隅丸長方形に近いプランを呈する。遺構確認面からの掘り込みは東側で43cm，西側で20cmを測る。底面は固くしまっている。壁は垂直に立ち上がっている。

覆土は3層に識別され，第2層と第3層はほぼレンズ状に堆積している。遺物は出土していない。

3 号 土 坑（第46図）

規模は長軸1.44m，短軸0.47mで東西方向に長い隅丸の長方形を呈する。遺構確認面からの掘り込みは東側で30cm，西側で21cmを測る。底面はほぼ平坦で，壁は外反している。

覆土は3層に分けられ，第2層と第3層が大部分を占め，レンズ状に堆積している。遺物は土師器片1点出土するのみである。

4 号 土 坑（第46図）

規模は長軸1.16m，短軸0.66mを測り，東西に長い隅丸方形状のプランを呈する。遺構確認面からの掘り込みは東側で31cm，西側で24cmを測る。底面は平坦で，壁は緩やかに外反している。

覆土は6層に識別される。遺物は出土していない。

7 号 土 坑（第46図）

規模は長軸1.00m，短軸0.60mを測り，均整のとれた隅丸方形のプランを呈する。遺構確認面からの掘り込みは東側で40cm，西側で30cmを測る。底面は平坦で，壁は外反している。

覆土は4層に識別され，第1層と第4層が大部分を占める。遺物は出土していない。

8 号 土 坑（第46図）

規模は径1.15mのほぼ円形のプランを呈する。遺構確認面からの掘り込みは東側で36cm，西側で18cmを測る。底面は椀状に湾曲し，底面と壁との境は不明瞭である。

覆土は3層に識別され，レンズ状に堆積している。東側は畝状の溝により攪乱を受けている。遺物は出土していない。

9 号 土 坑（第46図）

規模は長軸1.22m，短軸0.70mで隅丸方形状のプランを呈する。遺構確認面からの掘り込みは東側で81cm，西側で57cmを測る。底面は凹凸しており，壁はほぼ垂直に立ちあがる。

覆土は4層に識別される。遺物は出土していない。

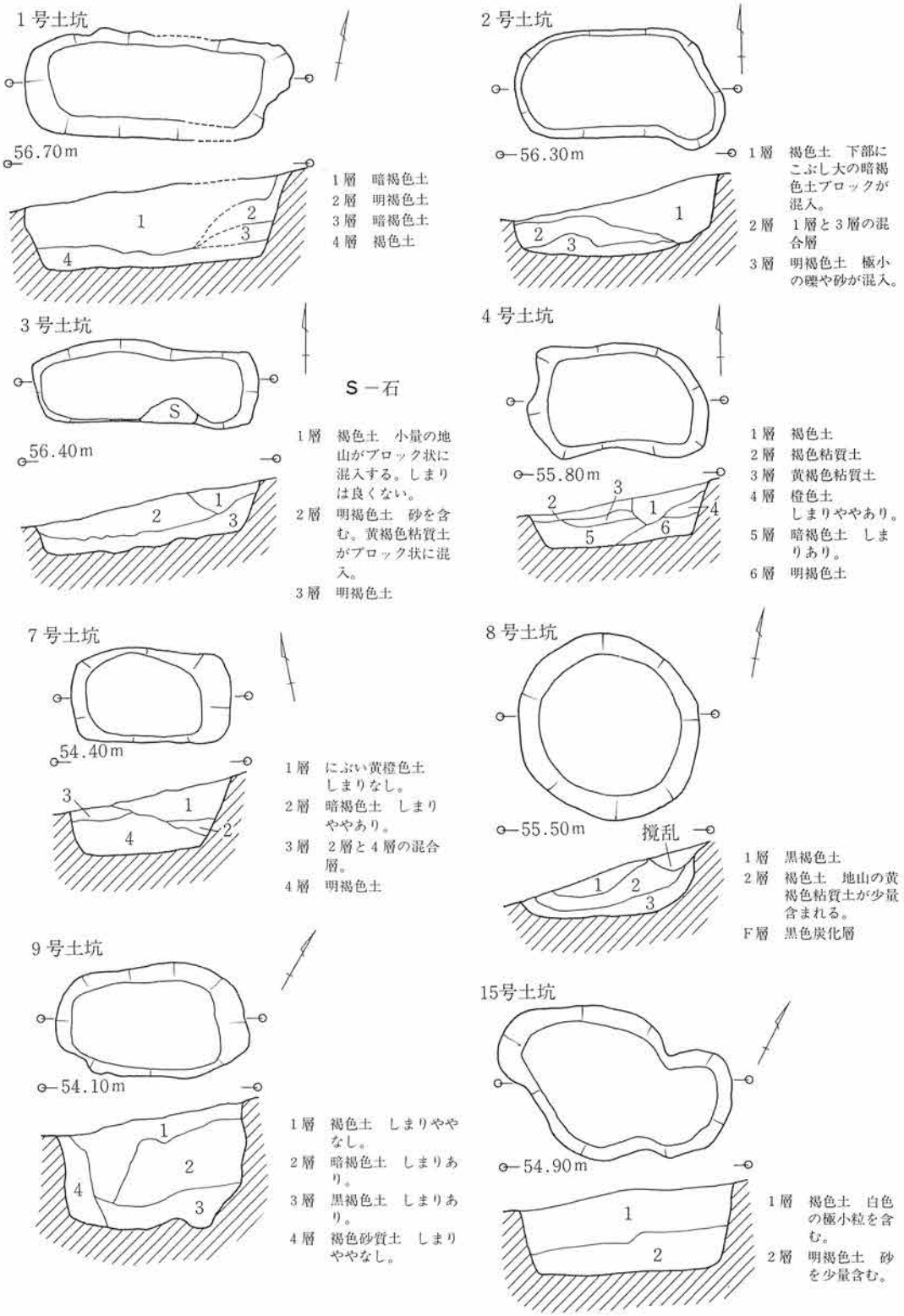
11 号 土 坑（第47図）

規模は長軸1.26m，短軸0.79mで隅丸方形状のプランを呈する。遺構確認面からの掘り込みは深く東側で81cm，西側で64cmを測る。底面は平坦で，壁はほぼ垂直に立ち上がる。

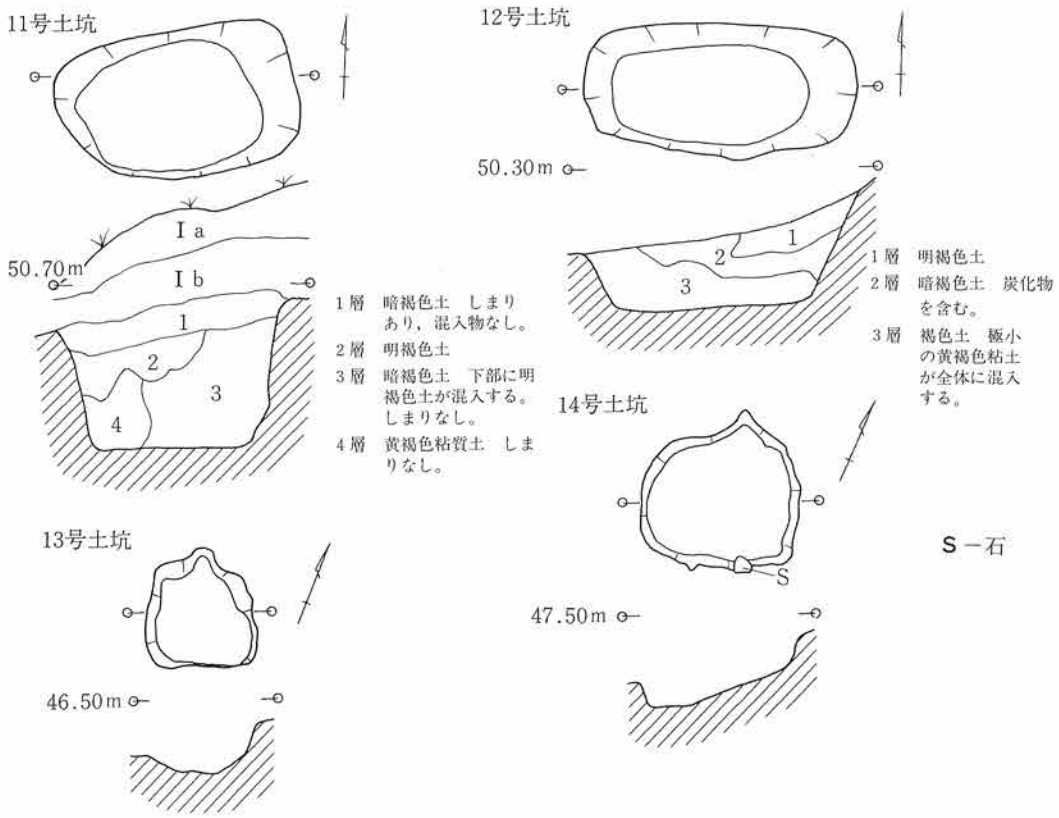
覆土は4層に識別される。遺物は出土していない。

12 号 土 坑（第47図）

規模は長軸1.48m，短軸0.71mで隅丸方形のプランを呈する。遺構確認面からの掘り込みは



第46図　A群土坑　1　(1/40)



第47図 A群土坑 2 (1/40)

東側で54cm，西側で32cmを測る。底面は平坦で，壁は外反しながら立ち上がっている。

覆土は3層に識別され，第2層には炭化物が若干含まれている。遺物は土師器片数点が出土している。

13号土坑（第47図）

規模は最大幅0.71m，最小幅0.57mの不定形のプランを呈する。遺構確認面からの掘り込みは最深部で20cmと浅く，底面は平坦ではなく，底面からの立ち上がりは緩く外反している。遺物は出土していない。

14号土坑（第47図）

規模は最大幅0.89m，最小幅0.69mの不定形のプランである。遺構確認面からの掘り込みは18cmと比較的浅く，底面はほぼ平坦であるが，地山面に沿って急傾斜している。遺物は出土していない。

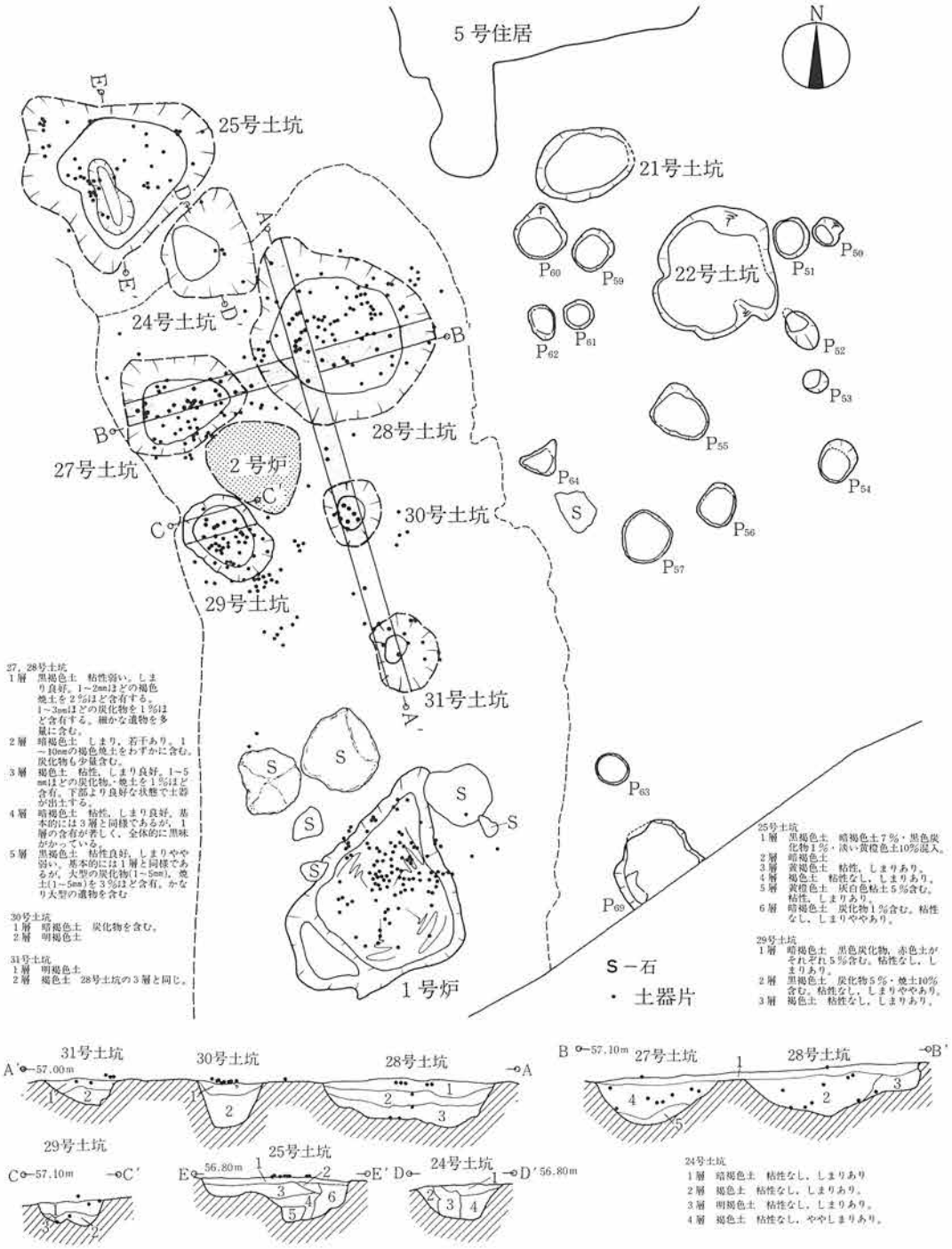
15号土坑（第46図）

規模は最大幅1.52m，最小幅0.61mの楕円形に近い不定形のプランを呈する。遺構確認面からの掘り込みは東側で51cm，西側で42cmを測る。底面は平坦で，壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は2層に識別され，比較的平坦な堆積をしている。遺物は出土していない。

B群土坑，1・2号炉（第48～50図，図版15～17）

検出区は6－B区に位置する23号土坑を除き，全て5－B区に集中している。5－B区は台地の西縁辺にあたり，土壌の流失・地山クラック等が目立ち，遺構・遺物の遺存状態は良好とは



第48図　B群土坑，1・2号炉，ピット及び遺物分布（1/60）

言えない。それは第48図の１・２号炉・27～31号土坑が立地する破線で囲まれた範囲に限定され，すでにⅣ・Ⅴ層の流失がみられる。そして，Ⅳ・Ⅴ層の下位に堆積する礫層が顔をのぞかせている。また，その地域の西側は，近・現代の耕作痕により攪乱を受けており，攪乱内から，多量に遺物が出土することから，検出された土坑群は，さらに西方へ伸びていたものと推定される。Ⅳ・Ⅴ層の流出した範囲にはⅢ層に近似する土壌が広い範囲で覆っており，遺物もかなり多く出土していることから，当初，これらの地域を住居跡として調査を進めてきた。しかし，調査の進展に伴って，遺物が数地点に集中出土すること，断面の観察により大小の落込みが多数検出されたこと等により，土坑群として扱うことにした。したがって，この地域での土坑のいくつかは，遺物集中範囲及び土坑立ち上がりの断面精査によって上面プランを復原している。

１　号　炉（第49図）

規模は最大幅約1.7ｍ，最小幅約0.7ｍの方形に近い不定形のプランを呈する。遺構確認面からの掘り込みは南西隅で40㎝の他は15～30㎝である。遺構内部で検出された径20～35㎝大の多数の礫は，その長軸を縦にし，礫上部のレベルをそろえるように，しかも隙間なく，掘り形の壁面に配されている。これらの礫は遺構掘り形の南壁に２重か３重に巡っていたものと推察される。また，東側の礫集中部には，いくつかの土器片が礫の下や間から検出されており，攪乱を受け移動している可能性も考えられる。礫に囲まれた範囲の床面は，火を受け硬くしまった状態で検出された。礫の表面は赤褐色や赤色に変色し，ヒビ割れやハジケが見られ火熱によるものと考えられる。

覆土は３層に識別され，焼土や炭化物は特に第２層下位で多く検出された。

遺物の多くは覆土上部より出土し，接合関係も１号炉内の遺物でまとまることが多い。しかし，杯の一部は28号土坑出土のもの(333)と接合する。石組みに囲まれた火床面と思われる覆土最下部からは，ほぼ完形の小型鍋(300)が一時的な圧力によってつぶされた状態で検出された。また301・302の大型甕の破片の一部は石組みの下や石の間にはさまれた状態で出土していた。これらは石組みの一部が崩壊したためによるものと考えられ，本遺構出土遺物の中では最も信頼性のおけるものである。大型甕(298)の破片の一部は上層と下層から出土している。

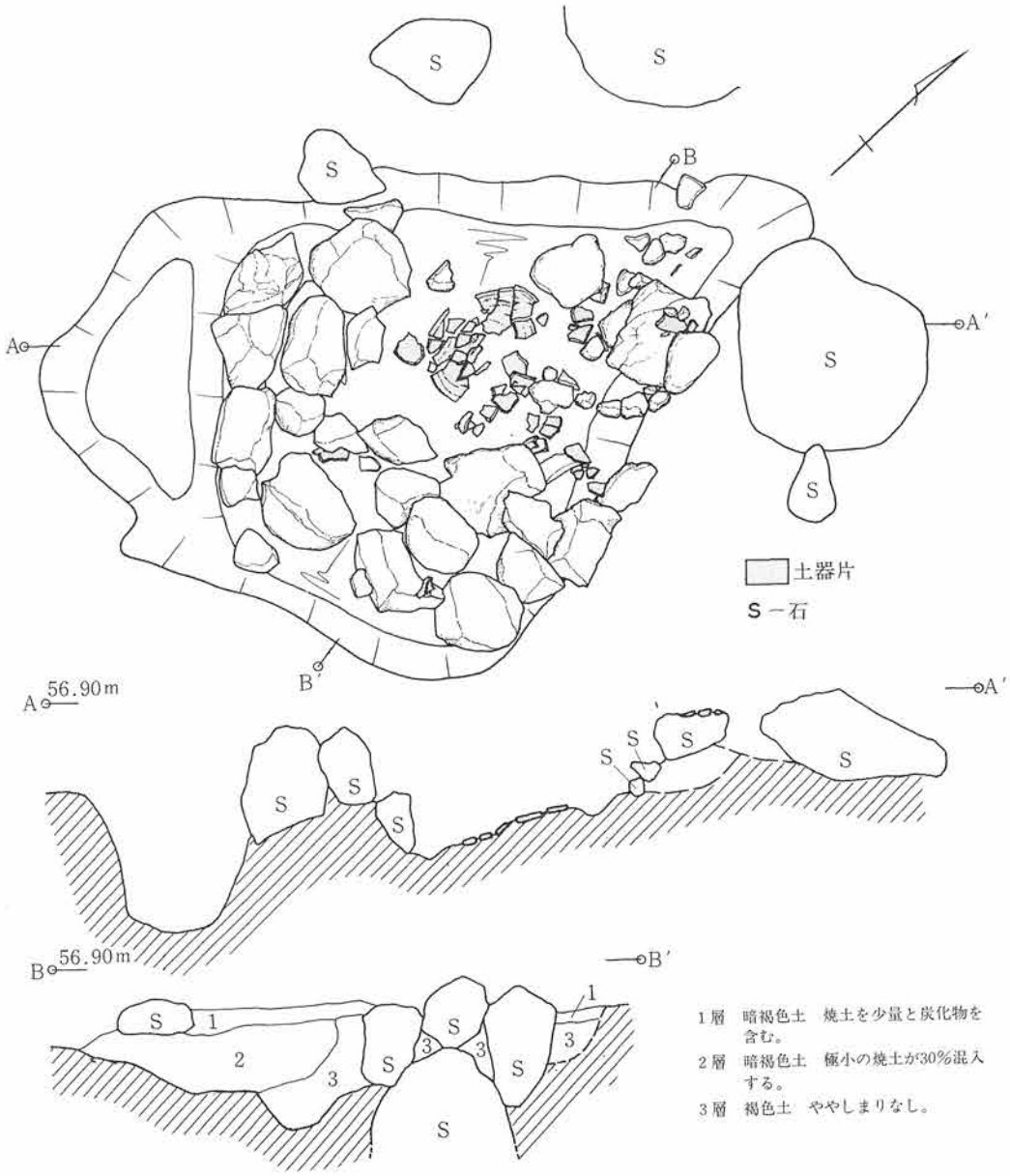
２　号　炉（第48図）

規模は不明確であるが，南北約0.9ｍ，東西約0.8ｍの範囲と推定される。遺構上部にはこぶし大の礫が多量に検出され，礫は赤褐色を呈し火を受けたものと考えられる。

覆土は上部に黒色土，その下に焼土・炭化物を多量に含む暗黄色土が堆積していたが，遺物の出土は少なく，図示できるものはない。

21 号 土 坑（第50図）

規模は長軸0.9ｍ，短軸0.7ｍで東西に長い楕円形のプランを呈する。遺構確認面からの掘り込みは東側で20㎝，西側で10㎝を測り，西壁が緩やかな立ち上がりとなっている。床面はほぼ平坦で，焼けて硬化していた。



第49図　B群　1号炉（1/20）

覆土は単層で炭化物や焼土を含む暗褐色土である。細片のため遺物は図化できなかったが，須恵器の杯片1点と土師器片10数点が出土している。

22号土坑（第50図）

21号土坑や22号土坑は5号住居の南側に位置し，周辺は比較的掘り込みのしっかりしたピットにとり囲まれている。規模は径約1.1mを測り，平面はほぼ円形に近い。遺構確認面からの掘り込みは20cm前後と比較的浅い。

覆土は2層に分けられ，2層ともほぼレンズ状に堆積している。遺物は第2層上部より比較的遺存度の良い椀が出土している。

23号土坑（第50図）

規模は長軸1.35m，短軸0.71mで南北に長い長楕円形のプランを呈する。遺構確認面からの掘り込みは南側で36cm，北側で24cmを測る。壁面の底部からの立ち上がりはなだらかに湾曲している。壁面の一部は近世以降の耕作等による攪乱を受けていた。

覆土は単層で褐色土が堆積し，黄褐色粘土がブロック状に混入していた。遺物は細片のため図化していないが，須恵器の蓋1点と土師器片64点出土している。

24号土坑（第48図）

規模は南北約1.0m，東西約0.8mの範囲と推測される。遺構確認面からの掘り込みは最深部で33cmである。壁面の立ち上がりは東側で緩く，西側で急である。

覆土は4層に識別され，各層とも固くしまっている。遺物は少量で細片のため図示していないが，破片の一部は25号土坑出土の杯(314)や28号土坑出土の甕(335)と接合する。

25号土坑（第48図）

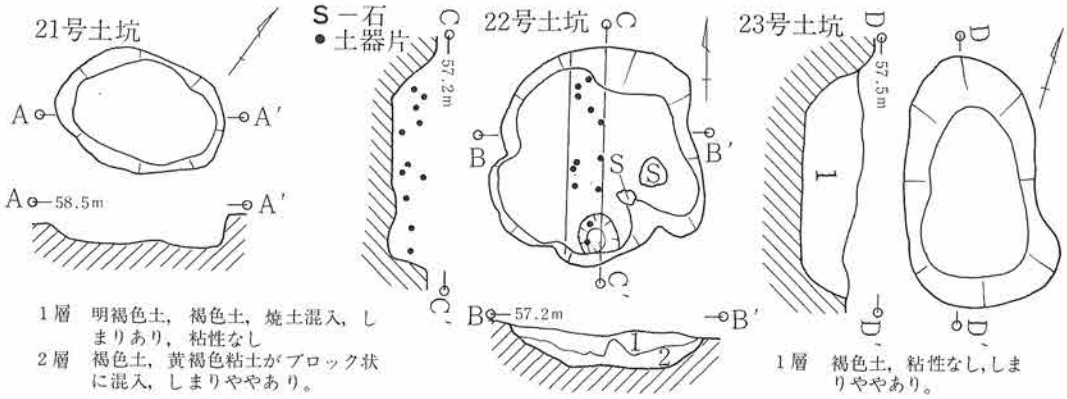
規模は南北約1.5m，東西約1.7mの範囲と推定される。遺構確認面からの掘り込みは最深部で43cmを測り，東西両側の立ち上がりは急であるが，途中に段があり，一部平坦面を残している。

覆土は6層に識別され，第1層は全体に薄く覆い，焼土粒子や炭化物が混入していた。出土遺物の殆どは覆土上層より出土している。

27号土坑（第48図）

規模は不明の部分が多いが南北約0.9m，東西約1.2mの範囲と推定される。遺構確認面からの掘り込みは緩く傾斜し摺鉢状を呈し，最深部で43cmを測る。遺物が比較的多く出土している遺構の1つである。

覆土は3層に分けられ，各層に焼土や炭化物が混入している。各層とも固くしまっているが底面も火を受けて硬化していた。遺物は完形に近い土師器の杯を主体に，底面に近い位置で検



第50図 B群土坑及び遺物分布（1/40）

出されている。

28号土坑（第48図）

規模はやや不明瞭であるが，南北約1.8m，東西約1.5mの範囲と考えられる。遺構確認面からの掘り込みは27号土坑と同様に緩く傾斜し，底面も平坦ではなく最深部で45cmを測る。

覆土は3層に識別され，底面が火を受けて硬化しているなど27号土坑との類似点が多い。遺物は上部で多く検出されているが，底面近くから出土した例も多い。

29号土坑（第48図）

規模は長軸0.85m，短軸0.6mの隅丸方形に近いプランを呈する。遺構確認面からの掘り込みは20cm前後を測る。底面は硬くしまっているが，起伏が見られる。

覆土は3層に分けられ，各層とも硬くしまっている。遺物は各層から検出され，特に底面近くからの出土が多い。

30号土坑（第48図）

規模は不明な部分が多いが，南北約0.58m，東西約0.5mの範囲と考えられる。遺構確認面からの掘り込みは40cmと深い。

覆土は2層に識別され，遺物は第1層上面より多く検出されている。

31号土坑（第48図）

規模は不明な部分が多いが，南北約0.7m，東西約0.55mの範囲と推定される。遺構確認面からの掘り込みは最深部で24cmを呈し，比較的浅い。底面は平坦ではなく，立ち上がりは緩く傾斜し，摺鉢状を呈する。

覆土は2層に分けられる。第2層には焼土や炭化物が混入し，遺物の殆どは第1層より出土し，細片化したものが多い。

B群土坑・1号炉出土遺物

1号炉出土遺物（第51・52図，図版28）

出土遺物は須恵器と土師器である。須恵器は蓋2個体，無台杯3個体が出土し，しかも皆細片である。土師器は甕と小型甕，杯が大半を占め，他に椀・鍋・非ロクロ土師器がある。

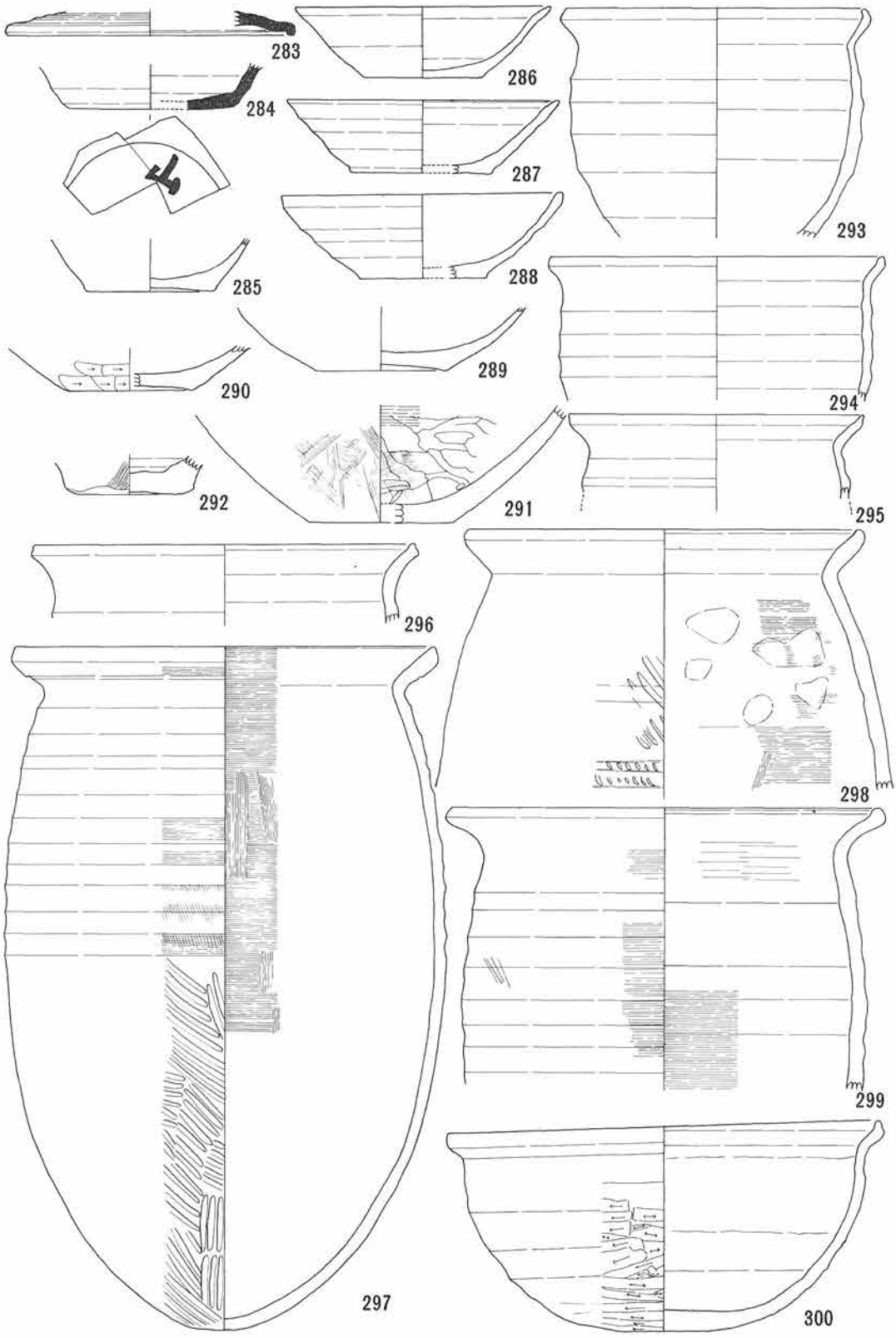
須恵器（283・284）

蓋（283）　口縁端部は屈折して丸くつままれ，断面は方形に近い。

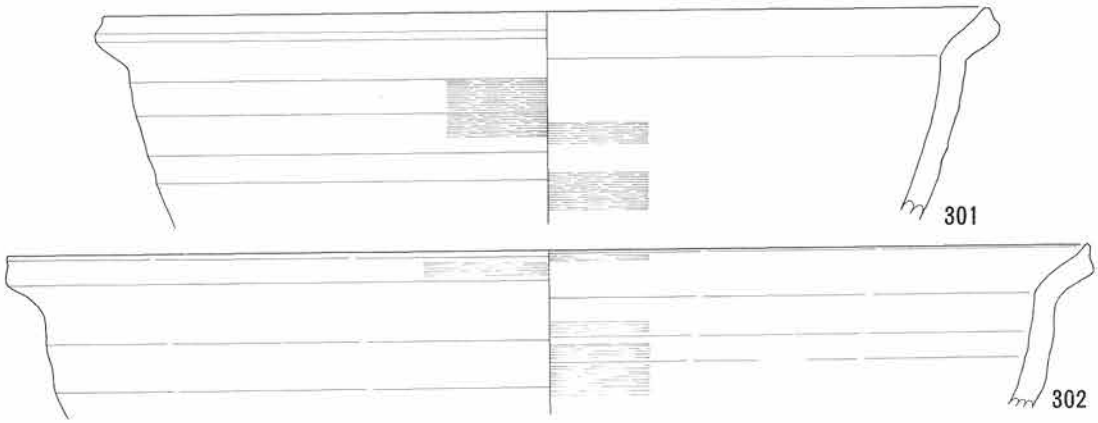
無台杯（284）　底部はヘラ切り後，ロクロ撫でによって調整され平坦になっている。底部外面に「山」と読める墨書痕が見られる。

土師器（285～302）

杯（285～288）　口縁部破片の識別により22個体以上が確認され，大半がE類であり，1点だけB類が含まれる。286・287の内面はロクロ撫でにより滑らかである。288は，口縁端部の器壁が厚く，底部から体部下半にかけて小さくくびれる。いずれもE類である。



第51図　B群　1号炉出土土器　1 (1/3)



第52図　B群　1号炉出土土器　2　(1/3)

椀（289・290）　3個体以上出土し，図示された椀はどちらもB2類である。289は外面体部下位の回転ヘラ削り痕が明瞭であり，内面はロクロ撫で後，ミガキが施されたものと思われる。290は磨耗著しいが，外面体部下位に回転ヘラ削り痕がみられる。

鉢（291）　鉢は1個体しか確認されておらずB類である。内外面とも不定方向にヘラ削り調整が施され，内面はその後ミガキが施されている。底部の切り離し法は不明であるが，その後の調整はヘラ削りである。体部の内面上部にはカキ目痕が明瞭に残っている。体部外面の一部に黒色の炭化物が付着している。

小型甕（293～295）　口縁部と胴部破片の識別より13個体以上が含まれる。B1類・B2類が確認されているが，大半がB2類である。

B1類(293)・B2類(294・295)　294・295は胴部があまり張らない。前者は内外面全体に炭化物状のものが，後者は口縁部と胴部上半の1部にススがそれぞれ認められる。

甕（296～299）　ロクロ成形の甕と非ロクロ成形の甕に大別できる。ロクロ成形の甕は，胴部破片の調整痕の識別により40個体以上が検出されているが，胴部破片の割に口縁部と底部破片の個体数が少ない。B1・D2類が出土している。非ロクロ成形の甕は1個体しか出土していない。

B1類(296～298)　297は口縁部より底部まで復原でき，体部外面下半に平行叩き目，内面上半はカキ目，下半は叩き目の後ハケ目調整が施されている。内面のカキ目に直行させて，カキ目と同じ工具により縦位のハケ調整痕が散見される。口縁部の外面には炭化物が一部付着している。298の器面は磨耗している。胴部外面は上半部まで平行叩き目が施され，内面は押圧痕の後にカキ目調整が施されている。

D2類(299)　胴部内面の上位は撫で，中位にはカキ目調整が施されている。他に図示していないが，胴部破片で外面に平行叩き目，内面に同心円叩き目が施されているものも見られる。

非ロクロ成形甕（292・第60図5）　292の底部と胴部には不定方向のハケ目痕が認められる。

内面は撫で調整により凹凸している。

鍋（300～302）　図示した3個体がすべてで，B_1・B_2類が出土している。

B_1類(300・302)　300は他の2例に比較して法量が小さく，器壁は薄手であり，形態等から甕とも考えられる。本遺跡では小型の鍋は他に下段の包含層から出土している。成形技法も他の鍋と異なる点が多く，特に底部には回転糸切り痕(第60図1)が認められ，内面はミガキにより仕上げられる。明確ではないが赤彩が施された可能性もある。302は口縁端部の内外面と胴部にカキ目痕が施されている。口縁部内面の一部にはススが付着している。

B_2類(301)　胴部内外面の一部にカキ目痕が認められる。

22号土坑出土遺物（第53図，図版29）

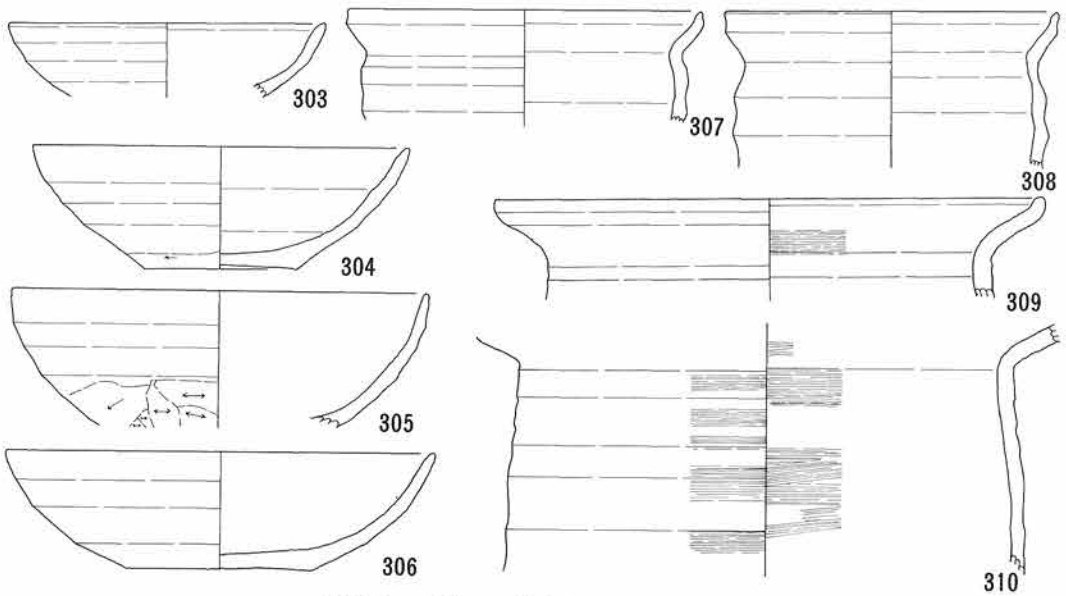
出土遺物はすべて土師器で，器種は杯・椀・小型甕・甕である。

土師器（303～310）

杯は，底部破片の識別により12個体以上が確認されている。303はC類と考えられるが底部欠損のため明瞭ではない。

椀（304～306）　3個体出土しているが，すべてB類である。内面はロクロ撫での後ミガキによって丁寧に仕上げられている。外面はロクロ撫でによる凹凸が残り，その凸部のみにミガキが施される。306は不明瞭であるが，304や305と同様，体部下位にヘラ削りが施される。また，304と306にはヒビ割れやハジケが認められる。特に306は歪みが著しく，体部下位から底部にかけての外面はにぶい赤橙色に変色している。

小型甕（307・308）　口縁部破片の識別により6個体以上確認され，図示されていないA_1類1個体を除き，他はB_1類である。体部内外面とも強いロクロ撫でによって凹凸している。

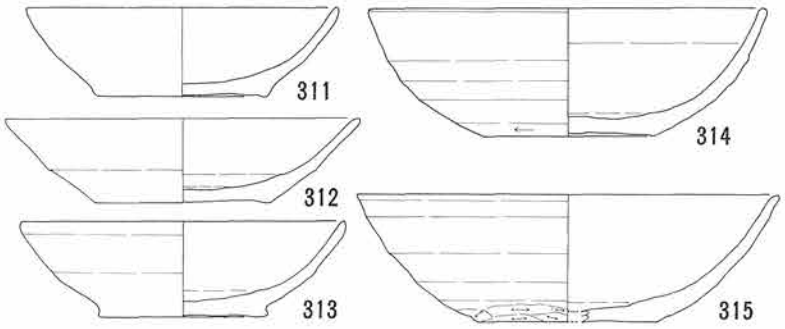


第53図　B群　22号土坑出土土器（1/3）

307の外面と口縁部内面にはスス状のものが付着している。

甕（309・310）

口縁部破片の識別により６個体以上確認されている。



第54図　B群　25号土坑出土土器（1/3）

309はD2類で，他にA1・D1・E類も散見される。309と310は胎土や色調等類似している。

25号土坑出土遺物（第54図，図版29）

遺物は細片化した土師器や須恵器である。須恵器は蓋と無台杯がそれぞれ１個体出土している。土師器には杯・椀・小型甕・甕などがある。このうち図示したのは土師器の杯と椀である。

土師器（311～315）

杯（311～313）　口縁部破片の識別により15個体以上出土している。図示した杯はすべてE類で，体部は直線的に立ち上がっている。特に312は器高が低く，体部も直線的に大きく開いている。

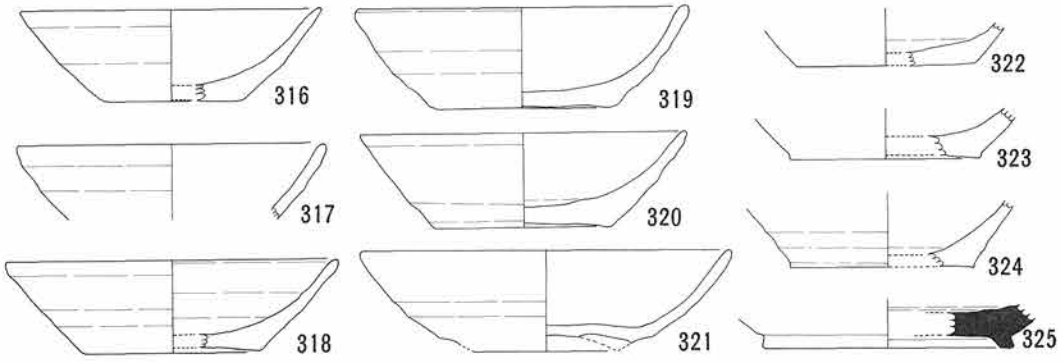
椀（314・315）　いずれもB類である。内面にはミガキが施されていたものと思われるが，器面が荒れており単位，方向等は不明である。

27号土坑出土遺物（第55図，図版27）

遺物は須恵器と土師器，それに未加工の滑石である。比較的残りの良い土師器の杯は，第４層下部か第５層にかけて出土している。他に須恵器の有台杯・無台杯・蓋各１個体と土師器の椀や甕などが検出されているが，細片のため図示できたのはわずかに須恵器の有台杯と土師器の杯・椀である。

須恵器（325）

有台杯（325）　底部破片で，器壁は厚く高台は大きく外反している。



第55図　B群　27号土坑出土土器（1/3）

土師器（316～324）

杯（316～320，322～324）　口縁部破片の識別により22個体以上が出土している。316～320はE類で，322～324は口縁部を欠損しているが，体部下位の立ち上がりから同類と考えられる。器壁は比較的厚い。

椀（321）　底部は赤褐色を呈し，歪み・剝落が著しく，火気の影響を強く受けたと思われる。また，上げ底気味の底部も前記の理由からのものである。

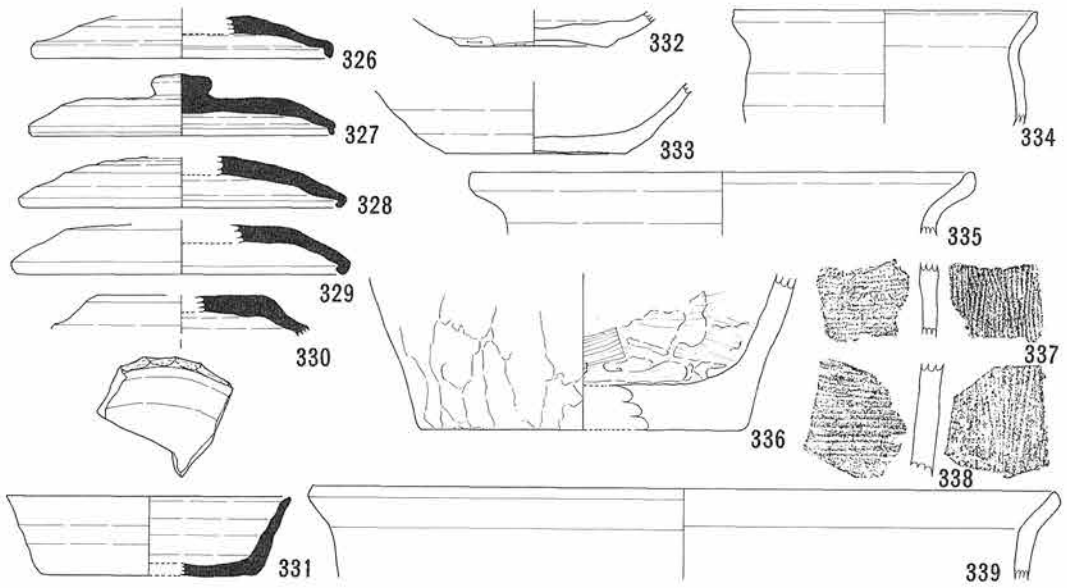
28号土坑出土遺物（第56図，図版30）

遺物は周辺の土坑に比べ，須恵器や非ロクロ土師器が多く出土している。須恵器には蓋と無台杯があり，土師器には杯・椀・小型甕・甕・非ロクロ成形甕・鍋がある。

須恵器（326～331）

蓋（326～330）　5個体以上出土している。ロクロ撫でによって丁寧に仕上げられ，特に内面は平滑になっている。天井はやや高く，328を除き他は平坦である。体部は傾斜し，口縁部は屈折するが，接地面まで垂下するもの(326・327)と，強く内傾するもの(328・329)とがある。口縁端部は丸くつつまれ，断面三角形や長方形を呈する。326の天井部と体部の境はヘラ削り後ロクロ撫でによって調整されている。327は端部外面が細い棒状のものによって削られ外反している。330は口縁部の屈折部付近で，外周にそった形で剝離が施されている。327の体部や328・330の口縁部外面には自然釉がかかっている。

無台杯（331）　底部は平坦で，体部は直線的にやや外反しながら開く。体部上半の外面に自然釉がかかっている。



第56図　B群　28号土坑出土土器（1/3）

土師器（332～339）

杯（332）　口縁部の識別により10個体以上出土しており，体部下位のヘラ削り調整や体部の立ち上がりからB2類と推定される。

椀（333）　器面は磨耗著しく，体部下半のヘラ削りの有無は不明確であるが，体部の立ち上がり等からB類と考えられる。

小型甕（334）　口縁部破片の識別により3個体以上が検出されている。334はB1類と推察される。

甕（335，第60図6・7）　胴部破片の識別により24個体以上が出土している。335は磨耗しており明確ではないが，B1類と考えられる。胴部破片から成形技法をみると外面は平行か格子状の叩き目痕，内面は同心円状の叩き目痕か押圧痕である。

非ロクロ成形甕（336～338）　336は底部が肥厚し，胴部は直線的に開きながら立ち上がる。胴部外面には撫でによると思われる調整痕が見られ，内面のハケ目痕は明瞭で幅約1.4cmの工具を使用している。337と338は胴部にあたるもので，外面に縦位，内面に横位のハケ目痕が認められる。

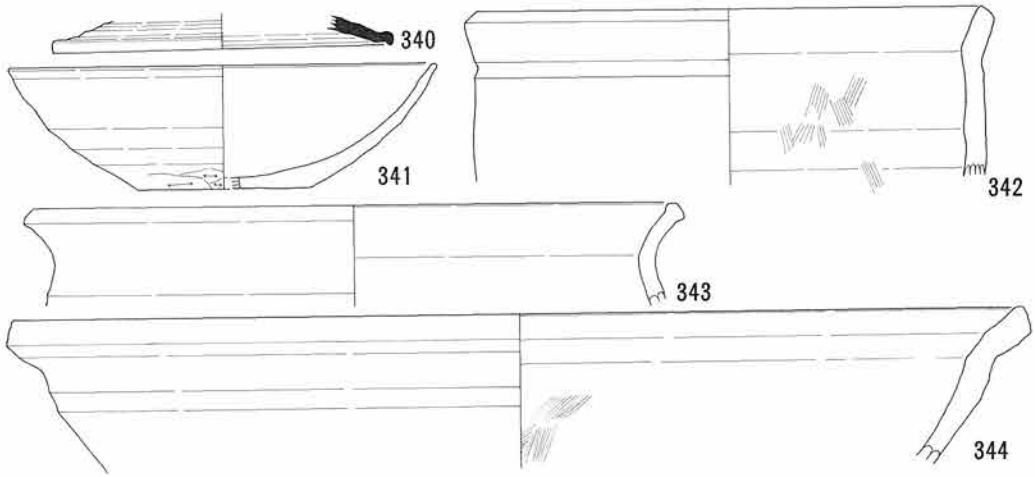
鍋（339）　口縁部の形態よりB2類と推測される。また，小片で磨耗著しいため明瞭ではないが，内面と外面体部にカキ目痕が観察される。

29号土坑出土遺物（第57図　図版30）

遺物は須恵器と土師器である。須恵器は蓋1・無台杯3個体で，土師器は多く出土し杯・椀・小型甕・甕・鍋などがある。土師器の杯は口縁部破片，その他は胴部破片の識別により，杯7・小型甕2・甕13・鍋1個体以上検出されているが，小片のため図示されたものは少ない。

須恵器（340）

蓋（340）　体部は傾斜し口縁部で一段高くなり，端部は垂下というよりやや外側に開くよう



第57図　B群　29号土坑出土土器（1/3）

に屈折させて，つままれている。

土師器（341～344）

椀（341）　体部下位にヘラ削りが施され，体部の立ち上がりは大きく開く。底部内面の一部に炭化物が付着している。

甕（342・343，第60図8・9）　胴部調整痕の識別により13個体以上出土している。口縁部の形態より，343はB_2類，342はE類と判断される。342の胴部内面には不定方向にハケ目，口縁部内面にカキ目がかすかに判明できる。8・9は胴部下半の叩き目やハケ目の拓影である。

鍋（344）　1個体のみの出土であるが，30号土坑の破片と接合する。B_2類である。

30号土坑出土遺物（第58図，図版30）

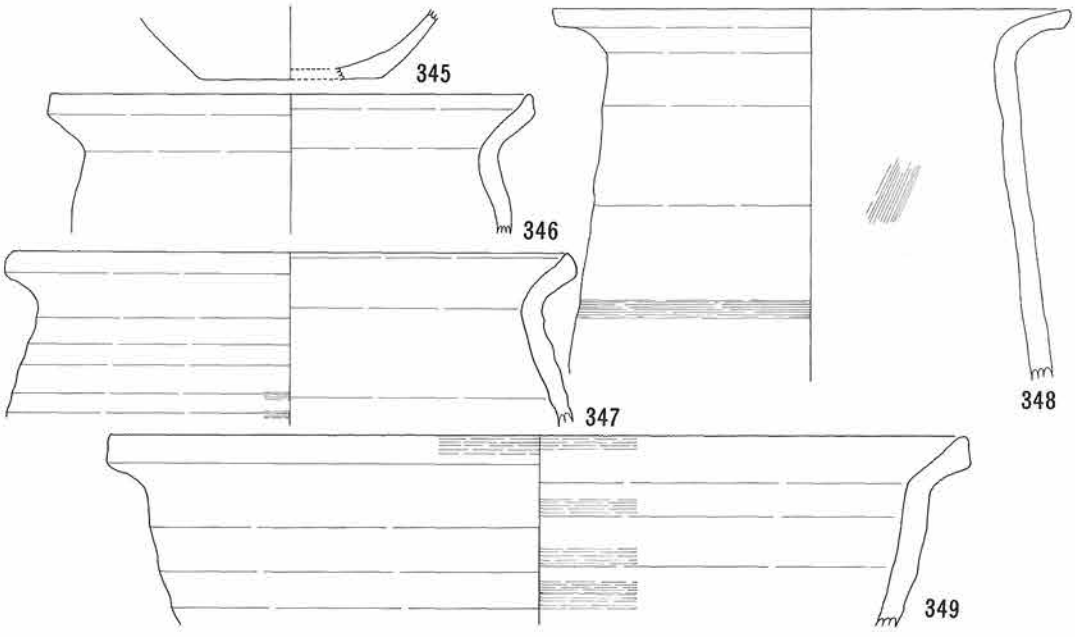
土師器のみ出土し，杯と甕・非ロクロ成形甕・鍋がある。隣接する29号土坑の破片と接合する鍋が，2個体分認められている。

土師器（345～349）

杯（345）は，底部破片より2個体以上が出土している。

甕（346～348）　胴部破片の識別により7個体以上が確認されている。B_1類とC類に分けられる。

B_1類（346・348）　348は口縁部が大きく外反し，口縁端部を外にややふくらませながらつまれている。特異な形態で，倒立させると甑とも考えられる。器面は磨耗して調整は明確ではないが，胴部外面の一部にカキ目，内面の一部に斜方向のハケ目が見られる。346も磨耗著しく，調整は不明である。

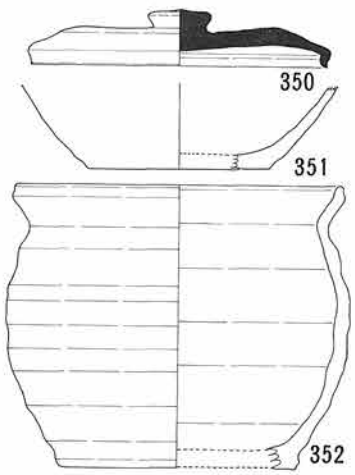


第58図　B群　30号土坑出土土器（1/3）

C類(347)　器面は剝落しているが，胴部外面の一部にカキ目痕がみられる。

鍋（349）　口縁部の形態からB1類と考えられる。内面と口縁端部外面にカキ目痕が見られる。器面は火の影響と思われる剝落が一部に認められる。破片の一部は29号土坑より出土している。

非ロクロ成形甕（第60図4）　胴部破片で内面には横位，外面には縦位のハケ目が施される。



第59図　B群　31号土坑出土土器 (1/3)

31号土坑出土遺物（第59図，図版30）

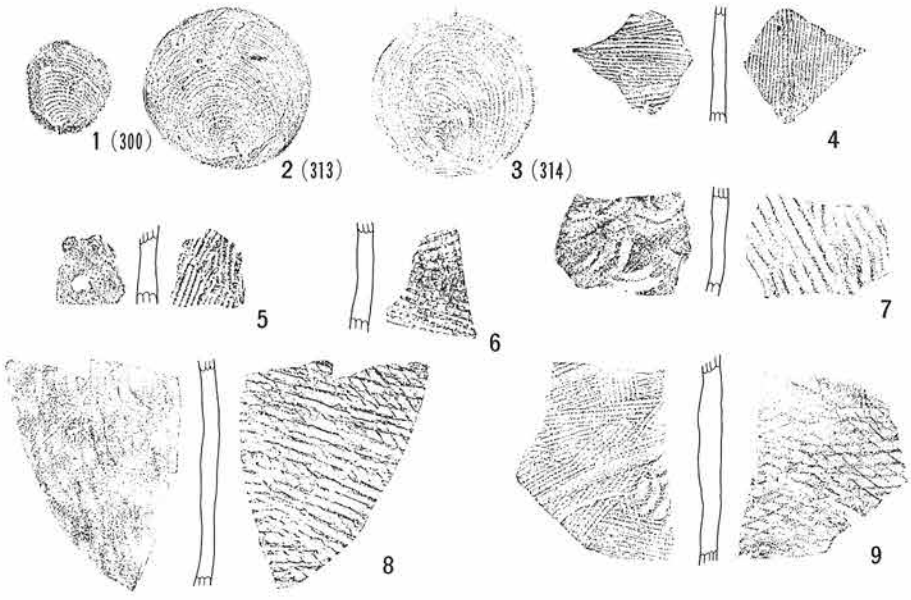
須恵器と土師器が出土し，土師器が大半を占める。須恵器には蓋が3個体，無台杯3個体分があり，図示できたものは蓋1個体のみである。土師器には杯・小型甕・甕・非ロクロ成形甕がある。甕は胴部破片の識別により17個体以上，非ロクロ成形甕は1個体以上出土しているが，細片のため図示していない。

須恵器（350）

蓋（350）　天井部と体部の境をヘラ削り調整している。つまみは中央部が少し高く，宝珠形に近い形をしている。屈折した口縁端部はやや外反気味につままれている。

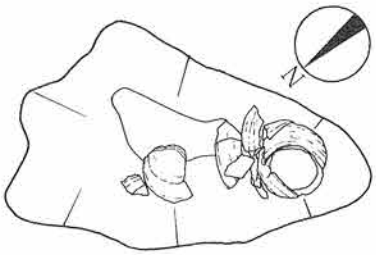
土師器（351・352）

杯（351）　口縁部破片の識別により7個体以上が出土している。351は口縁部欠損しているがE類と推定され，体部の立ち上がりは直線的に開いている。



第60図　B群土坑出土土器拓影（1/3）

小型甕（352）　胴部破片の識別により２個体以上が出土している。これら破片のうち27号土坑出土の破片と接合するものも含まれている。352は比較的遺存度の良いもので，B_2 類である。体部内外面はロクロ撫でが強く凹凸している。外面にスス状のものが見られる。



第61図　C群　6号土坑遺物出土状態　(1/20)

C 群 土 坑（第61・62図　図版17・18）

本土坑群は遺跡上段頂部付近に点存するもので，各土坑より土師器が多量に出土している。いずれも掘り込みのやや浅いものであるが，平面形態はバラエティーに富んでいる。それぞれ遺物の出土状態や遺構の規模から，性格の異なる土坑と思われる。

6 号 土 坑（第61図）

検出区は６-Ｄ区である。規模は長軸約0.85ｍ，短軸約0.3ｍを測り，東西に長い平面プランを呈する。本遺構の周辺は著しく攪乱を受けているため，正確な平面形態は不明である。遺構確認面からの掘り込みは約20㎝を測る。底面及び壁の掘り形等は企画性がなく一定していない。

覆土は暗褐色土を基本とし，炭化粒を多量に混入するもので，しまりがなく分層不可能であった。小型甕１個体と杯・椀が完形に近い状態で検出されている。小型甕を除き，いずれも赤色塗彩である。遺物や出土状況より祭礼的性格をもつ遺構の可能性がある。

10 号 土 坑（第62図）

検出区は４-Ｄ区で，本土坑北・東側は攪乱を受けていて一部崩れ，プランは不明確である。規模は長軸２ｍ，短軸0.8ｍ以上を測り，北方向に長い平面プランを呈している。確認面からの掘り込みは約20㎝である。底面はほぼ平坦であり，南側の壁の立ち上がりは明瞭であるが，北側の壁はやや緩やかに立ち上がる。出土遺物は，土師器の細片が数点出土しているが図化できる資料ではない。

16 号 土 坑（第62図）

検出区は７-Ｃ・Ｄ区で，調査区の中で最も東側に位置する。規模は長軸2.6ｍ，短軸2.1ｍを測り，南北方向に長い不定楕円形を呈する。確認面からの掘り込みは約20㎝である。

覆土は細分して７層に識別される。各層とも炭化粒・焼土粒がブロック状に混入するもので，土坑の東側では炭化物・焼土ブロックを主体とする層が堆積している。土坑西側は粘質土を多量に含む層が堆積する。底面はほぼ平坦で，薄く焼土が貼り付いた状態で検出され，火床面と考えられる。出土遺物の多くは土師器の杯で，表面に黒斑が観察されるものが目立ち，土師器焼成遺構の可能性が強い。

17 号 土 坑

検出区は６-Ｃ区で，隣接して南側に４号住居，東側に18号土坑が存在する。規模は長軸1.65ｍ，短軸1.20ｍを測るやや歪んだ楕円形のプランを呈する。

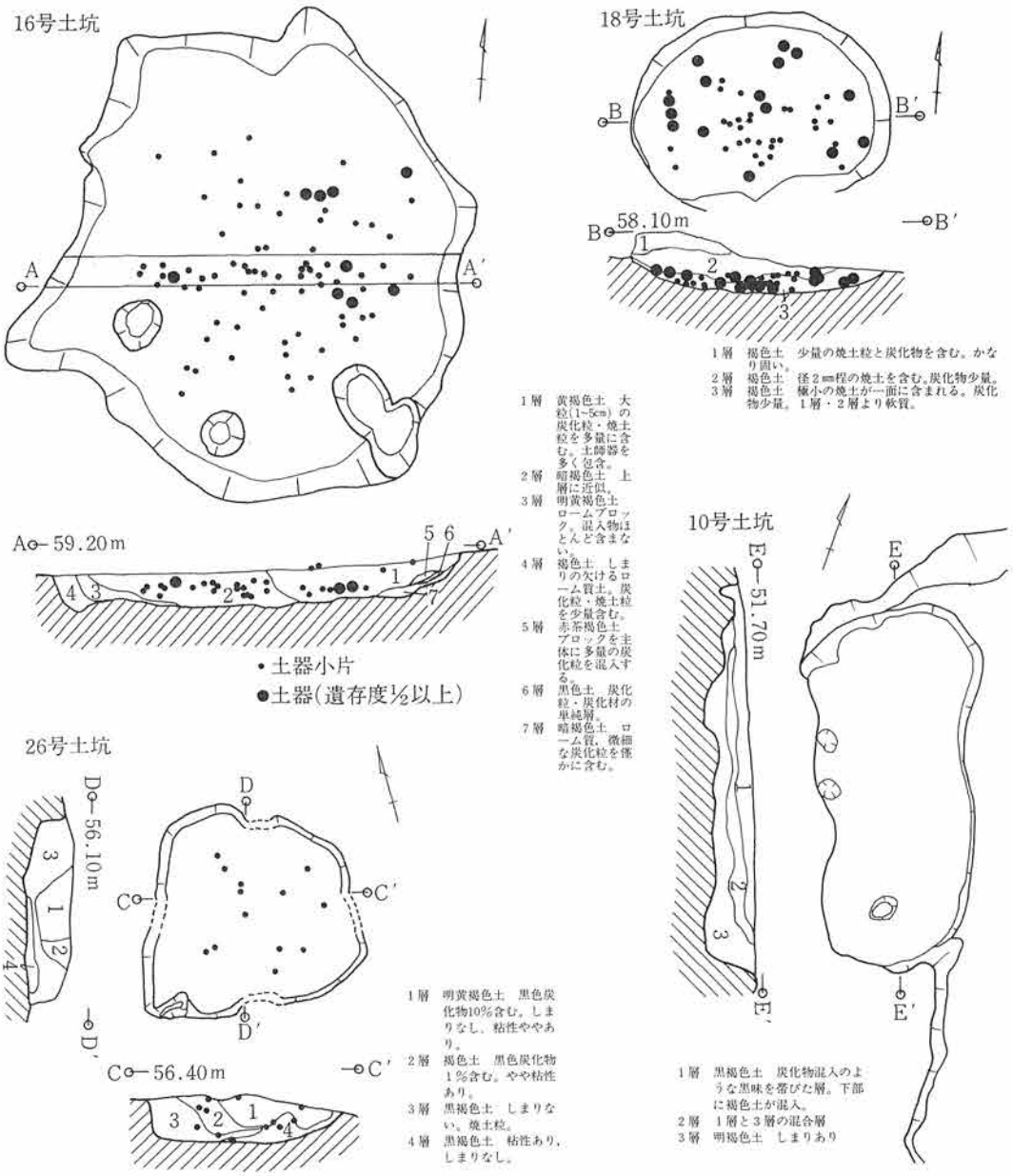
覆土は褐色土である。出土遺物は，土師器片だけで須恵器は含まれない。

18号土坑（第62図）

検出区は6-C区で，4号住居の北東隅に位置し一部重複している。両遺構の切り合いから，住居が新，土坑が旧の関係にある。

規模は長軸1.50m，短軸1mの東西にやや長い楕円形のプランを呈する。確認面からの掘り込みは，東側で約30cm，西側で約10cmを測る。底面は平坦で，緩く東側へ立ち上がっていく。

覆土は3層に識別され，各層とも焼土粒がブロック状に混入している。特に第3層では細か



第62図　C群土坑及び遺物分布（1/40）

い焼土粒が全面に混入している。底面は火を受けたものと推測され，やや赤く硬化している。出土遺物は杯・小型甕・鍋の器種が出土している。このなかで歪みをもつものや黒斑の観察されるものが多く，16号土坑と同様土師器焼成遺構の可能性が強い。

19号土坑（第16・18図）

検出区は5-C区で1号住居と重複する。両遺構の切り合いから，住居が旧・土坑が新の関係にある。当初から遺物が数地点に集中して出土することは分かったが，確認面付近の覆土が区別しにくく遺構は分離できなかった。そこで遺物集中で推定された重複遺構の範囲の限定と出土遺物を分離するために，遺物分布図を作製しながら調査を進めた。その後土層断面精査の段階をもって遺構の落ち込みが明瞭となったため，土坑と認定した。したがって住居床面上で確認された円形の落ち込み（第16図）は，本土坑の底部残存部である。また第18図で示した破線範囲は，土層断面と遺物分布状態によって本土坑の範囲を推定したものである。

規模は径約1.4mのほぼ円形を呈すると考えられ，確認面からの掘り込みは20cmを測る。底面は緩い摺鉢状を呈している。

覆土は2層に分層される。上層には赤色焼土ブロックが多量に含まれ，下層は火の影響により赤く硬化している。硬化面は地山までたっしている。出土遺物は土器断面が剝げたような異常な割れ方をするものが多く，土師器焼成遺構の可能性が強い。

20号土坑（第16・18図）

検出区は5-C区で19号土坑同様，1号住居と重複関係にあり，両遺構の切り合い関係も同様である。したがって平面プランは，遺物集中，土層断面等の観察により復原したものである。

規模は長径1.8m，短径1.2mのほぼ楕円形を呈するものと推定され，確認面からの深さは北東部44cmを測る。底面は，割合平坦で緩く立ち上がっていく。

覆土は2層に分層され，底面は部分的に火の影響により地山が赤く硬化している。また，北東の壁も火により硬化しており，周辺には焼土ブロックが散在している。覆土中からは多量に土器が出土している。

26号土坑（第62図）

検出区は4・5-C区で，土坑南側の壁は一部攪乱を受けている。

規模は長軸1.20m，短軸1.10mで隅丸方形状の平面形態を呈している。遺構確認面からの掘り込みは，約25cmである。底面はほぼ平坦で，西側の壁は直線的に立ち上がるが，東側は緩く立ち上がる。

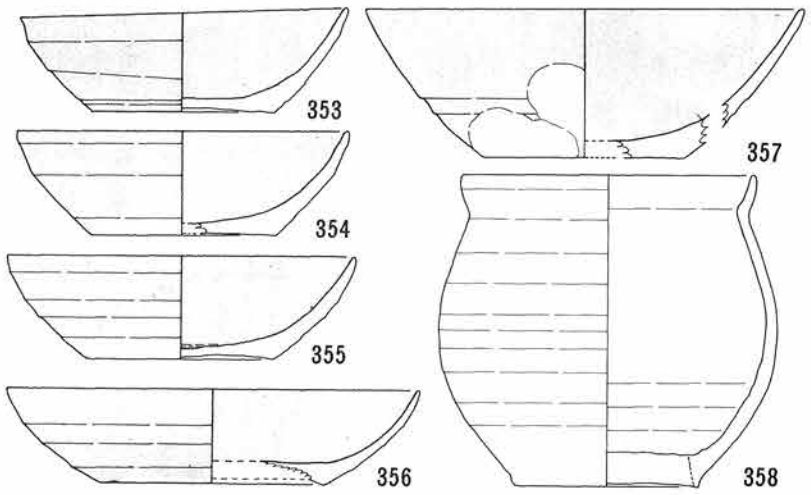
覆土は4層に識別され，下層には黒褐色土（基本層序の第Ⅳ層に類似）が堆積する。土器は，覆土全般にわたり出土している。

C群土坑出土遺物

6号土坑出土遺物（第63図　図版30・31）

遺物は土坑掘り形の中位より出土し，底面からやや浮いた状態で検出された。検出状況から，

後世の攪乱は，ほとんど影響していないと考えられる。最初に小型甕が配置され，次に甕の口縁部をふせるように杯と椀が重なって出土している。接合状況で注目されることは，小型甕の穿孔された底部が，２号住居覆土４層より出土していることで，６号土坑と２号住居は密接な関連をもつ可能性が強い。出土状態や赤彩土器などの遺物から祭礼に関連する土坑と推定される。図化したものは出土遺物全てであり，小型甕を除き全て赤色顔料を施す赤彩土器である。



第63図　C群　６号土坑出土土器（1/3）

土師器（353～358）

赤彩土器（353～357）　353～356は，遺存状態が良く，ほぼ完形になるが，歪みが著しい土器である。353は内外面の一部に黒斑が観察される。354は底部の一部が欠損しており，破損部位の形状から意識的に外面より内面へ穿孔されたものと推定される。355は外側の器面が著しく剝落している。しかし残存部にはハケ状工具で赤色顔料を塗った痕が良く観察できる。356は他のものに比べ，やや器高が低く口径が大きい。357は椀で，外側の器面は著しく剝落している。口径・器高の割合に対し底径が小さいもので，体部下半に回転ヘラ削りが観察される。外面の体部下半にも一部黒斑が観察される。

小型甕（358）は，底部が欠損しているが，354と同様に意識的に穿孔されたと推定される。内面体部下半は成形時の粘土紐巻き上げ痕が顕著に観察され，上半は丁寧に撫でられている。杯・椀に比べ胎土は粗く，大小の白色砂粒が多量に混入している。口縁形態から A1 類に属する。

16号土坑出土遺物（第64図　図版31・32）

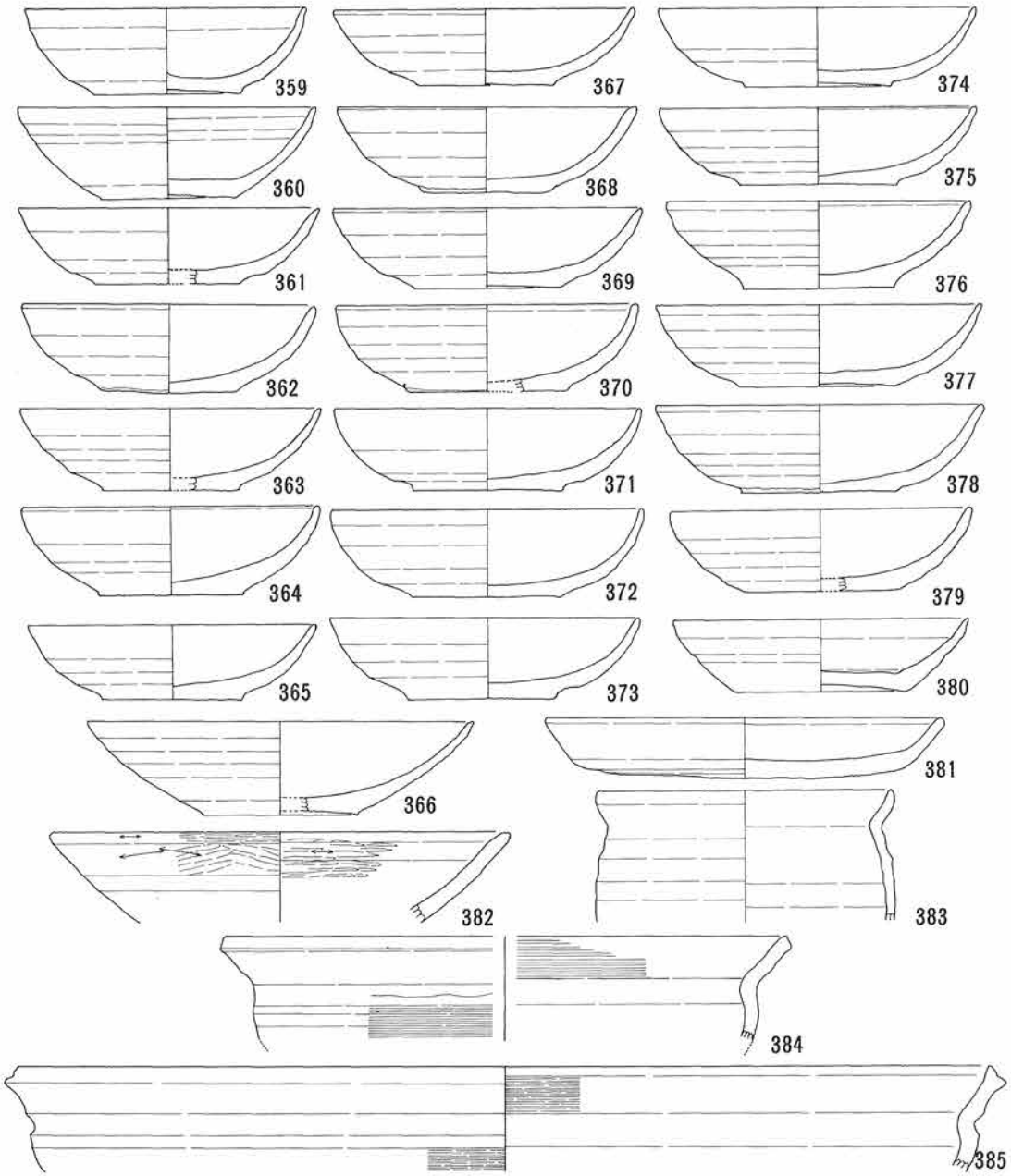
出土土器のうち須恵器の杯１点を除き，全て土師器が占めている。大半は覆土第１・２層出土で，床面直上付近からのものは少ない。杯のうち完形に近いものや個体の半分以上が残存して検出されたものが10個体以上あり，掘り込みが浅い割に遺存状態が良好である。

各器種の推定個体数は，底部の識別により杯67・椀２個体以上，口縁部の識別により小型甕１・鍋２・盤１個体である。この数より，土師器の中でも杯がその大半を占めることがわかる。出土土器片の一部に黒斑・器面の剝落・歪み等が観察されるものが多く，本土坑出土土器の一つの特徴ともいえよう。

土師器（359～385）

杯（359～380）　形態より杯の大半はB1類に属し，A1・A2類が少数出土している。図化したうち，黒斑が観察されるものは366・368・369・372・376・377・384である。

A2類(380)は，体部下半に削りが施されないが，口径に対し器高が低いため本類とした。底部はややあげ底気味となっている。



第64図　C群　16号土坑出土土器（1/3）

A1類(359・360)は，口縁部が入念にロクロ撫で調整されるもので直立気味となっている。内面は墨状の細かい黒色粒が付着している。底部縁辺の形態はB1類に類似するが，器高がやや高く，器壁も厚手となる。

B1類(361～379)は，基本的な形態は一致するが口縁形態が若干異なるものが存在する。368と374で，明らかに口縁端部をつまみ，内傾気味に仕上げるものであるが，新たな分類を設定するほどの形態・技法でないものと考えられる。各個体の接合状態を観察すれば，焼成時に生じたと推定されるヒビや歪みを有するものが目立つ。

椀（366・382）　器面が荒く大小の白色粒が多量に混入され，体部下半に削りが施されないものであるが，大きさや形態からB類とした。

C類(382)は，1点のみで同一個体の破片は出土していない。内外面とも横位のミガキが丁寧に施され，黒斑も観察される。

小型甕（383）　A1類(383)は，小型甕として唯一の出土である。胴部外面に黒斑が観察される。

鍋（384・385）　両者ともB2類である。体部と考えられる格子状叩き痕を有する破片も数点出土しているが接合せず，器形全体を把握できるものはない。

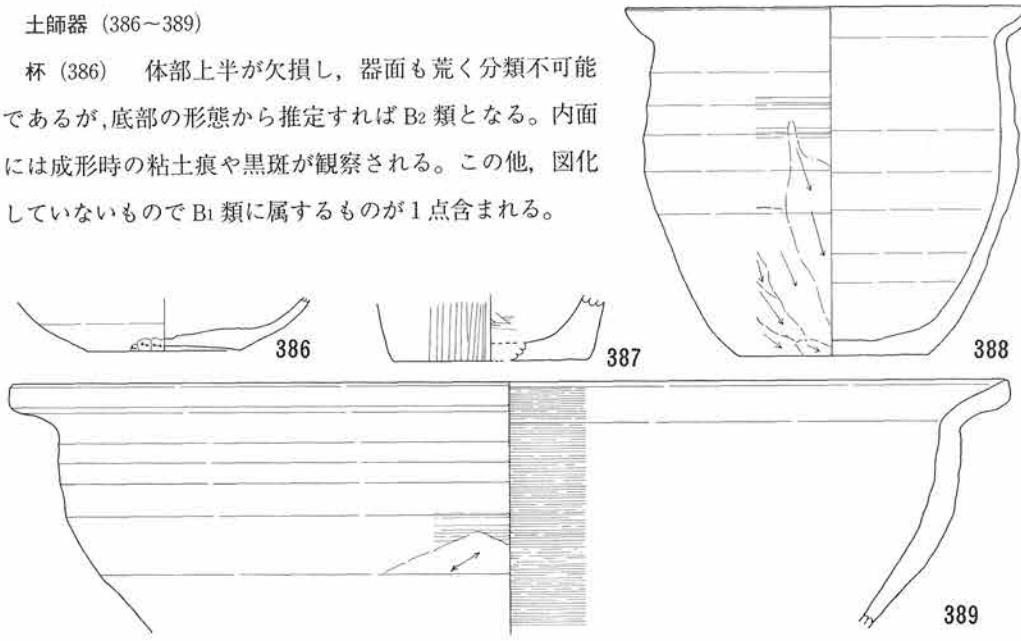
盤（381）　ほぼ完形で，内外面とも丁寧なロクロ撫でが施され，底部は回転ヘラ削りが施される。内面に黒斑が観察される。

17号土坑出土遺物（第65図　図版33）

全て覆土一括として取り上げた資料で，細部にわたる出土状態は不明である。全て土師器で総破片数は22点を数える。器種では杯4個体・非ロクロ成形甕1個体・小型甕1個体・鍋1個体以上が含まれると推定される。

土師器（386～389）

杯（386）　体部上半が欠損し，器面も荒く分類不可能であるが，底部の形態から推定すればB2類となる。内面には成形時の粘土痕や黒斑が観察される。この他，図化していないものでB1類に属するものが1点含まれる。



第65図　C群　17号土坑出土土器（1/3）

非ロクロ成形小型甕（387）　底面は粗い撫で，外面には縦位のハケ目が施されている。

小型甕（388）　口縁部がやや内傾しながら強く外反するA1類である。内面は撫での後に，所々螺旋状にカキ目が施され，平坦になっている。外面は体部上半に粘土紐痕の凹凸を顕著に残し，凸部にのみ，粗くカキ目が施されている。体部下半は上方から下方へヘラ削りが施され粘土紐の凹凸を消している。底部の調整は不明である。

鍋（389）　B2類で，外面に墨状の細かい黒色粒が付着している。外面体部中位から格子状の叩き目痕が観察される。

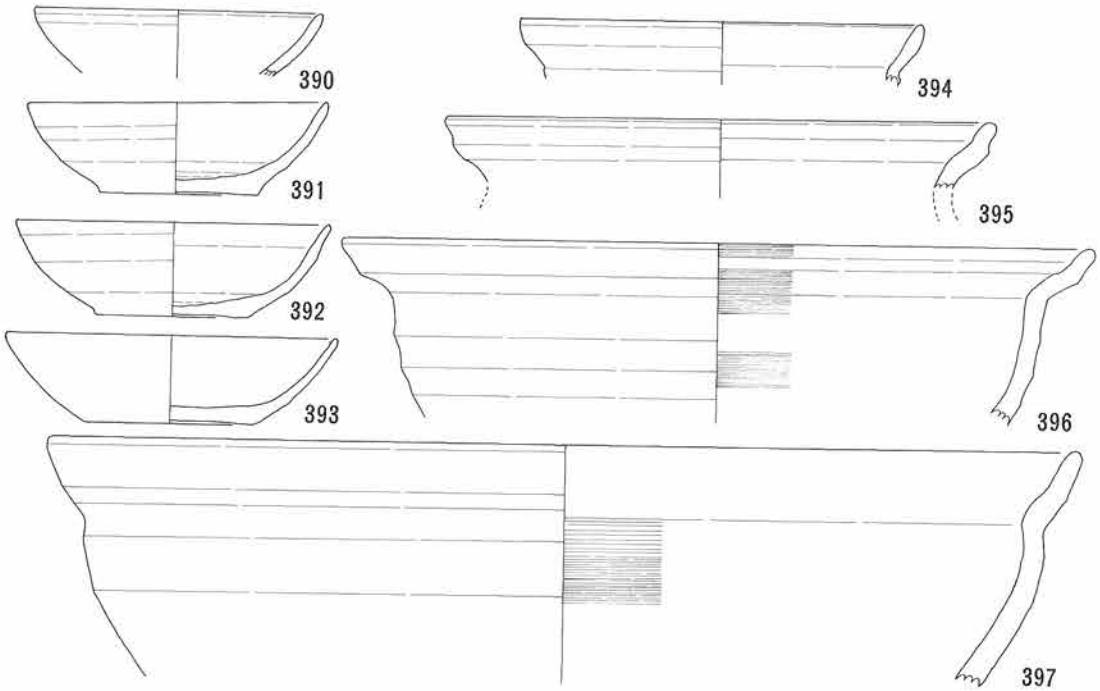
18号土坑出土遺物（第66図　図版33）

出土土器は全て土師器である。大半が覆土最下層の第3層からで，やや堅い火床と推定される面の上位より出土する。器種では杯・小型甕・甕・鍋が確認される。

土師器（390～397）

杯（390～393）　底部の識別より8個体以上含まれると推定され，B1・B2類が出土している。391・392などで器形の歪みが著しく，若干実物と実測図のイメージが異なる。

B1類(390～392)は，いずれも基本形態とやや異なる形を示しているが，390では体部の傾き，391・392では体部下半のくびれ等の特徴から本類とした。390・392の内外面には黒斑が観察される。393は，著しく器面が荒れ体部下半の削りの有無は不明である。しかし，体部下半のくびれが観察されず，内湾気味に立ち上らないことからA2類の可能性がある。



第66図　C群　18号土坑出土土器（1/3）

小型甕（394）　口縁部２点の出土で，同一個体と推定される。口縁端部が丸味をもち，やや強く外反する。

甕（395）　口縁形態の識別より２個体以上含まれると推定されるが，図化可能なものは１点のみである。図化しなかった１点は，B_2類に属する口縁部片である。

鍋（396・397）　口縁形態の識別より２個体以上含まれると推定され，A_1・A_2類が出土している。赤く焼けた体部下半の破片も多数出土しているが，接合しない。

A_1類(397)は，頸部で一端明瞭にくびれるが，直線的に立ち上り外反しないもので，外面は著しく荒れた器面を呈している。

A_2類(396)は，397と同様に砂粒を多量に含むもので，器面は内外面とも著しく荒れている。口縁部で黒斑状のものが観察される。

19号土坑出土遺物（第67図　図版33）

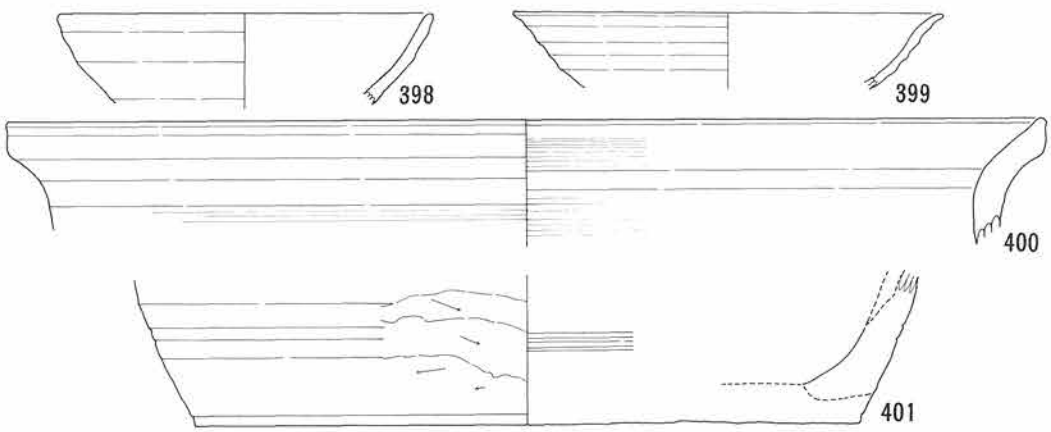
出土遺物は全て土師器であり，そのほとんどが覆土上層からの出土である。土器片の大半は405の鉢と同一個体と考えられ，わずかに，杯・甕・鉢・鍋の破片が出土している。405の破片は，数片，１号住居・20号土坑の範囲に広がっており，現段階では１点のみカマド付近の資料と接合した他，全て土坑内での接合である。

土師器（398～401）

杯（398・399）　底部破片の識別により12個体以上が含まれると推定されるが，それぞれ細片である。また，破片には，剝落した痕跡が目立つ。399はD類で器壁にミガキは施されていない。

甕　口縁部破片はないが，胴部破片の識別により２個体が含まれると推定される。いずれも細片であるが体部の破片から調整痕をみると，外面上半には縦方向の削り，下半には格子叩き目，内面の上半はカキ目，下半は同心円状の押圧痕がみられる。

鉢（401）　本土坑出土破片中，最も多量に出土している。破片の大部分は，火によってハジケたように剝落している。これらの破片は，ほぼ１個体(401)に復原されるものと考えられる。



第67図　C群　19号土坑出土土器（1/3）

口縁部破片がないため，全体像はつかめないが，底部からの立ち上がりを見る限り，底部が大きく胴部がほぼ垂直に立ち上がるバケツ状を呈するものと思われる。底部外面は指圧痕が顕著に観察され，外周には不定方向のハケ目が散見される。内面は指圧痕のみである。胴部の内外面はハケ目調整によるが，外面下半部には，ハケ目調整の前にヘラ削りが施される。

鍋（400）　口縁部破片の識別により３個体が含まれると推定される。別個体の口縁部破片の割には，胴部破片がわずか３点と少い。口縁端部の作り出しにより全てB1類に分類される。

20号土坑出土遺物（第68図　図版33）

安山岩製の礫片１点の他，全て土師器である。出土層位はほとんどが覆土上層である。覆土上層と底部付近で間隔を25cm以上隔てて接合する例もある。一部，１号住居カマド付近のものと接合した例もあるが，現段階では，19号土坑との接合関係はない。杯の破片が最も多く，個体の半分以上復原(402～406・408・409)できるものが多い。

土師器（402～414）

杯（402～406・407・408）　底部破片の識別により22個体以上が含まれると推定される。器形全体の形状よりB1・C1・C2・C3類に分類される。

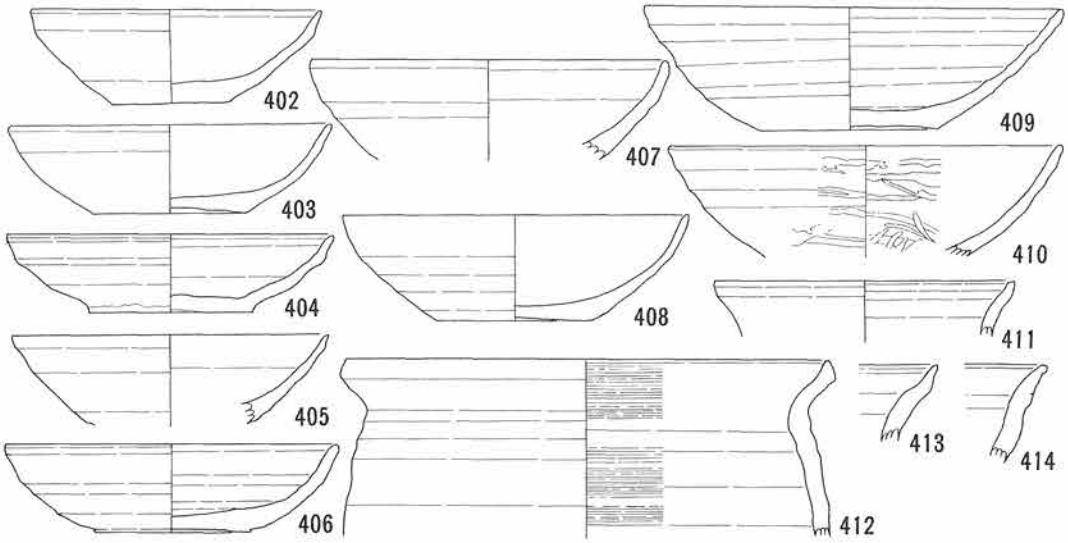
B1類(404・406)は，両者とも内面は撫でにより平滑に調整するが，外面にはロクロ痕を残す。

C1類(402)は口縁部外面に明瞭なる屈曲部をもち，底部は小さく体部との境は丸味をもつ。

C2類(403)，B1類の形態に似るが，B1類に比べ底径が小さく器高が若干高い。

C3類(408)，器高が高く底径は小さい。器面は荒れているが，内面は撫でによって平滑に仕上げられている。

その他405・407は細片のため全体像がつかめない。405は器高が高く，器体はほぼ直線的に広がっていく。407は器壁が厚く，口縁部にいたって内湾する。内面は平滑に撫で調整が加え



第68図　C群　20号土坑出土土器（1/3）

られている。

椀（409・410）　3個体分出土している。両者ともB類に含められよう。410の外面へはロクロ痕の凸部に限ってミガキが施され，内面体部上半へは，外面同様凸部に限ってミガキ，下半から底部にかけては全面にミガキが施される。

小型甕（411）　1個体のみの出土である。B_1類に含まれるが，外面口縁部の稜は不明瞭である。

甕（412・413）　体部破片の調整痕から7個体以上が含まれると推定されるが，いずれも細片である。B_1・B_2類が出土している。第70図26～28から体部の調整をみると，26・27は外面格子叩き目，内面撫でであり，28は，外面平行叩き目，内面は同心円状の押圧の後に不定方向へのハケ目調整が施される。

鉢（414）　2点のみの出土である。口縁端部は外側へ折り返す。内外面とも撫で調整であるが，外面には輪積み痕が明瞭に観察される。

鍋（第70図29・30）　体部破片の調整痕から2個体が含まれると推定されるが，破片数は少ない。外面上半は削り下半は叩き目，内面は一様に横位のカキ目調整がみられるが，下半には前段階での同心円状の押圧痕が部分的に残存する。

26号土坑出土遺物（第69図　図版34）

全て土師器片で，覆土各層より出土している。図化したなかで，覆土最下層の第4層出土のものは419だけで，他は第1層出土である。器種では杯・椀・小型甕・甕が確認される。

土師器（415～419）

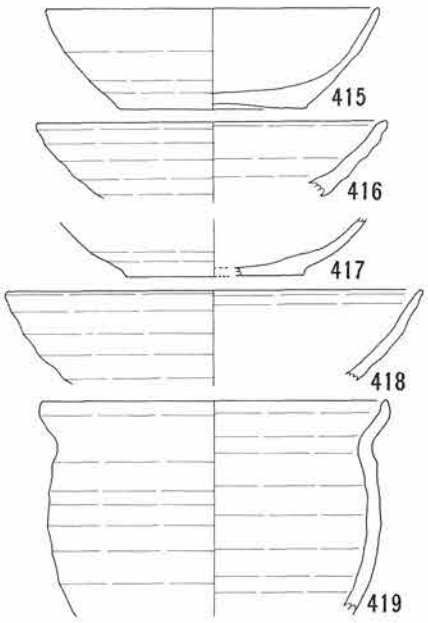
杯（415～417）　底部の識別より5個体以上含まれると推定され，A_2・E類が出土している。

A_2類(415)は，体部下半に回転ヘラ削りはみられず，器形は全体に歪んでいる。内外面とも焼けムラ，黒斑が観察される。

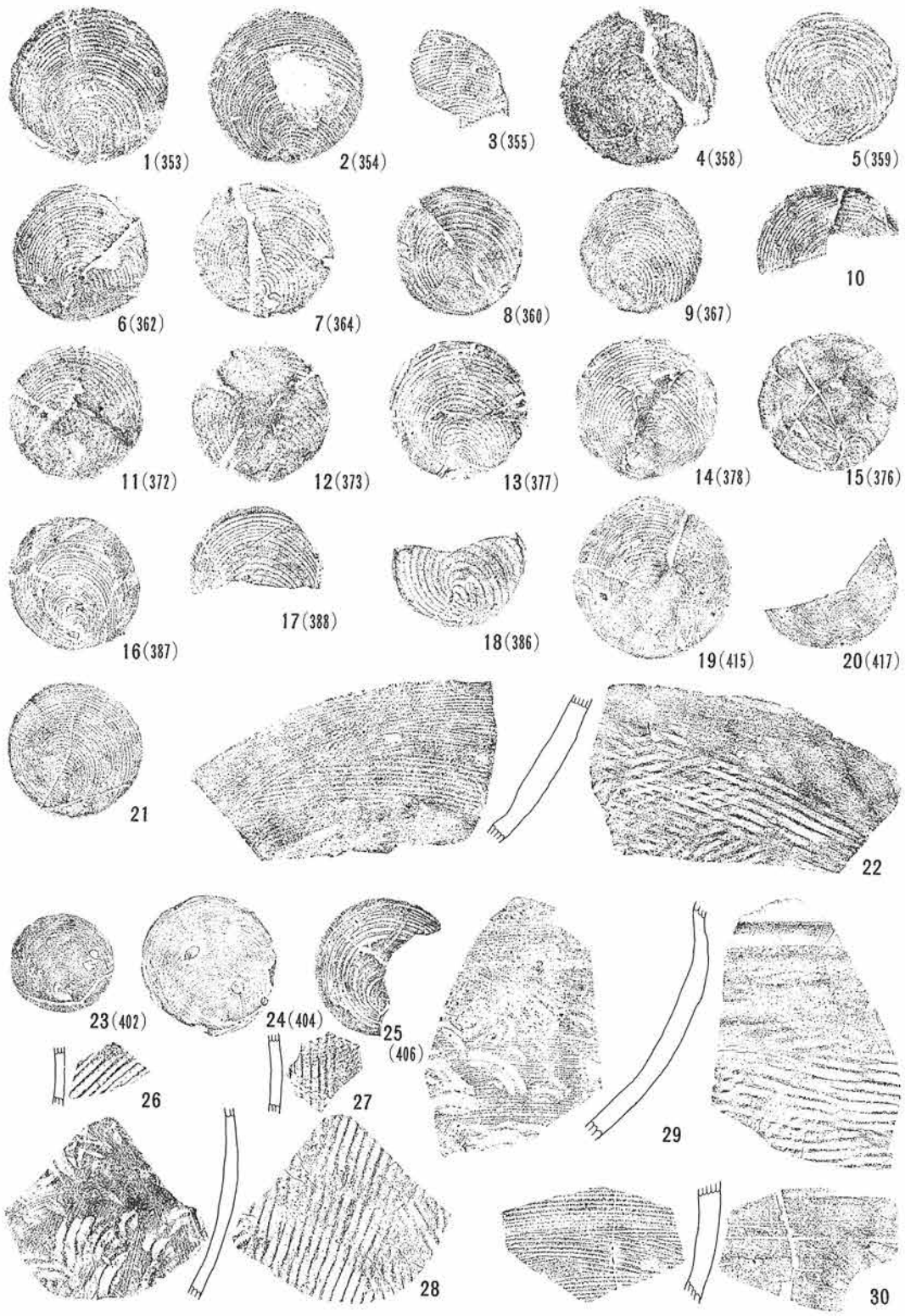
B_1・E類(416・417)　細片のため詳細不明であるが，416はE類，417はB_1類と推察される。

椀（418）　口縁部の形態からB類とした。内面の殆ど全体と外面の凸部にミガキが施されている。

小型甕（419）　1個体のみの出土である。口縁端部外面は，やや丸味を帯びるがわずかながら稜を有し直立気味となることからB_1類とした。外面体部の粘土巻き上げ痕は，ロクロによる撫で調整によりやや平坦となっている。



第69図　C群　26号土坑出土土器（1/3）

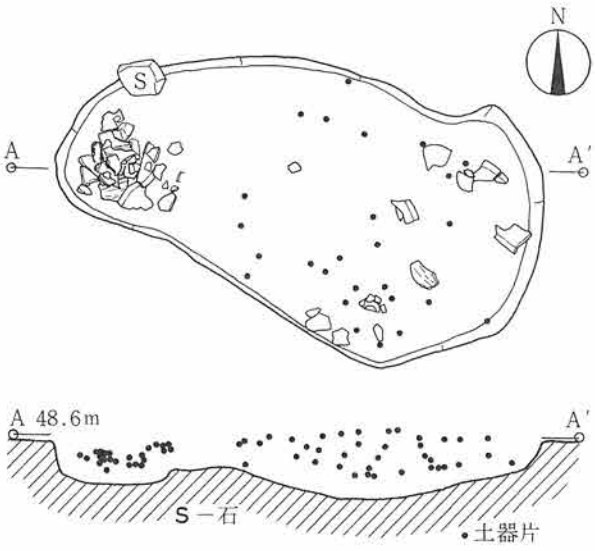


第70図　C群土坑出土土器拓影 (1/3)　( )内の数字は遺物番号

D群土坑

5号土坑（第71図）

検出区は5－L区である。規模は長軸2.60m，短軸1.40mの東側が広く，西側がせまい不定楕円形を呈する。遺構確認面からの掘り込みは，東側で30cm，西側で23cmを計る。床面は平坦でなく，東側は緩く窪み，西側への境いに段を有する。また東側窪みの大半が火により硬化しており，西側ではそれが確認されなかった。覆土は炭化粒を含む黒褐色土の単層である。出土遺物は，土師器杯・小型甕・甕・鍋であり，須恵器は出土していない。各器種の個体数は細片が多く底部片が少ないこともあって明確な数字は不明であるが，おおよそ杯7・小型甕2・甕7・鍋10個体以上と推定される。多くの土器は火床面よりやや浮いた状態で出土し，底面に貼り付いた状態のものはない。また土坑西側の窪みからは甕・鍋片（423・427～431）がややまとまって出土している。接合関係では，鍋で土坑周辺出土のものと土坑内東側出土のものが接合したり，西側の窪み出土のものと東側平坦出土の甕片が接合したりする。



第71図　D群　5号土坑及び遺物分布（1/40）

出土遺物（第72・73図　図版34）

杯C類，小型甕B・C類，甕A1類，鍋A1・A2・B1・B2類が出土している。鍋の破片が圧倒的に多く，口縁部からA類が大半を占める。

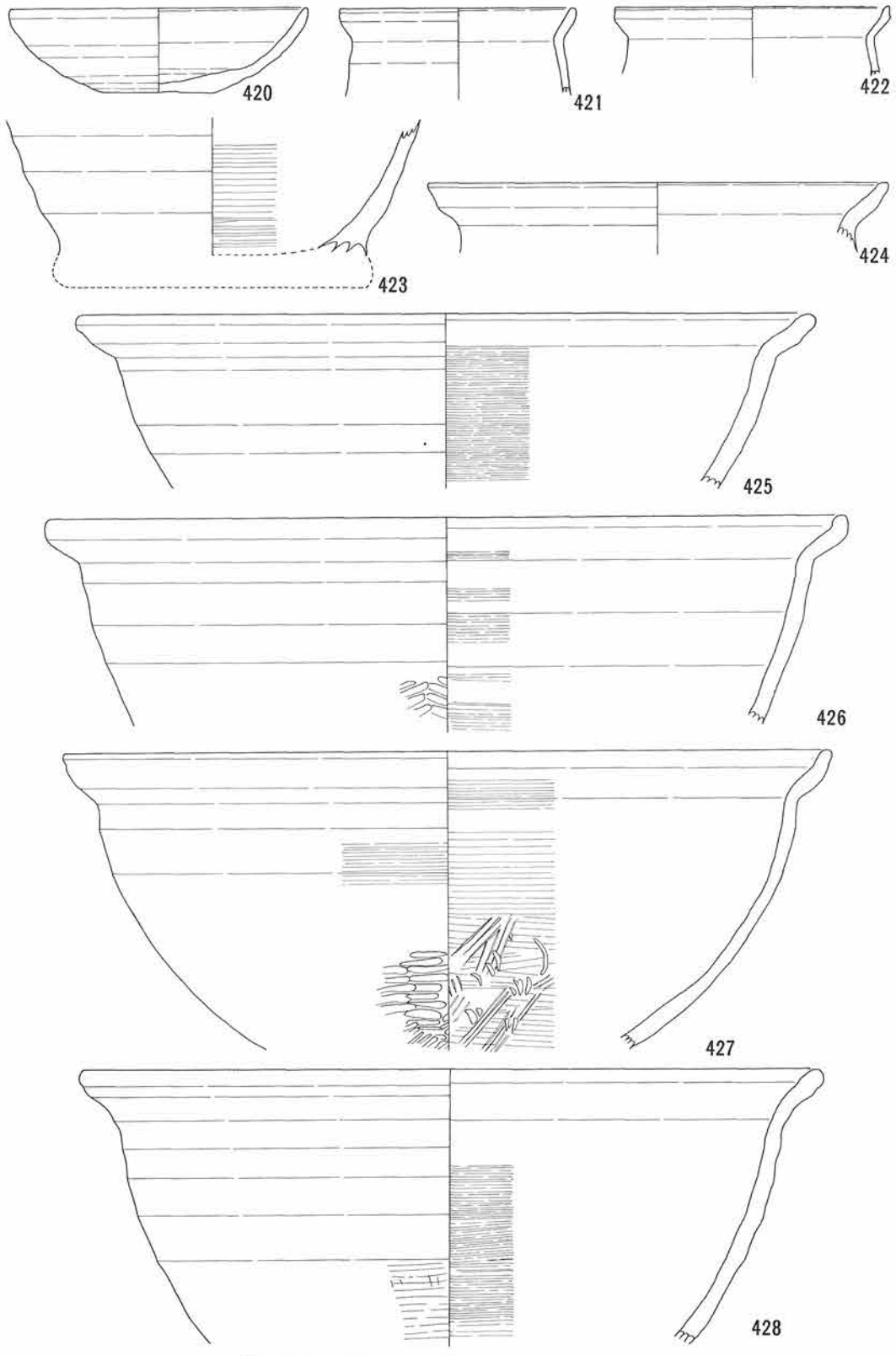
土師器（420～431）

杯（420）　7点以上の出土である。口径に対して底径が小さく，底部縁辺が撫でられC3類と思われるが，外面体部下半には不明瞭ながら回転ヘラ削りが施されている。内面には粘土紐痕の凹凸が見られる。

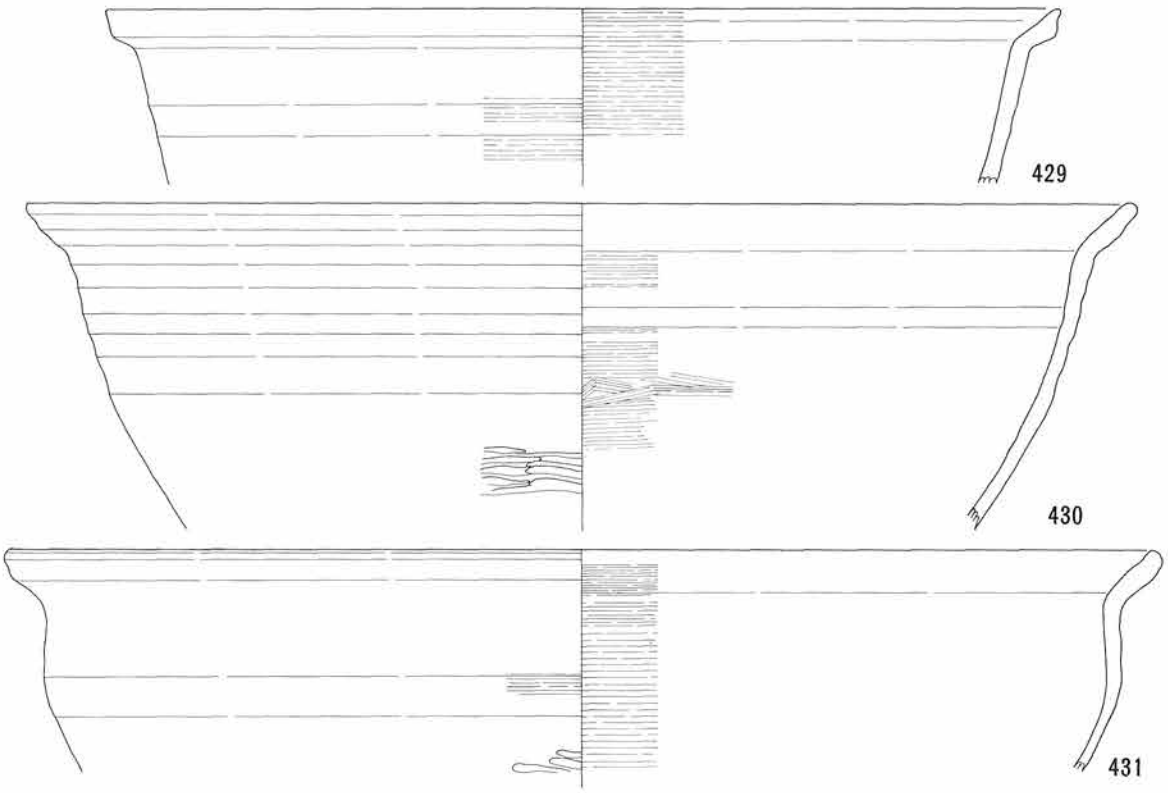
小型甕（421・422）　口縁部形態で421はB1類，422はB2類に分類される。421の外面は炭化物が付着し暗褐色を呈している。また，422の胎土は421に比べて緻密である。

甕（423・424）　423は底部付近の破片で，内面には粗いカキ目が全面に施されている。底部は破片から，やや膨らみをもつ厚手と推測される。424はA1類であり，内外面には黒斑が観察される。

鍋（425～431）　A1類（425・427），A2類（428・430・431），B1類（426）が出土している。427の内面は，体部下半に叩きが入り，次にカキ目が施されている。430は器形全体に歪みが見られ，口縁部がやや肥厚するものである。



第72図　D群　5号土坑出土土器　1　(1/3)



第73図　D群　5号土坑出土土器　2　(1/3)

D．遺構外出土土器（第74・75図　図版34・35）

畝状小溝やその他の遺構の覆土中から検出された遺物も含めて，包含層より出土した遺物は，平箱でおよそ10箱である。遺物の集中区は，上段では畝状小溝やその周辺，下段では沢の落ち込み周辺の3・4・5-K区である。遺物は土師器が大半を占め，須恵器はわずかしかない。図示した遺物は遺存度50％以上のものや，器形・成形技法などの特徴的なものを取り挙げた。

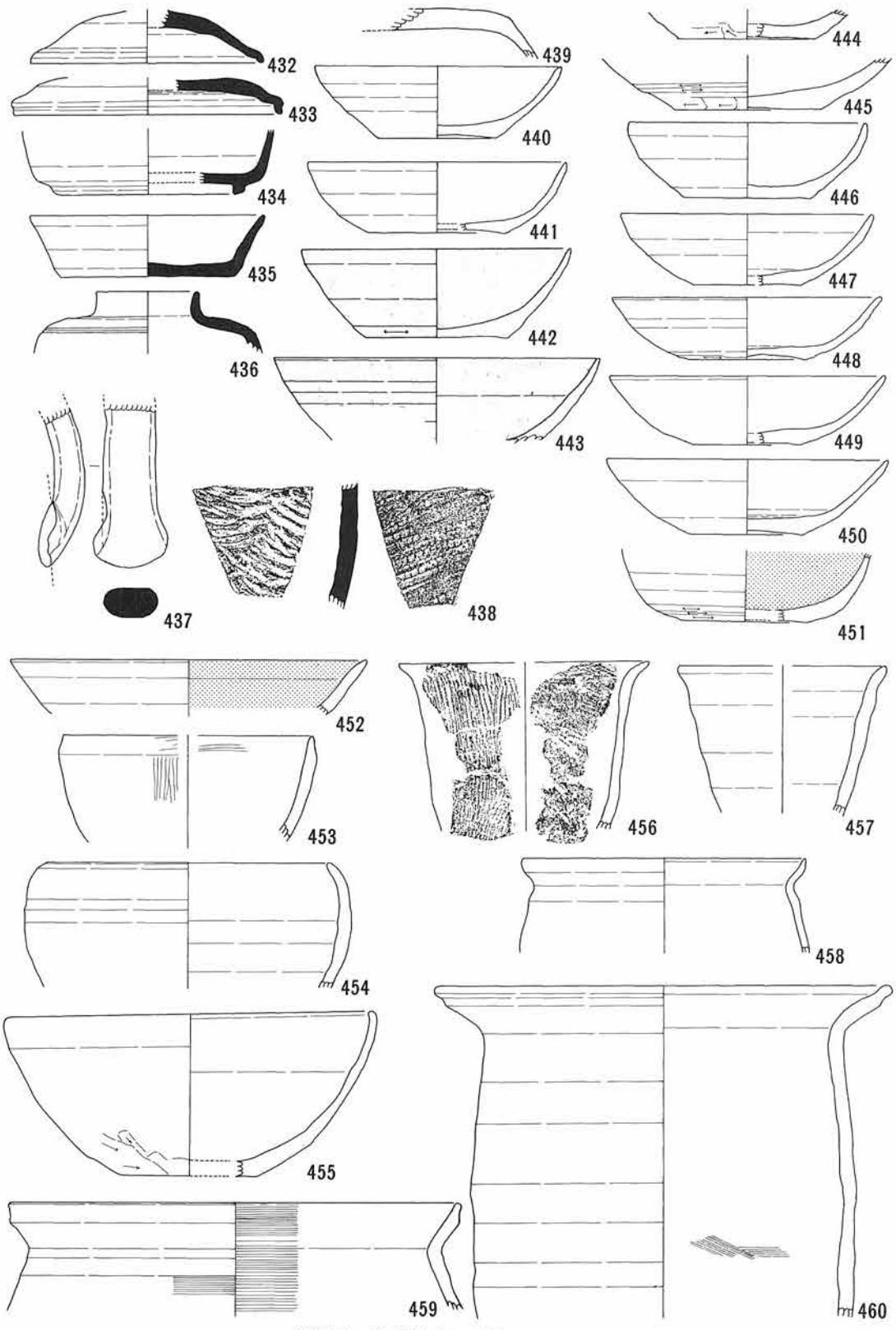
須恵器には蓋・有台杯・無台杯・短頸壺・把手・甕がある。土師器には蓋・杯・椀・鉢・小型甕・甕・非ロクロ成形甕・鍋・高杯があり，中でも杯が多い。

須恵器（432～438）

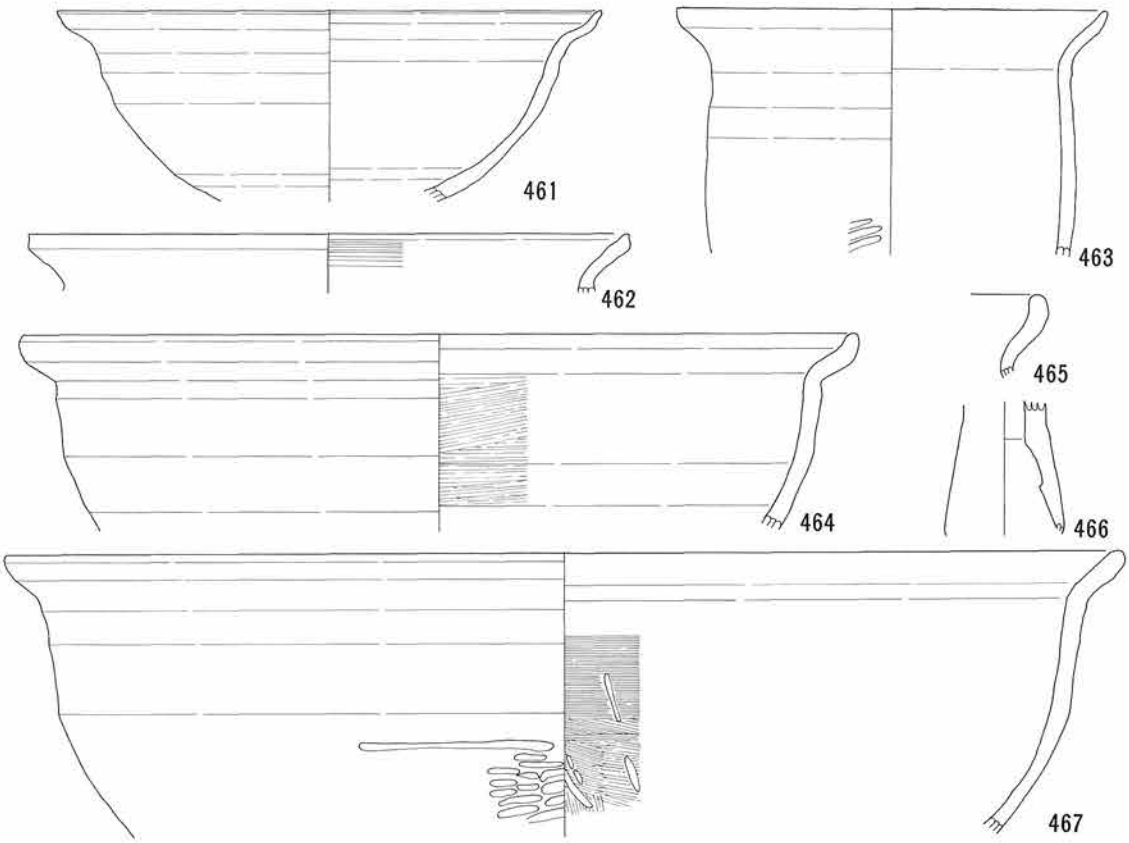
蓋（432・433）　432は天井部がなだらかに傾斜し，口縁部でやや外傾気味に屈折している。433は天井部平坦で口縁部で段をつくり，屈折部は外反しながら接地している。432は6-B区，433は4-B区出土。

有台杯（434）　口縁部は欠損しているが，体部は直線的に立ち上がっている。体部内面の一部にはタール状のものが付着している。4-D区出土。

無台杯（435）　体部はやや外反するように立ち上がっている。底部と体部の境には回転ヘラ削りが施されている。6-C区出土。



第74図　遺構外出土土器　1 (1/3)



第75図　遺構外出土土器　2　(1/3)

短頸壺（436）　外面肩部に2条の沈線を巡らしている。胎土はにぶい褐色であるが，酸化焔焼成である。8－C区出土。

把手（437）　胎土は非常に緻密で，焼成も良く，色調は灰白色を呈し，須恵器か陶器系のものか不明である。器面は丁寧に磨かれ平滑になっている。須恵器であるとすれば，平瓶の把手と考えられる。8－D区出土。

甕（438）　胴部破片で，外面に格子状，内面に同心円状の叩き目が施され，外面には自然釉がかかっている。6－D区の2号住居の上層より出土。

土師器（439～467）

蓋（439）　天井部はほぼ平坦で，体部は屈折気味に傾斜している。内外面平滑に仕上げられている。3号住居の蓋(第30図131)より天井部が高い。7－D区出土。

杯（440・441・444・446～450）

A_1類(444・446)，A_2類(441)，E類(440)　444の体部下位には回転ヘラ削り痕が観察できる。他は磨耗していて器面の調整は不明である。444は4－B区の畝状小溝と6－C区，441は7－D区，440は5－B区，446は4－J区出土。

B1 類(447・449)　両者とも器面剝落していて明瞭ではないが，体部下位は撫で調整と判断される。しかし，449の底径は極端に小さくC3類とも考えられる。いずれも5-K区出土。

B2 類(448)　体部下位には回転ヘラ削り痕が観察できる。体部外面の一部は火を受けてにぶい赤褐色に変色している。5-K区出土。

C3 類(450)　体部上半は屈折した後，直線的に大きく開いている。底径は異常に小さくなっている。3-K区出土。

赤彩土器(442・443)　442は杯A1類に相当し，底部下半に回転ヘラ削り痕が確認できる。443は底径が比較的大きく，体部は直線的に開きながら立ち上がっている。442は7-D区，443は3-C区出土。

黒色土器(451・452)　451は底部も含めた外面全体に回転ヘラ削り調整が施され，体部下半は大きく湾曲しながら立ち上がっている。内面は黒色処理され底部には放射状に磨かれた痕跡が見られる。外面にはスス付着している。452は器壁は薄くつくられている。口縁部はやや外反しながら大きく開いている。内面は磨かれ，光沢を放っている。外面は器面剝落しているが，磨かれていたものと推察される。451は3-K区，452は3-F区の性格不明遺構出土。

鉢(445・454・455)　底部破片の445を除き口縁部の形態からA1類と考えられる。445は胎土精良で，底部は回転糸切り後，回転ヘラ削りが施され平坦になっている。体部は大きく開いて立ち上がる傾向を示す。外面下位は回転ヘラ削りが施され，ロクロ撫でによるくびれと段をなしている。454と455は胎土に砂粒を多量に含み，器面は荒くなっている。445は5-K区，455は3-F区の性格不明遺構出土。

非ロクロ成形甕(453・456・457)　453はハケ目調整され，体部はやや開き気味に立ち上がる。口縁端部は上につままれ，器壁は薄くなっている。456と457は細片のため法量は不明であるが，体部はやや開き気味に立ち上がり，口縁部は短かく緩く外反している。体部の調整は456が粗く深いハケ目痕が残り，457は一部に薄くハケ目調整が施されている。453は5-B区と6-B区より，456と457は6-B区の4号住居西側の攪乱部より出土。

小型甕(458)　A1類である。口縁部内面にススが付着している。

甕(459・460・462・463)

A1 類(459・460)　459の内面にはカキ目痕が明瞭に観察できる。460は器面剝落しているが，口縁端部は強くつままれて外面に窪みが見られる。体部外面の中位には叩き目，内面には不定方向のハケ目痕がかすかに認められる。459は5-C区，460は5-C区と6-B区より出土。

C類(462)　5-B区出土。

D類(463)　磨耗著しいが，体部外面の一部に叩き目，内面にカキ目痕がわずかに観察できる。5-B区出土。

鍋(461・464・465・467)

A1 類(461・464・465)　461は小型の鍋である。体部の外面下半には黒斑が観察される。B群

土坑の1号炉出土の鍋と類似しており，本遺跡では2例しか出土していない。464は器面の調整が明瞭である。外面の一部にはススが付着している。

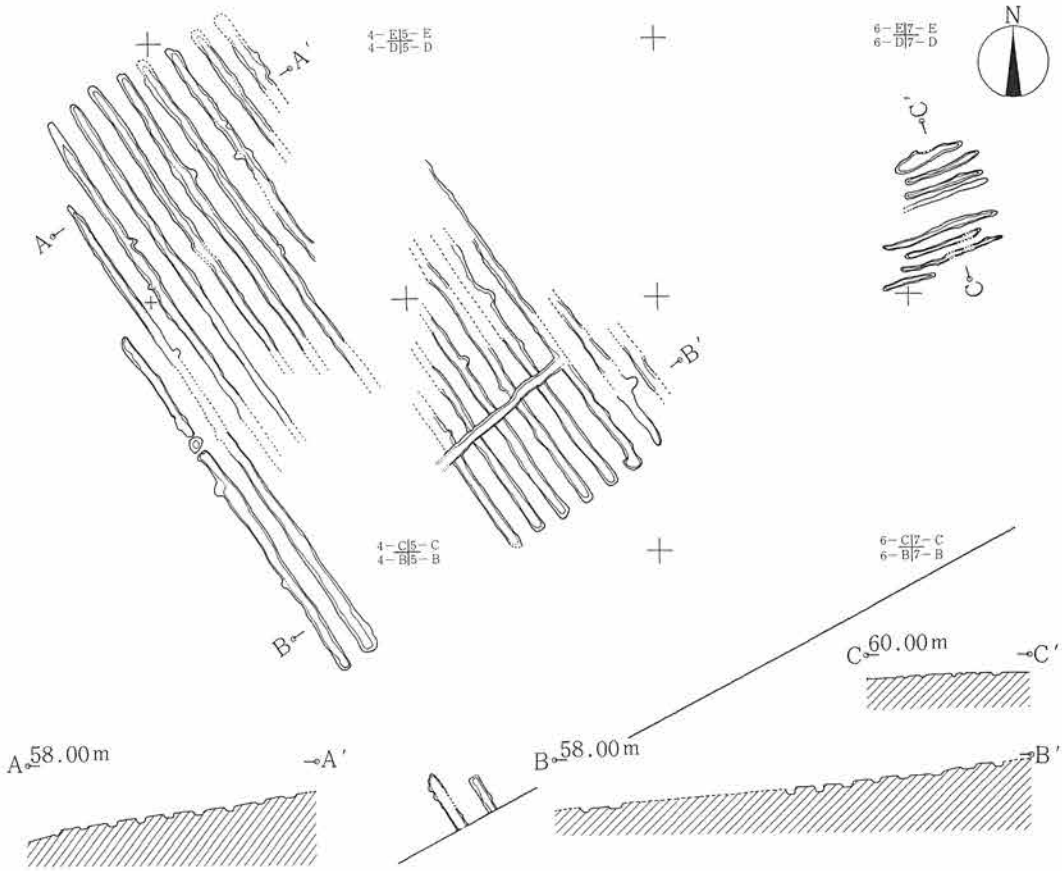
A2類(467)　口縁部は端部まで直線的に開き，端部は肥厚している。体部外面の中位には平行叩き目，内面には同心円叩き目が施された後カキ目調整されている。461は3-K区，465と467は4-K区，464は4—J区出土。

高杯(466)　脚部しか遺存していない。胎土には小礫，砂粒が多量に含まれ，器面は荒くなっている。2-K区出土。

3．その他の遺構と遺物

畝状小溝（第7・76図）

上段頂部から西側斜面にかけて検出されている。規模・方位・覆土・分布範囲等によって2種類に分けられる。4・5-C・D区を中心として分布するものと6・7-D区に分布するものがある。



第76図　畝状小溝（1/300）

4・5-C・Dを中心として分布する畝状小溝

1本の平均的な長さは24m，幅約0.4mで，遺構確認面からの掘り込みは20cm前後である。15本の各溝がN-34°-Wを指して平行に，0.7m前後の間隔を置いて並列していた。これらの溝とほぼ直行し（N-50°-E），他の溝を切るような形で認められた。

覆土は褐色土でしまりがなく，若干の炭化物を含む単層である。遺物は須恵器片数点と土師器片が多量に出土しているが，これらは遺構の埋没時に周辺の包含層・遺構からの流れ込みによるものと考えられる。

他の遺構との切り合い関係は，溝の南東側が1号住居の一部を切り，4-C・D区の東側では，現代の耕作痕により攪乱を受けていた。従って前者の畝状小溝は新，住居跡は旧の関係にあると言えよう。また5-B区南西隅の2本の溝は本溝の延長線上にあり，覆土や規模などからも同類と推察される。

6・7-D区に分布する畝状小溝

規模は不揃いであるが，最長の溝で4.8m，幅は0.2～0.4mの間である。遺構確認面からの掘り込みは5cm前後である。方向はほぼN-73°-Eである。

覆土はしまりのある黒褐色粘質土が主体である。

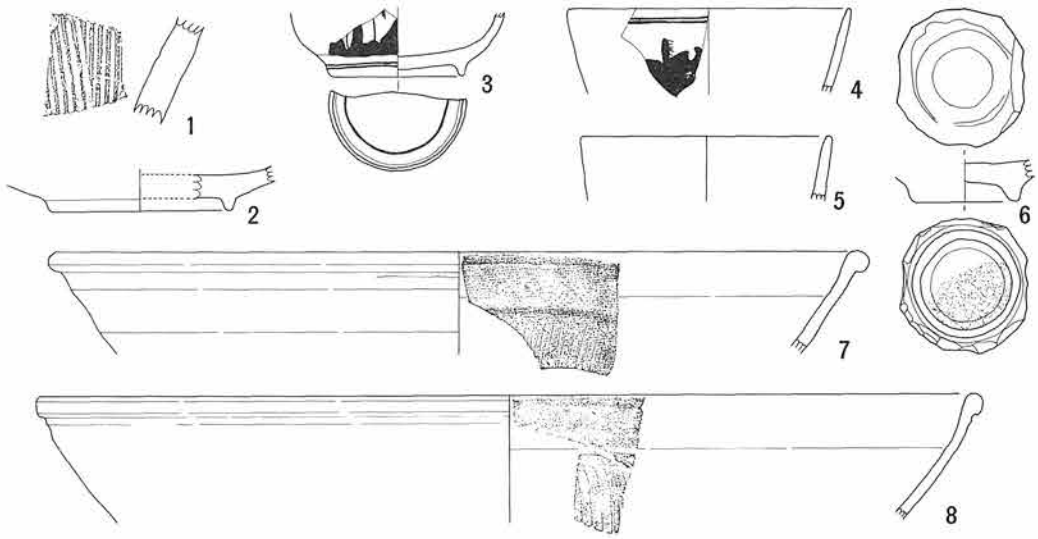
他の遺構との切り合い関係はみられず，遺物も出土していないが，覆土から平安時代の可能性が強い。

性格不明遺構（第7図）

住居跡・土坑・ピット・畝状小溝を除く落ち込み状の遺構を本項で一括して述べることとする。遺構は規模・覆土が似ており，長軸方向・分布範囲等によっておよそ4地区に分けられる。上段では4-C・D区を中心とする地区とそれ以外の地区，下段では3・4-K・L区と5・6-L・M区を中心とする地区である。これらの遺構は長方形状のプランを呈するものが殆どで，その長軸は斜面の等高線にほぼ平行し，覆土は褐色土でしまりがなく，明褐色粘質土が径1～3cm大のブロックで混入する単層であることから，現代の特定作物（山芋，ごぼうなど）の栽培痕とも推測される。

出土遺物は平安時代の土師器片，須恵器片が平箱で2箱分と縄文時代の石製品や近・現代陶磁器が若干量出土している。これらは埋没時に周辺の包含層や遺構の覆土が流入したためと考えられる。

上述の遺構の他焼土状の覆土をもつ落ち込みが上段の北及び西方向に傾斜するEラインの各区に分布する。規模は不定形のプランを呈し，底部は狭く，断面がピット状のものが大部分を占める。覆土は褐色土で焼土や炭化物が多量に混入する単層である。前者の遺構を切るような形で重複するものもある。



第77図　陶磁器（1/3）

出土遺物

陶磁器（第77図，図版36）

陶磁器の多くは耕作土や近世の畝状小溝，他の耕作痕等より単発的に出土したものが殆どである。近世の陶磁器と判断されるものは色調，施釉等の違いから16個体以上あり，肥前系・京焼風・越中瀬戸系などがある。いずれも細片のため詳細は不明であるが，18世紀頃の所産と推察される。また，中世の遺物と思われる瓷器系の陶器も１点含まれているが，紙面の都合上ここで述べることとする。以下，遺物中心に種類別に記述する。

瓷器系陶器（1）　摺鉢の体部破片である。色調は淡茶褐色を基調とし，胎土は緻密で焼成良好である。越前系の陶器と考えられるが，時期は不明である。4-K区出土。

肥前系陶磁器（3・4・6）　3は高台内面も施釉され，そこに染付けで一重の円が描かれている。また，高台外面と体部下位の境にも染付けが二重に巡り，体部下半には文様が描かれている。4は陶胎染付けである。6は見込みに蛇の目釉ハギが施されている椀と考えられる。高台畳付けから高台部内面にかけて砂目痕を有し，底部は2/3が露胎となっている。体部下半は高台方向から打ち砕かれ，円形に調整されたものと思われる。3の高台径は5.5cm，4の口径は11.3cm，6の高台径は4.3cmを測る。3は8-K区，4は4-A区，6は1号土坑出土。

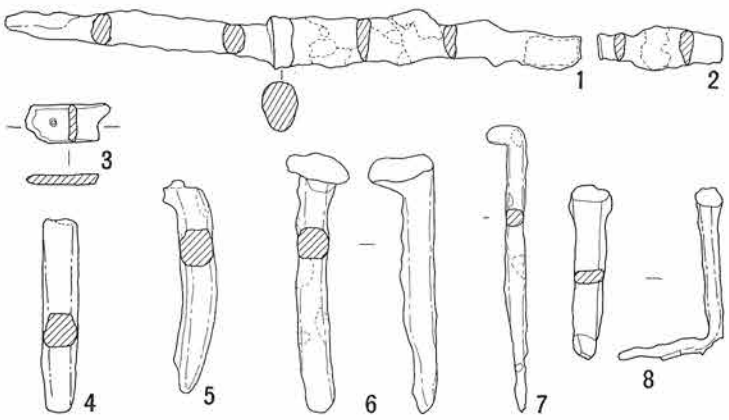
京焼（2）　胎土は赤味がかった明褐色を呈し，施釉より器面は黄褐色を呈している。高台径は7.5cmを測る。4号住居西側の攪乱部分より出土。

越中瀬戸焼（5）　底部内面の周縁に鉄釉が施されている。口径は10cmを測る。3-K区出土。

不明陶器（7・8）　いずれも摺鉢の口縁部破片で，胎土は黒褐色である。7は全体に茶褐色，口縁部に暗褐色の釉が施されている。8は全体に茶褐色の釉がかけられている。口径は7が32cm，8が37.3cmを測る。いずれも5-F区出土。

鉄製品（第78図，図版36）

鉄製品には刀子３点・角釘６点・和釘１点，その他丸釘・不明鉄製品・鉄滓など近・現代のものと思われる遺物が多数出土している。殆どは遺構外出土であるが，刀子の１と２はＢ群土坑，３は１号住居のカマド，和釘の８は４号住居より検出されたものである。これらはサビの湧出により，鉄自体もろく，サビをすべて除去することはできず，全形を知り得ないものが多い。１は先端部が欠失しているが，小刀と考えられる。現存の長さ19.3cmを測る。茎と身の間に切羽状のものが認められる。茎には木片が付着している。２の中央部も厚くなっており，切羽と判断される。３はサビの湧出が見られず，薄く板状になっている。一部に小さな孔が穿られている。原形は不明である。４～７は角釘，８は和釘と考えられ，先端部が細くなり尖っている。４～６の断面はほぼ同様の方形を呈している。４と５の頭部は折損したものと推測される。現存の長さは２が4.3cm，３が2.9cm，４が6.5cm，５が7.1cm，６が8.6cm，７が9.5cm，８が8.2cmを測る。４は７-Ｃ区，５は５-Ｃ区，６は６-Ｂ区，７は４-Ｃ区出土。



第78図　鉄製品（1/2.5）

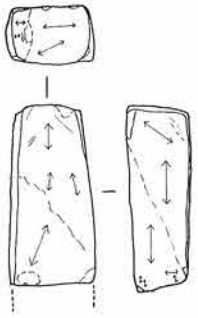
銭貨（第79図）

開元通宝（初鋳唐代　621年）が１枚，６-Ｍ区の耕作土より出土している。風化して薄くなり，変形している。

第79図　銭貨（1/1）

砥石（第80図，図版35）

３-Ｋ区から出土したもので，角柱状を呈する。下端を欠損するが，他の面は全て作業面である。現存の長さは，4.8cmを測る。凝灰岩製である。



第80図　砥石（1/2）

第Ⅳ章　小出越遺跡，および，その周辺の遺跡出土土師器の蛍光X線分析

奈良教育大学　三　辻　利　一

1.　胎土分析による土師器の産地推定

粘土を高温（～1350℃）で焼成しても，その化学特性に変動が起らないことは，筆者らによる粘土の焼成実験（三辻他　1978，三辻　1983）によって確認された。このことは須恵器生産の現場である窯跡から出土する須恵器片についても確認できる。すなわち，窯跡には十分焼成された硬い破片から，未焼成に近い軟らかい破片にいたるまで，種々様々の須恵器片が見出される。これらの破片を分析しても，化学特性に有意な差は認められず，一窯跡出土須恵器としてはばらつきはあるものの，一定の化学特性をもつことが確かめられた。したがって，土器を分析して得られる化学特性は素材粘土の化学特性である。このような実験・観察事実から胎土分析による土器の産地推定の研究は出発する。粘土の化学特性は母岩に支配される。したがって，岩石に地域差があるように，粘土を素材とした土器にも地域差があるはずである。この推定を確認するためには，全国各地の土器を分析してみなければならない。このような土器の地域差を求める研究を行うためには，まず，生産地のはっきりわかった土器が必要である。この点で全国各地に窯跡（生産地）が残っている須恵器が絶好の分析対象となった。筆者らの十数年間にわたる研究の結果，窯跡出土須恵器には地域差があることが証明された。しかし，地域差があることがわかったからといって，ただちに産地推定ができるという訳でもない。須恵器の窯跡が多すぎるからである。筆者が取扱った窯跡だけでも800基をこえる。このように多数の窯跡の中から，一つの産地を胎土分析のみで選択することは容易ではない。そこで，筆者は年代ごとに窯跡を整理し，須恵器の流通を追跡することにした。この点で特に注目されるのは窯跡の数が少ない５～６世紀代の須恵器の流通に関する研究である。既に，地方窯産の須恵器はそんなに遠方まで流通していないのに対し，大阪陶邑産の須恵器が全国各地の古墳に出土することが立証されつつある。

さて，問題は土師器である。窯跡が残っていないという点で流通の追跡は須恵器よりも難しい。しかし，不可能ではない。突破口はいくつかあるが，その一つが小出越遺跡，および，その周辺の遺跡出土土師器の場合である。小出越遺跡には，土師器焼成遺構とみられる土坑がみつかっている。この土坑内に散乱する多数の土師器片を分析してみて，それらが同質の胎土をもつかどうか，云い換えれば，同じ粘土を材料とした土師器であるかどうかを調べてみることである。もし，同質の胎土をもつとすれば，この土坑は土師器焼成遺構であることが土師器の胎土から検証されることになる。小出越遺跡の土坑が土師器焼成遺構であることが検証されると，次に，これらの土師器と同じ胎土をもつ土師器が同時代の周辺の遺跡にどのように分布し

ているか，どの程度遠くまで搬出されているかが追跡できることになり，土師器流通に関する一つのモデルケースとなる。土師器がどの程度，遠くまで搬出されるのか現在のところ全くわかっていないだけに，小出越遺跡産土師器の追跡は土師器流通の研究上，重要な意味をもつ。次に，時代が違えば，土師器胎土はどのように変わるのか，つまり，土師器の素材粘土の採集地がどのように変わっていくのかを調べる。そのために，小出越遺跡を中心とした地域で，小出越遺跡とは異なる時代の遺跡出土土師器を分析することになる。このようにして，土師器焼成遺構をもつ小出越遺跡を中心として，土師器流通の研究を拡大していくことができると筆者は考えている。以下に，小出越遺跡，および，その周辺の遺跡出土土師器の分析結果について述べよう。

2. 分析方法

土師器片はすべて表面を研磨して付着汚物等を削りおとしたのち，タングステンカーバイド製乳鉢（硬度9.5）の中で100～200メッシュ程度に粉砕した。粉末試料は塩化ビニール製リング枠の内へ入れ，約10トンの圧力を加えてプレスし，直径20㎜，厚さ3㎜の錠剤に成形し，蛍光X線分析用試料とした。エネルギー分散型蛍光X線分析装置で，Tuを二次ターゲットにして真空中でK，Caを，また，Moを二次ターゲットにして空気中でFe，Rb，Srを測定した。定量分析には，岩石標準試料JG—1を標準試料として使用した。分析値はJG—1による標準化値で表示した。

3. 分析結果

a 小出越遺跡の出土土師器

はじめに，小出越遺跡にある焼成遺構とみられる土坑内から出土した土師器のRb—Sr分布図を第81図に示す。この分布図は須恵器の地域差をよく表示するので，土師器の地域差をみる上にも役立つだろうと考え，使用することにした。そうすると，焼成遺構とみられる土坑内から出土した土師器はある程度はばらつくものの，一定の領域内にまとまって分布することが第81図からわかる。通常，一窯跡から出土する須恵器もこの程度にばらついているものであり，この点を考慮に入れると，これらの土師器は同質の胎土をもっているとみなし得る。これらの点を全部包含するようにして，小出越領域をとった。この領域は定量的な意味をもつものではなく，小出越遺跡産の土師器はこの領域にほぼ分布するという定性的な意味をもつにすぎない。とは云うものの，この分布領域は他の遺跡から出土した土師器を分析した場合，小出越遺跡産であるかどうかの目安をつける上に役立つ。この領域から全くはずれてしまった場合，小出越遺跡産である可能性がきわめて小さくなるからである。また，第81図には小出越遺跡と長者ヶ原で採集した粘土もプロットしてある。これらの粘土は一応，小出越領域に分布し，素材粘土であった可能性をもつが，そのことは更に他の因子についても調べてみなければならない。

第82図には，小出越遺跡の住居跡や土坑から出土した土師器のRb—Sr分布図を示す。大部分のものは小出越領域内に分布していることがわかる。しかし，2号住居から出土したNo45・

46・47・48・49の5点の土師器は小出越領域をとび出して分布し，小出越遺跡産の土師器ではない可能性をもつことを示唆する。以上のことでおおよその見当はつくと思うが，ここで，他の因子についても調べてみよう。

第83図にはK量を対比してある。K因子でも焼成遺構出土の土師器はよくまとまっている。そして，長者ヶ原の粘土は土師器とよく対応するのに対し，小出越遺跡の粘土は土師器には対応しないことがわかる。このことは小出越遺跡の粘土はそれだけで土師器素材にはならなかったことを示唆する。また，小出越遺跡（住居跡）の土師器も大部分は焼成遺構出土土師器に対応するが，No47・48・49などはずれて分布した。

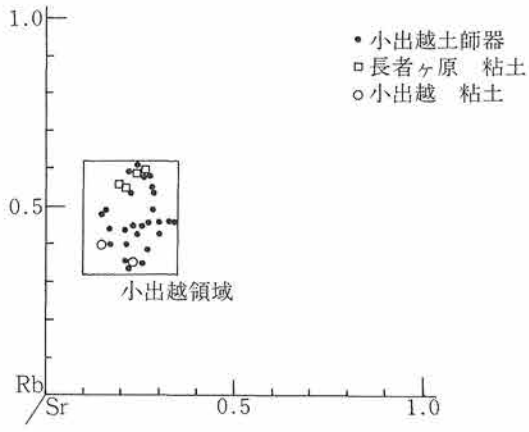
第84図にはCa量を比較してある。Ca因子でも焼成遺構の土師器はよくまとまって分布している。また，長者ヶ原の粘土は土師器とよく対応しているが，小出越遺跡の粘土はCa量が少なく少しずれて分布した。小出越遺跡の住居趾出土土師器も焼成遺構出土土師器によく対応していることもわかる。

第85図にはFe量を比較してある。Fe因子でも焼成遺構出土土師器はよくまとまって分布する。長者ヶ原の粘土はFe量がほんの少し多く，土師器とは少しずれる。これに対し，小出越遺跡の粘土はFe量も少なすぎて土師器には対応しない。住居跡の土師器のFe量は相当ばらついているものの，大部分のものは焼成遺構の土師器によく対応している。

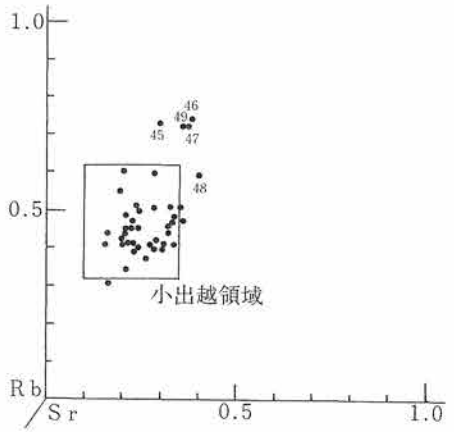
以上の結果，小出越遺跡の焼成遺構と推定される土坑から出土した土師器は全因子でよくまとまって分布しており（一窯跡出土須恵器と同程度のばらつき），同質の胎土をもつとみてよい。したがって，土師器胎土からみても，この土坑は焼成遺構であったという推定を支持する。また，長者ヶ原の粘土はFe因子でほんの少しずれるものの，他の因子では焼成土坑出土土師器と全く一致し，土師器の素材となった可能性は高い。それに対して，小出越遺跡内で採集した粘土はK，Ca，Fe因子で全くずれており，この粘土だけでは土師器粘土とはならなかったことは明らかである。また，小出越遺跡の住居出土土師器の胎土は大部分のものが焼成土坑出土土師器と全因子で対応しており，同遺跡内で焼成した土師器とみられる。しかし，No45・46・47・48・49など，若干の土師器は同遺跡産の土師器ではない可能性もあることをつけ加えておく。

b　小出越遺跡周辺の遺跡出土土師器

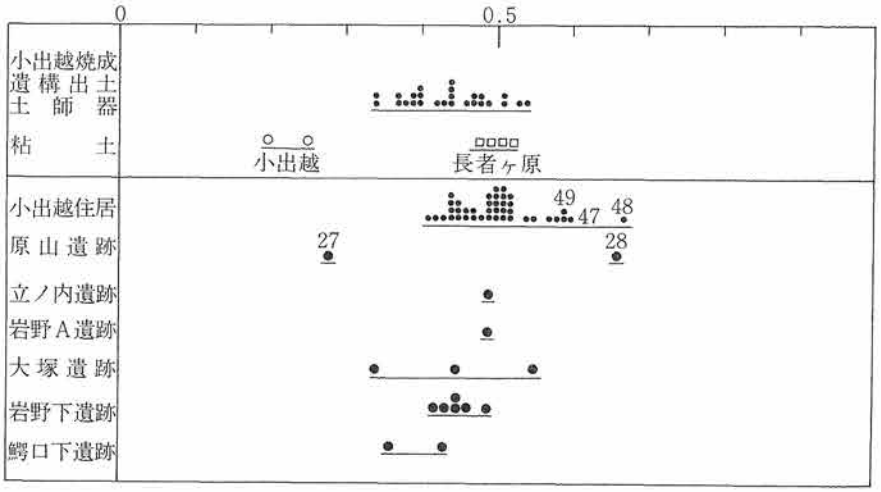
小出越遺跡周辺の遺跡出土土師器のRb—Sr分布図を第86図に示す。すべて，小出越領域に分布しているが，原山遺跡のNo27・28，鰐口下遺跡のNo87・88は小出越領域の隅に偏在することが注目される。また，周辺の遺跡出土土師器のK量，Ca量，Fe量は第83・84・85図に対比してある。そうすると，前記原山遺跡の2点の土師器はCa，Fe因子では小出越遺跡産の土師器に対応するものの，K因子では大きくずれ，小出越遺跡産でないことを示唆する。また，No27とNo28はそれぞれ別産地の土師器である可能性もK因子は示唆している。また，鰐口下遺跡のNo87・88はCa量が少なく，小出越遺跡産の土師器には対応しない。したがって，別産地の土



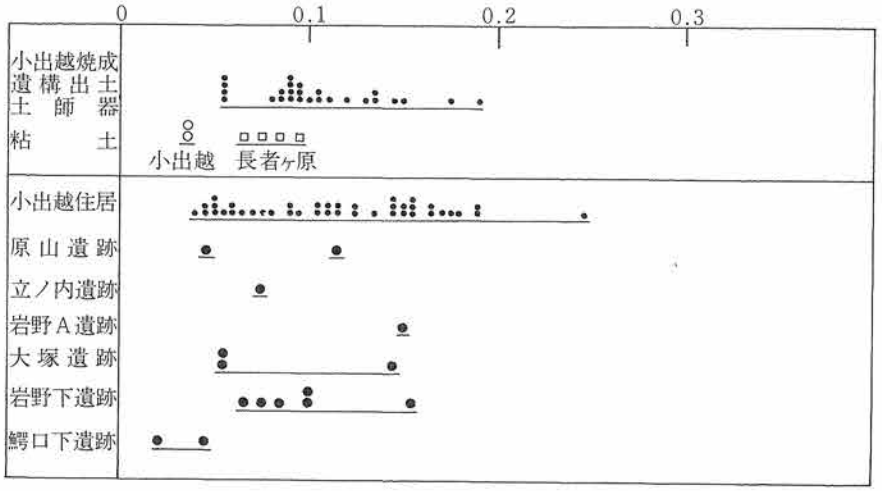
第81図　小出越遺跡土師器焼成遺構出土土師器の Rb-Sr 分布



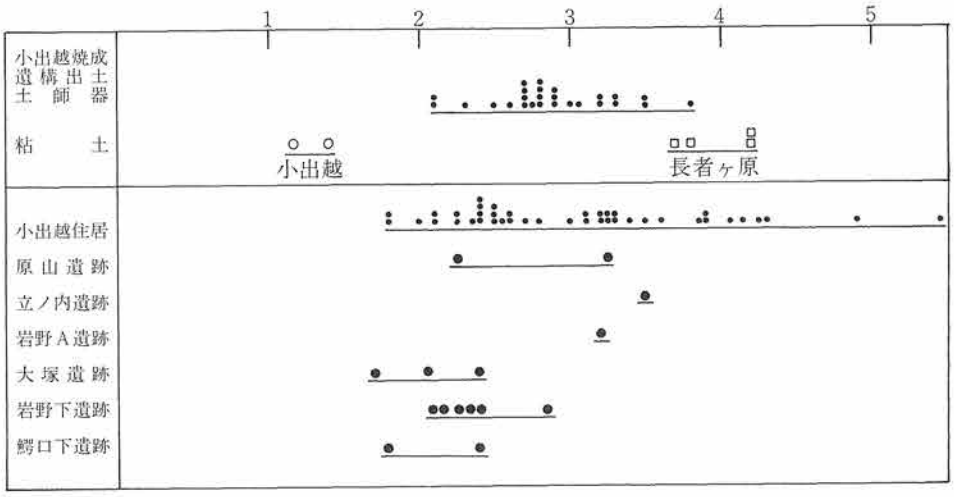
第82図　小出越遺跡住居跡・土坑出土土師器の Rb-Sr 分布



第83図　小出越遺跡及びその周辺遺跡出土土師器のK量



第84図　小出越遺跡及びその周辺遺跡出土土師器の Ca 量

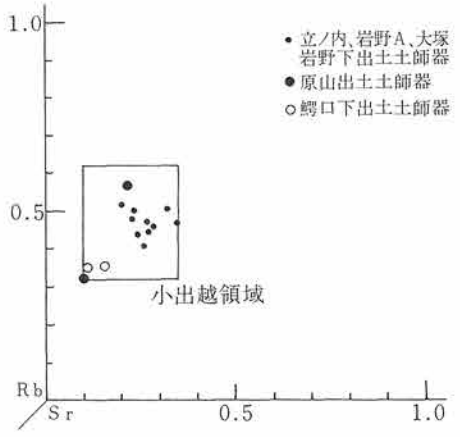


第85図　小出越遺跡及びその周辺遺跡出土土師器のFe量

師器とみられる。これ以外の周辺の遺跡出土土師器は全因子でほぼ小出越遺跡産土師器に対応しており，小出越遺跡産の土師器とみられる。

以上の結果，小出越遺跡は土師器を生産した遺跡であり，その土師器は周辺の遺跡へ流通したことが明らかになった。しかし，小出越遺跡産でない土師器が原山遺跡・鰐口下遺跡で検出されており，それらと対応する粘土・土壌が何処に分布しているのか，その産地を探る上に興味深い。

なお，分析結果は表2にまとめてある。



第86図　小出越遺跡周辺の遺跡出土土師器のRb-Sr分布

参考文献

三辻利一・脇田宗孝・圓尾好宏・喜多孝行・新浜夕起子　1978　『奈良教育大学古文化財報告，7，50』

三辻利一　1983　「古代土器の産地推定法」　ニューサイエンス社

第2表　胎土分析値

分析資料No	挿 図 No	出　土　地　点	器　　種	K	Ca	Fe	Rb	Sr
1	64図－381	小出越遺跡16号土坑	盤	0.443	0.110	2.27	0.464	0.299
2	〃 －362	〃　　〃	杯	0.387	0.055	3.02	0.397	0.173
3	〃 －359	〃　　〃	〃	0.404	0.086	2.07	0.450	0.226
4	〃 －376	〃　　〃	〃	0.337	0.054	2.75	0.436	0.167
5	〃 －377	〃　　〃	〃	0.379	0.058	3.05	0.487	0.163
6	〃 －378	〃　　〃	〃	0.370	0.056	3.31	0.481	0.152
7	—	〃　　〃	甕	0.340	0.092	3.48	0.361	0.215
8	64図－383	〃　　〃	小　型　甕	0.470	0.138	2.83	0.488	0.284
9	—	〃　　〃	甕	0.435	0.147	3.78	0.434	0.299
10	—	〃　　〃	鍋	0.441	0.136	2.55	0.549	0.276
11	66図－391	〃　18号土坑	杯	0.456	0.090	3.18	0.443	0.209
12	〃 －395	〃　　〃	甕	0.479	0.094	3.31	0.400	0.207
13	〃 －392	〃　　〃	杯	0.489	0.103	2.76	0.449	0.245
14	〃 －396	〃　　〃	鍋	0.475	0.189	2.85	0.455	0.344
15	〃 －397	〃　　〃	〃	0.467	0.151	2.68	0.460	0.333
16	65図－386	〃　17号土坑	杯	0.428	0.120	2.81	0.455	0.266
17	〃 －389	〃　　〃	鍋	0.416	0.094	3.21	0.341	0.222
18	〃 －388	〃　　〃	小　形　甕	0.388	0.086	2.73	0.392	0.274
19	68図－409	〃　20号土坑	杯	0.367	0.131	3.51	0.354	0.255
20	〃 －402	〃　　〃	〃	0.401	0.091	2.87	0.427	0.242
21	〃 －406	〃　　〃	〃	0.404	0.094	2.14	0.540	0.220
22	67図－401	〃　19号土坑	鉢	0.437	0.172	2.62	0.537	0.276
23	55図－319	〃　27号土坑	杯	0.514	0.089	2.65	0.616	0.238
24	〃 －320	〃　　〃	〃	0.529	0.104	2.78	0.581	0.257
25	〃 －318	〃　　〃	〃	0.512	0.080	2.93	0.592	0.220
26	〃 －316	〃　　〃	〃	0.536	0.100	2.72	0.576	5.266
27	—	原山遺跡1号住居	〃	0.284	0.046	3.25	0.317	0.097
28	—	〃	非ロクロ成形甕	0.662	0.118	2.24	0.573	0.212
29	—	小出越遺跡	粘　　土	0.196	0.035	1.16	0.347	0.226
30	—	〃	〃	0.253	0.035	1.39	0.404	0.154
31	—	長者ケ原遺跡	〃	0.523	0.093	3.82	0.588	0.256
32	—	〃	〃	0.501	0.087	3.74	0.586	0.249
33	—	〃	〃	0.469	0.062	4.20	0.560	0.201
34	—	〃	〃	0.477	0.074	4.19	0.550	0.206
35	19図－2	小出越遺跡1号住居カマド	杯	0.506	0.091	4.16	0.454	0.237
36	〃 －1	〃　　〃　カマド	〃	0.506	0.081	4.94	0.454	0.205
37	20図－50	〃　　〃	甕	0.472	0.154	2.79	0.416	0.287
38	21図－67	〃　　〃	鍋	0.452	0.111	3.86	0.408	0.225
39	20図－14	〃　　〃	杯	0.464	0.057	3.87	0.385	0.226
40	—	〃　　〃	椀	0.456	0.050	4.25	0.440	0.163
41	25図－84	〃　2号住居	杯	0.428	0.109	1.83	0.600	0.279
42	—	〃　　〃	〃	0.515	0.071	2.62	0.514	0.241
43	25図－94	〃　　〃	〃	0.507	0.047	3.28	0.554	0.186
44	〃 －99	〃　　〃	〃	0.498	0.041	3.18	0.605	0.204

分析資料No	挿図No	出土地点	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr
45	25図－105	小出越遺跡2号住居	鉢	0.442	0.115	2.52	0.727	0.298
46	26図－129	〃　〃	鍋	0.537	0.125	2.25	0.741	0.376
47	〃　－118	〃　〃	甕	0.604	0.150	2.35	0.724	0.372
48	〃　－123	〃　〃	〃	0.669	0.172	3.26	0.586	0.395
49	27図－126	〃　〃	鍋	0.590	0.148	2.09	0.722	0.368
50	—	〃　〃	杯　赤彩土器	0.492	0.048	1.96	0.479	0.212
51	26図－116	〃　〃	甕	0.513	0.143	1.83	0.483	0.336
52	56図－333	〃　28号土坑	杯	0.507	0.092	2.48	0.411	0.223
53	〃　－336	〃　〃	非ロクロ成形甕	0.410	0.112	2.55	0.367	0.258
54	—	〃　〃	甕	0.438	0.089	4.30	0.340	0.212
55	—	〃　〃	鍋	0.472	0.147	3.19	0.409	0.266
56	58図－349	〃　30号土坑	〃	0.582	0.190	2.10	0.406	0.307
57	〃　－348	〃　〃	甕	0.508	0.189	3.10	0.413	0.335
58	59図－352	〃　31号土坑	小形甕	0.436	0.243	4.05	0.501	0.245
59	54図－313	〃　25号土坑	杯	0.454	0.066	2.26	0.406	0.152
60	〃　－315	〃　〃	椀	0.498	0.106	3.00	0.469	0.229
61	51図－286	〃　1号炉	杯	0.453	0.050	5.60	0.309	0.160
62	〃　－299	〃　〃	甕	0.574	0.127	3.50	0.400	0.237
63	52図－301	〃　〃	鍋	0.521	0.181	2.72	0.440	0.319
64	51図－293	〃　〃	小形甕	0.491	0.162	3.24	0.398	0.305
65	30図－135	〃　3号住居	杯	0.419	0.105	2.37	0.396	0.277
66	〃　－144	〃　〃	台付大型Ⅲ	0.435	0.154	2.07	0.514	0.280
67	31図－147	〃　〃	鍋	0.491	0.168	2.47	0.469	0.361
68	30図－143	〃　〃	甕	0.502	0.154	2.38	0.467	0.333
69	72図－428	〃　5号土坑	鍋	0.518	0.134	2.59	0.462	0.322
70	〃　－427	〃　〃	〃	0.550	0.170	2.38	0.511	0.353
71	73図－430	〃　〃	〃	0.587	0.149	2.41	0.500	0.322
72	35図－157	〃　4号住居	杯	0.476	0.048	3.43	0.425	0.204
73	〃　－156	〃　〃	〃	0.511	0.059	3.62	0.449	0.216
74	〃　－160	〃　〃	〃	0.500	0.059	3.85	0.429	0.197
75	〃　－164	〃　〃	甕	0.485	0.076	3.31	0.407	0.209
76	—	立ノ内遺跡C・D－3・4区61	杯	0.490	0.073	3.52	0.484	0.234
77	—	岩野A遺跡SX14　6	〃	0.488	0.150	3.21	0.627	0.283
78	—	大塚遺跡9－H区　P35	〃	0.552	0.053	1.67	0.502	0.230
79	—	〃　9－I区　Ⅲ層	〃	0.445	0.057	2.38	0.522	0.195
80	—	〃　SK34	非ロクロ成形甕	0.338	0.148	2.05	0.451	0.269
81	—	岩野下遺跡SB5　P209	杯	0.446	0.063	2.86	0.458	0.284
82	—	〃　〃　P240	〃	0.415	0.099	2.15	0.444	0.247
83	—	〃　〃　P243	小形甕	0.433	0.087	2.34	0.473	0.268
84	—	〃　〃　〃	〃	0.451	0.074	2.42	0.411	0.256
85	—	〃　SB3　住穴4	杯	0.492	0.101	2.13	0.511	0.324
86	—	〃　SK1	〃	0.463	0.152	2.27	0.470	0.349
87	—	鍔口下遺跡SI2　P1	〃	0.428	0.045	1.77	0.364	0.158
88	—	〃　〃　34	〃	0.364	0.018	2.43	0.354	0.106

第Ⅴ章 ま と め

1. 縄文土器

本遺跡出土の縄文土器は，出土数が少なく断片的資料であるため詳細は触れず，ここでは全体の器形を復原しうる第10図の１・２について，資料報告程度に簡単に説明を加えたい。

１の類似資料を出土する周辺遺跡として，新潟県布目遺跡（小野他　1987），富山県南太閤山遺跡（山本　1986）等が挙げられる。布目遺跡第１群土器は波状の口唇に刻みを施し，胴部の凸帯に爪・半截竹管等による刺突列が施される。１にみられる隆帯下の半截竹管による鋸歯状平行沈線(注8)を除けば，胎土・内面の調整等にいたるまで酷似する。また８の平底外面へ施される爪形連続刺突の存在など類似点が多く，報告者は東北地方南部の桂島式・関東地方のニツ木式・関山Ⅰ式に比定している。また南太閤山遺跡第13類には，口縁部の羽状縄文・頸部への刻みを伴った隆帯の貼付け・隆帯下の半截竹管による鋸歯状平行沈線など文様構成・施文具において近似する。前記２遺跡の土器を概観すると，器形・施文具・施文方法・文様構成等において類似点が多くみられ，本資料もこれらの遺跡から前期前葉に位置付けておきたい。しかし本県にあっては，早期末～前期全般に比定される資料が少なく，その編年的序列・系統(注9)等，未整理なため詳細は不明である。そして，西頸城地方をみるかぎり，岩野Ｅ遺跡（高橋　1986）では早期末に東海系の入海式の流入，東カナクソ谷遺跡（田海　1987）では，前期初頭の北陸系の土器が出土するなど他地域からの影響を強く受けており，本遺跡出土土器も含め，今後，系統的に整理してゆかなければならないであろう(注10)。

２は，本文において縄文時代中期最終末に時間的位置付けを行った。しかし，該期の伴出遺物は全く見られず，この土器自体も破片数が少量なため，復原には若干の無理があることは否定できない(注11)。ここでは，不確定ながらも時期の比定を行った根拠について触れることとする。

関東地方では，縄文時代中期後葉から末葉にかけて両耳壺と称される土器群が存在する（安孫子他　1981，大塚・谷井他　1982）。特に加曽利ＥⅣ式期のそれは，①一対の把手が橋状を呈する，②把手が頸部から肩部にかけて付される，③口縁部が無文帯となり，胴部の縄文（地文）と隆帯によって画される点にこの土器との共通性を見い出すことができる。しかし，全体のプロポーションの面では，器高・口縁径・底部径の比率に大きな相違があるため，異質な感がするのは否めない。また文様の面では，把手と頸部に施された刺突列は，両耳壺には見られず，口縁部無文帯と胴部の縄文（地文）で構成されている点に違いがある。

刺突手法と橋状把手を有することからは，新潟県を中心に分布する後期初頭の三十稲場式との対比が必要となろう。また最近では，加曽利ＥⅣ式の両耳壺に三十稲場の系譜を辿る可能性があることも示唆されており注目される（田中　1985）。

三十稲場式の刺突手法には，花弁形文・突瘤文・瓜形文・押し引きによる三角状文などのパターンが知られている(注12)。しかし，この土器における棒状の先鋭な工具を下から突き上げる手法

（把手）や，水平方向に突く手法（頸部）は，三十稲場式に類例を見ない。加えて，把手や頸部にのみ刺突文を有し，胴部には縄文を施すという文様構成も同様である。[注13] 類似点をあげるとすれば，頸部の隆帯に付された連続的な刻み目文と全体的なプロポーションと言えよう。

以上，加曽利ＥⅣ式の両耳壺と三十稲場式を例証し，共通点・相違点を述べてきた。中でも前者との共通性は特筆すべきであり，時期比定に際しては大きなウエイトを占めている。しかし，相違点も無視することはできず，ひいては地域差か時間差かという大きな問題が生ずる。ここでは地域差という理解に立ったが，今後，当地方での類例が増加した段階で隣接する北陸地方，北信地方との比較を行った上で検討すべき課題となろう。

2．土師器焼成遺構

A　本県における土師器焼成遺構の事例と現状

県内の土師器焼成遺構は，現在のところ報告例がない。[注14] しかし，今熊１号古窯跡（小島他　1983）の報文中に「還元焼成されているが，器形・胎土共に土師器であって，焼成が須恵器窯で成されたものである。」との記述があり，須恵器窯での土師器焼成の可能性を指摘している。しかし，発掘調査の成果ではなく，灰原からの表採品という資料自体の限界性が存在することも，報告者自身が述べているところである。このような事例は県内に幾つか存在し，山崎須恵窯跡・貝屋須恵窯跡・真木山窯跡群等で報告されている。

山崎須恵窯跡（川上　1981）「窯は，全体にやや低温度時点に放棄されたもので器体はかなり脆く，未だ還元のかからない赤褐色，或いは黄褐色を呈するものが総てである。」と窯出土土器の様子を説明したうえで，窯内出土の内外共に黒色処理した椀とも杯とも区別が尽きかねる資料の説明のなかで「瓦質の黒色土器の検出は，同時焼成と考えざるをえないものであるが，他に報告例を見ない。」としている。[注15]

貝屋須恵窯跡（川上　1982）においても，須恵窯中に土師質土器の鉢・鍋・甕・甑が出土しており，中でも鍋は20数点（個体？）が出土したと言う。その多くは灰原より出土しており，報告者は窯内で焼成されたものと考えている。

真木山窯跡群（戸根　1986）では須恵窯出土品の中に「酸化焔焼成の長胴甕・鍋がある」とし，土師質土器が煮沸具に片寄る傾向を指摘している。そして須恵器窯で須恵器・土師器をそれぞれ時期を異にして焼成したものと報告者は考えている。

なお，狼沢２号窯跡（中川他　1973）から，土師器のような焼成を示す土器群が出土しているが，報告書は，形態・成形技法において須恵器と認めており，焼成中に窯体が壊われたためと考えている。

以上のような事例は，須恵器窯の構造で土師器を焼成した可能性を示唆したものであるが，[注16] 今後，資料の集積をまって明確になるものと考えられる。[注17] ここでは報告から土師器焼成の一面を提示するにとどめる。しかし，何れにしても断片的な資料に過ぎず，いぜん土師器焼成遺構

の存在は不明である。

B　土師器焼成遺構として認定される条件

「何をもって土師器窯とするか」(穴沢　1978) の指摘のように，現在，土師器焼成遺構に関しては，その実体が明確ではなく資料の増加を待っているのが現状といえよう。

本遺跡においても状況は同様であるが，ここで土師器焼成遺構として報告するにあたって，それらを認定した諸条件について本遺跡なりに列記しなければならない。

1．土師器表面に見られる破損形状……個々の土器説明文（平安時代土器観察表参照）のなかにもしばしば表現してきたところであるが，土器表面には剝落痕・ヒビ・歪み[注18]が多く観察される(図版24・29・31)。特に2号住居・6・16号土坑より出土した土師器に多く見受けられる。その他，1号住・4号住・1号炉・17・18・19・26・27号土坑にも少量見受けられる。器種別には杯・椀が大多数を占める。これらの破損形状（割れ方）は，土器消費地ではあまり見ることの出来ないものであり，須恵窯出土の須恵器の表面にしばしば見られる加熱による細かなハジケと同様なものと考える。これらの破損品は窯内焼成時の失敗作であり，土器生産地にそのまま留まるもので，基本的には消費地への流出は殆ど見られないものと考えられる。また，これらの破損形状の他に，器面内外に黒斑が観察されるものが多いことも特徴である[注19]。

2．遺構の床面・壁面等が焼固している……検出された土坑・住居跡の一部に床面・側壁が焼固しているものが存在する[注20]。

3．2の土坑・住居跡に，1で指摘した器表面の剝落の見られる土師器が多出する。

4．4号住居のような，カマド構造（人頭大の石を両方の袖に配した構造をもつ）をもたない竪穴が検出されており，工房跡の可能性がある[注21]。

5．須恵器の出土量が極めて少なく，土師器が多量に出土している。その中でも土師器杯は，全体に対する割合が極めて高い[注22]。

6．胎土分析の結果から，焼成遺構出土の土器は，その胎土が極めて近似する（単一須恵窯出土土器の指数範囲とほぼ同じ)。

以上6点が，本遺跡での土師器焼成遺構の存在を認めた理由である。

C　土師器焼成遺構と窯構造

土師器焼成遺構認定の諸要素を前記した。これを基に，土師器焼成遺構と考えられるものを整理すると，2号住居と5・16・18・19・20・27号土坑の7遺構となる。それらの遺構の分布状況は，5号土坑を除き上段の南西へ緩く傾斜する地点に集中しており，日本海から前川沿いの谷を通り抜け吹き込む，強い北西風が直接あたらない立地である。また，5号土坑も同様に，下段の南側沢地へ傾斜する地形に占する。

焼成遺構は，形態的に大きく2分類される。方形をした竪穴の1部を焼成部として張り出させたもの（2号住居）と，それ以外の浅いなだらかな掘り込みを持つものとである。

前者は，方形の工房跡とその1隅を弧状に張り出させた焼成部を持つ竪穴の遺構である。土

師器焼成のための工房跡が検出された遺跡に，瀬谷子遺跡（草間他　1971）・広綱遺跡（柳田他　1985）等がある。瀬谷子遺跡では方形の竪穴遺構の床面に焼土・火床が散在し，竪穴の隅に灰白色の粘土が集積されている。主柱穴らしきものは存在せず，上屋の有無については不明である。また，３号工房跡・５号工房跡・６号工房跡等で検出されている竪穴の壁を張り出す形で長軸１ｍ内外，短軸50cm内外の，楕円形を呈する火床が見られ，火床面は遺構外に向けて緩やかに，或るものは段を持ちながら上がっていく。報文では，これらの火床を竪穴内部から外側へ向かい火を焚く形の窯と考えている。これら床面，壁際等の火床の存在と土器の原料となる粘土の集積は，これらの竪穴が土器の焼成（窯）と加工・整形（工房）とが一体となった遺構と考えられる。本遺跡の２号住居も瀬谷子例に近いと考えられるが，遺構内の隅に見られる主柱穴様のピット（ピット４は火床に位置し，覆土も他と異なり炭化物を多量に含有する黒色土であることから性格が異なると考えられる）・方形部に見られる周溝状の溝等については，今後，検討してゆかなければならない。つまり柱穴様のピットの存在は上屋を想定させるが，張り出し部分を一部とする焼成部は，その火床面の広がりから方形部のかなり内部まで達しており，大規模なものと推定される。そして，遺構内覆土の観察から焼成部の上部構造らしき崩落土は確認されず，開口した窯と考えられ，どのような上屋構造をとれば，焼成部からの引火を防げるか検討事項となろう。次に方形部に見られる周溝の存在であるが，ここでは一応，排水溝としての用途を考えておく。しかし竪穴住居跡によく見られる壁板の付設跡とも見られ即断はできない。

後者の形態としては，楕円形・円形・不整形等が存在する。床面は平坦でなく，摺鉢状に窪み，しっかりした掘り方は確認されていない。水深（栗原　1972）・権現後（阪田　1984）・駒形（穴沢　1978）・水池（下村他　1976）遺跡等で検出されている焼成部と焚口部を形態的に分離する（イチジク形・二等辺三角形等）部分は確認されず，床面の段差・傾斜等もみられない。しかし５号土坑のみは，焼土範囲が片寄ることと，施設を２分できるような底面の段差の存在から，焚口部と焼成部とを分離できる可能性も存在する。しかし，それぞれの土坑覆土の観察から，上部構造らしき崩落土も確認されていないことなど，下宿内山（下宿内山調査会　1978）・南小泉（結城　1979）・落河原（谷本　1973）・サシトリ（秋田県教委　1976）・水深遺跡等で検出されているものに近い平窯と考えられる。また，瀬谷子遺跡の窯跡周辺で検出された，覆い屋根の存在を想定させる複数のピットの存在は確認されていない。

D　胎土分析について（第88・89図）

分析資料は合計88点であり，総て土師器である。その内訳は，小出越遺跡のもの67点，周辺遺跡のもの15点，小出越産粘土２点，長者ヶ原産粘土４点である。ここで，先ず，資料とした周辺遺跡と粘土採集地点について，概要を説明したい。

岩野Ａ遺跡（高橋　1986）　糸魚川市大字大和川字岩野に所在し，海川右岸の段丘に立地する。縄文時代早・前期，平安時代，中世の遺物・遺構が検出されている。焼土範囲とその近くに土師器杯の集中出土が見られ，これにSX 14の遺構名を付している。胎土分析に使用した土師器

底部片は，この集中地点からのものであり，底部径・体部の立ち上がり等から，報告記載の杯と同様な器形と考えられる。

大塚遺跡（県教委発掘　1986）　糸魚川市大字一宮字ソウレハ他に所在し，姫川右岸の段丘上に立地する。先土器時代から中・近世の遺物・遺構が検出されている。資料78はピット35より出土しており，体部下半がヘラ削り後，ナデられる杯である。79は包含層からの出土であり，実測図はないが杯体部の破片である。80はSK 34より出土しており，底部からバケツ状に開く体部をもち，外面縦方向のハケ調整・内面撫で調整をもつ非ロクロの鉢である。(注23) このうち78・80は，両遺構間で接合関係が認められることから供伴関係にあり，調査者は今池遺跡（坂井1984）の調査成果より9世紀前葉と考えている。

立ノ内遺跡（県教委発掘　1985・1986）　糸魚川市大字道明字立ノ内に所在し，早川左岸の段丘上に立地する。平安時代，中世の遺物・遺構が検出されている。焼土範囲が散在しSX 21の遺構名を付した地点に，製塩土器に伴って土師器杯が出土している。資料はこの地点からのもので実測図はないが，同地点から出土している杯と酷似しており，ここにその図を載せる。調査者はこの土器の時期を9世紀後半から10世紀前半に位置付けている。

鰐口下遺跡（県教委発掘　1986）　糸魚川市大字上刈字鰐口下に所在し，姫川右岸の段丘上に立地する。縄文時代後・晩期，平安時代の遺物・遺構が検出されている。半ば，破壊された竪穴住居跡のカマド脇のピットより，残りの良い杯が数個体出土しており，住居跡一括と考えられる。87は底部が厚く，88は体部に「山」を逆位にした記号と思われる墨書が描かれた杯である。

岩野下遺跡（和田　1987）　糸魚川市大字大和川字岩野に所在し，海川右岸の段丘上に立地する。縄文時代中期，奈良・平安時代，中・近世等の遺構・遺物が検出されている。その内，平安時代のSB 5・SB 3・SK 1の土器片を資料とした。報告では，SK 1とSB 5が9世紀後半から10世紀中葉に位置付けられている。本書には，SK 1の一括土器を参考として載せる。

原山遺跡（土田　1986）　糸魚川市大字大野字苦竹原に所在し，姫川右岸の段丘上に立地する。平安時代の竪穴住居跡が検出されている。その内，1号住居出土の杯・鉢（非ロクロ）を資料とした。調査者は，これらの資料を10世紀前半と考えている。

小出越産粘土　調査範囲の下段で黄褐色の遺構確認面より，約1ｍ50㎝下位の灰白色粘土である。

長者ヶ原産粘土　地表より50㎝と1ｍ下位より採集した黄灰色粘土である。

小出越遺跡出土のものは，竪穴住居跡(注24)・土器焼成遺構，その他の土坑とで，それぞれ遺構別に抽出した。資料は全体の器形が実測図で復原できるものを基本としたが，杯以外の器種は，小破片が多く，若干，復原できないものも含んでいる。また，器種別にあまり片寄らないように選択した。しかし，一部の遺構を除いて，その多くは，床面直上等，原位置をたもって出土

する例は少なく，覆土内出土遺物から，任意に資料としたことを付け加えておく。

周辺遺跡については，本遺跡と比較するため，時期的に似かよった遺物を資料とした。しかし，該期の資料は，最近の調査で遺跡数が増えているものの，遺物量・遺構等においても断片的な資料が多い。そして，未だ当地の土器編年も成されていない状況等も考え合わせると，各資料に時期的な不安が残る。しかし，大塚遺跡の分析資料78は，２号住居出土杯に，同じく80にいたっては，４号住居の非ロクロ成形甕(第40図226)に酷似する。また，立ノ内遺跡出土の杯は，底部径・体部立ち上がり・胎土等から，16号土坑出土の杯に極めて似る資料である。

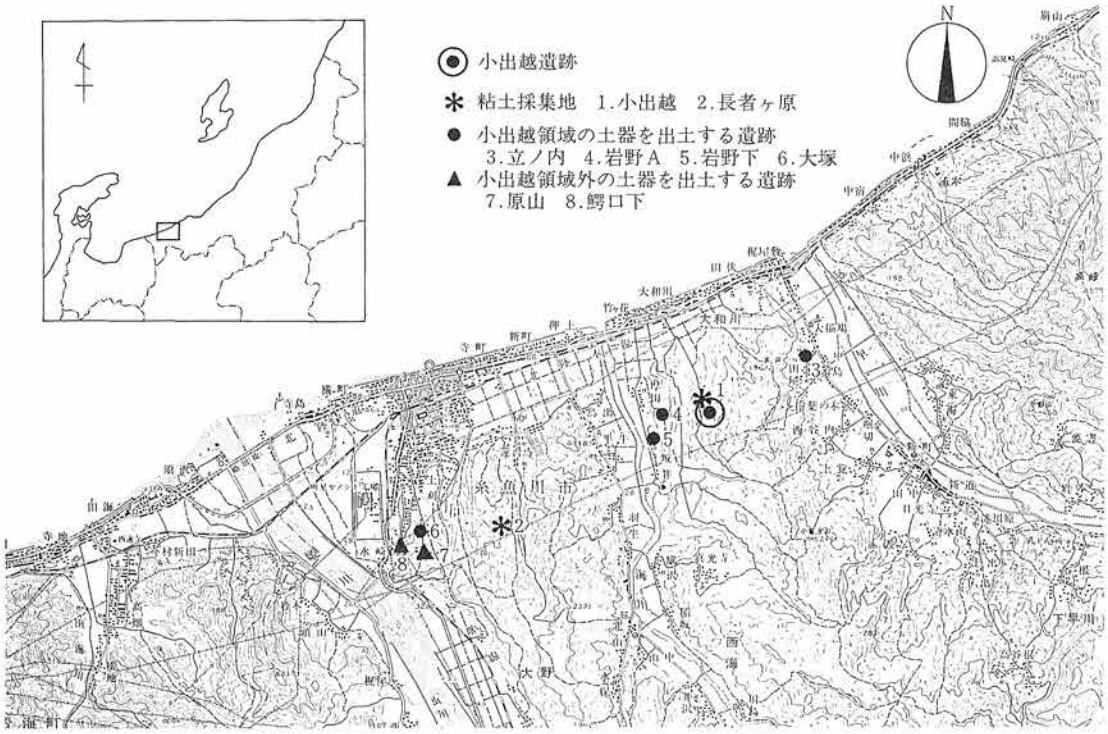
これらの資料を分析した結果は，第Ⅳ章に詳しいが，その結果を要約すると次のようになる。

1. 焼成遺構出土の資料は，分析結果が近似するため，同質の粘土を原料とした可能性が高く，遺構は土師器焼成遺構と考えられる。
2. 住居跡出土・土坑出土の土器の多くは，小出越領域を示し，本遺跡で焼成された可能性が強い。
3. ２号住居出土品で，分析資料45～49は，本遺跡以外の地で生産されたと考えられる。
4. 鰐口下・原山遺跡出土の資料は，本遺跡以外の地で生産されたと考えられる。
5. 長者ヶ原産の粘土は土師器素材となった可能性が高いが，小出越遺跡産の粘土はそれだけでは素材とはならない(注25)。

小出越遺跡については，２号住居で，領域外の資料が出土しており，それが45を除き総て煮沸具であることが注目される。また，２号住居は体部下半に回転削り調整を加える杯が大多数を占め，小出越遺跡の中にあっても時期的に最も古い土器群と考えられる。そして，５号土坑のように鍋を焼成したと思われる遺構の存在や，多数の器種が領域内に存在する分析結果から，本遺跡で多くの煮沸具まで焼成された可能性が存在する。これらを総合すると，２号住居に占地した人々は，本遺跡にあって最も初期に土師器焼成に従事したもので，その時，他の地で作られた煮沸具等を少ないながら持ち込んでおり，２号住居を工房・焼成の場と同時に居住空間として利用していたものと考えられよう。

次に，周辺遺跡についてであるが，岩野Ａ・鰐口下・岩野下・原山遺跡は，土師器杯に器壁の厚さ・底径の大きさ等，遺跡間でばらつきがみられるものの大きく９世紀中葉以降に対比されよう。また岩野Ａの資料で対応するなら，その高台付き皿から10世紀前半と推定される。そして，小出越２号住居・４号住居等でみられる杯Ａ・Ｂ類の後段階で，杯Ｃ類を出土する１号住居に対比またはそれ以降に該当すると思われる。また，大塚遺跡の資料は，小出越２号住居・４号住居に近似品があり，立ノ内遺跡のものは，４号住居・16号土坑のものと同様と考えられる。これらのことを総合し，胎土分析の結果と照らし合わせると以下のようになる。

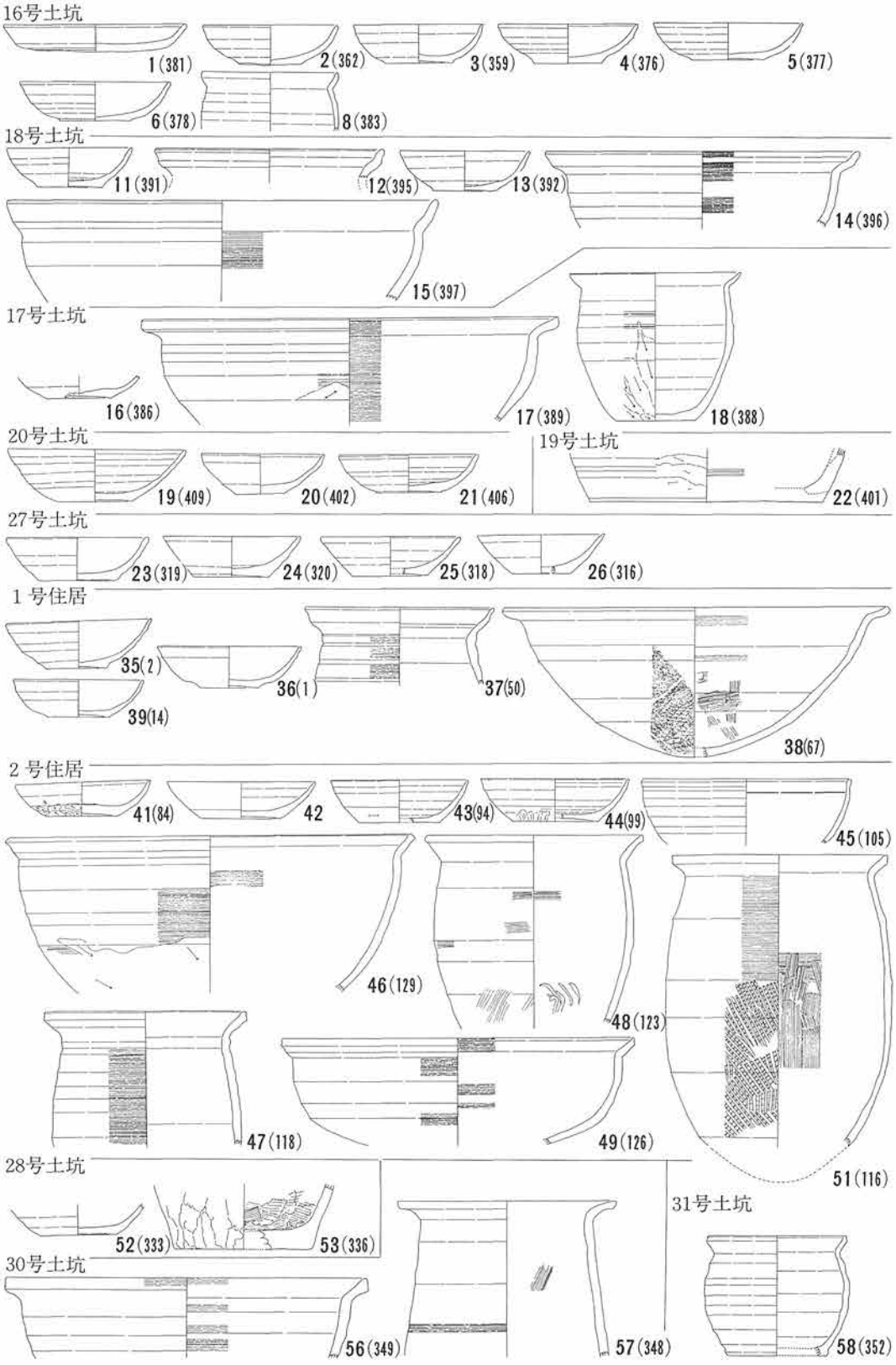
1. 少なくとも糸魚川全域に，小出越領域を示す粘土を材料とした土師器が分布する（姫川沿いの，原山・鰐口下遺跡では，領域外の土師器が出土しており，分布圏を区切る可能性も存在する)。
2. 小出越遺跡の土師器焼成期間は，土器の分析よりほぼ８世紀末～９世紀後半にかけて行



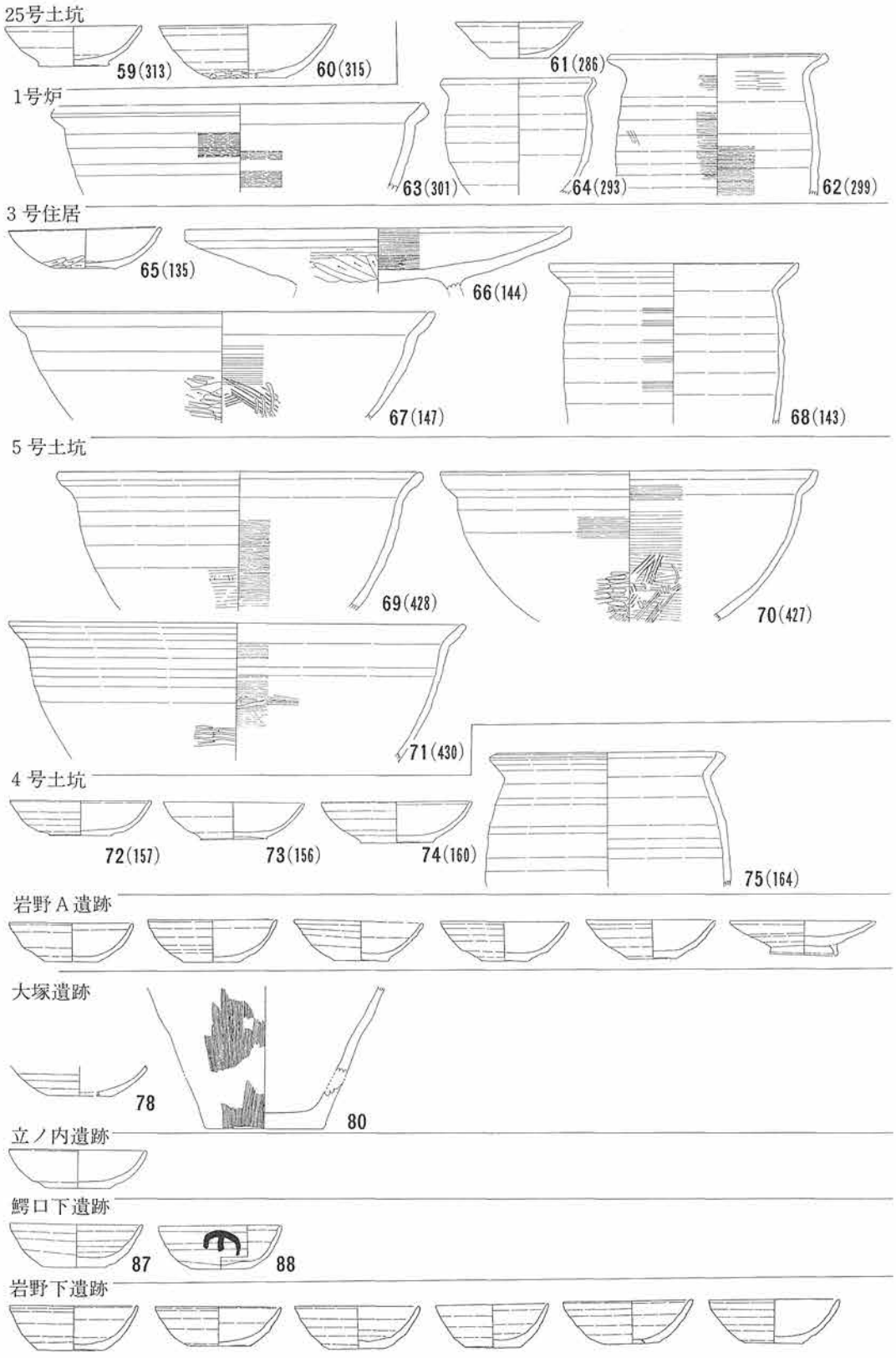
第87図　小出越領域内外の遺跡（1/100,000）（国土地理院，昭和44年3月30日発行，1/50,000）

われたものと考えられる(注26)。また鰐口下・原山遺跡から10世紀前半期に，小出越領域外の粘土を材料とした土師器の流入（土師器焼成遺構の存在）が考えられる(注27)。

以上，各項目について簡単にまとめてきたが，ここで小出越遺跡の土師器製作遺跡としての性格をまとめ，終わりとしたい。各地の土師器製作遺跡のありかたは，ほとんどが小規模なもので，土師器生産は単一集落または，地域圏を構成する小さな集落群を対象とした自給性の強いもの（塩野　1977・小宮　1986）とする考えと，水池遺跡(注28)・水深遺跡(注29)から考えられる大規模で，なおかつ組織的土器生産がおこなわれ（塩野　1977），しかも広い地域を対象とする生産基地的な性格を有するものとがある。本遺跡は，第2図でも分かるようにかなり斜面地に立地し，西側は前川，東・南側は山地，わずかに北側に開析されてはいるものの，起伏が多い。北側での表面採集の結果からも集落等の立地は考えられず，調査範囲内においても，わずかな住居跡と土坑（土師器焼成土坑等）が点在するにすぎない。そして，検出された遺構のほとんどが土師器焼成に係わったものと解されることから，小規模でありながら，土師器製作者集団の占するところと考えらる。また生産された土師器は，かなり広範囲に流通したものと推定され生産基地的な様相を示す。しかし，粘土採掘坑・粘土溜め遺構等の付属施設が検出されないことと，粘土分析の結果から，土器作りのすべての作業が小出越遺跡で行なわれたのではなく，土器生産の前段階である生地作りまでは，他の地域で行なった可能性が強い。



第88図　胎土分析資料　1　(1/6)



第89図　胎土分析資料　2　(1/6)

3．平安時代の土器

本遺跡は，土師器生産遺跡と考えられる。したがって，出土土器の組成は一般の消費地遺跡と異なる状況を示す。土師器焼成遺構の内５号土坑は鍋の破片が大多数を占め，ほぼ原位置を示すと考えられる土坑西側の窪地出土遺物も，鍋Ａ類で占められる。また，16号土坑出土土器は杯が圧倒的に多く，その中でも A_1 類がほとんどで，僅か A_2 類が１点含まれるのみであった。そして27号土坑は遺存率の高い杯が多数出土し，そのほとんどがＥ類に含められる。このように，焼成遺構の中には焼成物として同一器種・同一タイプを焼成したと考えられる遺物の出土がみられ，遺構内で出土した土器群に器種・タイプの片寄りが想定される。同時に一般の消費地遺跡と比較した場合，欠落した器種・タイプが存在する可能性もある。４号住居は本遺跡の中にあって明瞭なカマド施設をもった数少ない住居跡で，最も一般的な土器組成を示すと考えられるが，須恵器は出土土器全体の２割以下で器種的にも杯と杯蓋で占められ，片寄りがみられる。これらの組成は，土師器焼成を専業とする集団の住居の一面を示すものと考えられる。したがって本遺跡のような生産遺跡と一般の消費地遺跡を，土器組成の面から時期設定を試みることに危険性を感じるため，ここでは，前記した生産遺跡としての特性を踏まえ，数少ない伴出須恵器から各住居の大まかな時期設定をおこないたい。そしてこれらの時期設定を基に，共伴する土師器杯を中心に形態・技術的差異を指摘し，そこにみられる変遷を整理してみたい。

本遺跡の須恵器を概観すると，杯・杯蓋以外はほとんど出土していない。杯は，有台・無台とがあり，器高がわりあい低く小型のものが一般的である。杯蓋もほぼそれに対応する口径を示す。杯の底部は回転糸切りのものが有台杯に僅か２点あるのみで，他はすべて回転ヘラ切りで占められる。器壁は比較的薄いが，内面はわりあい滑らかに仕上げられたものが多い。体部は直線的に立ち上がり，口縁部で外方に大きく開くものはない。細片のため図示していないが，１号住居出土の須恵器杯も前記の特徴を示すと思われる。このような中で，３号住居の132と４号住居の179がそれぞれ特筆される。前者は無台杯の底部破片であるが，器壁が非常に薄く，内面もロクロ痕の凹凸を明瞭にのこす。このような特徴をもつ須恵器は，県内では番場遺跡（坂井　1987），今池遺跡（坂井　1984），一之口遺跡西地区（坂井　1986）などで出土しており９世紀中葉以降に比定される[注30]。本遺跡出土須恵器のうち最も新しい時期に相当すると考えられる。後者は底部から体部が急に立ち上がり，体部はほぼ直線的にやや開き口唇部で若干外反する器形で，底部は回転糸切り，底部と体部の境は明瞭な稜をもつ。この特徴に近似するものに頸城平野東側に位置する今熊窯（小島　1983）の資料を挙げることができ，９世紀前半に比定されよう。このように須恵器で見る限り，大局的に９世紀中葉以降（３号住居）と９世紀中葉以前（１号・２号・４号住居）に分けることができよう。

では次に各住居出土の土器（特に土師器杯）についてその特徴を述べてみたい。

２号住居は，赤彩土器[注31]の他，杯 A_2・B_2 類で占められる。赤彩土器に関しては杯に比べ，既して大型品が多いが，形態的・技術的には A_2 類に類似し，体部下半に回転ヘラ削り調整を施

第3表　土師器器種別組成表　（数字は，器種内での各タイプの占める割合(%)を表わす。○は，出土数が少なくないため，出土したタイプのみを示す。）

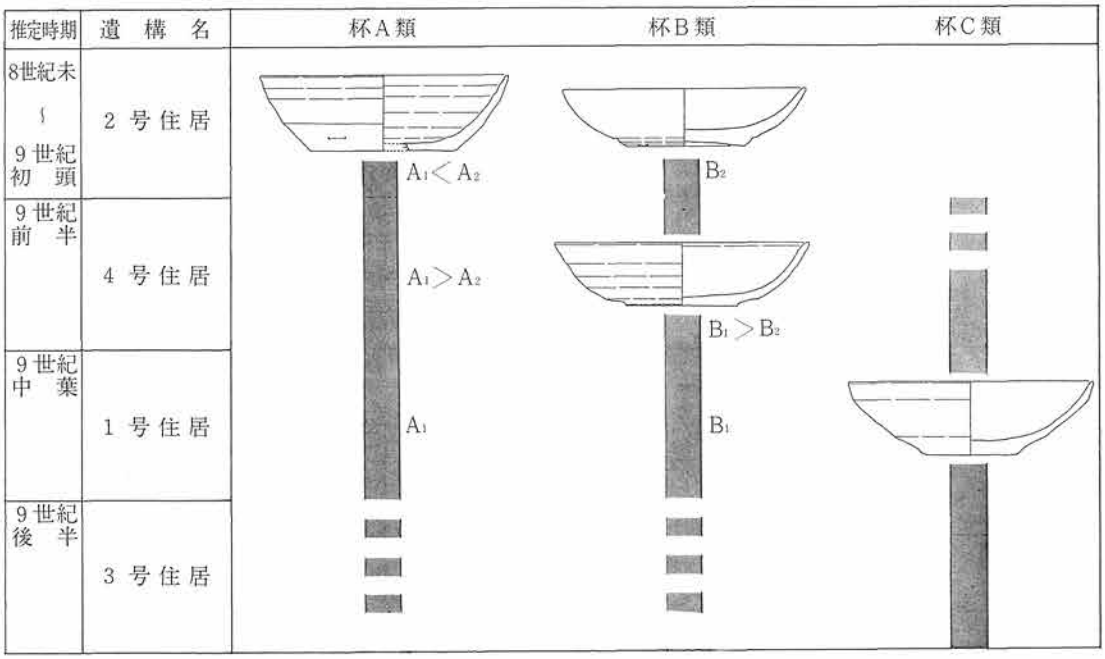
器種 / タイプ / 遺構名	杯									椀			小型甕				大型甕							鍋			
	A1	A2	B1	B2	C1	C2	C3	D	E	A	B	C	A1	A2	B1	B2	A1	A2	B1	B2	C	D1	D2	E	A1	A2	B1	B2
2号住居	10	40		50						○			100					88	15			5				50		50
4号住居	14	8	70		5	3							63		10	27		13	13	56					34	34	27	5
1号住居	17		30		8	8	20	12	5	○			10	50	20	20	19	25	25	25		6			23		62	15
3号住居			○				○															○	○			○		

すもので底径指数（底径≒口径×100）が50以上となる。これらに近似する資料は現在のところ県内・北陸地方には良好な資料を見出せないが，北関東・東北地方では9世紀初頭に位置付けられている(注32)。形態的には底径が大きく，器高が低いため須恵器に近似し，須恵器を模倣した器形とも考えられ(注33)，9世紀中葉以降の器高が高く，底径が小さな土師器杯と比較すれば，古い相様をもつものと考えられる。一方，B2類は底径指数が49とやや底径が小さく，形態的に似るB1類を多出する4号住居のものと比べ，底部と体部の境を削るという点で，A2類の範疇に含まれると考えられ，A2類同様古い様相と思われる。

4号住居は，2号住居でみられるA1・A2類とC類を若干含むが，大半はB1類で占められる。B類のなかでB2類が出土しないことは，体部下半を削るという技術的手法の衰退と考えておきたい。B1類に近似する良好な資料も周辺遺跡で見出すことができず，直接は時期比定できない。

1号住居は，C類が主体を占め今池遺跡SD3Ⅳ層出土土器にほぼ比定されようが，径高指数（器高÷口径×100）が27～29と器高が口径に対し依然低く，小破片であるが遺構内から出土した須恵器杯の器壁がやや厚いことなどから，今池遺跡SD3Ⅳ層よりやや古い時期と理解したい。

以上のように各遺構出土土器（杯）は，技術的・形態的に特徴を強く示すもので，その特徴を時期的な変遷ととらえ，ここで整理すると古い方から2号住居→4号住居→1号住居→3号住居の変遷が考えられる。9世紀中葉を境に須恵器と土師器の占有率が大きく逆転し，9世紀後半で土師器が大勢を占めることは北陸地方ばかりではなく，越後においても既に指摘されており（吉岡　1983・坂井　1984），この時期の土師器杯の形態を概観すると本遺跡のC類にほぼ含まれると思われる。1号住居も該期の所産となろうが，前述した今池遺跡SD3Ⅳ層との対比から9世紀中葉と位置付けられ，2号住居・4号住居は9世紀中葉以前と考えられる。また，4号住居出土の須恵器183は，今熊窯資料と極めて近似することから，共伴する杯B1類は9世紀前半に位置付けられ8世紀代に下ることはないと思われる。同時に前記した変遷から2号住居と4号住居のB類をみる限り，技術的・形態的に連続性がみられ，時期的に連続するものと推測され，2号住居はおおよそ8世紀末から9世紀初頭に編年付けられよう。また，E類に関してはB地区土坑を中心に出土しており，A・B類との共伴関係は見出せない。そして器壁



第90図 土師器杯の変遷想定図

の厚さ，内面の調整等かなり粗い作りで他の土器とは一見して区別される。平均して高径指数は28，底径指数は50である。また，椀と共伴する例が多いことから時期的に新しい様相を示すものと理解される。

次に土師器杯を基に共伴すると思われる小型甕・甕・鍋等の変遷について若干述べてみたい。甕・鍋等は分類の基準のところで，口縁部片が多出し，体部の資料が少ないため，口縁部形態のみの分類としたもので，ここでも体部下半の調整等については，あまりふれることができない。したがって，口縁部の作り出し等の特徴を中心に述べることとしたい。

甕を概観すると，大きく大型・小型の別があり各類の中での口径差は殆ど認められない。前者は口径21cm前後のものが一般的で，外面は頸部から口縁部にかけて撫で調整・体部上半にカキ目・下半にタタキ目を施し（上半と下半の境に1部削りの施される資料あり），内面は口縁から体部にかけてカキ目（1部ハケ目），下半に押圧痕が認められる。後者は口径12cm前後が大半を占め，基本的に回転糸切り底となる。内外面ともロクロ撫でによるが，一部の資料に胴部下半を削りにより仕上げるものがある。

口縁部の作り出しは，2号住居で，甕B1・B2・D類が確認されているが，口唇端部に明瞭な稜線をもち「く」の字に仕上げるものが多数を占める。小型甕は全てA1類で，屈曲部をもたず無調整のものである。4号住居は，甕B1・B2・C類が確認されており，2号住居同様「く」の字に仕上げるものがほとんどである。また，本住居の特徴として，C類が挙げられ口縁部外面を撫でにより押えつけ平坦面を作り出している。小型甕は，A1・B1・B2類が確認され，無調整のものと，「く」の字に仕上げるものが混在する。1号住居は，甕A1・A2・B1・B2類が確認されており，2号・4号住居で主体となる「く」字口縁とは他に，口縁端部を外方へ細く

つまみ上げたものがかなりの割合で含まれる。小型甕は，A1・A2・B1・B2類が確認され，甕と同様な様相を示す。また本遺跡で最も新しいと考えられる3号住居は，甕D・E類が確認され，形態の異なるE類を除けば，端部を「く」の字に仕上げるものはない。以上，甕について遺構毎に述べたが，須恵器・土師器杯の変遷に照し合わせると，序々に口縁端部の「く」の字がくずれ，丸まる傾向にある。しかし小型甕に関しては，その限りでない。

次に鍋を概観すれば，甕と同様にタイプ間での口径差はほとんどなく，口径35㎝前後のものが一般的である。外面は頸部から口縁部にかけて撫で調整・体部中位の削りをはさみ上半にはカキ目，下半にはタタキ目が観察され，内面は，上半にカキ目，下半にあて具痕とハケ目がみられるのが一般的である。口縁部の作り出しは，2号住居でB1・B2類が確認されており甕と同様に「く」の字に仕上げるもので占められる。4号住居は，A1・A2・B1・B2類がそれぞれ確認されているが，A1・A2類が主体を占め口縁端部を丸く仕上げるものが多い。1号住居はA2・B1・B2類が確認されており，A2類は1点のみで多くはB2類で占められる。3号住居は全てA2類で，端部を丸く仕上げる。以上が鍋についてであるが，甕同様，丸くなる傾向にあるが，1号住居でB1類の多出がみられ，一概には言えない。

以上，大まかな時期設定と，その間の本遺跡でみられる土器の変遷とを概観してきたが，本遺跡は生産遺跡の性格が強く，大半は一般消費遺跡的な土器組成をとらないため，他遺跡の土器群との比較が難しい。この中で，4号住居から転用硯175の須恵器蓋が出土しており，生産遺跡のなかにあって唯一居住としての性格を強く示す遺構である。さらに推察すれば，生産遺跡のなかにあって硯を使用していたことから，4号住居は本遺跡の中枢となるものであるが，現時点では多くを語ることはできない。

今後，小出越遺跡で生産された土師器（特に杯B1類）が，他の消費遺跡で良好な資料と共伴する例が増加し，編年付けられることを期待する。

4．結　　語

ここでは，調査成果について，時代毎にその要約を整理し結語としたい。

縄文時代

1．前期・中期の土器片・石器が少数出土している。前期の資料は新潟県布目遺跡に類例がみられ，中期の資料には，加曽利EⅣ式と三十稲葉式の移行期のものが出土している。

2．縄文時代の遺物を出土する遺構は検出されていないが，形態と立地からA群土坑中の長楕円形の平面プランをもつ土坑が該期の所産と考えられる。

平安時代

1．土師器焼成に関連すると思われる遺構の集中から，土師器を作った生産遺跡と考えられる。

2．生産された土器は，伴出須恵器と土師器杯の形態・技術的変遷から，およそ8世紀末

から9世紀後半に位置付けられる。

3．本遺跡で生産された土師器は，胎土分析の結果から，周辺遺跡へ流通した可能性がある。

近・現代

1．出土遺物は，18世紀以降のもので占められ，多数の耕作痕が検出され，調査範囲は該期から現在に至るまで畑地として利用されていた。

遺跡の推定範囲

1．地形・遺物分布状況から遺跡は調査範囲の南北へ伸びると考えられ，東西約100m・南北約250mのおよそ25,000㎡にのぼると考えられる。

注

1）（鈴木　1983）の分類名称を使った。

2）非ロクロ成形甕の中には，口縁部と胴部が明瞭に区別できないもの（鉢としたほうが妥当と思われるもの）が含まれるが，その中に口縁部と胴部の調整技法が異なるものがあり，甕・鉢を区別することが困難である。また出土量が少なく，そのほとんどが4号住居からの出土であり，ここでは，それらを便儀的に甕として記す。

3）須恵器の出土量が極めて少なく，杯・杯蓋が大多数を占め，その他の器種はほとんど出土していない。

4）16号土坑は杯B_1類・5号土坑は鍋をそれぞれ焼成したものと考えられる。

5）詳しくは第Ⅴ章3で述べる。

6）剝落は，器表面が熱により断面からハジケとんだ様子を示すもので，本遺跡にあってはこれらが，土器焼成時に生じたアクシデントと考えられる。その他，報文中では，土器焼成に起因したと思われる器面の状態を，「ヒビ」・「歪み」等の語を用いて表わしている。

7）粘土紐痕としたのは，輪積みか巻き上げか不明であるために，この用語にした。

8）布目遺跡第Ⅳ群第2類は半截竹管を多用し平行沈線を描く1群で，小片のため全体を窮い知るものはないが，本遺跡の資料とも合せ該期の土器群の中には，半截竹管による平行沈線文がある程度，しかも安定して含まれるものと考えられる。

9）群馬県三原田城遺跡（小野・谷藤　1987）Ⅱ群の中に，全体の器形・頸部有段部への刺突・有段部下の半截竹管による鋸歯状平行沈線文等きわめて本遺跡の資料に近似するものがあり，報告者は東海系の木島式との関係を指摘している。現在，これら系統について論じるすべはなく，今後の資料増加を待ち整理してゆかなくてはならない問題である。

10）第10図7の底部破片には，水晶粒が多量に含まれ，これらの胎土の特徴は，長野県北信地方にみられ，強い影響を受けていると考えられる。

11）特に胴央部から底部にかけての破片が不足しており，底部が若干すぼまる可能性もあることを明記しておく。

12）（寺村　1957）・（関　1971）の分類が，（田中　1985）によって整理されている。

13) 三十稲場式の胴部文様は，刺突文と縄文の割合が最も高いが，撚糸文・条線文・貝殻条痕文・沈線文・無文なども存在する（田中　1985）。

14) 三島町上向遺跡で土師器窯が検出されたとの報道（中村孝三郎氏調査　新潟日報1987，5月12日）があり，本報告を期待する。

15) 須恵器と土師器の同時焼成は不可能であり，ここでは，両器種が時期を異にして焼成されたものと考えられようか。

16) 岸本氏（1982）は，7世紀末から8世紀初頭を概し「北陸型煮沸セット」が須恵器窯で焼成されたことを指摘し，田嶋氏（1987）は，これら土師器を須恵器窯で焼成する形態が，それ以降長く続くと考えている。

17) いずれにしても，還元焔焼成と酸化焔焼成とを1窯内で同時焼成することは不可能と考えられ，前記した例は同一窯構造で還元焔焼成と酸化焔焼成を時期を異に実施されたものとの考えが妥当と思われる。しかし，筆者自身，前記の4遺跡の資料は実見しておらず，結論じみたことは何にも言えない。したがって，ここでは報文中の指摘を述べるに留める。

18) 秋田県サシトリ遺跡・岡山県沖の店遺跡等で，土師器焼成遺構から，「はじけ割れ」・「ヒビ」・「歪み」等が観察される土器片が出土している。

19) 駒形遺跡（穴沢　1978）の報文中に，稲科植物の燃料への利用と窯構造から「均一な，しかもカロリーの高い酸素の供給力を持つ素材は，燃料消費を少なく，しかも一定に保ち，灰の残り火を利用することができるという点で――（中略）――不完全な炎から一歩進んで，黒斑（黒色煤化部分）を除くことが可能になり，均一な製品を焼成できる……」としている。本遺跡の場合，何を燃料にしたか不明であるが，器面に黒斑が観察されるものが多く，前記の論と照し合せるならば，燃料と窯構造の違いにより生じたものと理解される。

20) 鍛治跡においても同様な土坑が検出されるが，鉄滓は遺構内外ともに殆ど出土せず，羽口にいたっては皆無である。また炭窯の場合は，平窯で側壁・床面が焼固する例は多いが，本遺跡のように，まとまった土器（遺構）の出土は見られない。

21) 埴輪工房跡としての茨城県馬渡遺跡・土師器工房跡としての岩手県瀬谷子遺跡等で検出されている。

22) 今池遺跡（坂井　1987）から土師器の須恵器に対する割合は，9世紀前・中葉で2割，9世紀後半で7～8割に大きく変化するという。しかし，本遺跡の場合，須恵器が最も多出する4号住居を例にとり，仮に9世紀後半の土器比率に当てはめても，須恵器の割合は2割弱であり，器種別にも短頸壺片1点を除き，すべてが杯と杯蓋で占められる。4号住居以外では，さらにその傾向を強くし，須恵器の伴わない例も多い。

23) 本遺跡の分類では「非ロクロ成形甕」となり，大塚遺跡の資料は4号住居の266に近似する。

24) 2号住居は，土師器焼成と工房とが一体化したものとして取り扱うが，焼成部からの出土土器はほとんどなく，方形部から多量に出土する土師器を分析資料としたため，分析結果は住居の欄で処理している。

25) 本遺跡では斜面地を含め，かなり広範囲にわたり調査がなされたが，粘土採掘坑・粘土溜め遺構等の粘土採掘に関わる遺構が発見されなかった。このことは，小出越産の粘土を素材としなかったという胎土分析の結果の裏付けとなろう。

26) 椀とよく共伴関係を示す杯E類が，仮りに新しい時期（9世紀後半以降）に設定されるならば，27号土坑の存在により土師器焼成期間も同様に長期間に渡ることになる。

27) これらは，小出越遺跡以外の地で土器焼成をおこなった可能性を示唆するものであるが，それらが時間的なものなのか，それとも土器供給圏によるものなのか，また，それとはまったく関係なく，ただ単に粘土採集地点が異なるだけのものなのか，今後，前後する時期で広範囲にわたり資料分析をしてゆかねば明らかとはならない。

28) 粘土溜・井戸・工房跡・焼成坑・土器捨て場等の施設を保有し，組織的な土器製作者集団の存在が推定される（塩野　1977）。

29) 遺跡の近くの鷲宮神社は，新篇武蔵風土記稿に「土師宮ト号スヘキヲ和訓相近キヲシテ転シテ鷲明神ト唱ヘ来レリ」とあり土師氏との強い関係が考えられ（栗原　1972），土師器を専門に，かなり大がかりに生産した可能性があると思われる。

30) これらのうち，番場遺跡では出土須恵器の胎土分析を行い，小泊窯産に近似すると報告している。

31) 赤彩土器（杯・椀）は，9世紀前半に消滅すると考えられ（田嶋　1987），本遺跡では2号住居・6号土坑で赤彩土器が一定量含まれている。形態的・技術的にA_2類に近似することから，やや古い様相を示すものと思われる。

32) （白鳥　1980）では，多賀城跡より出土した土器群をA～F群の6つに区分し，杯体部下半から底部にかけて回転ヘラ削りが施されているものをC群とし，胆沢城跡第23次調査SD 114溝跡第3層出土の一括資料と対比し，9世紀初頭～中葉と位置付けている。一方，福島県広網遺跡（柳田　1985）では，土師器の杯をa類とb類の二者に分類し，口径に対して底径の割合の大きいものをa類，小さいものをb類とし，底径の大きいa類がb類に先行するものとして，a類を8世紀末～9世紀初頭，b類を9世紀前半代～中葉としている。本遺跡における杯A_1・A_2類は，底径指数が50以上で，広網遺跡のa類と類似する。

33) この他に須恵器を模倣したと思われるものは，3号住居131の土師器蓋・4号住居151・193の土師器蓋，16号土坑381の盤等が存在する。

引　用　文　献

秋田県教育委員会　1976　「サシトリ台遺跡」『秋田県文化財調査報告書第37集　能代・山本地区広域農道建設に伴う発掘調査報告書』

穴沢義功　1978　「第9章　土師窯跡の調査と研究」『駒形遺跡　第1・2次発掘調査報告書』　駒形遺跡発掘調査団

安孫子昭二　他　1981　「第Ⅱ章　地域別報告」『神奈川考古　第11号』　神奈川考古同人会

伊藤　晃　他　1981　「沖の店遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』　岡山県教育委員会

大塚孝司・谷井　彪　他　1982　「第8節　ⅩⅣ期　第5章　縄文中期土器群の変遷　縄文中期土器群の再編」『研究紀要』　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

小野　昭・小熊博史　1987　「巻町布目遺跡の調査」『巻町史研究Ⅲ』　新潟県西蒲原郡巻町

小野和之・谷藤保彦　他　1987　「三原田城遺跡」『関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書　第13集』　群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

川上貞雄　他　1981　『五泉市文化財調査報告(2)　山崎須恵窯址』　五泉市教育委員会

川上貞雄　他　1982　『加治川村文化財調査報告(1)　貝屋須恵窯址』　加治川村教育委員会

岸本雅敏　1982　「東江上遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町土器・石器編―』　上市町教育委

員会
岸本雅敏・山本正敏　1986　「南太閤山Ⅰ遺跡」『都市計画街路　七美・太閤山・高岡線内遺跡群　発掘調査概要(4)』　富山県教育委員会
木太久守　他　1986　『北九州市埋蔵文化財調査報告書第47集　長野Ａ遺跡１』　㈶北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
草間俊一・伊藤鉄夫・伊藤陽夫・及川清介　1971　『瀬谷子遺跡　第三次緊急調査報告』　江刺市教育委員会・岩手県文化財愛護会
栗原文蔵・山本良知・中島利治・小林重義　1972　『東北縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　水深』　日本道路公団・埼玉県遺跡調査会
小島幸雄　他　1983　「末野古窯跡群」『新潟県文化財調査年報第22　保倉川流域』　新潟県教育委員会
小宮恒雄　1986　「須恵器以前の土器の生産と流通」『岩波講座　日本考古学３』　岩波書店
坂井秀弥　他　1984　「今池遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集』　新潟県教育委員会
坂井秀弥　他　1986　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集　一之口遺跡西地区』　新潟県教育委員会
坂井秀弥　1987　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集　三島郡出雲崎町番場遺跡』　新潟県教育委員会
塩野　博　1977　「土師（土師器）製作遺跡について」『月刊文化財　第167巻』　第一法規出版
下宿内山遺跡調査団　1978　『下宿内山２』　下宿内山調査会
下村登良男　他　1976　『水池土器製作跡（水池遺跡）発掘調査中間報告』　明和町教育委員会
白鳥良一　1980　「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』　宮城県多賀城跡調査研究所
鈴木郁夫　1983　「Ⅰ　地形分類図」『新潟県上越地域土地分類基本調査　糸魚川』　新潟県
鈴木道之助　1983　「石鏃」『縄文文化の研究　７』　雄山閣
関　雅之　1971　『耳取遺跡』　見附市教育委員会
田嶋明人　1987　「第４章　第３節　古代土器の編年軸設定」『篠原遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター
高橋　保　他　1986　「岩野Ｅ遺跡・岩野Ａ遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集』　新潟県教育委員会
田中耕作　1985　「所謂　三十稲場式土器　の成立について」『信濃　第37巻第４号』　信濃史学会
谷本鋭次　1973　「落河原遺跡」『三重県埋蔵文化財調査報告15』　三重県教育委員会
土田孝雄　1986　「岩野Ａ遺跡・原山遺跡・新割遺跡・道者ハバ遺跡」『糸魚川市史　資料集１』　糸魚川市
寺村光晴　1957　「三島郡十二遺跡Ａ地点出土の土器」『越佐研究　第12集』　新潟県人文研究会
田海義正　1987　「７．東カナクソ谷遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告第47』　新潟県教育委員会
戸根与八郎　1986　「真木山窯址群」『新潟県史　通史編１』　新潟県
中川成夫他　1973　「笹神村文化財調査報告４　狼沢窯址群の調査」　笹神村教育委員会
阪田正一　他　1984　『萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　八千代市権現後遺跡』　㈶千葉県文化財センター
柳田和久　他　1985　『広網遺跡』　郡山市教育委員会
結城慎一　他　1982　『仙台市文化財調査報告書第35集　南小泉遺跡』　仙台市教育委員会
吉岡康暢　1983　「奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江荘』　松任市教育委員会
和田壽久　他　1987　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第46集　岩野下遺跡』　新潟県教育委員会

第4表　平安時代土器観察表

挿図No	出土地点	器種・分類	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	黒斑	ハジケ	技法
1	1号住居カマド	土師杯C 2	13.4・3.9・5.4	赤色	小砂利を含む	良	1／2	体部外面	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
2	〃	〃 C 2	13.6・4.4・5.7	赤色 一部外面褐色	小砂粒多く含む	良	4／5	体部外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り
3	〃	〃	13.0・－・－	赤色	砂粒を含む	良	口縁1／5			ロクロ撫で
4	〃	〃	13.4・－・－	褐色	砂粒を含む	良好	口縁1／6			ロクロ撫で
5	〃	〃 E	－・－・6.8	褐色	砂粒を含む	良好	底部4／5	底部外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り
6	〃	〃	－・－・－	褐色	緻密	良好	底部1／8			ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下半削り
7	〃	土師甕B 2	20.0・－・－	明褐色	小砂粒を若干含む	良	口縁1／7			ロクロ撫で，内面カキ目
8	〃	〃 B 1	20.6・－・－	褐色	砂粒を若干含む	良	口縁1／6			ロクロ撫で，外面カキ目
9	1号住居	土師杯A 1	11.8・3.2・6.0	赤褐色	白色粒を若干含む	良	1／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り
10	〃	〃 A 1	12.2・3.6・6.6	赤色	緻密	良好	1／3	体部内外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り
11	〃	〃 A 1	－・－・6.4	赤色	緻密	良好	底部1／4			ロクロ撫で，底部回転糸切り
12	〃	〃 B 1	12.0・－・－	褐色	白色粒子を若干含む	不良	口縁1／2			ロクロ撫で
13	〃	〃 B 1	13.0・2.6・6.3	明褐色	細砂を多く含む	不良	2／5	底部外面	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
14	〃	〃 B 1	12.0・3.6・5.6	褐色	白色粒を多く含む	良	9／10	体部外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り
15	〃	〃 B 1	13.2・3.5・6.6	褐色	砂粒を含む	良	1／3	底部外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り
16	〃	〃 B 1	－・－・6.0	(明)褐色	砂粒を若干含む	良好	底部1／3	底部外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り
17	〃	〃 B 1	－・－・6.0	明褐色	白色粒を含む	不良	1／8			ロクロ撫で，底部回転糸切り
18	〃	〃 B 1	－・－・6.1	褐色	やや粗い	不良	底部完形	底部外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り
19	〃	〃 C 1	12.8・3.8・4.9	褐色	白色粒・砂粒を含む	良	1／4			ロクロ撫で，底部回転糸切り
20	〃	〃 C 1	12.0・－・－	褐色	砂粒を含む	良好	1／8			ロクロ撫で
21	〃	〃 C 3	13.0・3.4・6.0	内赤色 外褐色	白色粒を多く含む	良	4／5			ロクロ撫で，底部回転糸切り
22	〃	〃 C 3	12.8・3.6・5.4	赤褐色	白色粒を多く含む	良	9／10			ロクロ撫で，底部回転糸切り
23	〃	〃 C 3	13.2・－・－	褐色	小砂利を若干含む	良	口縁1／5			ロクロ撫で
24	〃	〃 C 3	12.6・3.4・6.0	褐色	やや粗く，白色粒を含む	良	2／3	口縁部内面	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
25	〃	〃 C 3	14.2・－・－	褐色	白色粒子を若干含む	良	口縁1／4		有	ロクロ撫で
26	〃	〃 D	14.0・－・－	褐色	緻密	良好	1／8			ロクロ撫で
27	〃	〃 D	15.3・－・－	褐色	砂粒を含む	良	口縁1／6			ロクロ撫で
28	〃	〃 D	－・－・7	赤褐色	緻密	良好	底部3／4			ロクロ撫で→ミガキ，底部回転糸切り
29	〃	〃 A 1	11.2・3.8・6.4	赤褐色	白色粒を若干含む	良	1／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り
30	〃	〃	－・－・6.8	褐色	砂粒を含む	良	底部1／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り
31	〃	〃	16.7・－・－	灰褐色	細かい白色粒を含む	不良	口縁1／4	体部外面		磨耗が著しく不明
32	〃	〃	14.2・－・－	褐色	細砂を若干含む	良	1／8			ロクロ撫で

挿図No	出土地点	器種・分類	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	黒斑	ハジケ	技法
33	1号住居	土師杯	－・－・7.2	内黒色 外褐色	緻密	良好	底部1／6	底部外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り
34	〃	〃	－・－・5.6	褐色	白色粒を若干含む	良好	底部2／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り→削り，体部下半削り
35	〃	土師黒色土器	17.0・－・－	内黒色 外赤色	緻密	良好	1／10			ロクロ撫で
36	〃	土師椀A	14.0・4.8・6.0	褐色	小砂粒を含む	不良	1／4			ロクロ撫で，底部回転糸切り
37	〃	土師鉢	10.2・－・－	褐色	砂粒を多く含む	良	1／7			ロクロ撫で
38	〃	土師小型甕A2	10.9・－・－	褐色	砂粒を含む	良	1／14			ロクロ撫で
39	〃	〃 A2	11.0・－・－	褐色	砂利を多く含む	不良				ロクロ撫で
40	〃	〃 A2	10.6・－・－	褐色	砂利を含む	良	1／12			ロクロ撫で
41	〃	〃 B1	11.0・－・－	赤色	砂粒を含む	不良	1／6			ロクロ撫で
42	〃	〃 B1	12.0・－・－	褐色	砂粒を多く含む	良	1／7	口縁から体部		ロクロ撫で
43	〃	〃 A2	－・－・－	赤色	細砂を含む	不良				ロクロ撫で
44	〃	〃 B2	－・－・－	赤色	小砂利を若干含む	良好				ロクロ撫で
45	〃	〃 A2	－・－・－	褐色	砂粒を多く含む	良				ロクロ撫で
46	〃	〃 B2	－・－・－	褐色	緻密	良好	1／11			ロクロ撫で
47	〃	〃 A1	－・－・－	褐色	砂粒を多く含む	良				ロクロ撫で
48	〃	〃	－・－・7.8	褐色	白色粒子を含む	良	底部1／4			磨耗が著しく不明
49	〃	土師甕A1	15.0・－・－	褐色	白色粒を多く含む	良	口縁1／8			ロクロ撫で，外面カキ目
50	〃	〃 A1	17.8・－・－	褐色	白色粒を多量に含む，粗い	良	1／7			ロクロ撫で，外面カキ目
51	〃	〃 A2	22.6・－・－	褐色	砂粒を多く含む	良	1／8			ロクロ撫で，内外面カキ目
52	〃	〃 A1	24.6・－・－	褐色	砂粒を含む		口縁1/12			ロクロ撫で
53	〃	〃 A2	21.0・－・－	褐色	砂粒を含む	良	口縁1／6			ロクロ撫で，内外面カキ目
54	〃	〃 B1	16.8・－・－	赤色	白色粒を多く含む	良	口縁1/10			ロクロ撫で，内面カキ目
55	〃	〃 D2	19.0・－・－	明褐色	小砂利を多く含む	良	口縁1／8			ロクロ撫で
56	〃	〃 B1	22.0・－・－	褐色	小砂利を若干含む	良好	1／4			内外面カキ目，口縁部外面ロクロ撫で
57	〃	〃 B1	15.6・－・－	褐色	緻密	良好	口縁1/10			ロクロ撫で
58	〃	〃	27.2・－・－	褐色	砂粒を多く含む	良				ロクロ撫で
59	〃	〃 B2	20.5・－・－	褐色	白色粒・小砂利を多く含む	良	口縁1/12			ロクロ撫で
60	〃	土師鉢	－・－・－	内褐色 外暗褐色	砂粒を含む	良好				磨耗が著しく不明
61	〃	土師鍋B1	39.7・－・－	内褐色 外赤褐色	砂粒を多少含む	良好	1／12	外面		外面ロクロ撫で，内面カキ目
62	〃	〃 B2	40.4・－・－	褐色	砂粒を含む	良	1／20			外面ロクロ撫で，内面カキ目
63	〃	〃 A2	41.4・－・－	明褐色	茶色の砂粒を多く含む	不良	1／25			外面ロクロ撫で，内面カキ目
64	〃	〃 B1	－・－・－	褐色	白色粒を多量に含む	良好	1／10			外面ロクロ撫で，内面カキ目
65	〃	〃 B1	－・－・－	赤色	小砂利を多く含む	良		体部外面		外面ロクロ撫で，内面カキ目
66	〃	〃 B2	－・－・－	褐色	砂粒を含む	良				外面ロクロ撫で
67	〃	〃 B2	36.8・14.0・－	赤褐色	砂粒を多く含む	良	1／6			外面上撫で，中削り，下叩き目，内面上カキ目，下押圧の後ハケ目
68	2号住居	須恵蓋	12.2・2.0・－	茶褐色	緻密	良好	4／5			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り

挿図No	出土地点	器種・分類	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	黒斑	ハジケ	技法
69	2号住居	須恵蓋	12.0・3.0・－	明灰褐色	細砂を含む	良	1／3			ロクロ撫で，内面に回転糸切り痕を残す
70	〃	〃	－・－・－	灰褐色	緻密	良好	1／3			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り，内面赤彩
71	〃	須恵有台杯	12.6・3.8・8.3	青灰色	白色粒子を少量含む，密	良好	1／10			ロクロ撫で
72	〃	〃	－・－・7.2	灰褐色	小礫を若干含む	良	1／3			ロクロ撫で，底部回転ヘラ切り
73	〃	須恵杯	11.4・3.1・8.4	灰褐色	緻密	良	1／3			ロクロ撫で，底部回転ヘラ切り
74	〃	〃	－・－・9.4	灰褐色	細砂粒を含む	良	底部1／5			ロクロ撫で，底部回転ヘラ切り
75	〃	〃	11.8・－・－	灰褐色	砂粒を若干含む	良	1／10			ロクロ撫で
76	〃	〃	11.6・－・－	灰褐色	砂粒を若干含む	良	1／10			ロクロ撫で
77	〃	土師杯B2	11.6・3.1・6.2	褐色	砂粒を若干含む	良	1／2	体部外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下部回転ヘラ削り
78	〃	〃 B2	13.0・3.5・6.2	褐色	小砂利を2・3含む	良	1／2	体部外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下端回転ヘラ削り
79	〃	〃 B2	12.7・3.0・6.0	赤色	小砂利を2・3含む	良	1／10			ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下端回転ヘラ削り
80	〃	〃 B2	11.8・3.3・6.4	赤色	白色粒子を含む	良	1／10			ロクロ撫で，底部回転糸切り
81	〃	〃 B2	12.6・3.6・6.4	赤褐色	白色粒子・小礫を含む	良	底4／5 体1／8	底部内面		ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下端回転ヘラ削り
82	〃	〃 B2	13.3・3.5・7.4	赤色	小砂利を2・3含む	良	1／5			ロクロ撫で
83	〃	〃 B2	13.0・2.9・6.5	赤褐色	白色粒子を含む	不良	1／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下端回転ヘラ削り
84	〃	〃 B2	12.8・3.8・6.5	明褐色	砂粒を多く含む	良	1／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下端手持ヘラ削り
85	〃	〃 B2	14.2・3.4・6.5	褐色	小礫・白色粒子を若干含む	良	1／4	底部外面	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下端回転ヘラ削り
86	〃	〃 B2	11.9・－・－	褐色	白色粒子を含む緻密	良好	口縁1／6	口縁部外面		ロクロ撫で
87	〃	〃 B2	11.8・－・－	褐色	白色粒子を含む	良	口縁1／8			ロクロ撫で，体部外面下端回転ヘラ削り
88	〃	〃 B2	12.0・－・－	褐色	砂粒を含む	良	口縁1/10	体部外面		ロクロ撫で
89	〃	〃 B2	13.0・－・－	赤褐色	白色粒子を含む緻密	良好	体部1／2			ロクロ撫で
90	〃	〃 B2	15.3・－・－	褐色	砂粒を含む	良	口縁1/11	内外面		ロクロ撫で
91	〃	〃 B2	－・－・6.5	褐色	緻密	不良	底部1／5			ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下端回転ヘラ削り
92	〃	〃	－・－・7.4	明褐色	やや粗い	良	1／2			ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下端回転ヘラ削り
93	〃	〃 A2	12.9・4.0・7.6	褐色	内面に黒色粒子を含む	良	3／4	内外面全体	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下半回転ヘラ削り
94	〃	〃 A2	12.2・4.0・6.6	明褐色	白色小礫を多く含む	良	底4／5 体1／8	底部内面		ロクロ撫で，底部回転糸切り

挿図No	出土地点	器種・分類	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	黒斑	パテ	技法
95	2号住居	土師杯A 2	13.5・3.5・7.3	赤褐色	白色粒子を多く含む	不良	9／10	底部外面	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下半回転ヘラ削り
96	〃	〃 A 2	13.9・3.9・8.6	褐色	内面に黒色粒子を含む	良好			有	ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下半回転ヘラ削り
97	〃	〃 A 2	13.5・3.2・7.8							ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下半回転ヘラ削り
98	〃	〃 A 2	14.5・3.6・8.0	褐色	小礫を若干含む	良	1／3	外面底部～体部	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下端回転ヘラ削り
99	〃	〃 A 2	14.0・4.0・8.0	褐色	白色小礫を若干含む	良	1／2	全体にボツボツ		ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下半回転ヘラ削り
100	〃	〃 A 2	14.6・－・－	褐色	砂粒を含む	良	口縁1/14	体部内面全体	有	ロクロ撫で
101	〃	〃	14.2・－・－	褐色	小礫を含む	良	口縁1／8	体部外面にうっすら	有	ロクロ撫で
102	〃	土師赤彩土器	12.3・－・－	赤褐色	白色粒子を少量含む	良	口縁1／8			ロクロ撫で
103	〃	〃	18.2・－・－	赤褐色	砂粒を少量含む	良	口縁1／6			ロクロ撫で
104	〃	土師椀A	12.3・4.5・4.0	褐色	砂粒を含む	不良	1／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り
105	〃	土師鉢A 2	20 ・－・－	暗褐色	砂粒を多く含む	不良	1／3	内外面		ロクロ撫で
106	〃	〃 A 1	23.7・－・－	暗褐色	砂粒を多く含む	不良	口縁1/12	内外面		ロクロ撫で
107	〃	土師小型甕A 1	14.0・－・－	明褐色	小礫を少量含む	不良	1／10			ロクロ撫で
108	〃	〃 A 1	12.8・－・－	明褐色	砂粒を含む	不良	1／10？			ロクロ撫で
109	〃	〃 A 1	13.0・12.4・7.5	明褐色	小礫を多く含む	不良	1／2	外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り
110	〃	〃 A 1	－・－・－	明褐色	小砂利を若干含む	良	少々		有	ロクロ撫で
111	〃	〃 A 1	－・－・－	褐色	小礫・砂粒を含む	良	少々			ロクロ撫で
112	〃	〃 A 1	－・－・－	明褐色	砂粒を含む	良				ロクロ撫で，内面カキ目
113	〃	〃	－・－・7.8	褐色	小礫・砂粒を含む	良	底部1／2	内面		ロクロ撫で，底部回転糸切り
114	〃	〃	－・－・8.2	褐色	小砂利，黒色粒を多く含む	良好	底部4／5	底部内面	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
115	〃	土師甕B 1	22.0・－・－	褐色	緻密・小礫	良好	口縁1／8	口縁部内面		ロクロ撫で，体部内外面カキ目
116	〃	〃 B 1	20.2・－・－	褐色	砂粒を多く含む	良好	全体1／2			ロクロ撫で，体部外面上カキ目，下平行叩き目，内面カキ目，ハケ目
117	〃	〃 B 1	18.4・－・－	褐色	小礫・砂粒を多く含む	良好	口縁1／7			ロクロ撫で，体部内外面カキ目
118	〃	〃 B 1	18.8・－・－	褐色	砂粒を非常に多く含む	良好	1／3			ロクロ撫で，体部外面カキ目
119	〃	〃 B 1	16.4・－・－	明褐色	砂粒を含む	良好	口縁1/10			ロクロ撫で
120	〃	〃 B 1	18.2・－・－	明褐色	砂粒を多く含む	良好	口縁1/12			外面ロクロ撫で，内面カキ目
121	〃	〃 B 1	20.6・－・－	褐色	小礫・砂粒を含む	良好	口縁1／6	口縁部内外面		ロクロ撫で
122	〃	〃 B 2	23.0・－・－	明褐色	砂粒を含む	良好	口縁1/12			ロクロ撫で，内面カキ目
123	〃	〃 B 2	20.4・－・－	赤褐色	白色粒子・砂粒を含む	良	口縁1／6			ロクロ撫で，体部外面下平行叩き目，内面下同心円文
124	〃	〃 D	22.0・－・－	褐色	砂粒を含む	良	1／15			ロクロ撫で，体部外面カキ目

挿図No	出土地点	器種・分類	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	黒斑	ハジケ	技法
125	2号住居	土師甕B 1	22.0・－・－	褐色	細砂を含む	良	口縁1／4	体部外面		ロクロ撫で，体部内外面カキ目
126	〃	土師鍋B 1	33.0・－・－	明褐色	砂粒を多く含み小礫少々	良	1／15			ロクロ撫で，内外面カキ目
127	〃	〃 B 2	34.7・－・－	褐色	砂粒を含む	良好	口縁1/10	口縁部外面		ロクロ撫で，内外面カキ目
128	〃	〃 B 1	38.0・－・－	褐色	砂粒を含む	良	1／15	口縁部外面		ロクロ撫で，内外面カキ目
129	〃	〃 B 2	38.4・－・－	褐色	小礫・砂粒を多量に含む	良	1／4			ロクロ撫で，体部外面上カキ目，下削り，内面カキ目
130	3号住居	須恵蓋	12.4・－・－	灰白色	細粒を含む	不良	2／5			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り
131	〃	土師蓋	17.3・－・－	褐色	細砂を含む・白色粒少々	不良	2／5			ロクロ撫で
132	〃	須恵杯	－・－・8.2	灰白色	白色粒少々	良	底部完形			底部ヘラ切り，内面ロクロ撫で
133	〃	土師杯E	13.0・－・－	褐色	比較的緻密	不良	口縁1／9			ロクロ撫で
134	〃	〃 E	13.2・－・－	褐色	比較的緻密	不良	口縁1／9			ロクロ撫で
135	〃	〃 B 2	14.3・3.7・5.8	褐色	砂粒を少々	不良	4／5			ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部下端回転ヘラ削り
136	〃	〃 B 2	－・－・6.4	褐色	比較的緻密	良	底部1／4			ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部下端回転ヘラ削り
137	〃	〃 B 1	－・－・6.0	褐色		不良	底部1／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り
138	〃	土師小型甕	－・－・6.8	褐色	砂粒少々	良	底部1／2			ロクロ撫で，底部回転糸切り
139	〃	土師甕D 2	18.0・－・－	褐色	細砂多し	良	1／4			ロクロ撫で，内面カキ目
140	〃	〃 E	23.1・－・－	褐色	砂粒少々	良	1／6			ロクロ撫で，内外面カキ目
141	〃	〃 D 1	23.0・－・－	内褐色 外(赤)褐色	砂粒多し	良	1／9			ロクロ撫で，内外面カキ目
142	〃	〃 D 1	23.0・－・－	赤褐色	小礫・砂粒多し・粗い	不良	1／10			ロクロ撫で，体部カキ目
143	〃	〃 D 1	23.9・－・－	褐色	細砂多し・砂粒少々	良	1／6			ロクロ撫で，体部外面カキ目
144	〃	土師台付大型皿	37.0・－・－	褐色	細粒を含む	良好	1／3	体部外面		ロクロ撫で，外面下ヘラ削り，内面カキ目，底部内面ハケ目，底部外面撫で→カキ目
145	〃	土師鍋A 2	33.9・－・－	明褐色	砂粒を多く含む	良	1／8			ロクロ撫で
146	〃	〃 A 2	37.5・－・－	内明褐色 外褐色	砂粒を多く含む	良	1／5			ロクロ撫で，体部外面下叩き目，内面カキ目
147	〃	〃 A 1	40.6・－・－	(茶)褐色	砂粒を多く含む	良	1／5			ロクロ撫で，体部外面下叩き目，体部内面上カキ目，下同心円文→ハケ目
148	4号住居P 1	須恵杯	12.0・3.8・7.0	灰白色	細砂多し	良	1／6			ロクロ撫で，底部ヘラ切り
149	〃 P 2	土師杯C 1	14.0・3.8・6.0	内褐色 外明褐色	白色砂粒を含む・小礫少々	不良	1／3		有	磨耗している
150	〃 P 4	土師小型甕	－・－・7.0	赤褐色	細砂を多く含む	良	底部2／3			底部内面ロクロ撫で，外面回転糸切り
151	〃 P 1	土師蓋	16.0・－・－	明褐色	細砂を含む	不良	1／12			ロクロ撫で
152	〃 P 2	土師甕	－・－・－							外面平行叩き目，内面ハケ目
153	〃 P 3	須恵蓋	12.0・－・－	灰褐色	白色細砂わずか	良好	1／3			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り
154	〃 P 3	土師杯B 1	13.1・－・－	赤褐色	白色細砂わずか	良	1／8			ロクロ撫で

挿図No	出土地点	器種・分類	法量(cm)口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	黒斑	ハジケ	技法
155	4号住居P3	土師杯B1	12.8・3.8・5.5	褐色	白色小礫少々	良	1／14	外面にうっすら		ロクロ撫で，底部回転糸切り
156	〃 P3	〃 B1	13.2・3.5・6.2	内茶褐色 外赤褐色	小礫含む・白色砂粒少々	良	ほぼ完形		有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
157	〃 P3	〃 B1	13.2・3.3・5.8	茶褐色	小礫多し・細砂含む	良	2／3強		有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
158	〃 P3	〃 B1	13.7・3.5・6.5	褐色	小礫少々・白色砂粒多し	不良	1／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り
159	〃 P3	〃 B1	13.6・－・－	茶褐色	緻密	良	口縁1／6			ロクロ撫で
160	〃 P3	〃 B1	14.0・3.9・6.8	茶褐色	砂粒多し	良	2／3		有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
161	〃 P3	〃 B1	14.0・4.0・6.4	茶褐色	小礫少々	不良	ほぼ完形		有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
162	〃 P3	〃 B1	－・－・6.9	明褐色	白色砂粒多し	良	底部1／4			ロクロ撫で，底部回転糸切り
163	〃 P3	土師甕C	20.0・－・－	明褐色	砂粒少々	良	口縁1／7			ロクロ撫で，内面カキ目
164	〃 P3	〃 C	20.7・－・－	明褐色	砂粒少々	良	口縁1／4			ロクロ撫で，体部外面下半叩き目
165	〃 P3	〃 C	25.0・－・－	内赤褐色 外褐色	細砂を含む	良	口縁1／6			ロクロ撫で，体部上内外面カキ目，体部外面下平行叩き目，内面下ハケ目
166	4号住居	須恵蓋	11.0・1.9・－	灰褐色	細砂多し	良好	2／3			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り
167	〃	〃	12.0・2.7・－	黒灰褐色	白色小礫多し	良好	1／2			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り
168	〃	〃	12.6・－・－	灰褐色	細砂多し	良	1／5			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り
169	〃	〃	13.0・－・－	灰褐色	細砂多し	良好	1／2			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り
170	〃	〃	13.0・－・－	灰白色	細砂多し	良	1／4			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り
171	〃	〃	12.6・－・－	灰褐色	細砂少々	良	1／2強			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り
172	〃	〃	13.0・－・－	灰白色	細砂多し	不良	口縁1／2			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り
173	〃	〃	13.6・－・－	灰褐色	緻密	良	1／5			ロクロ撫で
174	〃	〃	14.0・－・－	黒灰褐色	緻密・細砂を含む	良好	1／6			ロクロ撫で
175	〃	〃	－・－・－	暗褐色	砂粒少々	良好	1／4			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り
176	〃	〃	－・－・－	内灰褐色 外暗褐色	細砂多し	良好	1／2			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り
177	〃	〃	14.8・－・－	灰白色	細砂多し	不良	口縁1/10			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り
178	〃	須恵有台杯	10.0・4.0・7.4	明灰色	細砂多し	良	1／3			ロクロ撫で，底部回転ヘラ切り
179	〃	〃	－・－・7.4	内灰色 外暗灰色	細砂多し	良好	底部1／2			ロクロ撫で，底部外面一部に回転糸切り
180	〃	〃	10.8・3.7・8.0	明灰色	細砂多し	良	底部1／6			ロクロ撫で
181	〃	〃	－・4.5・7.4	内灰色 外黒灰褐	細砂少々	良好	4／5		有	ロクロ撫で，底部回転ヘラ切り
182	〃	〃	－・－・7.8	灰褐色	細砂少々	良	底部1/12			ロクロ撫で，底部回転糸切り
183	〃	〃	11.6・4,0・7.0	灰褐色	細砂多し	良好	1／2		有	ロクロ撫で，底部回転ヘラ切り
184	〃	須恵杯	11.0・3.8・8.0	灰褐色	細砂多し	良好	口縁1／7			ロクロ撫で，底部回転ヘラ切り
185	〃	〃	12.0・3.4・7.6	灰褐色	細砂少々	不良	1／6			ロクロ撫で，底部回転ヘラ切り
186	〃	〃	11.5・3.0・9.0	褐色	細砂多し	良	1／2			ロクロ撫で，底部回転ヘラ切り

挿図No	出土地点	器種・分類	法量(cm)口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	黒斑	ﾊｼｹ	技法
187	4号住居	須恵杯	12.0・－・－	灰褐色	細砂少々含むが緻密	良	口縁1/10			ロクロ撫で
188	〃	〃	12.0・－・－	明灰褐色	細砂多し	不良	口縁1/10			ロクロ撫で
189	〃	〃	12.6・－・－	灰褐色	小礫わずか・細砂少々	不良	口縁1／7			ロクロ撫で
190	〃	〃	－・－・8.0	褐色	細砂多し	良	底部1／4			ロクロ撫で，底部回転ヘラ切り
191	〃	須恵短頸壺	16.0・－・－	灰褐色	細砂少々	良好	口縁1/10			ロクロ撫で
192	〃	須恵杯	12.0・－・－	明褐色	細砂少々	不良	口縁1/14			ロクロ撫で
193	〃	土師蓋	15.0・－・－	褐色	小礫少々	良	口縁1／8			ロクロ撫で，内面黒色処理
194	〃	土師杯B1	13.0・3.5・6.0	明褐色	細砂・白色粒多し	良	1／2			ロクロ撫で，底部回転糸切り
195	〃	〃 B1	13.1・3.4・6.0	赤褐色	砂粒少々	不良	1／2	底部外面にうっすら		ロクロ撫で，底部回転糸切り
196	〃	〃 B1	13.4・－・－	赤褐色	白色細砂少々	不良	口縁1／4	体部外面		ロクロ撫で
197	〃	〃 C1	13.3・3.8・5.7	(茶)褐色	白色砂粒を含む	不良	1／3	底部外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り(底部の角は磨耗している)
198	〃	〃 B1	13.8・3.6・6.4	赤褐色	細砂・白色粒多し	良	4／5	外面下半		ロクロ撫で，底部回転糸切り
199	〃	〃 B1	14.0・3.6・6.6	褐色	細砂多し	良	4／5	体部外面にうっすら		ロクロ撫で，底部回転糸切り
200	〃	〃 B1	14.0・4.0・6.4	内褐色外赤褐色	細砂を含む	良	2／3	口縁部内面にうっすら	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
201	〃	〃 B1	14.5・3.4・6.5	赤褐色	白色粒・砂粒少々	不良	1／6			体部磨耗著しい，底部回転糸切り
202	〃	〃 B1	14.4・3.5・6.3	(茶)褐色	細砂を含むが緻密	良好	1／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り
203	〃	〃 B1	14.5・3.7・7.1	赤褐色	白色砂粒を多く含む	不良	1／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り
204	〃	〃 B1	14.8・－・－	褐色	緻密	良	1／6	体部外面		ロクロ撫で
205	〃	〃 B1	15.0・－・－	明褐色	細砂少々	不良	1／4		有	ロクロ撫で
206	〃	〃	10.5・2.4・5.6	内明褐色外褐色	砂粒多し	不良	完形	体部外面下半	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下半ヘラ削り
207	〃	〃	12.0・－・－	赤褐色	白色細砂少々	良	口縁1／2			ロクロ撫で
208	〃	〃	12.4・－・－	褐色	細砂を少し含むが緻密	良	口縁1／5	体部内面にうっすら	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
209	〃	土師杯A1	12.2・3.7・6.8	褐色	細砂を少し含むが緻密	良好	1／2			ロクロ撫で，底部回転糸切り
210	〃	〃 A1	12.6・3.9・6.5	内赤褐色外褐色	細砂多し	良	ほぼ完形		有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
211	〃	〃	13.0・－・－	明褐色	白色砂粒含む	良	口縁1／2			ロクロ撫で
212	〃	〃 B1	12.6・3.7・6.2	褐色	白色粒多し	良	3／4	内部全体にうっすら		ロクロ撫で，底部回転糸切り
213	〃	〃 B1	13.0・3.8・5.8	赤褐色	砂粒少々	不良	口縁1／4			ロクロ撫で
214	〃	〃 C1	12.8・4.0・6.2	内(茶)褐色外褐色	白色粒多し	良	1／6	外面にうっすら		ロクロ撫で，底部回転糸切り
215	〃	〃 A1	12.8・3.6・6.8	褐色	細砂少々	不良	1／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り
216	〃	〃	13.0・3.7・5.8	褐色	小礫わずか	良	1／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り
217	〃	〃 A2	13.7・3.5・7.2	褐色	砂粒少々	良	1／2	内外面にうっすら	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
218	〃	〃 B1	14.0・4.0・6.4	褐色	細砂を含むが緻密	良好	1／2			ロクロ撫で，底部回転糸切り
219	〃	〃 A2	14.0・4.1・6.4	褐色	細砂を含むが緻密	良	1／2			ロクロ撫で，底部回転糸切り

挿図No	出土地点	器種・分類	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	黒斑	ハジケ	技法
220	4号住居	土師杯A 2	14.2・3.9・6.2	褐色	砂粒少々	良	1／2強	外面口縁～体部		ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下端回転ヘラ削り
221	〃	〃 B 1	14.6・4.1・6.2	茶褐色	細砂多し	不良	1／2			ロクロ撫で，底部回転糸切り
222	〃	土師椀	－・－・7.0	赤褐色	砂粒多し	不良	底部1／2			磨耗が著しく不明
223	〃	土師杯	－・－・5.6	褐色	緻密	良好	底部3／4	体部外面下半		体部ロクロ撫で，体部外面下半回転ヘラ削り，底部回転糸切り
224	〃	土師足高杯	12.8・4.2・6.6	赤褐色	細砂・白色小礫を含む	良好	3／4			ロクロ撫で，底部回転糸切り
225	〃	土師鉢A 2	20.4・－・－	褐色	小砂利多し	不良	口縁1／4			ロクロ撫で
226	〃	土師甕 C	19.2・－・－	赤褐色	細砂多し	良	口縁1／4			ロクロ撫で，内外面カキ目
227	〃	〃 B 2	21.6・－・－	褐色	細砂多し緻密	良好	口縁1／4			ロクロ撫で，体部上内外面カキ目，体部下内外面ハケ目
228	〃	〃 B 2	22.2・－・－	茶褐色	砂粒少し	良	口縁・体部1／6			ロクロ撫で，体部外面カキ目，下半平行叩き目
229	〃	〃 B 2	18.0・－・－	茶褐色	砂粒多し	良	口縁2／3			ロクロ撫で，内外面カキ目
230	〃	〃 B 1	18.6・－・－	褐色	砂粒多し	良	口縁1／4			ロクロ撫で，外面カキ目
231	〃	土師小型甕B 2	10.4・－・－	赤(茶)褐色	砂粒多し	良	口縁1／7			ロクロ撫で
232	〃	〃 A 1	14.0・－・－	褐色	砂粒多し	不良	口縁1／8			ロクロ撫で
233	〃	〃 B 1	14.0・－・－	褐色	細砂多し	不良	口縁1／8			ロクロ撫で，内外面カキ目
234	〃	〃 B 1	14.0・－・－	暗褐色	細砂多し	良	口縁1/10			ロクロ撫で
235	〃	〃 A 1	14.3・－・－	茶褐色	砂粒多し	不良	口縁1/10			ロクロ撫で
236	〃	〃	－・－・7.0	内赤褐色 外暗茶褐色	砂粒多し	良	1／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下半回転ヘラ削り
237	〃	〃 A 1	－・－・－	褐色	細砂が多い	良				ロクロ撫で
238	〃	〃 A 1	9.4・－・－	褐色	細砂少々	良	口縁1/13			ロクロ撫で，内面カキ目
239	〃	〃 A 1	－・－・－	褐色	細砂多し	不良				ロクロ撫で
240	〃	〃 A 1	－・－・－	明褐色	白色小礫・砂粒少々	不良				ロクロ撫で
241	〃	〃 B 1	－・－・－	褐色	細砂が多い	良				ロクロ撫で
242	〃	〃 A 1	8.7・－・－	暗褐色	細砂を少し含む	不良	口縁1/14			ロクロ撫で
243	〃	〃	－・－・6.4	茶褐色	白色細砂多し	良	底部1/10			ロクロ撫で，底部回転糸切り
244	〃	〃	－・－・6.4	明褐色	細砂多し	良	底部3／5			底部回転糸切り
245	〃	〃	－・－・6.8	茶褐色	細砂少々	良	底部1／5			ロクロ撫で，体部外面下半回転ヘラ削り
246	〃	〃	－・－・6.0	茶褐色	細砂少々	良	底部1／6			ロクロ撫で，底部回転糸切り
247	〃	土師甕C	20.8・－・－	内褐色 外赤褐色	砂粒多し	良	口縁1／7			ロクロ撫で，内外面カキ目
248	〃	〃 B 1	22.8・－・－	褐色	細砂多し	良好	口縁1/10			ロクロ撫で，外面カキ目
249	〃	〃 C	21.2・－・－	茶褐色	砂粒多し	不良	口縁1/10			ロクロ撫で，外面カキ目
250	〃	〃 C	19.0・－・－	明褐色	砂粒多し	不良	口縁1/10			ロクロ撫で，内面カキ目
251	〃	〃 C	21.0・－・－	赤褐色	細砂多し	良	口縁1／6			ロクロ撫で，内外面カキ目

挿図No	出土地点	器種・分類	法量(cm)口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	黒斑	ハジケ	技法
252	4号住居	土師甕C	20.0・－・－	明褐色	砂粒少々含む	良	口縁1／5			ロクロ撫で，内面カキ目
253	〃	土師非ロクロ成形甕	18.0・27.0・10.0	内褐色 外暗茶褐色	砂粒多し	良好	全体1／3			口縁部外面横撫で，体部外面上縦位ハケ目，下ヘラ削り内面横位ハケ目，底部撫で
254	〃	〃	18.6・－・－	内褐色 外暗茶褐色	砂粒多し	良好	口縁1／3			口縁部横撫で，体部外面縦位ハケ目，内面横位ハケ目
255	〃	〃	－・－・－	暗褐色	砂粒多し	良	口縁少し			体部外面縦位ハケ目，内面横撫で＋縦位ハケ目
256	〃	〃	－・－・6.3	褐色	砂粒多し	良	底部2／3			体部下半及び底部外面ハケ目のち底部撫で
257	〃	〃	－・－・6.2	茶褐色	砂粒多し	良	底部完形	底部内外面～体部下半		体部下半縦位，内面横位ハケ目
258	〃	〃	－・－・－	褐色	砂粒少々	良	口縁少し			体部外面縦位ハケ目，内面横位ハケ目，口縁部横撫で
259	〃	〃	－・－・6.6	褐色	砂粒多し	良	底部1/10			体部下半外面ハケ目
260	〃	〃	－・－・8.0	茶褐色	砂粒多し	良	底部2／3			体部下半外面ハケ目
261	〃	〃	－・－・8.4	明褐色	砂粒多し	良	底部1／4			体部外面ハケ目
262	〃	〃	33.6・－・－	内茶褐色 外暗茶褐色	砂粒多し	良	口縁1/12			口縁部外面撫で，内面ハケ目，体部外面縦位ハケ目，内面横撫で
263	〃	〃	－・－・8.4	暗茶褐色	小砂利をかなり含む	良				体部下半外面縦位ハケ目，内面横位ハケ目
264	〃	〃	43.0・－・－	褐色	小礫少々	良	口縁1/10			口縁部横撫で，体部外面縦位ハケ目，内面横位ハケ目
265	〃	土師製塩土器	38.0・－・－	赤褐色	小礫わずか・細砂含む	良	口縁1/14	口縁部		体部撫で，粘土紐痕顕著
266	〃	土師非ロクロ成形甕	33.8・19.7・10.0	褐色	砂粒多し	良好	約1／4			外面縦位ハケ目，内面口縁部横位ハケ目→体部外面ハケ目→内面撫で，底部撫で
267	〃	土師鍋A1	23.0・－・－	褐色	細砂多し	良好	約1／4			ロクロ撫で，内面カキ目
268	〃	〃 A1	－・－・－	褐色	砂粒多し	良	少々			ロクロ撫で，内面カキ目
269	〃	〃 A1	－・－・－	暗茶褐色	砂粒多し	良	少々			口縁部ロクロ撫で，内面カキ目
270	〃	〃 A1	30.0・－・－	褐色	細砂少々	良好	約1／14			ロクロ撫で，体部外面上カキ目，ヘラ削り下平行叩き目，内面カキ目→内面体部下同心円文
271	〃	〃 B1	－・－・－	褐色	細砂多し	良	口縁少々			ロクロ撫で，体部カキ目
272	〃	〃 B1	－・－・－	褐色	細砂多し	良	口縁少々			ロクロ撫で，内面カキ目
273	〃	〃	28.0・－・－	茶褐色	茶色砂粒多し	良	約1／20			口縁部外面ロクロ撫で，内面カキ目
274	〃	〃 A1	31.0・－・－	茶褐色	茶色砂粒多し	良	約1／10			ロクロ撫で，内外面カキ目
275	〃	〃 A2	37.0・－・－	暗褐色	細砂多し	良	約1／8			ロクロ撫で，体部上半内外面カキ目，下半外面叩き，内面カキ目，同心円文
276	〃	〃	38.0・－・－	褐色	砂粒多し	不良	約1／8			磨耗が著しく不明

挿図No	出土地点	器種・分類	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	黒斑	ハジケ	技法
277	4号住居	土師鍋A 2	39.4・－・－	褐色	細砂多し	良	約1／9			ロクロ撫で，内外面カキ目，体部外面下叩き目，体部内面下ハケ目
278	〃	〃 B 1	29.0・－・－	内褐色 外赤褐色	細砂多し	良	約1／2			ロクロ撫で，内外面カキ目
279	〃	〃 A 2	34.6・－・－	赤褐色	白色粒少々	良	口縁1/30	口縁部内面にうっすら		ロクロ撫で，内外面カキ目
280	〃	〃 B 1	33.0・－・－	内明褐色 外茶褐色	茶色砂粒多し（白色粒も）	良	口縁1/10			ロクロ撫で，外面体部下叩き目，体部内面下半横位ハケ目
281	〃	〃 B 2	40.2・－・－	茶褐色	細砂を含むが緻密	良	口縁1/16			ロクロ撫で，内外面カキ目
282	〃	〃 B 1	37.0・－・－	明褐色	砂粒少々	不良	口縁1/12			ロクロ撫で，内面カキ目
283	1号炉	須恵蓋	13.7・－・－	灰白色	緻密	良好	口縁1／4			ロクロ撫で
284	〃	須恵杯	－・－・8.0	灰色	白色粒少々・細砂多し	良	約1／2			ロクロ撫で，底部回転ヘラ切り後撫で
285	〃	土師杯E	－・－・6.2	（茶）褐色	白色粒少々	不良	底部完形			ロクロ撫で，底部回転糸切り
286	〃	〃 E	12.2・3.4・5.8	明褐色	白色粒・白色小礫含む	不良	1／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り
287	〃	〃 E	13.0・3.5・6.6	褐色	砂粒含む，緻密	良好	1／2			ロクロ撫で，底部回転糸切り
288	〃	〃 E	13.4・4.0・6.0	褐色	小礫を若干含むが緻密	良	1／7			ロクロ撫で，底部回転糸切り
289	〃	土師椀B	－・－・6.2	赤褐色	白色粒混入・粗い	不良	底部1／4			ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下半ヘラ削り
290	〃	〃 B	－・－・6.0	明褐色		良好	底部1／3			底部回転糸切り，内面ヘラミガキ，体部外面下半回転ヘラ削り
291	〃	土師鉢	－・－・6.7	暗褐色	比較的緻密	良好	底部1／5			体部外面ヘラミガキ，内面体部上半カキ目，下半ヘラミガキ＋ハケ目
292	〃	土師非ロクロ成形甕	－・－・6.0	（赤）褐色	砂粒少々	良	底部完形			外面ハケ目，底部外面不整方向の撫で
293	〃	〃 B 2	14.0・－・－	赤褐色	砂粒多し	不良	口縁1／4			ロクロ撫で
294	〃	〃 B 1	15.7・－・－	褐色	砂粒多し	良	1／8			ロクロ撫で
295	〃	〃 B 1	14.0・－・－	褐色	砂粒多し	良	口縁1／4			ロクロ撫で
296	〃	土師甕B 1	18.0・－・－	赤褐色	砂粒少し	不良	口縁1／6			ロクロ撫で
297	〃	〃 B 2	20.0・32.5・－	赤褐色	細砂多し	良	1／2			ロクロ撫で，体部外面下平行叩き目，内面カキ目＋ハケ目
298	〃	〃 D 1	20.4・－・－	褐色	砂粒少々	良	口縁1／6			ロクロ撫で，体部外面叩き目，内面押圧痕＋カキ目
299	〃	〃 D 2	20.4・－・－	赤褐色	白色粒多し・砂粒多し	良	1／5			ロクロ撫で，内外面カキ目
300	〃	土師鍋B 2	20.6・9.7・3.8	褐色	細砂少々緻密	良好	ほぼ完形	底部内面にうっすら		ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下半ヘラ削り，内面ミガキ
301	〃	〃 B 2	35.1・－・－	内褐色 外赤褐色	細砂多し	良	口縁1／4			ロクロ撫で，内外面カキ目
302	〃	〃 B 2	43.0・－・－	褐色	細砂多し	良	口縁1/13			ロクロ撫で，内外面カキ目
303	22号土坑	土師杯	12.6・－・－	褐色	細砂を多く含む	良	口縁2／3	体部外面		ロクロ撫で

挿図No	出土地点	器種・分類	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	黒斑	ハジケ	技法
304	22号土坑	土師椀B	15.0・4.9・6.2	褐色	細砂を多く含む	良好	4／5		有	ロクロ撫で，底部回転糸切り，外面凸ミガキ内面ミガキ，体部外面下端回転ヘラ削り
305	〃	〃 B	16.6・－・－	(赤)褐色	細砂を多く含む	良好	1／2		有	ロクロ撫で，体部外面下半ヘラ削り，外面凸ミガキ内面ミガキ
306	〃	〃 B	17.0・4.7・7.3	褐色	細砂を多く含む	良	2／3		有	ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面凸ミガキ
307	〃	土師小型甕B1	14.0・－・－	赤褐色	砂粒を含む・白色粒も	良	1／5			ロクロ撫で
308	〃	〃 B1	13.0・－・－	赤褐色	砂粒を含む・白色粒も	良	1／6			ロクロ撫で
309	〃	土師甕D2	21.7・－・－	明褐色	細砂を含む	良	1／7			ロクロ撫で，内面カキ目
310	〃	〃	－・－・－	明褐色	細砂を含む	良好				ロクロ撫で，内外面カキ目
311	25号土坑	土師杯E	12.4・3.5・6.7	赤褐色	小礫少々	不良	1／2			磨耗が著しく不明
312	〃	〃 E	14.1・3.3・7.0	茶褐色	茶色小礫少々細粒含む	良	1／3	底部外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り
313	〃	〃 E	13.0・3.8・6.8	褐色	小礫を含むが緻密である	良	1／2	底部外面～体部		ロクロ撫で
314	〃	土師椀B	15.8・5.1・6.5	褐色	砂粒が多い	良好	1／2			ロクロ撫で，底部回転糸切り，内面ミガキ，体部下半外面回転ヘラ削り
315	〃	〃 B	16.7・5.0・6.9	(茶)褐色	砂粒を含む	良	2／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部下半外面回転ヘラ削り
316	27号土坑	土師杯E	12.0・3.6・5.4	(茶)褐色	砂粒を含む	不良	1／4			ロクロ撫で，底部回転糸切り
317	〃	〃 E	12.4・－・－	褐色	細砂を含む	良	口縁1／7	外面		ロクロ撫で
318	〃	〃 E	13.0・3.6・7.0	褐色	細砂を含む	不良	1／2			ロクロ撫で，底部回転糸切り
319	〃	〃 E	13.0・4.0・7.0	褐色	砂粒を含む	良	ほぼ完形	底部外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り
320	〃	〃 E	13.0・3.8・7.0	褐色	細砂を含む	良	ほぼ完形			ロクロ撫で，底部回転糸切り
321	〃	土師椀	14.8・4.0・6.0	茶褐色	細砂を含む	良	体部1／4	底部外面	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り，底部の歪み著しい
322	〃	土師杯	－・－・7.0	褐色	砂粒を含む	良	底部1／5	底部外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り
323	〃	〃	－・－・7.5	暗褐色	細砂を含む	良	1／4			ロクロ撫で，底部回転糸切り
324	〃	〃	－・－・7.3	褐色	緻密	良好	底部1／5			ロクロ撫で，底部回転糸切り
325	〃	須恵有台杯	－・－・10.0	暗灰褐色	細砂多し	良	底部1/10			ロクロ撫で
326	28号土坑	須恵蓋	11.8・－・－	暗灰色	白色粒多し	良好	口縁1／4			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り→ロクロ撫で
327	〃	〃	11.9・2.5・－	灰色	小礫を若干含むが緻密	良好	1／4弱			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り
328	〃	〃	12.6・－・－	灰色	細砂を若干含む	良	1／6			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り
329	〃	〃	13.0・－・－	灰色	細砂を若干含む	良好	1／10			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り
330	〃	〃	－・－・－	灰白色	細砂を含む	良	口縁1／6			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り
331	〃	須恵杯	11.2・3.2・8.6	灰色	白色粒少々・細砂多し	不良	1／3			ロクロ撫で，底部回転ヘラ切り
332	〃	土師椀B	－・－・5.9	赤褐色	白色粒・細砂含む	良好	底部1／2			ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部下端ヘラ削り

挿図No	出土地点	器種・分類	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	黒斑	ハジケ	技法
333	28号土坑	土師椀B	－・－・7.0	褐色	白色粒多し	不良	底部完形			ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部下半ヘラ削り
334	〃	土師小型甕B1	12.0・－・－	赤褐色	砂粒多し	不良	口縁1／6			磨耗が著しく不明
335	〃	土師甕B1	20.0・－・－	赤褐色	砂粒多し	不良	1／7			ロクロ撫で
336	〃	土師非ロクロ成形甕	－・－・12.8	褐色	砂粒多し	良	底部1／3			外面縦位ヘラ撫で，内面ハケ目
337	〃	〃	－・－・－	(茶)褐色	砂粒少々	良				外面縦位ハケ目，内面横位ハケ目
338	〃	〃	－・－・－	褐色	砂粒少々	良				外面縦位ハケ目，内面横位ハケ目
339	〃	土師鍋B2	29.6・－・－	褐色	細砂少々	良	1／15			ロクロ撫で
340	29号土坑	須恵蓋	13.5・－・－	灰白色	細砂を含む	良好	口縁1/10			ロクロ撫で
341	〃	土師椀B	17.0・4.9・6.8	明褐色	細砂を含む	良	口縁1／8			ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下端ヘラ削り，内面ミガキ
342	〃	土師甕E	20.0・－・－	赤褐色	砂粒少々・白色粒(小礫)	良	口縁1／8			ロクロ撫で，内面ハケ目
343	〃	〃 B2	25.6・－・－	茶褐色	細砂多し	良	1／24			ロクロ撫で
344	〃	土師鍋B2	40.2・－・－	内褐色 外赤褐色	細砂多し	良	口縁1/24			ロクロ撫で，体部内面ハケ目
345	30号土坑	土師杯	－・－・7.2	褐色	砂粒を含む	良	底部1／6			ロクロ撫で，底部回転糸切り
346	〃	土師甕B1	19.0・－・－	褐色	砂粒少々	良	口縁1／7			ロクロ撫で，磨耗している
347	〃	〃 C	22.0・－・-	褐色	茶色細砂多し	良	口縁1／5			ロクロ撫で，磨耗している，外面カキ目
348	〃	〃	20.6・－・－	(茶)褐色	砂粒多し	良	1／8			ロクロ撫で，磨耗している，体部外面カキ目，内面ハケ目
349	〃	土師鍋B1	34.0・－・－	褐色	細砂多し	良	1／4弱			ロクロ撫で，内外面カキ目
350	31号土坑	須恵蓋	11.7・2.2・－	灰白色	砂粒を含む・小礫少々	良	1／3弱			ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り
351	〃	土師杯	－・－・7.0	褐色	白色粒・砂粒を含む	良	底部1／4			底部回転糸切り
352	〃	土師小型甕B2	13.0・11.2・9.4	内褐色 外茶褐色	小礫少々・砂粒多し	良好	1／2			ロクロ撫で，底部回転糸切り
353	6号土坑	土師赤彩土器	13.1・3.9・7.3	褐色	やや粗い	不良	ほぼ完形	内外面	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下半回転ヘラ削り
354	〃	〃	13.2・4.1・7.2	(赤)褐色	白色粒を含む	良	ほぼ完形		有	ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下半回転ヘラ削り
355	〃	〃	13.8・4.1・7.4	(赤)褐色	比較的緻密	良	ほぼ完形		有	ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部回転糸切り，体部外面下半回転ヘラ削り
356	〃	〃	16.4・3.7・8.8	(赤)褐色	比較的緻密	良	約1／4		有	ロクロ撫で，体部外面下半回転ヘラ削り
357	〃	〃	17.4・5.8・7.8	(赤)褐色	比較的緻密	良好	約1／2	体部外面	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下半回転ヘラ削り
358	〃	土師小型甕A1	11.6・12.3・7.3	褐色	小礫多し・器面はやや粗い	良	ほぼ完形	体部外面	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
359	16号土坑	土師杯A1	12.0・3.7・6.3	褐色	細砂少々	良好	ほぼ完形	口縁部内面・体部		ロクロ撫で，底部回転糸切り
360	〃	〃 A1	12.7・3.9・5.8	褐色	砂粒少々	良好	ほぼ完形	口縁部外面	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り

挿図No	出土地点	器種・分類	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	黒斑	ハジケ	技法
361	16号土坑	土師杯B 1	12.9・3.3・6.2	褐色	砂粒子を多く含むが粗い	良	1／3		有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
362	〃	〃 B 1	12.4・3.8・5.8	褐色	細砂少々	良好	1／2	内外面に顕著	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
363	〃	〃 B 1	12.9・3.5・5.8	明褐色	白色粒子少々	良	1／3		有	ロクロ撫で，底部撫で調整
364	〃	〃 B 1	12.7・3.8・6.2	褐色	砂粒を含む	良	ほぼ完形	底部内面，底体部外面	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
365	〃	〃 B 1	12.3・3.2・6.0	褐色	白色粒・小礫少々	良	1／2			ロクロ撫で，底部回転糸切り
366	〃	土師椀B	16.5・4.0・6.6	褐色	小礫・白色粒子異常に多し	良	口縁1/12	外面にうっすら		ロクロ撫で，底部回転糸切り
367	〃	土師杯B 1	13.0・3.3・5.8	褐色	細砂を多く含む	良	ほぼ完形		有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
368	〃	〃 B 1	12.8・3.7・5.4	褐色	小礫少々	良好	1／3	体部外面	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
369	〃	〃 B 1	13.2・3.4・6.2	褐色	小礫を若干・白色粒若干	良	完形			ロクロ撫で，底部回転糸切り
370	〃	〃 B 1	13.0・3.7・6.8	赤褐色	白色粒を若干含む・緻密である	良好	1／2			ロクロ撫で，底部回転糸切り
371	〃	〃 B 1	13.1・3.5・6.4	褐色	白色粒子を含む	良	1／4			ロクロ撫で，底部回転糸切り，底部内面撫で
372	〃	〃 B 1	13.3・3.7・6.3	褐色	白色粒・砂粒を若干含む	良	1／2	体部外面に顕著		ロクロ撫で，底部回転糸切り
373	〃	〃 B 1	13.3・3.5・6.4	赤褐色	白色粒を多く含む	良	ほぼ完形	底部外面	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
374	〃	〃 B 1	13.6・3.4・6.2	褐色	白色粒子少々	良	1／2			ロクロ撫で，底部回転糸切り
375	〃	〃 B 1	14.6・3.3・6.8	赤褐色	白色粒子少々	良	1／2強	外面にうっすら	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
376	〃	〃 B 1	13.0・3.8・6.5	赤褐色	緻密	良好	4／5		有	ロクロ撫で，底部回転糸切り後，撫で調整
377	〃	〃 B 1	13.9・3.5・6.6	赤褐色	小礫を若干含むが緻密である	良好	3／4		有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
378	〃	〃 B 1	14.0・3.8・6.6	赤褐色	小礫少々	良好	4／5		有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
379	〃	〃 B 1	12.9・3.5・6.6	明褐色	白色粒子を含む	良	1／2			ロクロ撫で，底部回転糸切り
380	〃	〃 A 2	12.6・3.1・7.3	赤褐色	砂粒を含む	良	口縁1／7			ロクロ撫で，底部回転糸切り
381	〃	土師盤	16.8・2.6・3.0	褐色	細砂を多量に含む	良好	ほぼ完形	内面	有	ロクロ撫で，底部回転ヘラ削り
382	〃	土師椀C	19.7・－・－	内赤褐色 外褐色	緻密	良好	口縁1／5	内外面	有	内外面横位のヘラミガキ
383	〃	土師小型甕B 1	12.6・－・－	褐色	茶色粒子を含む	良	口縁1／6	体部外面		ロクロ撫で
384	〃	土師鍋B 2	24.0・－・－	内赤褐色 外褐色	小礫わずか	良好	口縁1/11			ロクロ撫で，内外面カキ目
385	〃	〃 B 2	41.7・－・－	褐色	白色粒・小礫を含む	良	1／10			ロクロ撫で，内外面カキ目
386	17号土坑	土師杯B 2	－・－・6.0	褐色	小礫を含む	良	底部2／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り，底部外面下端ヘラ削り
387	〃	土師非ロクロ成形甕	－・－・7.6	褐色	砂粒を多く含む	良好	1／6			外面縦位ハケ目，底部撫で
388	〃	土師小型甕A 1	16.2・13.8・7.4	(茶)褐色	小礫を多く含む	良	約1／2		有	ロクロ撫で，体部下半縦位ヘラ削り，体部外面カキ目
389	〃	土師鍋B 1	39.4・－・－	上褐色 下赤褐色	黒色粒子の付着	良	1／5		有	ロクロ撫で，内外面カキ目，体部外面ヘラ削り，叩き目
390	18号土坑	土師杯B 1	11.3・－・－	内暗褐色 外黄褐色	細粒を含む	良	口縁1/10	内外面		ロクロ撫で

挿図No	出土地点	器種・分類	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	黒斑	ハジケ	技法
391	18号土坑	土師杯B 1	12.0・3.7・6.2	(茶)褐色	白色粒・小礫を含む	良	3／4			ロクロ撫で，底部回転糸切り
392	〃	〃 B 1	12.5・3.7・6.2	褐色	小礫少々	良	1／2	体部外面	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
393	〃	〃 A 2	13.0・3.5・6.4	褐色	砂粒少々	良	約1／2		有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
394	〃	土師小型甕	16.0・－・－	褐色	砂粒多し	良	口縁1/10			ロクロ撫で
395	〃	土師甕A 1	21.6・－・－	褐色	細粒を含む	良	口縁1／6	外面にうっすら		ロクロ撫で
396	〃	土師鍋A 1	29.6・－・－	茶褐色	砂粒を多く含む	良	口縁1／7			ロクロ撫で，内面カキ目
397	〃	〃 A 1	40.7・－・－	内褐色 外赤褐色	砂粒を多く含む	良	口縁1/13			ロクロ撫で，内面カキ目
398	19号土坑	土師杯	12.3・－・－	暗灰色	緻密	良	口縁1／6			ロクロ撫で
399	〃	〃 D	14.2・－・－	褐色	白色粒を含む	良	口縁1／6		有	ロクロ撫で
400	〃	土師鍋B 1	34.2・－・－	褐色	細粒を含む	良	口縁1/10	口縁部内外面		ロクロ撫で，内外面カキ目
401	〃	土師鉢	－・－・22.0	褐色	砂粒を含む	良		内外面	有	ロクロ撫で，体部外面下半回転ヘラ削り，内面カキ目
402	20号土坑	土師杯C 1	11.4・3.7・4.6	褐色	細粒を含む	良	4／5	口縁部外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り
403	〃	〃 C 2	12.7・3.5・6.0	褐色	細粒を含む	不良	2／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り
404	〃	〃 B 1	12.9・3.6・6.5	褐色	緻密	良好	2／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り
405	〃	〃	12.5・－・－	褐色	白色粒を含む	不良	1／10	外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り
406	〃	〃 B 1	13.1・3.5・6.2	褐色	砂粒少々	良好	1／3	外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り
407	〃	〃	14.0・－・－	褐色	白色粒を含む	良	1／8			ロクロ撫で
408	〃	〃 C 3	13.6・4.2・6.1							ロクロ撫で，底部回転糸切り
409	〃	土師椀B	16.5・4.8・7.0	褐色	細粒を含む	不良	3／4	体部外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下半回転ヘラ削り
410	〃	〃 B	15.5・－・－	褐色	緻密	良好	体部1／8			ロクロ撫で，内外面ミガキ
411	〃	土師小型甕B 1	11.8・－・－	褐色	白色粒を含む	不良	口縁1／8			ロクロ撫で
412	〃	土師甕B 2	19.0・－・－	褐色	白色粒を含む	良	口縁1／8			ロクロ撫で，内面カキ目
413	〃	〃 B 1	－・－・－	赤褐色	砂粒を含む	不良	口縁1／8			ロクロ撫で
414	〃	土師非ロクロ成形甕	－・－・－	褐色	砂粒を含む	良	口縁1／8	内外面		内外面撫で
415	26号土坑	土師杯A 2	13.2・4.0・7.4	褐色	砂粒を多く含みやや粗い	良	1／2強	体部外面	有	ロクロ撫で，底部回転糸切り
416	〃	〃 E	13.8・－・－	褐色	小礫・細砂を含む	良	1／8			ロクロ撫で
417	〃	〃 B 1	－・－・7.0	褐色	緻密	良好	底部1／2			ロクロ撫で，底部回転糸切り
418	〃	土師椀B	16.4・－・－	(赤)褐色	小礫・細砂を含む	良	1／12			ロクロ撫で，外面凸部ミガキ，内面ミガキ
419	〃	土師小型甕B 1	13.7・－・－	褐色	砂粒を多く含む	良	1／3			ロクロ撫で
420	5号土坑	土師杯C 3	14.0・3.9・5.1	赤褐色	小礫少々・白色粒少々	不良	1／2	口縁部内面		ロクロ撫で，底部回転糸切り
421	〃	土師小型甕A 1	11.0・－・－	内明褐色 外暗褐色	細砂少々	良	1／5			ロクロ撫で
422	〃	〃 B 1	12.8・－・－	(茶)褐色	緻密	良好	1／5.5			ロクロ撫で
423	〃	土師甕	－・－・－	褐色	砂粒少々	良	底部1／5			ロクロ撫で，内面ハケ目
424	〃	〃 A 1	21.6・－・－	褐色	細砂少々	良好	口縁1／4	内外面		ロクロ撫で

挿図No	出土地点	器種・分類	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	黒斑	ハジケ	技法
425	5号土坑	土師鍋A1	34.5・－・－	明褐色	砂粒多し	良	口縁1／8			ロクロ撫で，内面カキ目，外面下半叩き目
426	〃	〃 A2	37.5・－・－	内明褐色 外赤褐色	黒色粒・砂粒多し	良	口縁1／9			ロクロ撫で，内面カキ目，外面下半平行叩き目
427	〃	〃 A1	36.0・－・－	内明褐色 外赤褐色	砂粒多し・黒色粒多し	良	口縁1／4			ロクロ撫で，内外面カキ目，外面下半平行叩き目，内面同心円押圧痕，ハケ目
428	〃	〃 A2	34.8・－・－	内明褐色 外(茶)褐色	砂粒多し・白色粒多し	良	口縁1／7			ロクロ撫で，内面カキ目，外面下半叩き目
429	〃	〃 B1	37.8・－・－	内明褐色 外赤褐色	白色粒・砂粒多し	良	口縁1／5			ロクロ撫で，内外面カキ目
430	〃	〃 A1	43.9・－・－	内明褐色 外赤褐色	砂粒・黒色粒子多し	良	口縁1／4			ロクロ撫で，内面カキ目，外面下半叩き目
431	〃	〃 A2	45.2・－・－	内明褐色 外褐色	白色粒・砂粒多し	良	口縁1/24			ロクロ撫で，内外面カキ目，外面下半叩き目
432	遺構外	須恵蓋	11.2・－・－	灰色	細砂含む	良	1／8			ロクロ撫で
433	〃	〃	12.9・－・－							ロクロ撫で，天井部回転ヘラ削り
434	〃	須恵有台杯	－・－・8.3	灰白色	細砂多し	良	底部1／4			ロクロ撫で
435	〃	須恵杯	11.3・3.0・8.4	灰白色	細砂多し	不良	1／2			ロクロ撫で，底部回転ヘラ切り
436	〃	須恵短頸壺	5.0・－・－	(茶)褐色	細砂多し	良	口縁1／3			ロクロ撫で
437	〃	須恵把手	－・－・－	灰白色	比較的緻密	不良				
438	〃	須恵甕	－・－・－	灰色	比較的緻密	良好				外面格子状叩き目，内面同心円文押圧痕
439	〃	土師蓋	－・－・－	(茶)褐色	細砂多し	良	1／6			ロクロ撫で
440	〃	土師杯E	11.9・3.5・5.6	赤褐色	白色砂粒多し	良	1／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り
441	〃	〃 A2	12.5・3.4・6.6	(赤)褐色	砂粒多し	不良	1／4			ロクロ撫で，底部回転糸切り
442	〃	土師赤彩土器	13.0・4.3・6.9	明褐色	砂粒少々	良	1／3弱	体部内面		ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部外面下端回転ヘラ削り
443	〃	〃	15.7・－・－	明褐色	小礫若干	良	口縁1／5		有	ロクロ撫で
444	〃	土師杯	－・－・6.6	明褐色	細砂少々	良	底部2／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部下端ヘラ削り
445	〃	土師鉢	－・－・7.0	茶褐色	白色砂粒少々	良好	底部1／3	内面に顕著		ロクロ撫で，体部外面下半と底部回転ヘラ削り
446	〃	〃 A1	11.6・3.6・6.0	赤褐色	白色粒を少量含む	不良	1／3			ロクロ撫で，底部回転糸切り
447	〃	〃 B1	12.2・3.4・5.2	褐色		良	1／4	体部外面		ロクロ撫で，底部回転糸切り
448	〃	〃 B2	13.0・3.0・5.6	褐色	白色砂粒少々	良	底部完形	体部外面下半		ロクロ撫で，底部回転糸切り，体部下端ヘラ削り
449	〃	〃 B1	13.4・3.3・5.2	明褐色	砂粒多し	良	1／4			ロクロ撫で，底部回転糸切り
450	〃	〃 C3	13.6・3.6・5.9	明褐色	細砂を含む	不良	完形			ロクロ撫で，底部回転糸切り
451	〃	黒色土器	－・－・－	内黒色 外茶褐色	緻密	良好	1／6			外面ロクロ撫で，底部と体部下半回転ヘラ削り
452	〃	〃	17.2・－・－	内黒色 外赤褐色	緻密	良好	口縁1/20			ロクロ撫で，内外面ミガキ

挿図No	出土地点	器種・分類	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	黒斑	ハジケ	技法
453	遺構外	土師非ロクロ成形甕	－・－・－	褐色	砂粒少々	良	1/16			外面縦位ハケ目，口縁部外面撫で，内面撫で
454	〃	土師鉢A 1	13.6・－・－	茶褐色	小礫少々・砂粒多し	良	口縁1／8			ロクロ撫で
455	〃	〃 A 1	18.0・7.8・6.5	暗褐色	砂粒多し	良	完形			ロクロ撫で，体部外面下半ヘラ削り
456	〃	土師非ロクロ成形甕	－・－・－	茶褐色	砂粒少々	良				外面縦位ハケ目，内面横位ハケ目→横位撫で
457	〃	〃	－・－・－	茶褐色	細砂多し	良				体部外面縦位ハケ目，口縁外面横撫で，内面撫で
458	〃	土師小型甕A 1	13.8・－・－	明褐色	砂粒多し	不良	1／10	口縁部内面		ロクロ撫で
459	〃	土師甕A 1	21.8・－・－	褐色	やや緻密であるが黒色粒付着	良	口縁1／7	体部内面		ロクロ撫で，内外面カキ目
460	〃	〃 A 1	22.0・－・－	褐色	砂粒多し	不良	口縁1／4			磨耗が著しく不明
461	〃	土師鍋A 1	21.6・－・－	褐色	緻密	不良	口縁1/10	体部外面下半		ロクロ撫で
462	〃	土師甕B 1	23.7・－・－	褐色	細砂を若干含む	良	口縁1/10	口縁部外面		ロクロ撫で，内面カキ目
463	〃	〃 D 1	17.1・－・－	赤褐色	砂粒多し	不良	口縁1／3			ロクロ撫で，内面カキ目，体部外面下半叩き目
464	〃	土師鍋A 2	33.0・－・－	明褐色	小礫・細砂を若干含む	良好	口縁1/10	口縁部内面		ロクロ撫で，内面カキ目
465	〃	〃 A 2	－・－・－	茶褐色	砂粒多し	良				ロクロ撫で，体部内面カキ目
466	〃	土師高杯	－・－・－	褐色	砂粒多し	不良				磨耗が著しく不明
467	〃	土師鍋A 2	44.4・－・－	褐色	細砂多し	良	口縁1/10			ロクロ撫で，体部外面下半叩き目，内面押圧痕→カキ目

遺跡空中写真（国土地理院　1947撮影　25 UU 31PRS M627A 314CW 4NOU47 27）

図版 2

遺跡遠景

調査前の状況

表土剝ぎ（上段）

発掘風景（上段）

遺構検出作業（上段）

土坑群調査風景（B群）

2号住居調査風景

畝状小溝調査風景（上段）

遺構掘り（上段）

実測作業（上段）

図版 4

実測作業（上段）

実測作業（上段）

表土剝ぎ（下段）

遺構掘り（下段）

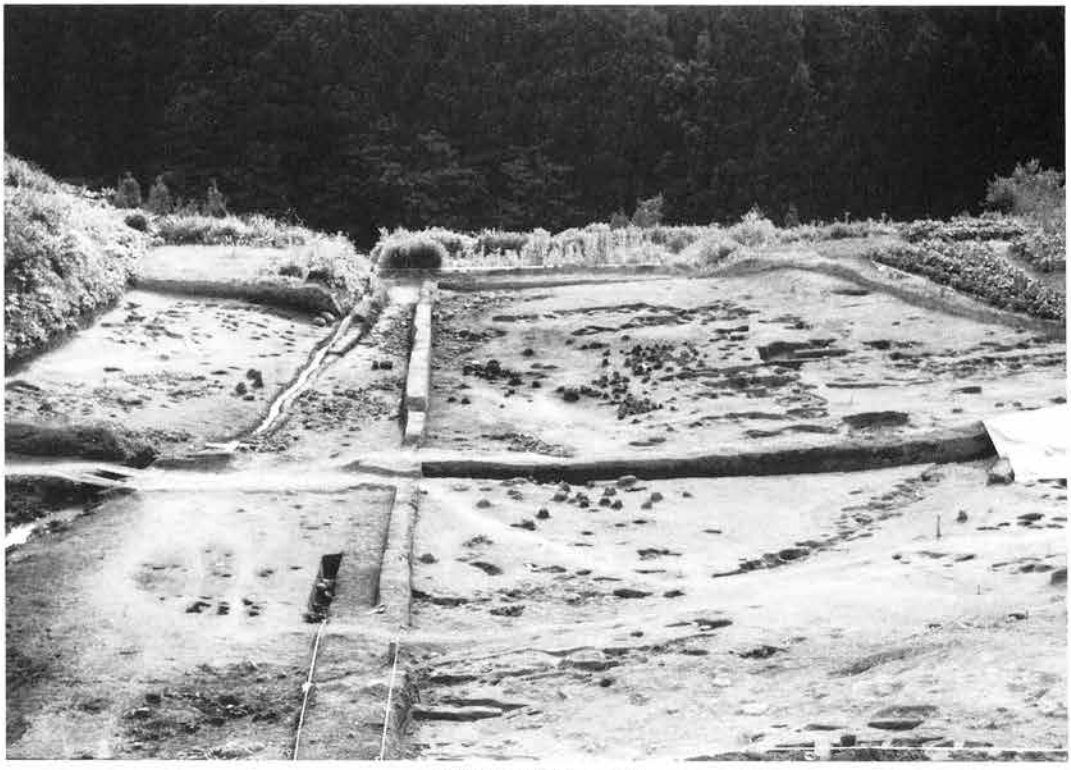
沢部遺物出土状態（下段）

遺構掘り（下段）

遺構完掘状態（下段）

見学者に対する遺跡説明

遺構分布状態（上段）



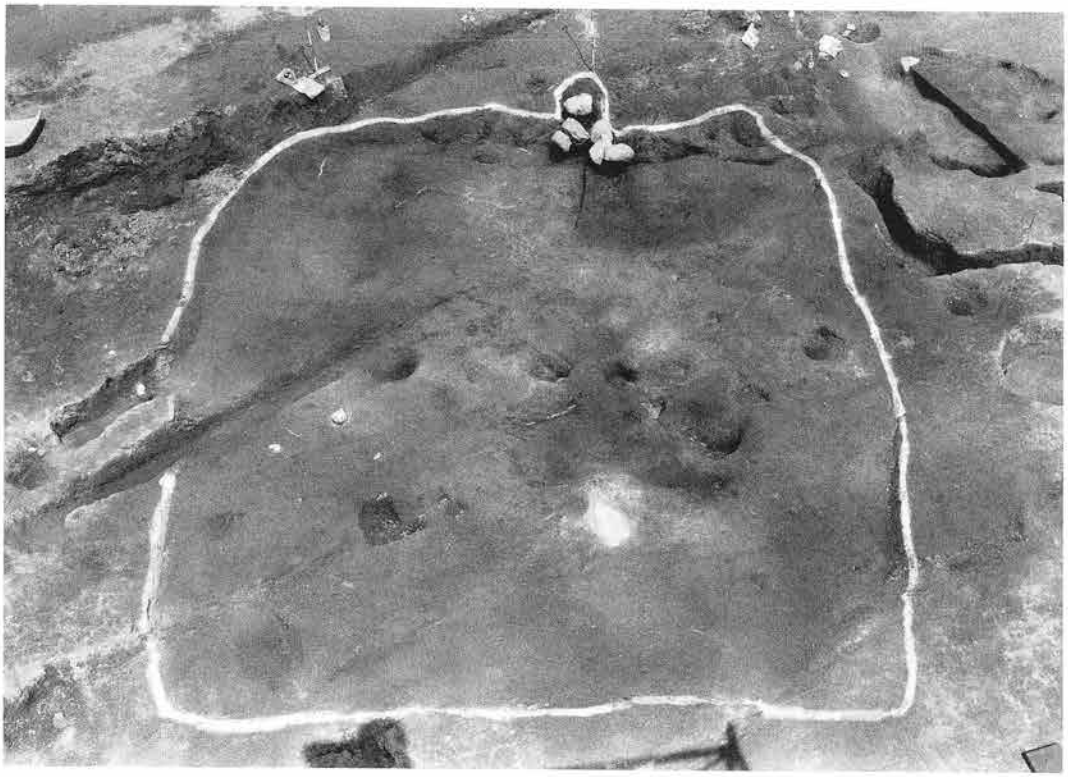
遺構分布状態（下段）

図版 6

60年度確認調査区遠景

60年度確認トレンチ

60年度確認トレンチ



1 号住居完掘状態

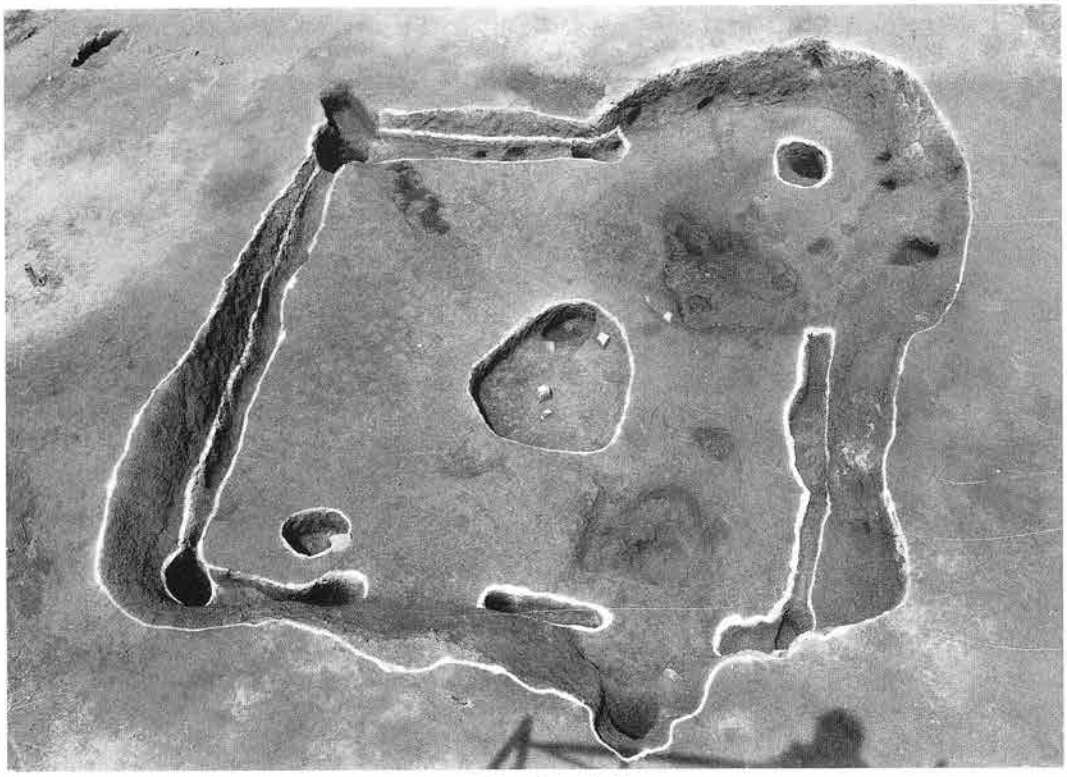
1 号住居カマド

1 号住居カマド遺物出土状態

1 号住居遺物出土状態

1 号住居遺物出土状態

図版 8



2 号住居完掘状態

2 号住居遺物出土状態

2 号住居遺物出土状態

2 号住居土層堆積状態

2 号住居床面直上遺物出土状態

3 号住居完掘状態

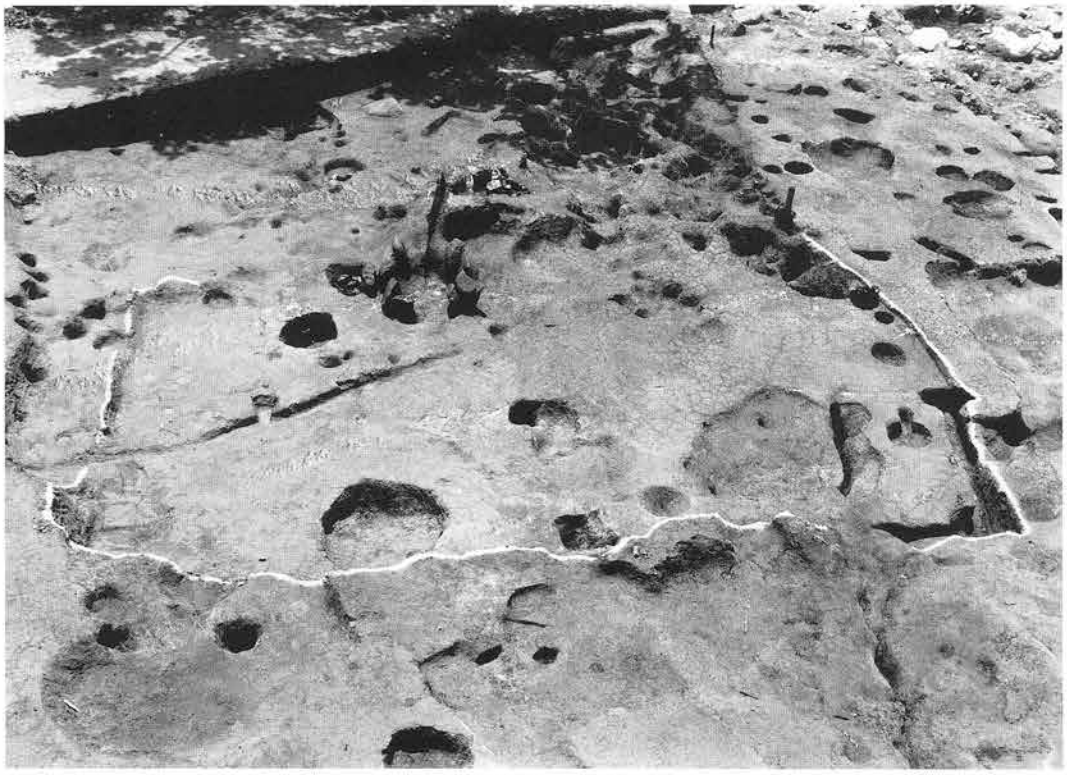
3 号住居遺物出土状態

3 号住居遺物出土状態

3 号住居遺物出土状態

3 号住居周溝遺物出土状態

図版10



4号住居完掘状態

4号住居遺物出土状態

4号住居発掘風景

4号住居発掘風景

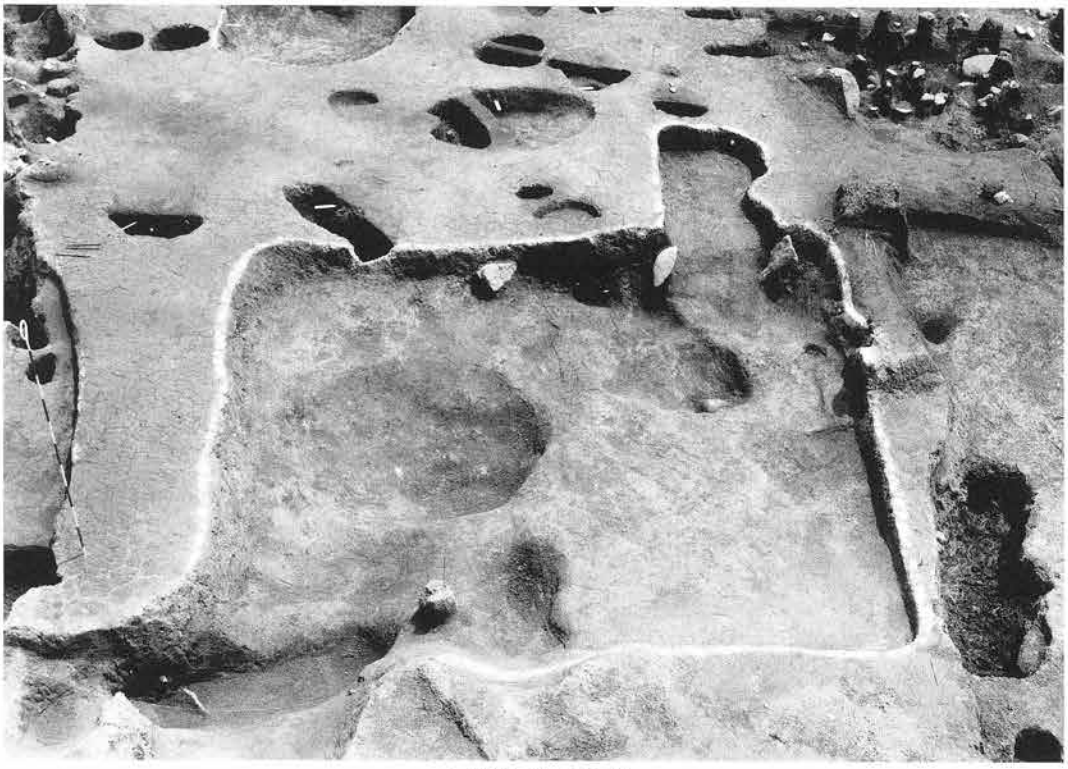
4号住居遺物出土状態

4号住居カマド

4号住居ピット2遺物出土状態

4号住居ピット3遺物出土状態

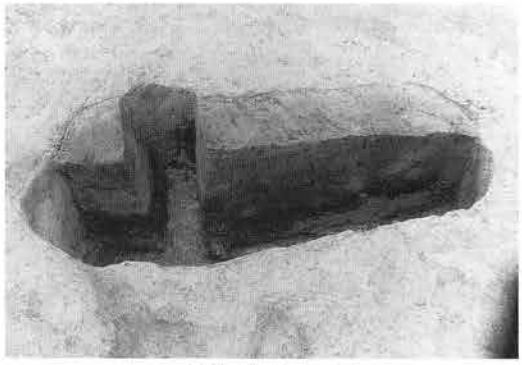
5号住居カマド



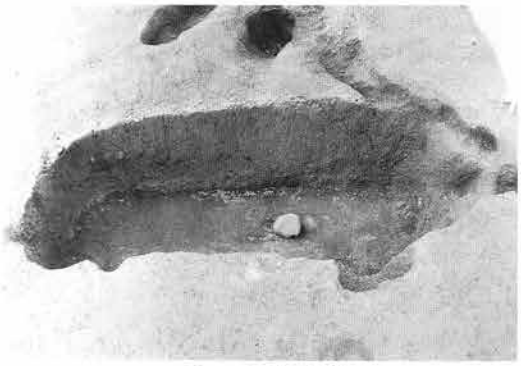
5号住居完掘状態

図版12

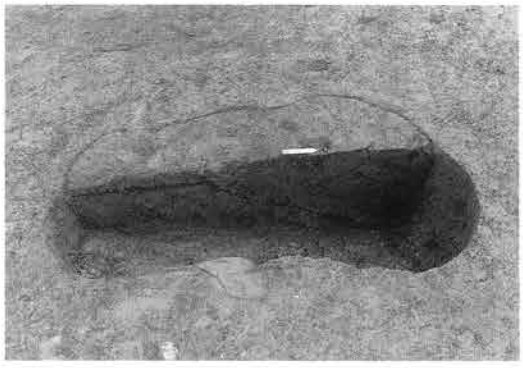
A群土坑分布状態



1号土坑土層断面



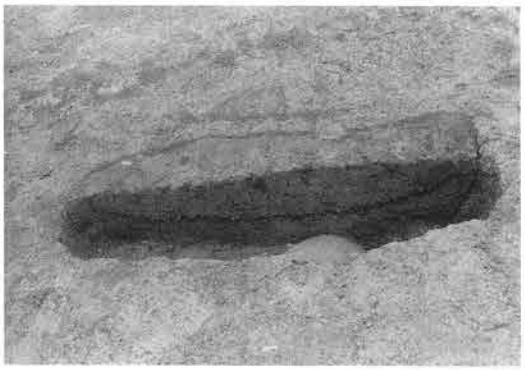
1号土坑完掘状態



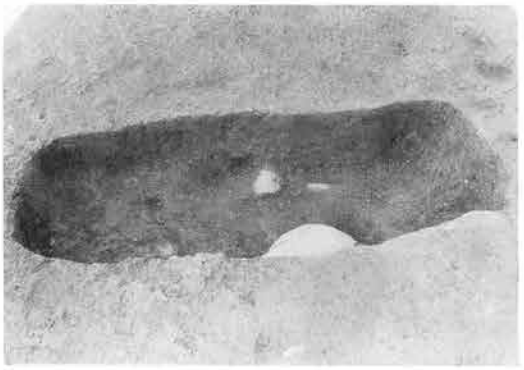
2号土坑土層断面

2号土坑完掘状態

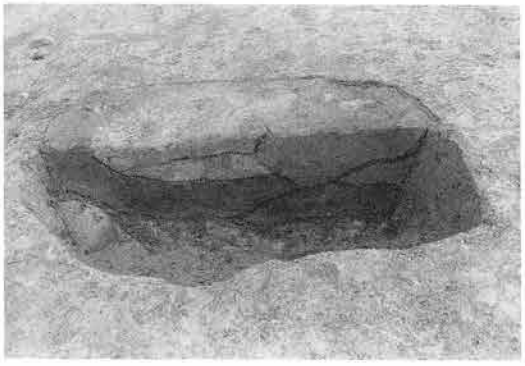
(A群土坑)



3号土坑土層断面

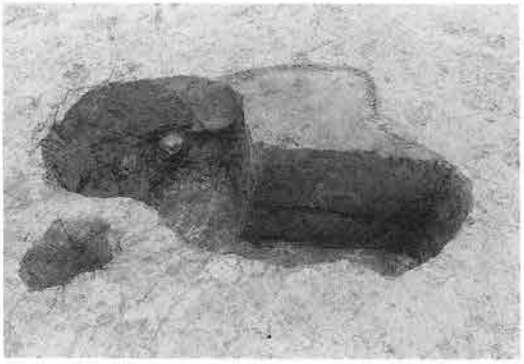


3号土坑完掘状態



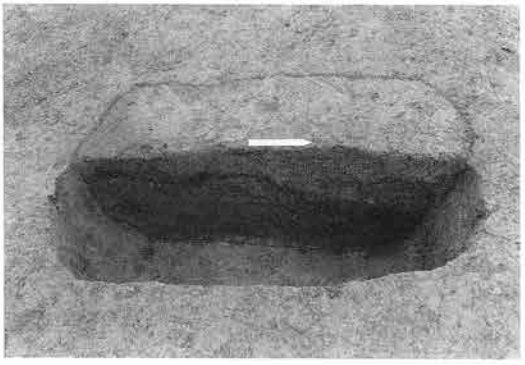
4号土坑土層断面

4号土坑完掘状態

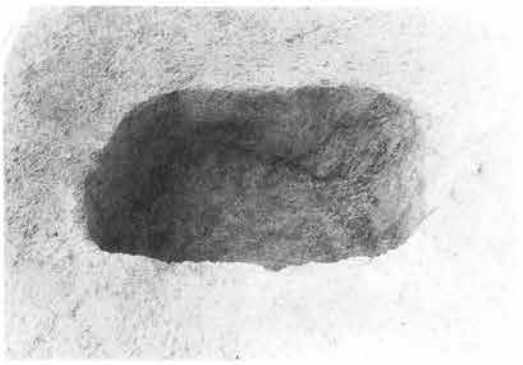


15号土坑土層断面

15号土坑完掘状態



7号土坑土層断面



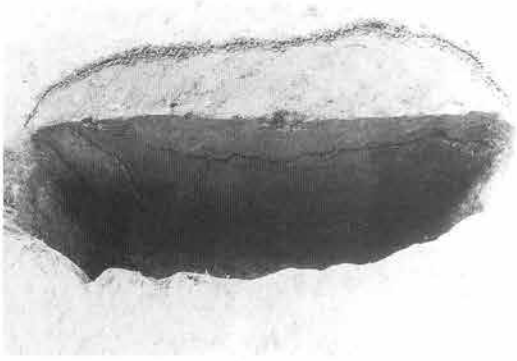
7号土坑完掘状態

（A群土坑）

図版14

8号土坑土層断面

8号土坑完掘状態

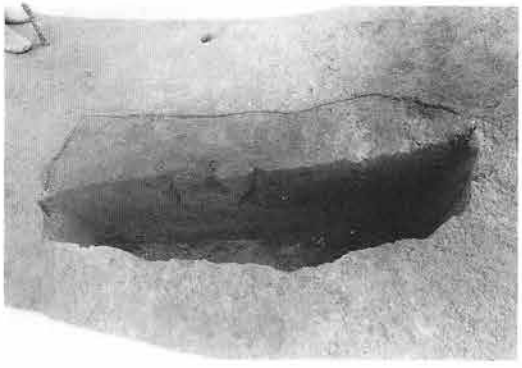


9号土坑土層断面

11号土坑土層断面

10号土坑土層断面

10号土坑完掘状態

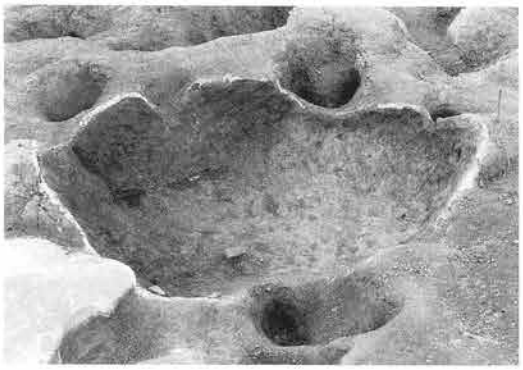


12号土坑土層断面

12号土坑完掘状態

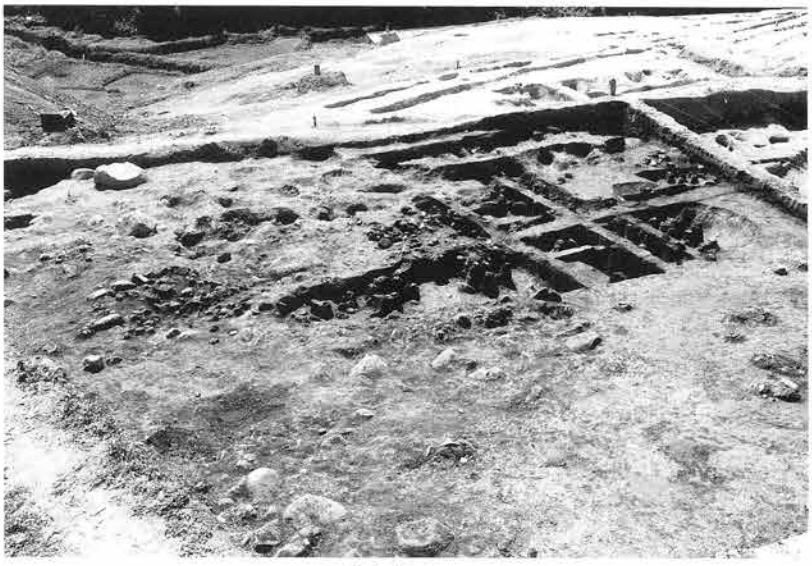
（A・C群土坑）

22号土坑遺物出土状態



23号土坑完掘状態

B群土坑（北→南）



B群土坑（東→西）

図版16

25号土坑遺物出土状態

27号土坑遺物出土状態

28号土坑遺物出土状態

27・29・30号土坑遺物出土状態

31号土坑遺物出土状態

1号炉検出状態

1号炉土層断面

1号炉遺物出土状態

（B群土坑）

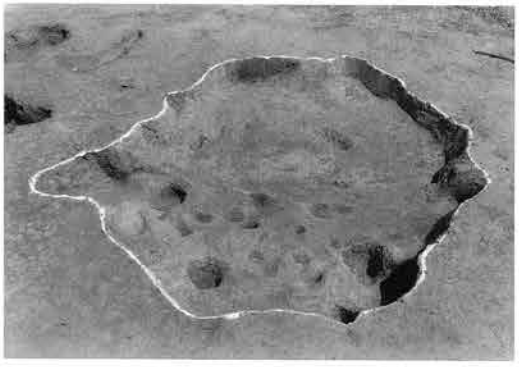
1 号炉完掘状態

2 号炉遺物出土状態

6 号土坑遺物出土状態

6 号土坑遺物出土状態

16号土坑遺物出土状態



16号土坑完掘状態

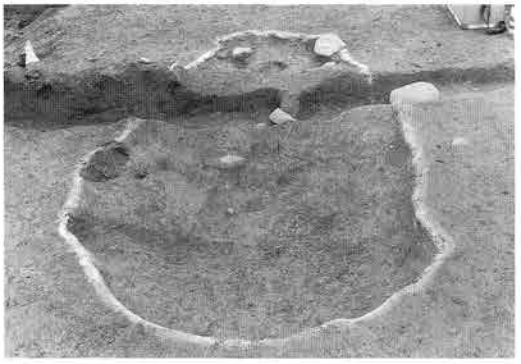
18号土坑遺物出土状態

5 号土坑遺物出土状態

（B，C，D群土坑）

図版18

5号土坑遺物出土状態



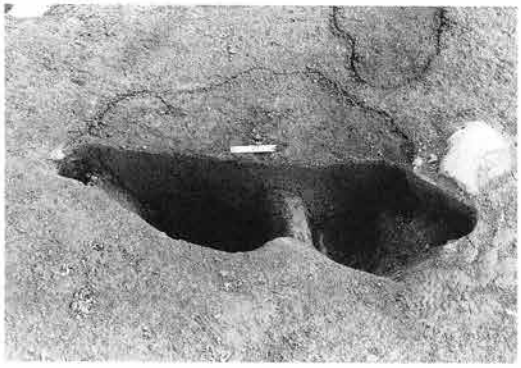
5号土坑完掘状態

畝状小溝分布状態

畝状小溝発掘風景

畝状小溝発掘風景

焼土ピット



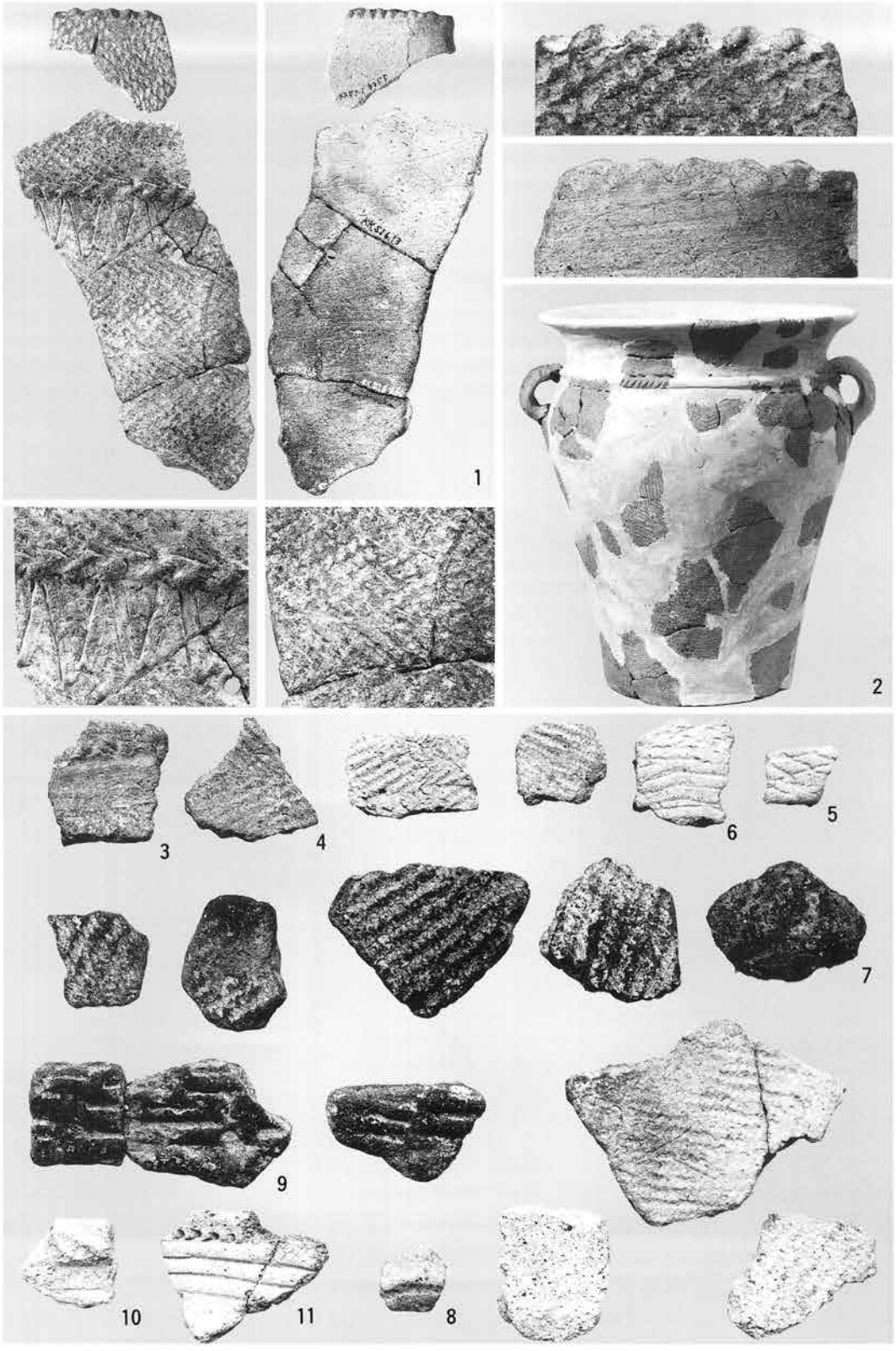
焼土ピット

沢部河床

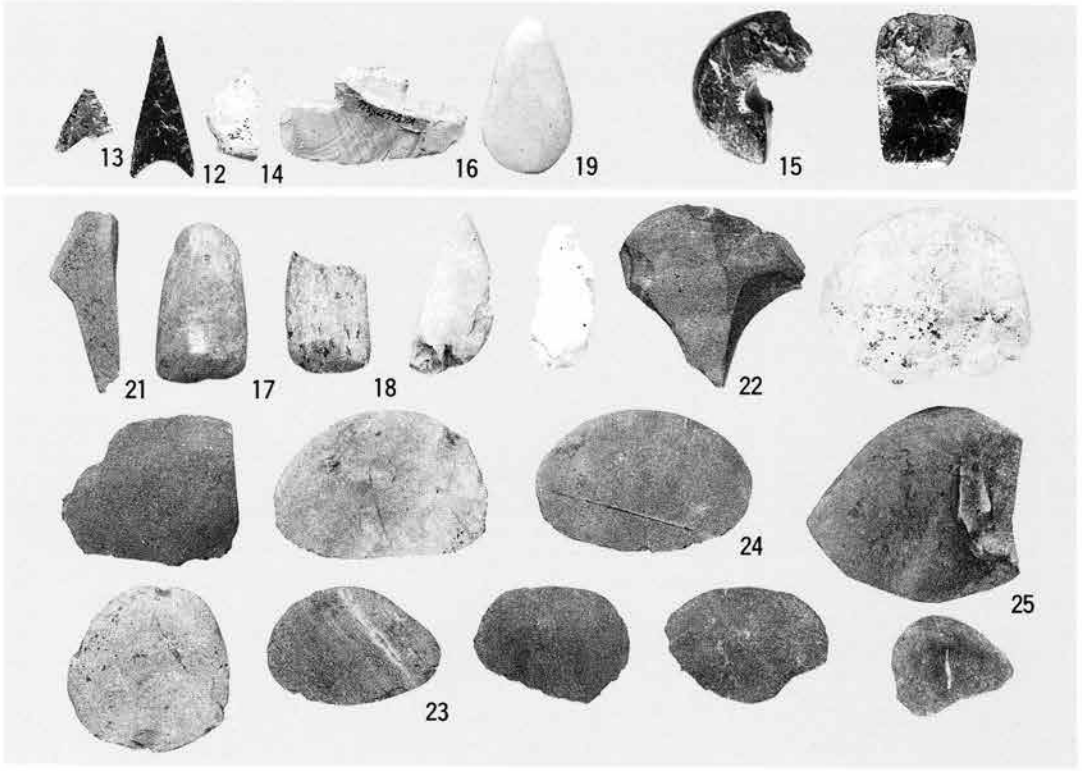
Ⅳ・Ⅴ層試掘坑

Ⅳ・Ⅴ層試掘坑

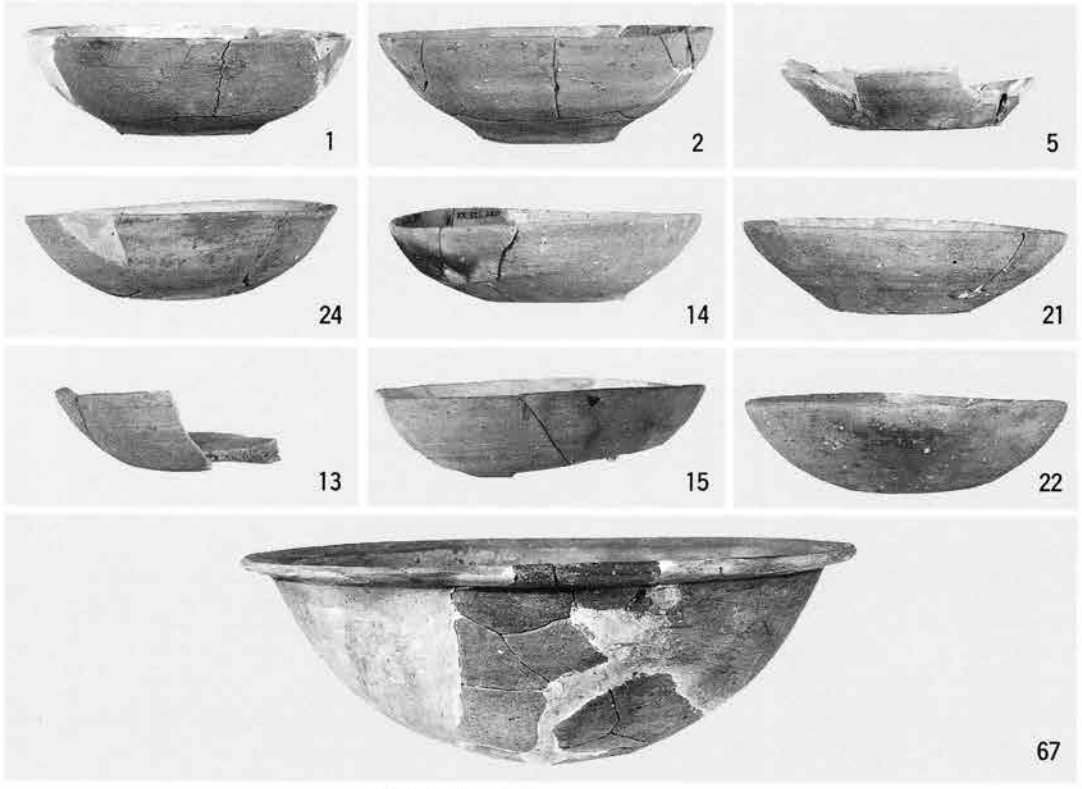
図版20



縄文時代の土器（1，2＝1/5・他は1/2）

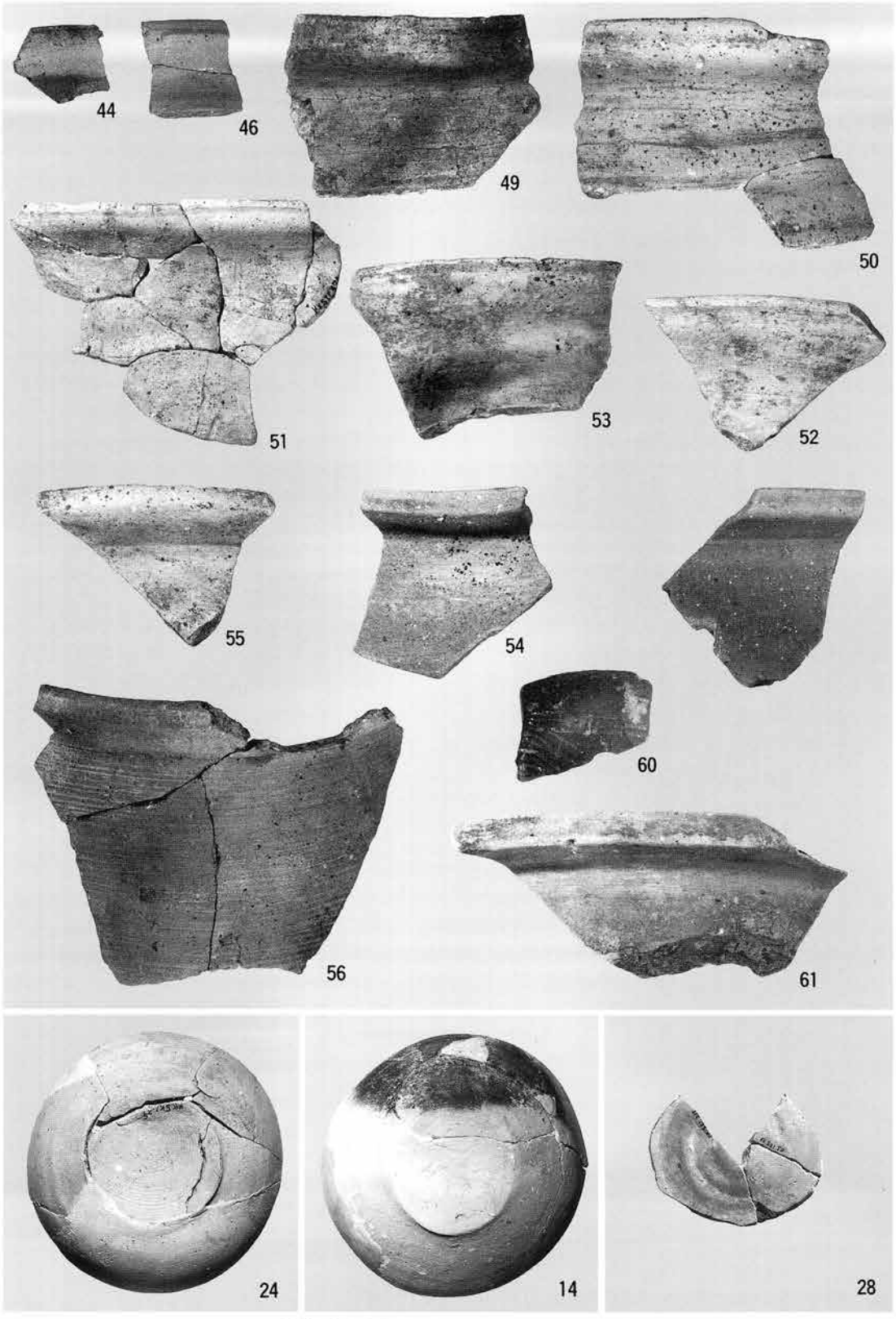


縄文時代の石器（13～19＝1/2・15＝1/1.5・他は1/3）

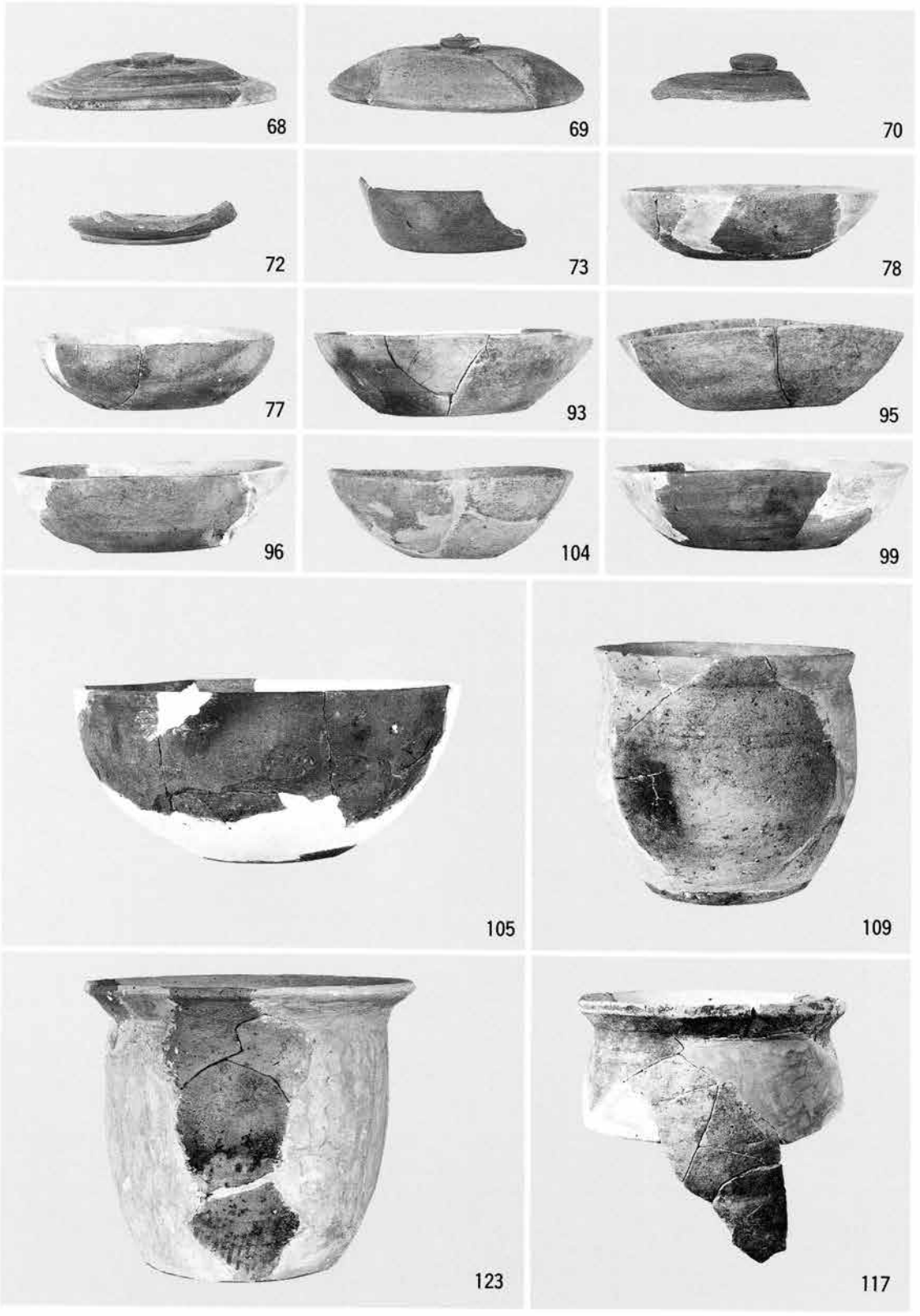


1号住居出土土器（67＝1/4・他は1/3）

図版22

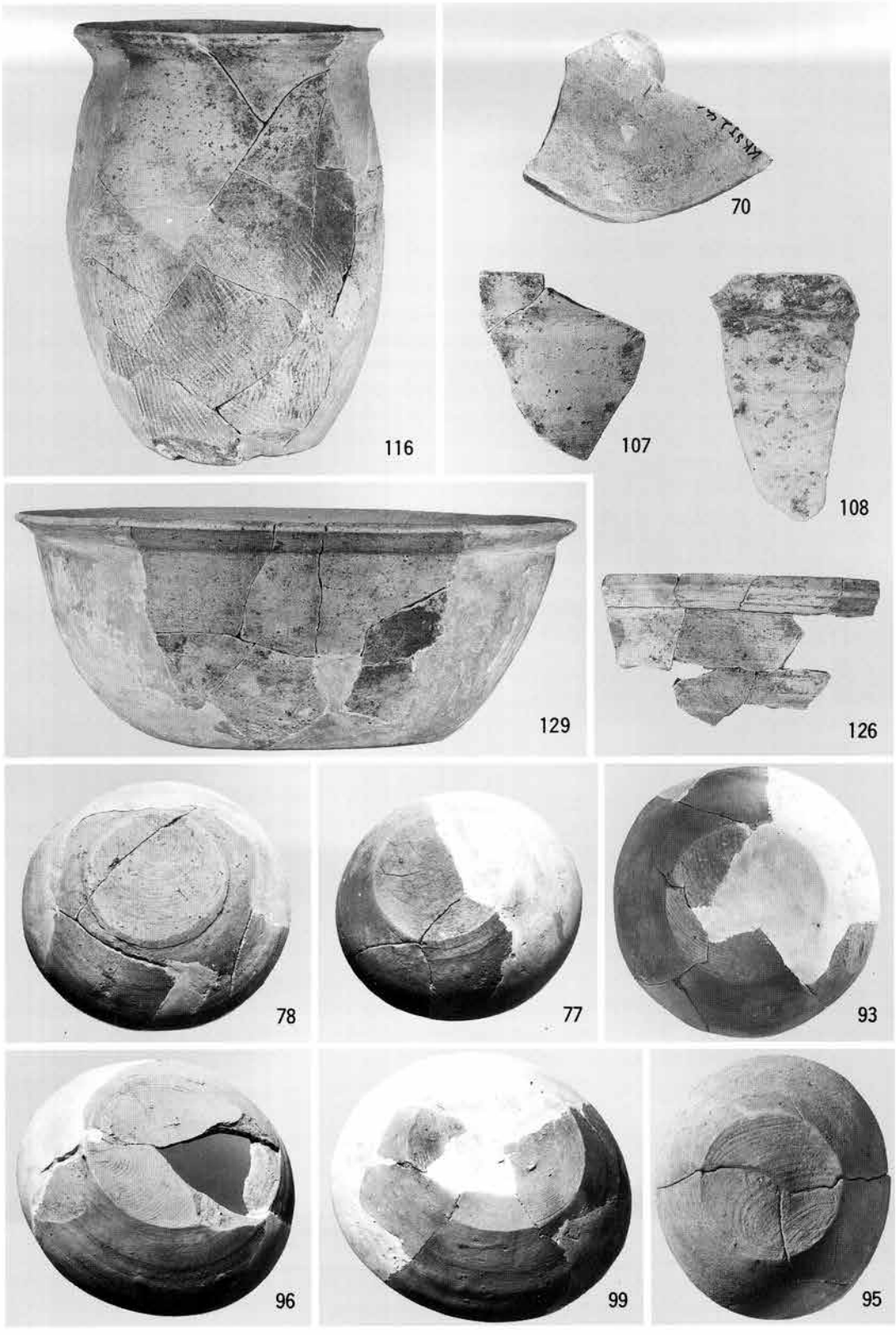


1号住居出土土器（24，14，28＝⅓・他は½）

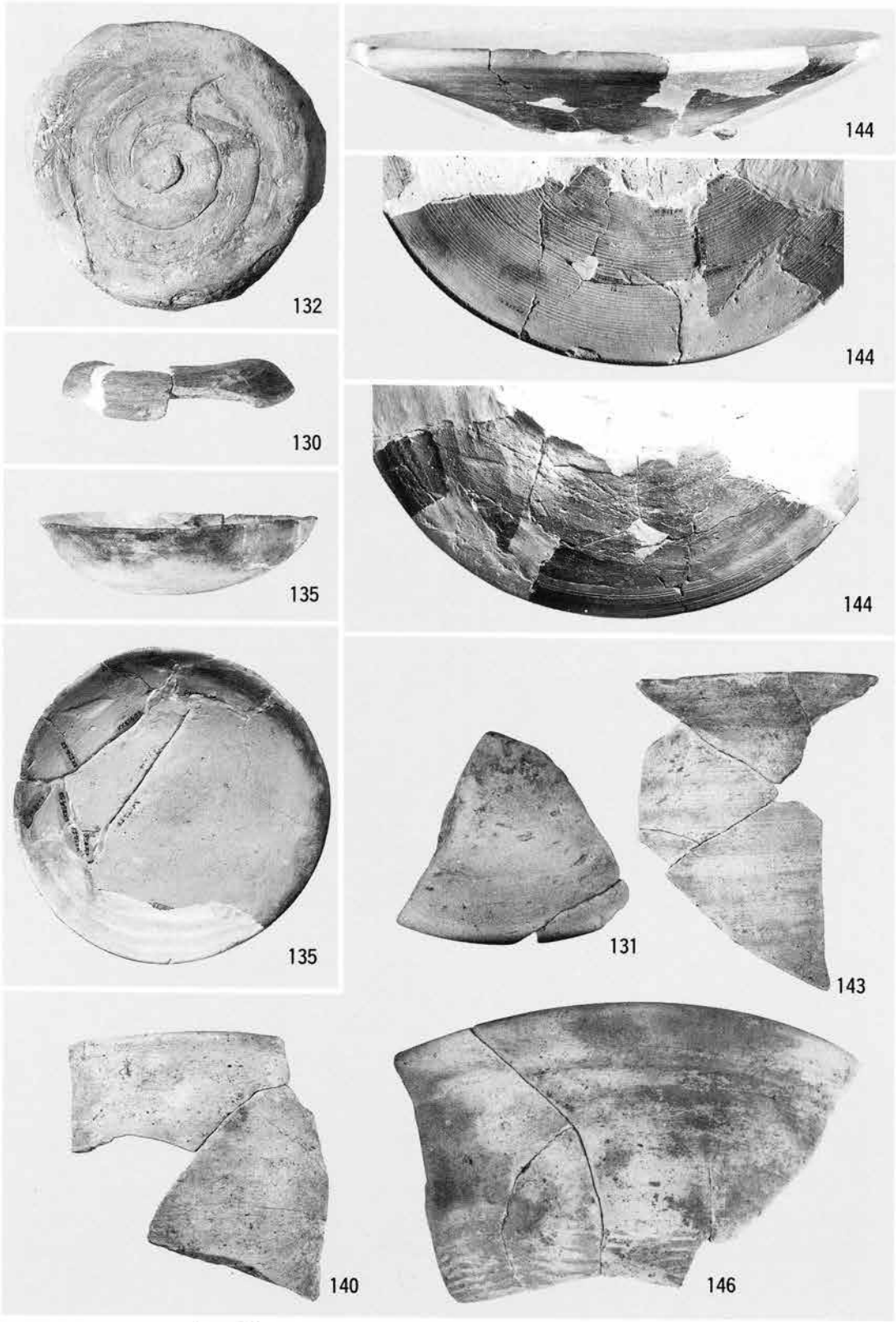


2号住居出土土器（123，117＝¼・他は⅓）

図版24

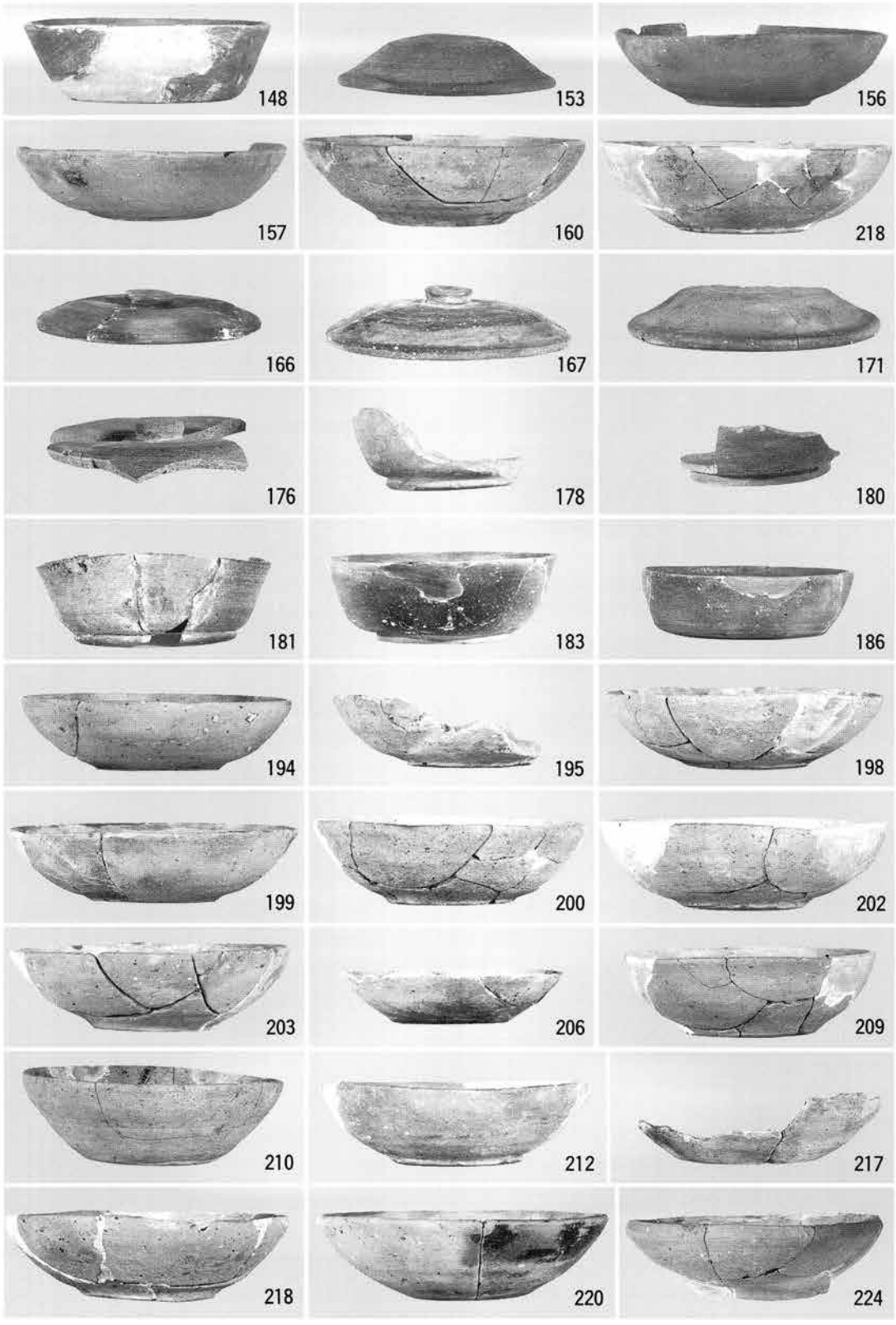


2号住居出土土器（116，126，129＝¼・70，107，108＝½・他は⅓）

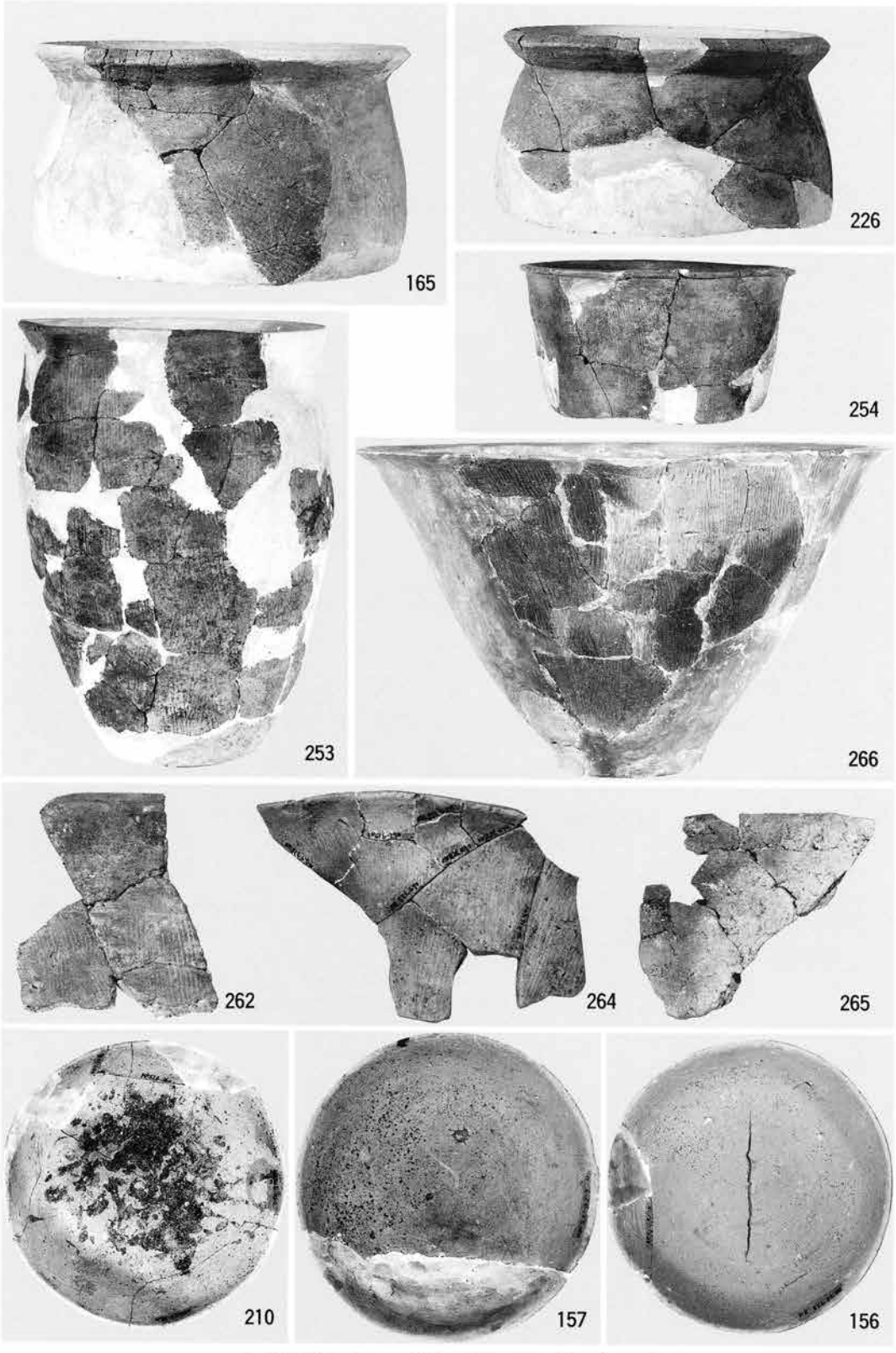


3号住居出土土器（132，131＝½・144＝¼・他は⅓）

図版26

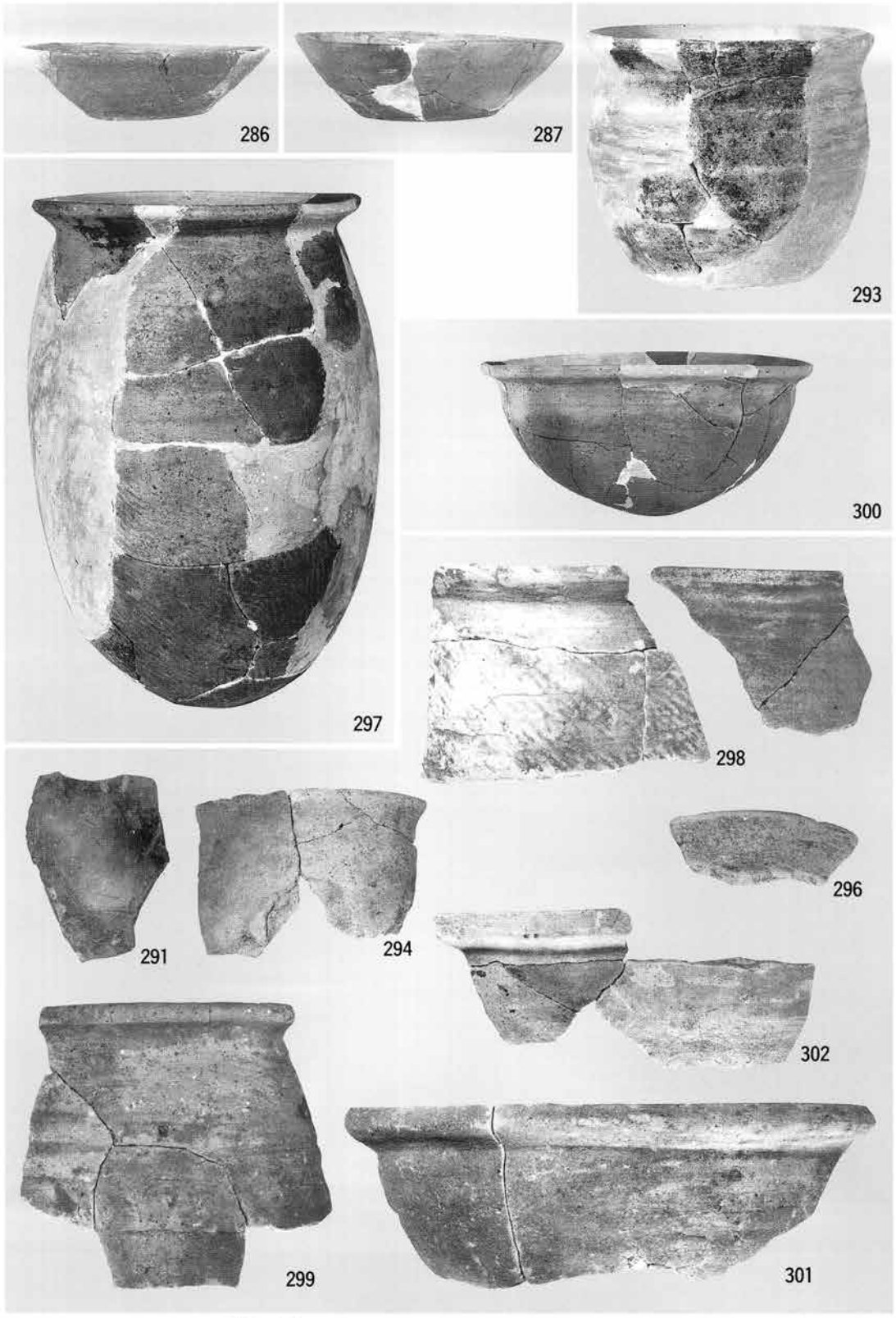


4号住居出土土器（1/3）



4号住居出土土器（210，157，156＝1/3・他は1/4）

図版28



B群土坑出土土器（1号炉）（293，297，300＝1/4・他は1/3）

22号土坑

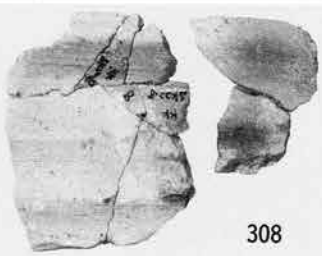
304

305

306

306

307


308

309

25号土坑

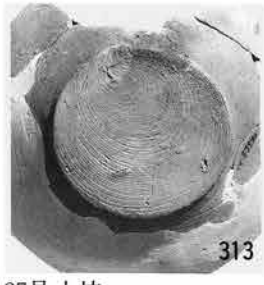
311

312

313

314

315


313

314

315

27号土坑

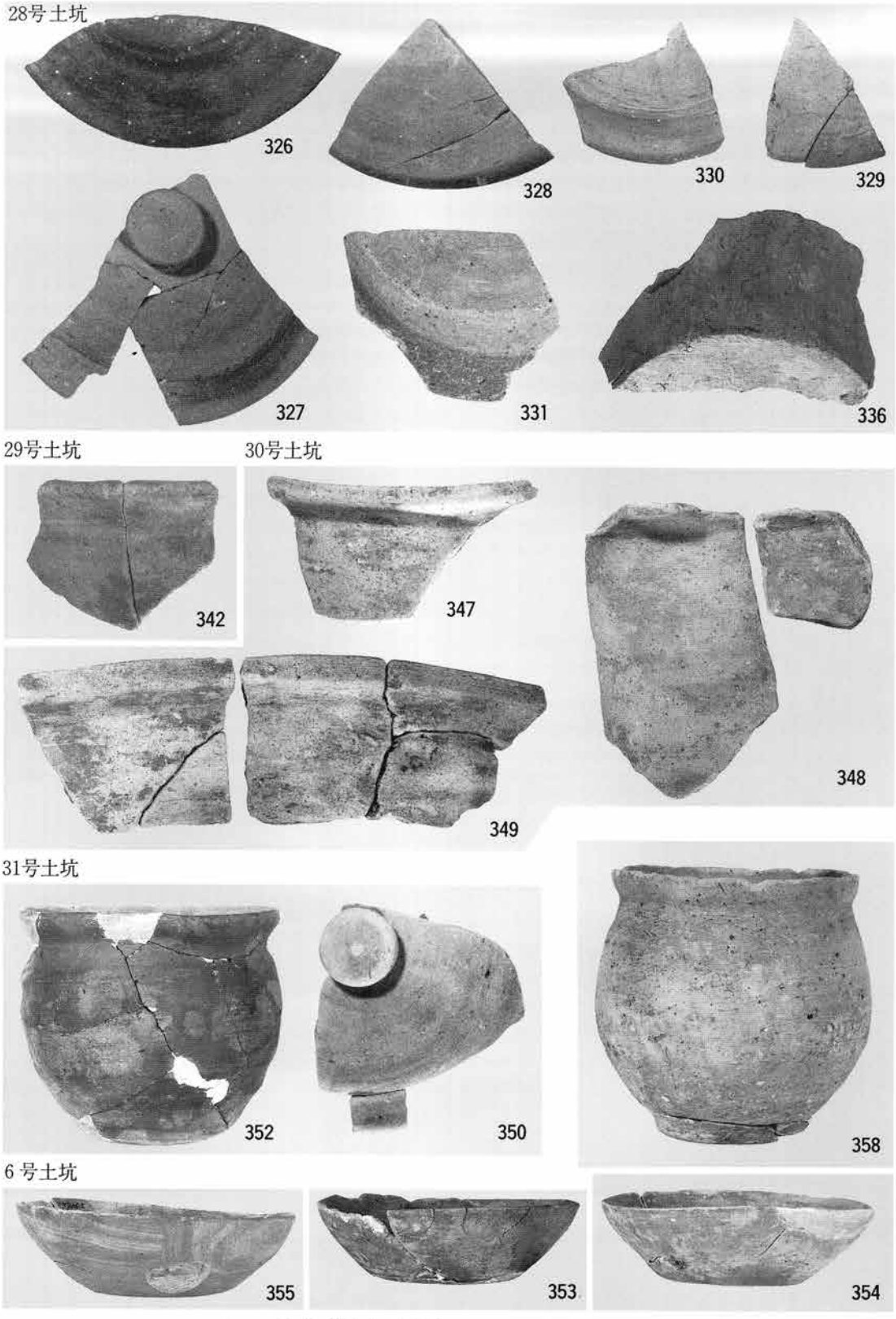
316

320

318

B群土坑出土土器（307～309＝½・他は⅓）

図版30



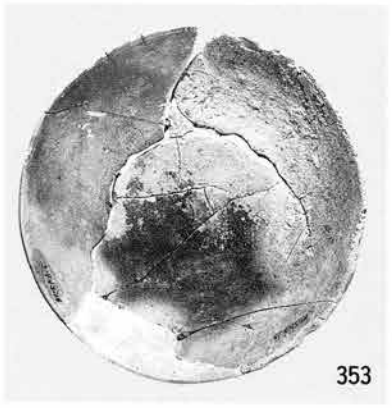
B・C群土坑出土土器（326～331，350＝½・他は⅓）

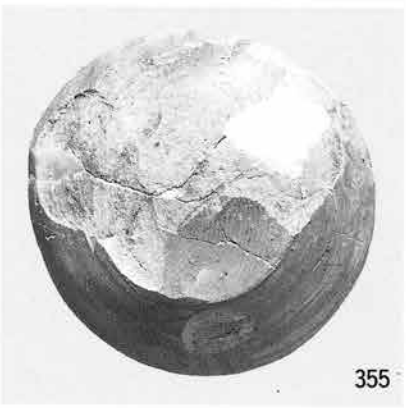
6号土坑

354

358

358


353


355

357

16号土坑

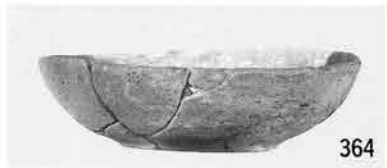
359

365

361

362

363


364

360

367

368

369

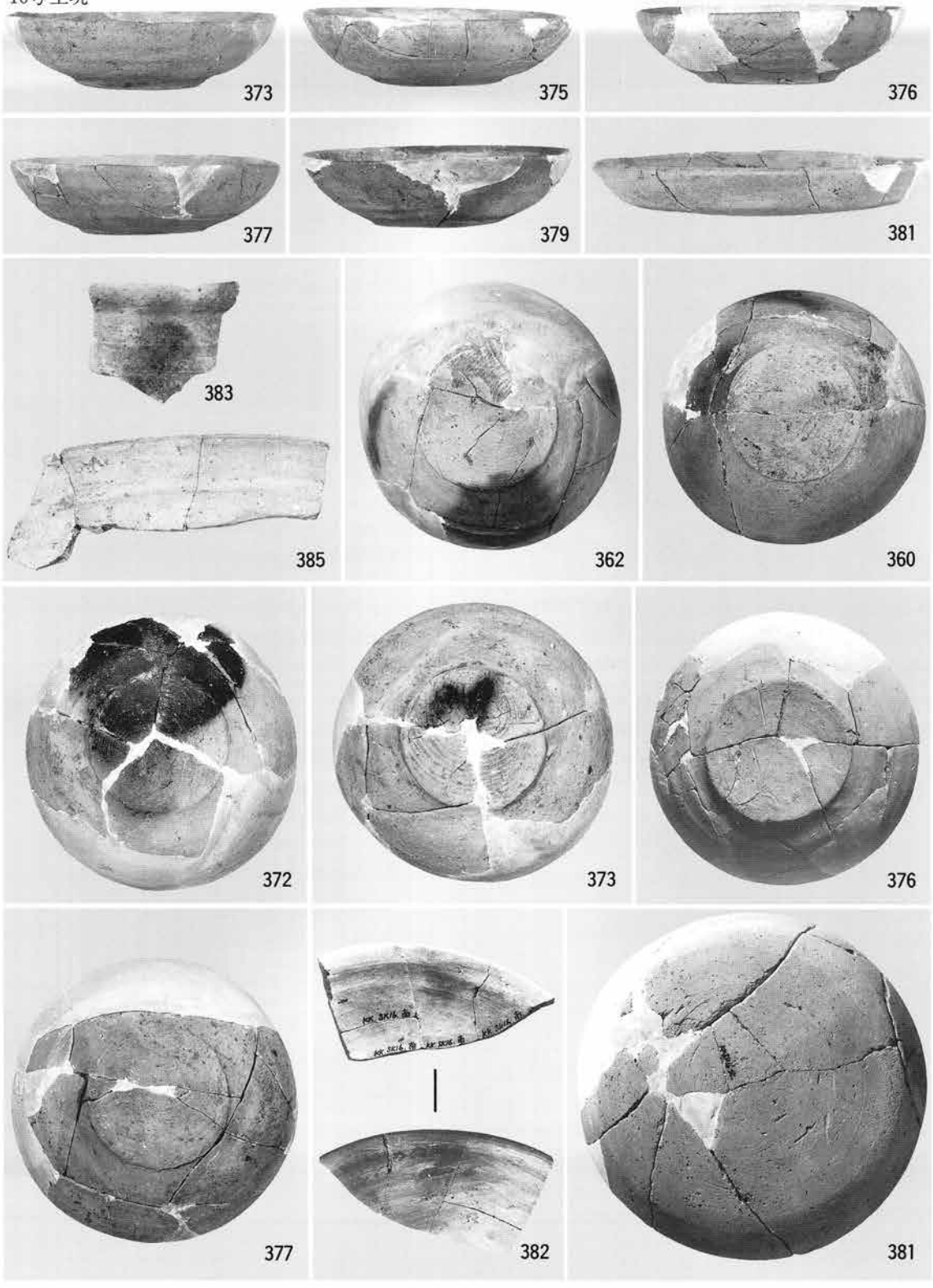
370

372

C群土坑出土土器 (1/3)

図版32

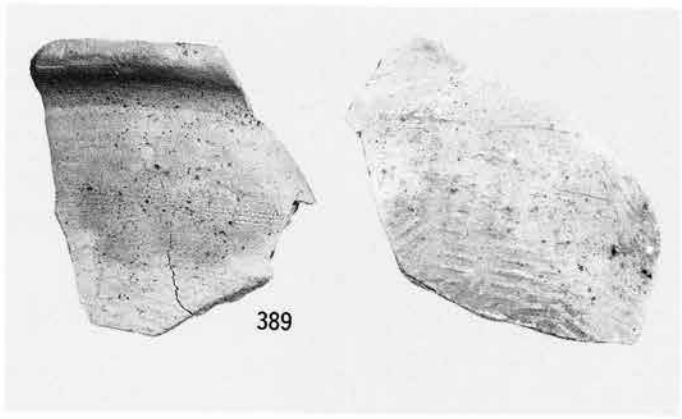
16号土坑



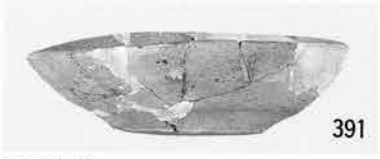
C群土坑出土土器（1/3）

17号土坑

388


389

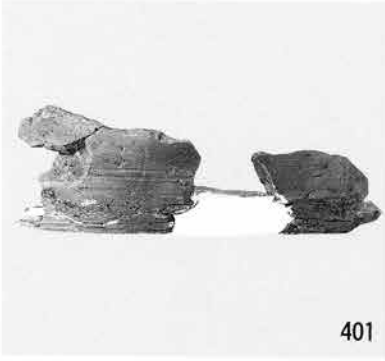
18号土坑

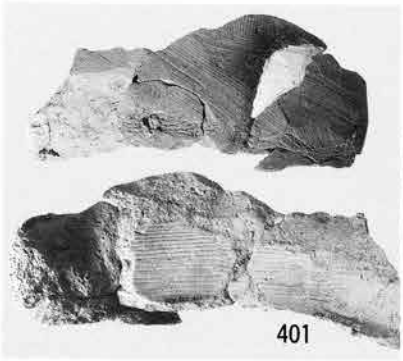

391

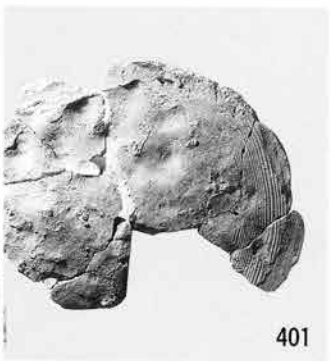
392

393

19号土坑


401


401


401

20号土坑

402

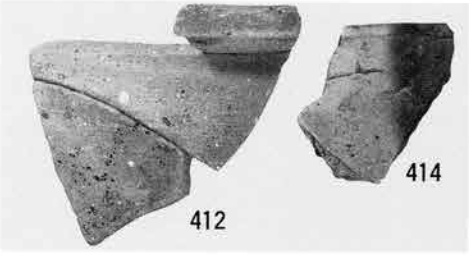
403

408

404

406

409


412

414

404

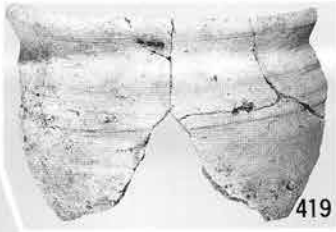
406

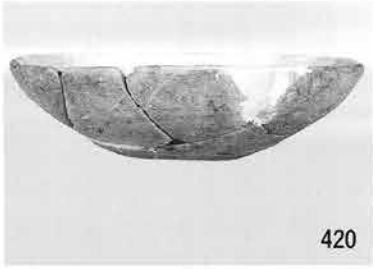
C群土坑出土土器　(412, 414＝½・他は⅓)

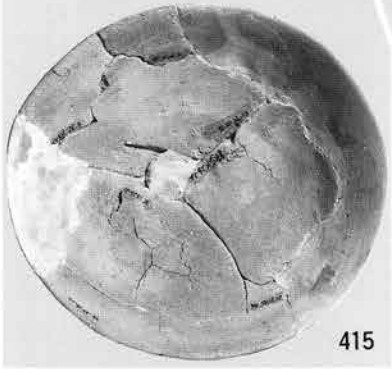
図版34

26号土坑

415


419

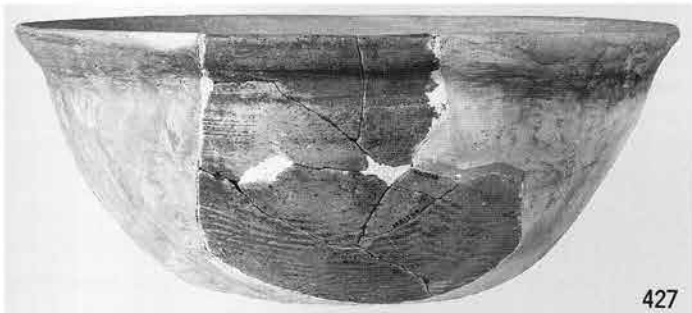

420

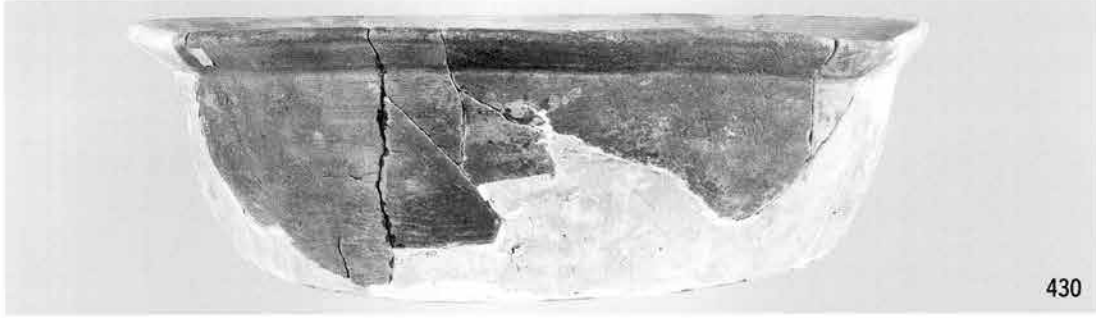

415

428

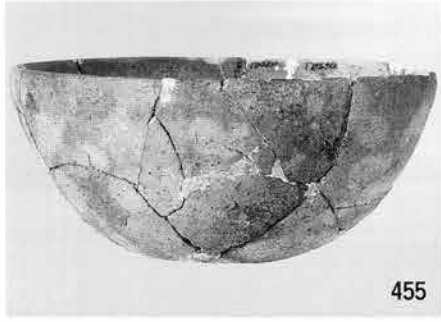
5号土坑

427

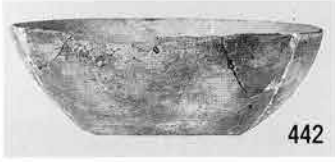

427


430

遺構外


455

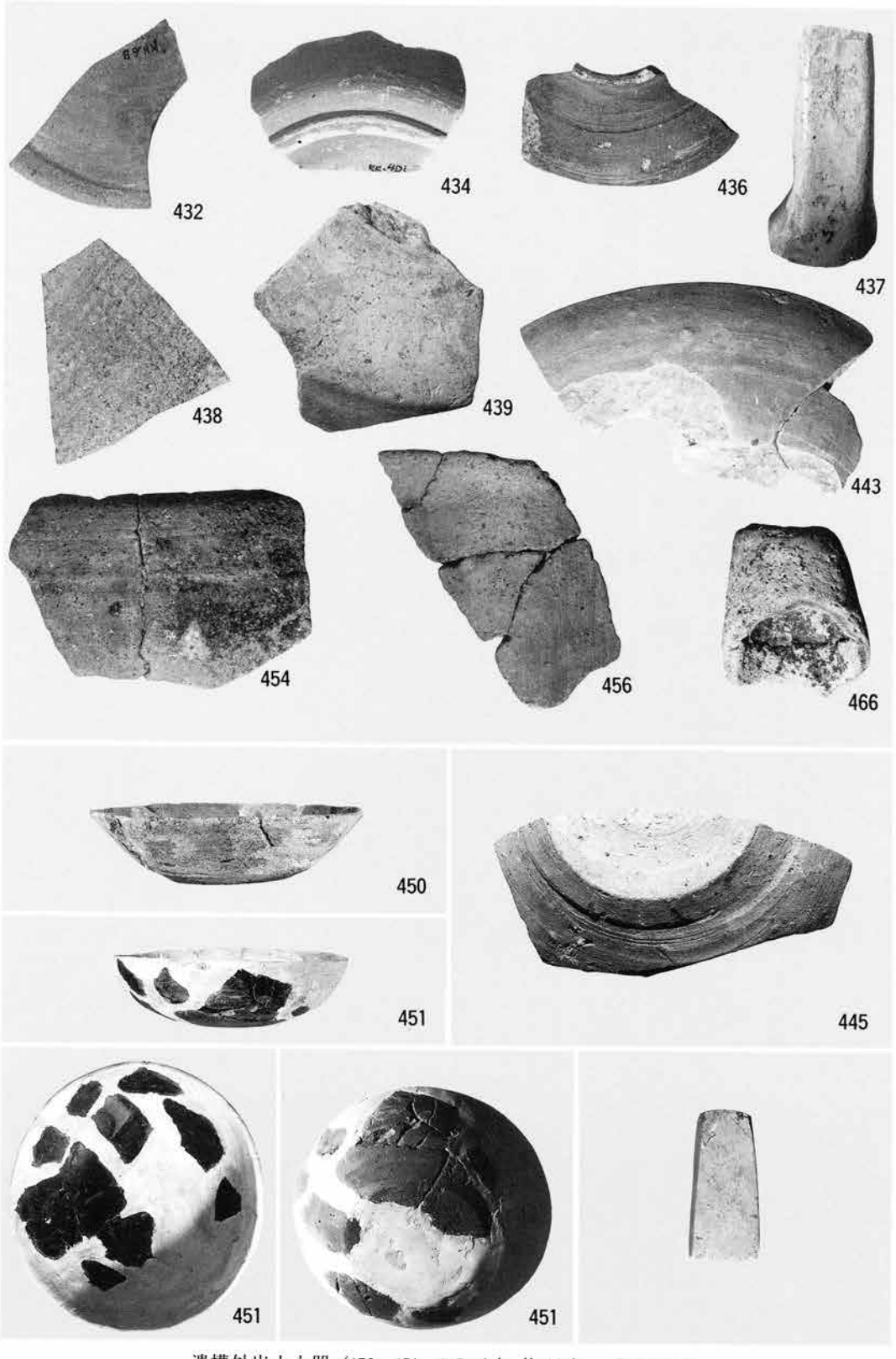
440


442

446

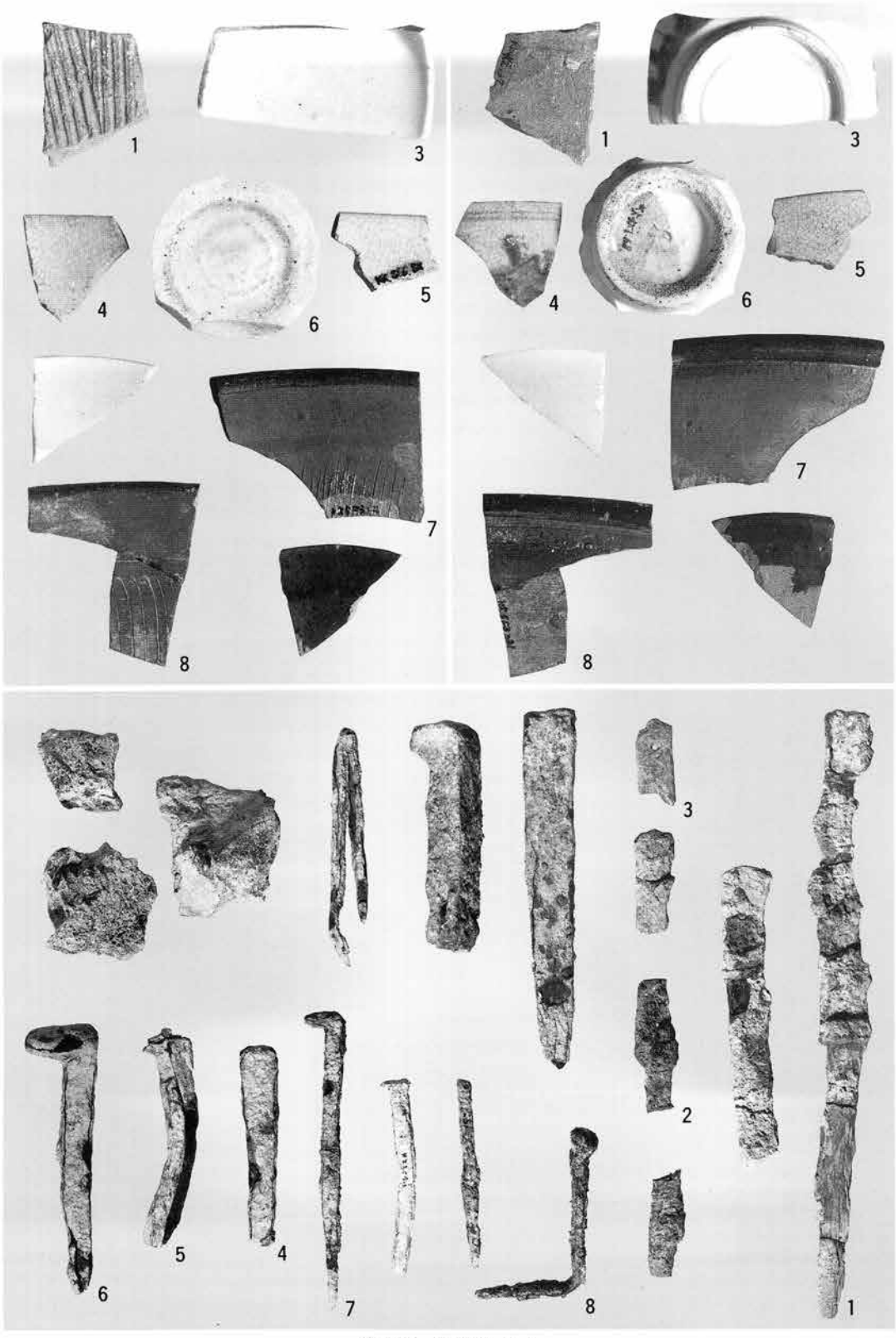
449

C・D群土坑・遺構外出土土器（428，427，430＝1/4・他は1/3）



遺構外出土土器（450，451，445＝⅓・他は½）・砥石（½）

図版36



陶磁器・鉄製品 (1/2)

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第51集

北陸自動車道

糸魚川地区発掘調査報告書Ⅴ

小出越（こいでごし）遺跡

昭和63年３月25日印刷
昭和63年３月30日発行

発行　新潟県教育委員会
新潟市新光町４番地１
電話　(025)285-5511

印刷　長谷川印刷
新潟市学校町通１－６
電話　(025)228-3309

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第51集『小出越遺跡』　正誤表

頁	誤	正
p３１ 第２８図	１２（７１）	１２（６９）
p７８ 第７０図	１６（３８７）	１６
p７８ 第７０図	１７（３８８）	１７
図版２６	１８０	１７９
図版３５	４５６	４５７